



パパが見た映画  
365本



第三集  
(上)

磐田 匠

## はじめに

---

映画が大好きだった、父と

だんだん大きくなってきて、難しい映画とか見始めた二人の息子に。

そして映画を愛する全ての人々に、この本を捧げます

## この本について

---

ブログをやってみました。

過去形で書くってことは、現在休止中でございます。

そのブログのなかで、やれドラマだとか映画だとか、音楽だとかを、ランダムにご紹介してあげましたが...

一日一本の映画を毎日紹介して行って、一年で365本の映画を紹介できたりしたら、かっこええやろなって思ったのが全てのはじまりでございました。

更新が遅れると一日二本とか三本とかの映画を紹介し続けて、連載は二年ちょっと続きました。今週はこんな映画見ました、今週はテレビでこんな映画やりますよって感じでしたね。

で、コツコツと書きためた原稿をまとめたものがこの「パパが見た映画365本」シリーズでございます。

一年続くかな、どうかなって思いながら始めた連載ですが、けっこう映画って見てるものでございます。

そんな事情がある本ですので、シリーズもののご紹介順とか、けっこうぐちゃぐちゃでございます。

テレビオンエア情報みたいな感じで書いていた時期もありますもので。

御勘弁いただきたいと思います。

あと、表記上のご注意。

えっと。スターのみなさんにはなんせ「さま」をつけさせていただいております。

なぜかというと。

一応、私、元役者なんですよね。大阪の古い演劇人の人なんかだと、先生って普通につけちゃいます。

西山先生とか端田先生とか堀内先生とか志摩先生とか。

そうじゃないと「さん」づけ。

須永さんとか馬場さんとか柳川さんとか田中さんとか。

萬子さんとか南条さんとか鍋島さんとかシュン太郎さんとかいのうえさんとか。

辰巳さんはつみさん、生瀬さんはさんちゃんさんだったけど。

で。

西山先生を先生って呼び、シュン太郎さんをさんづけで呼ぶ私が、ハリウッドスターを呼び捨てにしたらあかんやろって思って。

さまづけで統一させていただいております。

ただし、文頭のスタッフキャストは、映画本の慣例にならい、あえて呼び捨てです。

あと、個人的にね。映画のあらすじって、すげえ読みにくいなってずっと思ってましてん。

役名であらすじ書くでしょ。

このときジャックは...とか。ジャックって誰やねん、みたいな。

映画の世界を皆様にイメージしやすくしてさしあげたいなって気持ちでも書いておりますんで、邪道を承知で、演じたスターの名前であらすじ書いてます。

普通、友達に映画のこと説明するときに、「そのあとマクレーンはな...」みたいな説明する人、少ないでしょ。「ウィリスさまがね...」って説明するでしょ。

井戸端会議みたいな映画感想本を目指しておりますので、逆に役名で説明したほうがわかりやすそうな場合を除き、あらすじ上での役名表記も基本はしませんので、こちらもご了承くださいと思います。

前置きはこれくらいにしまして。

本編、おたのしみください。

はじまりはじまりい

## 気狂いピエロ

---

1965年フランス・イタリア合作

監督 ジャン・リュック・ゴダール

主演 ジャン・ポール・ベルモンド、アンナ・カリーナ、サミュエル・フラ

え〜っと。365日映画コラム、早いもので三冊目にはいりました。

映画コラム連載開始当初は一年もつかどうか心配しておりましたが。

第一作目は「スピーシーズ〜種の起源」、二冊目の最初は「スクリーム」でした。

なんかここだけ見るとB級映画特集コラムみたいなんで、三冊目の最初の作品は、ちょっとええかっこして生意気にもゴダール作品。

どや、見直したか。

主人公のベルモンドさま、パーティーに出て、なんやかんやあって、パーティーを抜け出して、元恋人に会いにいきます。

で、そこで殺人事件に巻き込まれてしまいます。

んで、なんか疾走しながら南フランスに逃げます。

そこで元恋人はカレシみたいな人のもとへ行って、頭にきたベルモンドさま、二人を撃ち殺して、頭にダイナマイトを巻いて自爆。

どや。

わけわからんやろ。

自爆したあと、映し出されるめっちゃ青い海。

そして流れる「何をみつけた？永遠を…」なんてランボアの詩のナレーション。

いぐわあああああ。

わけわからん。

でもしかたないですかね。

相手はゴダール監督だし。

そもそも見始める前から「ゴダール作品はわけわからんで〜」なんてまわりから言われてましたし。

ゴダール監督っていいますと、ヌーヴェルバーグの旗手なんていわれた監督さんでございます。手法なんてめっちゃ前衛的。

私が中学とか高校とかのころは、ゴダールを見たっただけで「あいつ、けっこうやるやん」なんて思われたりしました。

私はどっかの名画座で、この「気狂いピエロ」と「彼女について私が知っている二、三の事柄」の二本立てを見ましたが、「気狂いピエロ」はなんとなくついていけたけど、「彼女について私が知っている二、三の事柄」のほうはさっぱりわけがわからなかったです。

やっぱり私には前衛は無理だったのかも。

パゾリーニ監督作品にもついていけなかったし。

パパの採点。100点満点中75点。

作品途中の疾走感みたいなのは、素晴らしかったです。

わけがわからなりにそれは理解できたし、クライマックスのとんでもない虚無感もすごいいいって思いました。

これほどわけがわからないのに強烈な印象が残ってるって、やっぱり名作なんだろうね。

## ロボコップ2

---

1990年アメリカ映画

監督 アーヴィン・カーシュナー

主演 ピーター・ウエラー、ナンシー・アレン、ダン・オハーリー、トム・ヌーナン

え〜っと。第二集のかなり後半のほうでとりあげた「ロボコップ」の続編でございます。

大ヒットの前作の世界観そのままひきついで、けっこう頑張っております。

ただ、前作があまりにもよくできていただけに、若干弱さを感じてしまいますね。残念だけど。

舞台はやっぱり近未来のデトロイト。

新型の麻薬が蔓延しております。

警察はというと、前作で民間企業に買い取られてしましまして、それによる労働環境悪化を改善すべくストの最中だったりしてございまして。

しかたないからロボコップが一人でワルたちに立ち向かってたりしてございまして。

そのころ警察を牛耳るハイテク企業では、新型ロボコップが開発されます。

人間の体を利用してしまったために肝心なところで人間的な弱さが出るロボコップ。より完全なマシンであるロボコップ2号。

企業は新型ロボコップにがっつり力を入れるわけですね。

で、ここで邪魔になるのがロボコップ1号なわけでした。

そんな折、1号は新型麻薬で荒稼ぎしていたギャング一味と戦い、つかまってバラバラにされてしまいます。

企業の2号推進派は、修理の際、ロボコップ1号のシステムに細工をします。

で、暴走させて欠陥品として1号を回収し、後釜として2号を導入しようとして画策します。

しかしただではやられないロボコップ。

自ら荒療治でシステムを修復させ、麻薬密売グループのボスを退治します。

しかし「ロボコップ2号を開発した博士」がこのボスの脳を使って、ロボコップ2号のシステムを補強しようとしたことから事態がややこしくなります。

ロボコップ2号はこのワルボスの意識に乗っ取られてしましまして、2号が暴走をはじめるわけですね。

果たしてロボコップはロボコップ2号を倒すことができるのでしょうか...

パパの採点。100点満点中75点。

今回、データとか調べてましたら、ナンシー・アレンが演ずる婦警さん、アン・ルイスって役名らしい。

なんか「六本木心中〜」みたいな感じですね。

「ダッケエド〜心なんってえ〜」みたいな。とりあえずこの役名だけで5ポイント献上です。

## ロボコップ3

---

1993年アメリカ映画

監督 フレッド・デッカー

主演 ロバート・バーク、ナンシー・アレン、ジル・ヘネシー、レミー・ライアン

「ロボコップ2」のさらに続編でございます。

映画的にはもうここらが限界でしょうね。

事実、映画としてのロボコップはこれにて打ち止め。

「ロボコップ」ワールドは、キャラクターだけを拝借したテレビシリーズへと活躍の場を移すこととなります。

舞台はやっぱり近未来のデトロイト。

警察機構のオーナーとなったハイテク企業、今回は新型都市建設のために、旧市街地を接收しようとするわけですね。

この会社、なんせ警察のオーナー会社なもんだから、やりたい放題でございます。

家を追われた住民たちは、ゲリラとなって抵抗しますが、警察、強い。

ゲリラたちは教会に籠城。

そんな彼らを容赦なくやっつけようとするハイテク企業側の特殊チーム。

そんな男たちの前に立ちはだかるのは、やはりわれらのロボコップでございます。

しかし、警察機構には逆らえないというプログラムを施されているために、ロボコップはその特殊チームに手出しすることができません。

ゲリラチームのリーダーはそんなロボコップをを助け、ゲリラ軍のアジトへ連れていきます。

天才コンピューター少女の助けを借り、ロボコップはシステムを修正、警察へ戦いを挑むことになるわけですが...

前作までロボコップを演じていたピーター・ウェラーさま、さすがにもうこんなんでできへんで、と思ったか思わなかったか、ロボコップ役からは降板しております。

ナンシー・アレンちゃんもいっしょに降りてたらよかったのに。

って思ってしまう私でございます。

それというのも... (以下採点後のコメントに続く)

パパの採点。100点満点中65点。

お気に入りの女優さん、ナンシー・アレンさま演ずるアン・ルイス婦警、作品途中で殺されてしまいます。

第一作で重傷を負ったとき、ロボコップに「また（ロボコップとして）生き返るさ」、みたいなことを言われてたので、女ロボコップとして登場するのを期待しておりましたが。

結局アレンちゃん生き返らなかったです。あかんがな。それだけで5点減点。



## アクエリアス

---

1986年イタリア映画

監督 ミケーレ・ソアヴィ

主演 デヴィッド・ブランドン、バーバラ・クピスティ、ロベルト・グリゴロフ

えっと。けっこうよくある系のホラームービーです。

殺人鬼が登場人物グループの一人ひとりを毒牙にかけていきまして、最後に主人公（これがたいがい女性です）とタイマン対決。

こういった作品はですねえ、物語展開は工夫しようがないわけで、あとはいかに物語の細かい設定で他の作品との差別化をはかるかってことになるでしょうが。

ホラーミュージカルを練習している劇団がありまして。

その劇団員の一人が練習中に怪我をしちゃいます。

近くには精神病院しかなくて、しかたないからそこに手当てに行きますが、劇場に戻る車には、看護師を殺して病院を脱走した殺人犯が潜んでいたわけでありまして。

今回の殺人鬼はなんとフクロウのお面をかぶっております。

これって劇団のホラーミュージカルの犯人が劇中でかぶる予定だったものなんだけど。

フクロウのお面かぶった殺人鬼ってちょっとマヌケですわなあ。

そんなフクロウマスクの殺人鬼、ミュージカルのリハの舞台の上で殺人したり、けっこうめっちゃめちな殺人プランを繰り返します。

んで、その成果を舞台上に飾ったりするような趣味の犯人くんです。

途中のサスペンフルな展開とか、けっこういけてましたが、なにしろフクロウマスクだから、犯人が何やってもちょっとコメディタッチになっちゃいます。

そういう意味では「13金」のホッケーマスクってすぐれものの小道具だったんだなあって思ってしまう。

パパの採点。100点満点中70点。

この作品をけっこう印象深くしているのは、作品を見たときには滑稽だったフクロウマスクと、悪趣味な死体装飾趣味。

逆にそんな描写がこの作品を他のホラー作品から一線を画すものになっているから皮肉ですよな。

## アサイラム・狂人病棟

---

1972年イギリス映画

監督 ロイ・ウォード・ベイカー

主演 ピーター・カッシング、ブリット・エクランド、ハーバート・ロム、シャーロット・ランプリング

かなりゴシックなホラーでございます。

で、オムニバス形式で怪奇な世界が描かれます。

この作品に関していえば、どぎついSFXとかスプラッター描写は控えめ。

オーソドックスな、ちょっと懐かしい感じのオムニバスホラーでございます。

主人公...っていうか、まあストーリーテラーになるのが精神科医でございますして、彼が院長の許しを得て、患者たちの恐怖体験を聞くわけです。

それぞれの患者たちには、この精神が壊れてしまうほどの恐怖体験をしております。

ピーター・カッシングさま、ブリット・エクランドさま、ハーバート・ロムさまにシャーロット・ランプリングさま。

そうそうたるメンバーが、それぞれの怪奇な世界の主役に挑むわけです。

バラバラ死体が復活して復讐しにくる話とか、呪いの人形がナイフをもって殺しにくる話だとか。

そんなエピソードをまとめる全体エピソードの、ラストのオチもけっこう効いています。

このオチはかなりお気に入りの部類に入るドンデン返しでございます。

大流血シーンとか残酷特殊メイクとかSFXとかありませんが、とにかく正攻法で恐怖体験をさせてくれる一本でございます。

パパの採点。100点満点中65点。

この作品、大学生のころビデオで見ました。

そのころは当然ビデオがあったわけですが、最新の映画情報データによりますと、現在ではビデオも絶版。

DVDも作られてないようです。

内容にかなり倫理的な問題がある作品ですので、DVD発売はありえないと思います。

けっこう豪華キャストで面白かったんだけど。

## スキャナーズ

---

1981年アメリカ映画

監督 デイヴィッド・クローネンバーグ

主演 スティーブン・ラック、マイケル・アイアンサイド、ジェニファー・オニール

カナダの名匠、デイヴィッド・クローネンバーグ監督の評価を一気に高めた傑作でございます。物語的なひねりとか設定の面白さ以上に、ディック・スミスさまの特殊メイクが素晴らしい一作。

映画前半のショックシーン、めっちゃええ感じです。

もう、このシーンだけでホラー映画の殿堂入りでございます。

ラックさまは浮浪者。

彼には不思議な力があります。念ずるだけで人を苦しめることができるわけですな。

それだけじゃなくて、彼には他人の思考が声となって脳に響いてしまうって力もあったりしまして。

その能力のために彼は浮浪者としての生活を余儀なくされているわけですね。

なんせ他人の思考が聞こえてしまうわけですから、まともな社会生活なんて送れません。

ラックさまが「力」を使うところを目撃した男たち、ラックさまをある場所に連れていくわけですな。

そこはコンセックってえ組織でして。

彼らは超能力者を集めて、要人専門のボディガードチームを作ろうとしておるわけです。

ある日、コンセックで公開の「意識の走査実験」が行われます。

スキャナーと呼ばれる超能力者が、観客の一人の意識を読みとろうとしますが、逆にそのスキャナーは頭を破壊されてしまいます。

実はその観客・アイアンサイドさまは、実験を行った人よりはるかに高い能力をもっていたわけでございます。

アイアンサイドさまはその能力を使って世界征服を狙う悪の秘密結社の首領だったりします。

おお、ショッカーみたいや。

やがてラックさまとアイアンサイドさまの一騎打ちになるわけですね。

もうとにかくすばらしい特殊メイクです。

それだけでいいから見てほしいですね。

途中の頭蓋破裂シーンと、クライマックス。

もうこれだけで二本分くらいの価値あるんじゃないかと勝手に思っております。

パパの採点。100点満点中90点。

マイケル・アイアンサイドさま、もうめちゃくちゃいいです。

この人、とんでもない役ばかりやってましたが、懐かしの海外ドラマ「V」でおいしい役演じたあたりで善人役もまわってくるようになりましたよね。

って、最近似たようなこと書いたなあってよく考えたら「トータル・リコール」に出てましたよね。

大好きな役者さんです。

## ゴジラ（1954）

---

1954年東宝作品

監督 本多猪四郎

主演 志村 喬、河内桃子、宝田 明、平田昭彦

今日からしばらく、東宝特撮SF映画を続けてご紹介しましょうね。

とりあえず今日は東宝怪獣路線を決定づけた傑作の「ゴジラ」でございます。

「ゴジラ」ってのは、そもそも「核の脅威」を実体化させたモンスターなわけですね。

ラストの志村さまの台詞にもはっきり出ているんですが、人類が核をもてあそび続ける限り、ゴジラの脅威は消えないとか、そういうコンセプトがはっきり出ております。

「ゴジラ」の当初のデザインは、水爆で皮膚がケロイド状態になったものだったようです。

それが途中で、ゴツゴツした岩みたいな皮膚感に変更されました。

「ケロイド」が変更されたのは本当に正解だったようですね。

後に「ウルトラセブン」で欠番となる第十二話は、宇宙核実験で被爆して皮膚がケロイド状になってしまった宇宙人とセブンが戦う話でした。

その設定が問題になってしまったようで。だからゴジラもケロイドデザインだったら、封印されてたかもしれません。

度重なる水爆実験で、生活環境を冒された恐竜（なんだろうなあ）、ゴジラ。

水爆のせいで海底の生物が死滅してしまったため、飢えたゴジラは陸にあがって暴れるわけですね。

その上ゴジラくん、水爆の放射能エネルギーを体内にためこんだせいで、口から光線を出したりするわけでございます。

ゴジラ撃退のために自衛隊やらが出動しますが、通常兵器はゴジラには効かない。

天才科学者芹沢＝平田さまが、オキシジェン・デストロイヤーって兵器（なのかなあ）の発明をしております。

こいつは水中の酸素を破壊して、生物を殺してしまう兵器。

博士はこの兵器をゴジラ退治に使用する決心をするわけです。

ゴジラ対兵器。果たして結果は...

って人間が勝つから志村さまが上記のセリフをしゃべるわけですが。

パパの採点。100点満点中90点。

後の東宝怪獣路線を決定づけることになった傑作。さすがに素晴らしい作品でございます。

## ゴジラの逆襲

---

1955年東宝作品

監督 小田基義

主演 小泉 博、若山セツ子、笠間雪雄、千秋 実

今日も東宝特撮SF映画。

「ゴジラ」の続編でございます。えっと。

後に製作される「ゴジラ」～「ゴジラVSビオランテ」へと続くシリーズがありますが、このシリーズは本作「ゴジラの逆襲」以降の話はなかったものとされております。ただ、1954年版のゴジラは存在したって設定でした。

「ゴジラの逆襲」以降はゴジラは死んでおりませんで、そのゴジラがだんだん性格が丸くなって、子供を助けたり、人類のために宇宙怪獣と戦ったりするわけですので、まあ「ビオランテ」につながるゴジラ世界では、このゴジラが存在したら困るんでしょうね。

「ビオランテ」以降のゴジラ世界も、作品によって描かれる世界が微妙に違っていたりします。キングギドラの取り扱いとか、作品によってめっちゃ違うのが面白いのですが。

えっと。

ゴジラは前作、1954年版「ゴジラ」で死んだわけですが、おったわけですか、もう一匹。

それだけではなく、水爆実験で目覚めた第二の怪獣・アンギラスも登場します。

二匹の怪獣、とりあえずめっちゃ戦う。戦いながら海の中へ。

やがてゴジラ、大阪へ上陸。

アンギラスも大阪に登場。

二大怪獣、大阪の町をわやくちゃにしながら戦い、結局ゴジラが勝ちます。

で、ここからはやはり人類対ゴジラになってくるわけですか。

今回ゴジラを封印するのは飛行機隊でございます。けっこう熱い頑張りを見せてくれます。

本作以降のゴジラは、この後キングコングと戦ったりモスラと戦ったりしながら、やがて改心して人類の味方になりますが、この作品時点ではまだまだめっちゃ悪者。

ダーティーに暴れてくれます。

パパの採点。100点満点中75点。

がんばってはいるんですが、やっぱり第一作には勝てません。

「ゴジラ」でも、二作目の宿命を越えることはできなかつたようで。

余談ですが、飛行機隊のひとりに扮している名優が「七人の侍」にもご出演されてた千秋 実様です。

最初にこの作品を見たとき、あまりにも子供だった私は、この人を小松方正様と勘違いして見ておりました。

どうでもいい話ですが。

## モスラ（1961）

---

1961年東宝作品

監督 本多猪四郎

主演 フランキー堺、小泉 博、香川京子、伊藤エミ、伊藤ユミ

懐かしの東宝特撮映画シリーズでございます。

このへんの作品群ってのは、「ゴジラ」の成功に気をよくした東宝さんが、手を変え品を変え、いろんなタイプのモンスター映画を製作した時期ですね。

しかしながらここの初期「怪獣映画」に色濃く影響を与えているのは、やっぱり「核」の問題。

作品そのものにどんよりしたメッセージが含まれるのは、やはり世界唯一の被爆国、日本の映画だからでしょうか。

某国の水爆実験海域にインファント島という島がありまして、台風にまきこまれて遭難した日本国籍の船の乗組員が、被爆することもなくその島で救助されます。

核実験区域なのに、その島には先住民族もすんでおり、しかもめっちゃ元気だったって証言を聞いた科学者の皆様、インファント島調査団を結成します。

島に上陸した調査団、やっぱりというかお約束というか、島の「動く食虫植物のでっかいやつ」に襲われたりします。

調査団を救ったのは謎の小美人。おお、ザ・ピーナッツやあ。

調査団の言語学者が絶妙のハモリを聴かせる小美人の言葉を解読しまして、島を調査せずに帰ることになります。

そんなんでええんやろか。

しかし調査団の中の悪人が後日島を訪れ、小美人を誘拐して見世物にしようとするわけですな。見世物にされた小美人の歌はインファント島に眠るモスラの卵に届き、卵は孵化してモスラの幼虫が現れ、日本へ。

自衛隊はモスラを攻撃しますが、そんなもんにやられてたら怪獣映画は成立しまへん。

モスラは東京タワーに巨大な繭をつくり、成虫になります。

小美人を連れて某国に高飛びした悪人さんを追います。いぐわあああ。

えっと。平成モスラもなんかこんな感じの話だったような気がするんですが。

なんか記憶がごっちゃになってるなあ。

パパの採点。100点満点中70点。

作品全体を包む空気が優しすぎて、イマイチ乗りきれなさがあったりする作品ですね。

もうちょっと怪獣は怖くあってほしいんですが。ま、しかたないですなあ。モスラだし。

## 空の大怪獣ラドン

---

1956年東宝作品

監督 本多猪四郎

主演 佐原健二、平田昭彦、田島義文

懐かしの東宝特撮映画シリーズでございます。

昨日ご紹介の「モスラ」の五年前に映画化された作品でございます。

どこかに東宝怪獣映画の製作年度順の資料とかあると思うのですが。

ゴジラを基準に考えますと、ゴジラは最初にアンギラスと戦って、次にキングコングと戦って、そのあとモスラと戦います。

ラドンと戦うのはモスラのあと。

キングギドラと最初に戦う「怪獣大戦争」（だったかな）の序盤、キングギドラと交戦する前にちょこっと戦います。

って記憶があったので、ラドン登場はモスラのあとだろうと勝手に思ってましたが、逆だったようです。

今回の舞台は九州でございます。

「ゴジラ」が東京、「ゴジラの逆襲」が大阪。

ここらの時期、怪獣映画が特撮で街を破壊するってのは、けっこうな観光PRになっていた時期です。

親子連れで大阪まで行って、「あれがゴジラとアンギラスが壊した大坂城だよ〜」みたいなノリなんでしょうね。

私もこの映画を見たあと、めっちゃ九州に行きたかったって記憶があります。

九州の炭鉱が作品の舞台。

作業員が相次いで惨殺されるって事件が起こります。

この事件、古代から生きていた巨大トンボの幼虫、メガヌロンって奴が犯人だったわけですよ。

で、炭鉱の技師・佐原さまが坑内に入ってそやつを退治しようとするんですが、ちょうど起こってしまった落盤事故で、佐原は坑内の洞窟に落ちる。

そこで見たものは、洞窟にいる無数のメガヌロンと、それを餌にしながら今にも孵化しようとする、巨大な翼竜プテラノドン＝ラドンの卵だったわけでございます。

で、またまたですが、古代、石炭の中に埋もれていたラドンとメガヌロンは、地下水爆実験の影響による地核変動で目覚めてしまったのではないかって話になりまして。

おお、また核の影響により怪獣出現。

孵化したラドンと人類の戦いが始まるわけでございます。

やっぱりここらへんの時代の怪獣映画って、核がキーワードになってますね。

まあいいちゃあいんだけど。これだけ続くとまたかって気持ちになったりして。



パパの採点。100点満点中80点。

映画のクライマックスで、傷ついたラドンが必死に飛ぼうとする場面、実は操演用のワイヤーが切れてしまって、そのために瀕死っぽい動きになってしまったとか。

特撮映画史に残る名場面の裏には、こんなアクシデントがあったんですね。

## 海底軍艦

---

1963年東宝作品

監督 本多猪四郎

主演 高島忠夫、藤山陽子、小泉 博

懐かしの東宝特撮映画シリーズでございます。

この作品あたりは、怪獣は登場するんだけど、かなりSFチックな仕上がりになっております。

ムー大陸ってのがありまして。

一夜にして海底に沈んだ文明だとかいいますよね。

このムー帝国の文明は実は滅んではいなくて、海底に独自の文明世界を築いていたって設定です。

で、ムー人は地上界への侵略を計画しているわけです。

このムー人が一番恐れているのが、ある企業の美人秘書藤山さまの父、田崎 潤さま。

田崎さまは旧帝国海軍のえらいさんで、戦中の大海運会社のえらいさんだった人。

戦争で亡くなったって話だったんだけど、実は彼は生きていて、独自に「海底軍艦・轟天号」ってのを所持しております。

ムー人にとってはこの田崎さまと轟天号がやっかいでしかたないわけですな。

で、藤山さまを拉致して海底軍艦の動きを封じようとしたりするわけです。

で、カメラマンとして藤山さまと知り合った高島さま、彼女の父である田崎さまを探し、ムー人と戦う決意をします。

うん、けっこうよくできた話です。

何より原爆とか水爆とかを使わずに、これだけの話を組み立てたってのがいいですよ。

作品の舞台になるのが潜水艦（っていうか海底軍艦なんだけど）の中とか、海中です。

なんか息苦しい感じもしますが、それはそれで楽しかったです。

怪獣、やっぱり出てきます。マンダ。

もう、海底都市の守護神みたいな設定の怪獣。

この造形もけっこうはまってよくできております。マンダ君、その後、怪獣映画の常連に昇格致しました。

パパの採点。100点満点中85点。

平成以降の東宝特撮映画の総決算ともいえるべき「ゴジラ・ファイナルウォーズ」にも、出てきましたよ「海底軍艦・轟天号」。

私のようにオールド怪獣映画ファンにはたまらない再登場でした。

「ゴジラ・ファイナルウォーズ」は、轟天号が登場したってだけで星一つ増えた感じだったです。

## 緯度0大作戦

---

1969年東宝作品

監督 本多猪四郎

主演 ジョセフ・コットン、宝田 明、岡田眞澄、リチャード・ジャッケル

懐かしの東宝特撮映画シリーズでございます。

これはもう怪獣映画って枠を越えて、SF冒険活劇でございます。

登場する怪獣も、破天荒なものではなく、すんげえリアル。

マッドサイエンティストがごちゃごちゃ造ったモンスター、みたいなリアルな造形で、なかなかいけてます。

そういう意味では、昨日ご紹介した「海底軍艦」とか今日の「緯度0大作戦」なんかは怪獣映画ってカテゴリーに入れるよりは、やっぱりSF映画なんでしょうね。

物語の主人公は三人の学者はんでございます。

宝田さま、岡田さま、ジャッケルさま。岡田眞澄さまがアメリカ人だかイギリス人だかって設定だったと思います。

確かにほとんど外国人さんみたいな顔なんだけど。

三人は遭難しちゃいまして、謎の潜水艦アルファ号に助けられ、その海底基地「緯度0」に立ち寄ります。

海底基地ってすんげえ科学力でもって造られた基地なわけです。

このアルファ号の艦長がなんとジョセフ・コットンさまだったりするわけで。

はじめてこの映画をみたときの私はまだ小学生とかだったわけで、ジョセフ・コットンさまがどんだけすごい役者さんだかわけわからなかったわけで。

「誰やねん、この外人さん」みたいな感じだったですわ。

このコットンさまにも敵がおるわけすな。

こいつが悪の科学者で、緯度0の基地を破壊し、世界征服を企む男。

要塞島で悪の研究をしたりしております。こやつが画期的な発明をした科学者・平田昭彦さま親子を誘拐するわけすな。

で、コットンさま、平田さまの救出のために要塞島に向かうのであります。

彼らを待ち受けるのは、巨大ネズミに人間コウモリに翼をもった巨大ライオン。

すげえすげえ。めっちゃ普通に楽しむことができた作品であります。

パパの採点。100点満点中85点。

ラストのオチというか、物語の終わりがたもなんかめっちゃ不可思議で大好き。

思わずニヤリとさせられます。

## 地球防衛軍

---

1957年東宝作品

監督 本多猪四郎

主演 佐原健二、平田昭彦、白川由美、河内桃子

またまた懐かしの東宝特撮映画シリーズでございます。めっちゃSF映画でございます。

富士山麓で、突如山火事だとか土砂崩れだとかが発生します。

なんでやねんって調べておりましたら、いきなり地中からロボット「モゲラ」が登場。

けっこう暴れまわるわけですが、簡単にやられちゃいます。

おおよ。

ここからはけっこうハードでリアルなSF世界が展開されてまいります。

ロボットを操っていたのはミステリアンってえ宇宙人でございますして、彼らは原爆だとか水爆だとかで自らの星を滅ぼしてしまった宇宙人です。

しかし彼らは圧倒的な科学力を持っております。

円盤だとか怪光線だとかで自衛隊は全滅。

全人類は地球防衛軍を組織し、世界中の科学力を結集させてミステリアンに対抗することになるわけでございます。

えっと。あのお。

このへんの設定の対宇宙人映画ってね、どうしてクライマックスの「起死回生プラン」が同じになっちゃうんでしょうか。

って書いてしまうとわかると思うんだけど。

そうです。「ガメラ対バイラス」「ゴジラVSキングギドラ」「インディペンデンス・デイ」、あとテレビシリーズの「V」の途中にも似たような「起死回生」プランがあったんだけど。

どうなんだか。物語って、こういう展開しか作れないものなんじゃないかな。

パパの採点。100点満点中80点。

この作品で登場する敵ロボットのモゲラ君、このあと東宝特撮映画の中でもずっと出番がなかったわけですが、平成ゴジラシリーズになって、突如復活。

しかも人類の叡智の結晶ときたもんだ。

ロボットって、この映画の当時は謎の宇宙人の科学力の象徴で、しかもモゲラに戦車とか光線とかで対抗してた人類ですが。

平成になって、ようやく「リアルな怪獣映画」でモゲラ型ロボットが登場。

人類にも科学力がついたらってことじゃないかな。

# 妖星ゴラス

---

1962年東宝作品

監督 本多猪四郎。主演 池部 良、上原 謙、志村 喬

かなりアーリーな時期の東宝特撮SF大作でございます。

もう、めっちゃ破天荒な設定の、めっちゃ激しいSF大作。

これぐらいとんでもない設定の映画のほうが、夢があっていいかもしれませんね。

えっと。めっちゃ強烈な大きさの新星が発見されます。

その星は「ゴラス」と名づけられます。

ゴラスは周辺の小惑星なんかを吸収しながら巨大化していくわけですね。

で、ゴラスはまっすぐ地球に向かっていくことが次第にわかってきまして、このままだと地球と衝突するんだってところまで明らかになります。

おお、「アルマゲドン」みたいでんなあ。

「アルマゲドン」は接近してくる星を破壊しようようとしてましたが。

この作品ではゴラスを破壊するか、地球が逃げるかどっちかだって話になります。

ゴラス破壊は失敗。で、地球が軌道を変えてゴラスをやりすごそうって話になるわけで。

っていうか、そういう話になるところがすごいです。

人類は南極大陸に原子力ジェットエンジンを設置しまして、そのエンジンの推進力を惑星軌道そのものを変えてしまおうなんて計画したりします。

エンジン据付のあたりで、南極ででっかいトドの怪獣が登場したりします。

まあこのへん怪獣が登場するあたりははお約束ですわな。

この怪獣も「地球防衛軍」のロボットモグラ同様、あんまり活躍しないです。

ちょこっと出てきて、サクッとやられて、みたいな怪獣。

怪獣くんがやられてからは、もうひたすら地球を動かす話になります。

星が地球にせまってくるってのは待たなしの話ですから、ひたすら緊迫した状況になりますよね。

果たして地球に明日はやってくるのでしょうか～

パパの採点。100点満点中85点。

今、この原稿を書きながらいろいろ思い出していたんですが、この惑星と地球の衝突クライシスって設定、その後いろいろ応用されておりました。

ウルトラマンでも「彗星ツイフォン」と地球が衝突しそうになる話がありましたし、ウルトラセブンでは移動する「宇宙都市ペガッサ」が地球と衝突しそうになってペガッサ星人が地球の軌道変更を頼みにくるなんてエピソードがありました。

あと「アルマゲドン」の原作者さん、この「妖星ゴラス」、見たんでしょうかね。

「銀河英雄伝説」の小惑星型の要塞にジェットエンジンをつけて要塞対要塞の戦いを挑むって話（えっと、イゼルローン要塞対ガイェスブルグ要塞のエピソードでっせ）の絵柄って、けっこ

うこの映画のクライマックスシーンに似てるように思ったりもしました。  
まあ先駆的作品と高く評価しておきましょうぞ。

## ジャッカル

---

1997年アメリカ映画

監督 マイケル・ケイトン・ジョーンズ

主演 ブルース・ウィリス、リチャード・ギア、シドニー・ポアチエ

第二集のおわりらへんで、フレデリック・フォーサイス原作、フレッド・ジンネマン監督の「ジャッカルの日」をご紹介しましたが、その作品のリメイク。

って私は思い込んでいたんですが、なんかそうじゃないみたい。

「ジャッカルの日」関連のスタッフはまったくクレジットされておりませなんだ。

ってことは...インスパイヤとか、オマージュとか...パクリとか。

ジャッカル=ウィリスさまと名乗る殺し屋が、要人暗殺の目的でアメリカに入国します。

この情報をFBIのえらいさんポアチエさまが入手。

ジャッカル計画を阻止しようと躍起になりますが、裏をかかれ続けます。

そこでポアチエさま、ジャッカル行動パターンを予測できる唯一の男ってことで、囚われのテロリスト、ギアさまを捜査に協力させることにするわけですね。

ウィリスさまはリモコン仕掛けのミサイル砲だとかを準備してたりするわけです。

ギアさま、ウィリスさまを追い込んだりするわけですが、やっぱり彼を捕らえることはできないわけです。

ウィリスさまは最新鋭のミサイルだとかを使って暗殺に臨みます。

ギアさま、間一髪で暗殺を阻止。

さあここからギアさまとウィリスさまの戦いが始まるわけです。

パパの採点。100点満点中65点。

「ジャッカルの日」を見てなかったらけっこう面白く感じたかもしれませんが、そこそこに「ジャッカルの日」そっくりの場面が出てきたりして、「え？」って感じ。

そういうところがあったんで、リメイクだろうなって思い込んだんですが、クレジットなしでここまで同じ設定にしちゃ、ちょっといかんかな。

## プロジェクトA

---

1984年アメリカ映画

監督 ジャッキー・チェン

主演 ジャッキー・チェン、ユン・ピョウ、サモ・ハン・キン・ポー

この作品のころの香港カンフー映画は、ジャッキー・チェンさま、サモ・ハン・キン・ポーさまを中心に動いていました。

で、その二人にちょっと遅れてユン・ピョウさまがついていった感じですか。

ちょっとってというか、かなりってというかだけ。

ジョン・ウー監督が作り出した新しい流れ、香港ノワールが登場するまでは、やはり誰が何といってもジャッキー・チェンさま主導でございましたね。

二十世紀初頭の香港が舞台です。

海賊が暴れまわっております。

海軍司令官は、海賊討伐隊を組織するわけですか。

そのリーダーがチェンさまだったわけですが、いろいろありまして、チェンさまは隊長を解任されてしましまして、怒って海軍をやめたりして。

そんなゴタゴタをしている間にも、やっぱり海賊は暴れまわるわけですね。

ついには香港籍の船だけでなく、英国籍の船まで海賊に襲われてしましまして、海軍司令官はチェンさまを再び討伐隊の隊長に抜擢。

チェンさまは陸軍のピョウさま、親友で盗賊のリーダーのキン・ポーさまらと、奇想天外な「A計画」をもって海賊に対することになるのでございます。

当時の香港映画トップスターたちの競演でございます。

っていってもしょっちゅう競演してるんだけど。

今ではジャッキー・チェンさま以外はほとんど見かけないですけど。

サモ・ハン・キン・ポーさまは監督業・プロデュース業で活躍しておられるようですが。

ユン・ピョウさまは何をされておられるんでしょうか。

パパの採点。100点満点中70点。

ジャッキー・チェンさまの映画ってね、ジャッキー・チェンさまそもそもの「いい人」っぷりがすごく現れて、どんな作品であってもなんだかとってもいい映画です。

あんまりどんよりした終わりがたしません。

これに対して、ジャッキーさまの先輩っぽくつい見てしまうブルース・リーさまの作品は、かなり軽いタッチで撮られている「ドラゴンへの道」でさえラストはかなりどんよりしましたです。

これもキャラの違いなんでしょうか。

ただ、私はジャッキー・チェンさまの明るさ、苦手です。



## コップランド

---

1997年アメリカ映画

監督 ジェームズ・マンゴールド

主演 シルベスター・スタローン、ロバート・デ・ニーロ、ハーヴェイ・カイテル、レイ・リオッタ

スタローンさま、デ・ニーロさま、カイテルさま、リオッタさまの豪華顔合わせですね。

っていうか、スタローンさま作品でここまで芸達者をそろえた作品って、あまりないですね。

スタローンさまとか、シュワルツェネッガーさまとか、あとヴァン・ダムさまとかセガールさまとか、このへんの人って、あまり豪華キャストの映画には出ないですよ。

そういう意味ではけっこうびっくりしたキャスティングです。

作品の舞台はニューヨークにほど近い町。

住民のほとんどが警察官で、「コップランド」などと呼ばれている町がありまして。

その町の治安をまかされている保安官がスタローンさまでございます。

ある日、ニューヨーク市警の若い警官が、銃さえ持っていない黒人の若者を射殺する事件が発生します。

警察のえらいさんカイテルさまは、若い警官をかばおうするわけですね。

丸腰の市民を射殺した罪の意識で、その若い警官は橋から川に身投げ自殺したってことにして、その警官をかくまい、別の町に逃がそうとします。

しかし事件が次第におおごとになっていってしまいまして、警察の内部調査官デ・ニーロさまが動き出します。

デ・ニーロさまは、保安官スタローンさまに協力を要請しますが、スタローンさまとしては協力できないわけですね。

実際、スタローンさまは、カイテルさまが若い警官を車にかくまって移動するところを見ているわけですね。

調査官デ・ニーロさまは、コップランドのえらいさんカイテルさまが、マフィアと癒着しているのではないかと疑っていたりします。

まあ事実つながっているわけですが。

カイテルさまはマフィアからの指示で、かばいきれなくなった「若い警官」を消そうとしますが、失敗して逃げられてしまいます。

次第に事件が複雑になっていきまして、スタローンさまはカイテルさまを調査官に告発しようと思いますが、デ・ニーロさま調査官は、捜査終了を理由に動いてくれません。

ここからスタローンさまの孤独な戦いが始まります。

クライマックスがめっちゃええ感じ。

マッチョアクションに頼らないスタローンさま、初めて見たような気がします。

パパの採点。10点満点中90点。

めっちゃ普通のポリスサスペンス。

なんか、肉体派アクション派から脱皮しようとしているスタローンさまの必死さがけっこう伝わってくる系の作品ですね。

うん。悪くはないんだけど。

今後に期待って感じです。

でも、ここまでがんばるんなら、上半身裸、本当に封印したほうがいいと思うんだけどなあ。

## デッド・コースター

---

2003年アメリカ映画

監督 デヴィッド・R・エリス

主演 A・J・クック、マイケル・ランデス、アリ・ラーター、T・C・カーソン、ジョナサン・チェリー、キーガン・コナー・トレシー、ジェームス・N・カーク、リンダ・ボイト

「ファイナル・ディスティネーション」って映画がありまして。飛行機に乗る予定だった若者たちが、うち一人の「飛行機墜落の予知夢」のおかげで命拾いします。

しかしその若者たちは「その事故で死ぬ運命」だったようで、彼らを「避けられない死」が追いかけてくるってホラーサスペンスでございます。

その続編。っていっても後日談ではなく、全く別の事件です。

女子大生・クックさまは、ハイウェイを使ってのバカンスに出かけようとするわけですね。

その途中で、すんげえリアルな白日夢を見てしまいます。

ハイウェイの大事故で、数十人死亡、みたいな。

自らの予知夢を信じたクックさま、ハイウェイに入る合流道路のところを車でとおせんぼ。

クラクション鳴りまくり。

保安官がやってくる。

しかし彼らの目前で、夢の通りの大事故が発生しちゃいます。

事故を避けようとした車がクックさまの車に突っ込んできて、クックさまの車に乗ってた同級生たちは全員死亡。

たまたま車を降りていたクックさまと、クックさまの車に邪魔されてハイウェイに入れなかった七人の男女が難を逃れます。

ここからは前作「ファイナル・ディスティネーション」の展開でございます。

助かった人たちが、「逃れられない死の運命」に弄ばれるように、一人また一人と死んでいきます。

けっこうえぐい死にかたばっかり。

「死の運命」を変える方法がありそうだってことがわかったり、前作での唯一の生存者が出てきたりして、物語的にはけっこうな盛り上がりを見せます。

思っていたよりも面白かったです。

パパの採点。10点満点中75点。

謎なのはタイトル。「デッドコースター」ってわりには「ジェットコースター」とか出てきません。

この作品のさらに続編の「ファイナルデッドコースター」はそのものずばり、「ジェットコースター事故」が題材なんだけど。

なんで2003年時点で2006年製作の続編につけるべきタイトルが選ばれたのでしょうか。まさかこのタイトルも予知夢？



## レッド・ドラゴン

---

2002年アメリカ映画

監督 ブレッド・ラトナー

主演 アンソニー・ホプキンス、エドワード・ノートン、レイフ・ファインズ、ハーヴェイ・カイテル、エミリー・ワトソン

トマス・ハリス原作によるレクター博士シリーズの三作目の映画化でございます。

第一作「羊たちの沈黙」はアンソニー・ホプキンスさまとジョディ・フォスターさまのダブル主演っぽくて、第二作の「ハンニバル」はかなりホプキンスさまがフューチャーされた感じでしたよね。

この第三作は、一作の「羊たちの沈黙」以前の物語でございます。

レクター博士が女性FBI捜査官のクラリス・スターブリングに出会う前ですね。

ホプキンスさまのいってしまいそうな怪しい目つきはさすが。

冒頭、レクター博士は、FBI捜査官に逮捕されてしまいます。

「羊たちの沈黙」につながる物語だってんで、レクター博士とFBI捜査官ノートンさまの知恵比べみたいな展開を期待したんですが、レクター博士に捜査協力をしてもらっていたノートンさま、自分が追っている事件の犯人が博士だと見抜いてしまいまして、瀕死の重傷を負いながら博士を逮捕します。

で、ここからあと、博士は獄中で資料だけを見て犯人をプロファイリングすることになるわけです。

今回、活躍するのはファインズさま演ずる殺人鬼「レッド・ドラゴン」。

ノートンさまはレクター博士に受けた傷以上に精神的にまいってしまっていて、FBI職を退いております。

そんなノートンさまに現場復帰を要請する上司がカイテルさま。

ファインズさま、自分を追ってくるノートンさまを片付けることによって、自分が天才的犯罪者であることを証明しようとするわけです。

ファインズさまはホプキンスさまに心酔してたりしまして、そんなファインズさまにホプキンスさまはノートンさまの住所を調べて教えたりして。

中盤からはレクター博士＝ホプキンスさまはすこし影がうすくなりまして、レッドドラゴン＝ファインズさまがひとりで大暴れ、みたいな感じになっちゃいます。

パパの採点。10点満点中75点。

レクター博士シリーズってことで、かなり期待して見たんですが、思っていたほどレクター博士の見せ場が少なかったんで、ちょっとうむむって感じで見てしまいました。

面白くないことはなかったんですが。

## まだまだあぶない刑事

---

2005年「まだまだあぶない刑事」製作委員会作品

監督 鳥井邦男

主演 館ひろし、柴田恭平、浅野温子、仲村トオル、佐藤隆太、ベンガル、小林稔侍

大人気のテレビシリーズの映画化。

っていうか、テレビで大人気だったシリーズの映画版。

テレビシリーズはもちろんとっくの昔に終わっております。

ちょうど「必殺」シリーズが、オンエア終了して映画で完結したのと同じ感じですよ。

っていっても今の若い人「必殺」ってわかんないみたいですが。

「踊る大捜査線のパターンっていったらわかるのかな。

しかし必殺がわからないってことは「あぶない刑事」も説明しなきゃいけないのかなあ。

タカ&ユージのはみだし刑事二人が巻き起こす、コメディタッチのスーパー刑事物語。

オンエア当時は、日本のドラマにしてはかなりとんでもない銃撃戦が繰り広げられるって話題になっておりました。

「あぶ刑事」のここまでの映画版、全部見たはずなんですが、順番とか覚えてないんですわ。

「あぶない刑事」「またまたあぶない刑事」「もっともあぶない刑事」「あぶない刑事リターンズ」「あぶない刑事フォーエバー」の順番だったと思うんですが。

前作のラストで殉職した、と思われていたタカ＝館さまとユージ＝柴田さまですが、二人は健在で、香港マフィア摘発のための潜入捜査官として活躍しとったわけですね。

で、無事組織を壊滅させて港署に凱旋してまいります。

港署にはすっかりオバハンになった浅野温子さまとか、全然キャラも外見もほとんどかわってない木の実ナナさまとかがやっぱりおられます。

木の実ナナさま、今は署長です。

で、ドラマではタカとユージのパシリだったトオル＝仲村さまが、今では課長。

まあそんなことはどうでもよくて。

今回は、タカ・ユージが香港で壊滅させた組織が扱っていた小型核爆弾を使って要人暗殺をもくろむ組織が相手でございます。

謎のスナイパーなんかも出てくるんだけど。

タカ・ユージが香港潜入捜査のときに警察を裏切ったんじゃないかなんて疑う警察のえらいさんなんかもおまして、二人はやっぱり警察からも追いかけられながら捜査を進めることになりましたが、ここからはやっぱりお約束の展開でございます。

映画化なんかもう不可能だろうなあって思っていた豪華キャストがまたまた集結でございます。

館さま・柴田さま・浅野さま・仲村さま。

ドラマでは主役級のビッグネームさんたちが、軽いノリで楽しませてくれます。

パパの採点。10点満点中85点。

ドラマでいい味だしておられた故・中条静夫さまがおられないのがとっても残念です。

## カルマ 2

---

2002年香港映画

監督 ソイ・チャン

主演 ニキ・チャウ、ウィニー・レオン、バーナード・チャウ、サイラス・チャウ

残念ながら「カルマ」は見ておりませんです。

「カルマ」ってレスリー・チャンさまの遺作だったんですね。

で、「カルマ2」ですが、当然レスリー・チャンさまは出ておりません。あたりまえか。

内容もね、たぶん前作とは関係とか全然ないと思います。

サイコホラーってのが共通してるだけだと思います。

まあよくある話ですわな、そういうの。

難病に冒された少女が、人生に失望して恋人とともに心中をはかります。

男の子は一命をとりとめますが、少女は残念ながら助からなかったわけですね。

で、少女の怨念が「男の子」に輸血をした人たちにとりつくわけでございます。

おお、怖い怖い。

こんな映画見せられちゃあおちおち輸血もできやしねえや。

んでまた、少女が患っていた病気ってのが癌系の病気でございますなあ。

抗癌薬の影響でしょうか、彼女の霊は丸坊主なわけでございます。

めっちゃ顔とか怖いし。

なんかほんま夢に出てきそう。

若いのに渾身の演技って感じでございます。

少女の霊の願いはねえ、その輸血した人にとりついて、一命をとりとめた彼氏を殺させること。

いぐわああああ。

で、輸血をした人のなかの男女がこの事件を通じて仲良くなっていたりしまして、「相手のために」、「相手を殺人者にさせないために」その助かった彼氏を殺そうとしたりするわけで。

いぐわああああ。

あまりにもダークな展開。

ちょっと勘弁してほしい系の設定でございます。

物語のほとんどが病院で展開するってのもちょっと苦手やなあ。病院って苦手なんです。

パパの採点。100点満点中65点。

うむむ。あまりにも苦手な展開なんで点数低め。

霊を演じる女の子、ド迫力でそこだけはポイント高かったんだけど。

そもそもこの映画、「リング」あたり以降のニュージャパニーズホラームービーに影響されたものとか。

そうかそうか。

このころのジャパニーズホラーって、ちょうどこの映画みたいにラストあたりでクシャクシャッ



てなる映画多かったですもんね。

こういうわけわからんところだけ真似しなくてもいいのに。

## デスノート

---

2006年「デスノート」製作委員会作品

監督 金子修介

主演 藤原竜也、松山ケンイチ、瀬戸朝香、鹿賀丈史、細川茂樹

大人気コミックスの映画化です。

ただ、コミックス原作あんまり詳しく知らないです。

それにしてもけっこう面白い仕上がりでしたね。

キャストもけっこう豪華だし。

途中の警察側の論理に、明らかに無理な理屈とかあるんだけど。

そもそも今の日本の法律は、主人公を裁くことはできないんすよね。

「デスノート」と、そこに名前が書かれた人が死ぬことの因果関係が科学的に立証されないと、日本の法律も警察も主人公を裁くことはできないんですなあ。

いくらワラ人形作って「丑の刻まじり」しても、ブドゥーの呪いの儀式やっても、殺人罪には問われないのと同じ理屈でございます。

そこんとこすつとばしちゃって物語が進んでいくもんだから、ちょっとおやって思いました。まあそれはそれとして。

主人公、ライト＝藤原さまは、警察エリートを目指す大学生。ある日、彼は、法では裁けない悪人がいるってことに絶望し、法律書を捨ててしまいます。

そのとき彼が見つけた一冊の黒表紙のノート。

それこそ、死神が落とした「死のノート」。

そのノートに名前を書けば、名前を書かれた者は死んでしまいます。

藤原さまは、世の悪人たちの名前を一人、また一人と書いていきます。

悪人たちはみな心臓発作で死んでいくわけですね。

犯罪者たちの原因不明の突然死があまりにも続くことを重く見た警察は、FBIと協力し、これまで数々の何事件を解決してきた天才探偵L＝松山さまとともに、犯人(?)逮捕に向けて動き出すことになります。

もうねえ、藤原竜也さまがめっちゃくちゃいいですね。

彼の才能を演出家の蜷川さまが絶賛したそうですが、これだけの才能ならね、うなずけます。

彼に対する松山ケンイチさま。賛否両論みたいですね。

原作イメージと違うとか、気持ち悪いとか。

確かに気持ち悪いんだけど。

でも、天才藤原さまに対抗するには、ちょっと外すしかなかったのかなあって思ったりして。脇を固めるベテラン名優のみなさんもかなり頑張っておられます。

藤原さまの父親である警察エリートを演ずる鹿賀さまがもうめっちゃええ感じ。さすがです。パパの採点。100点満点中75点。

本作はあくまで前編。ここで評価するのはあまりよくないと思いますが、この作りかた、絶対後編見たくなっちゃいますよね。

## レザボア・ドッグス

---

1991年アメリカ映画

監督 クエンティン・タランティーノ

主演 ハーヴェイ・カイテル、ティム・ロス、マイケル・マドセン、クリス・ペン

けっこう好きな映画で、これまでご紹介もれてた作品をちょちょこってご紹介していきますね。

最初にご紹介するのはタランティーノ監督の「レザボア・ドッグス」でございます。

タランティーノ監督、最近なんだか静かですね。

情報収集漏れしてるだけなのかもしれませんが。

俳優として地味な活動を続けながら脚本を書きためていったタランティーノさま、この作品の脚本がハーヴェイ・カイテルさまの目にとまり、カイテルさまのバックアップを得て撮った記念すべき作品でございます。

宝石強盗団がおりまして、その計画のためにお互いの名前も経歴も知らない男たちが集められます。

うむむ。ここらは「華麗なる賭け」とか「ユージュアルサスペクツ」みたいな展開でございますなあ。

で、計画を実行に移すわけです。

完璧な計画だったんですが、なぜか強盗団の動きは警察に筒抜けだったわけですね。

撃たれたりなんやでボロボロになりながらアジトに集まった一味ですが、仲間の中に警察に通じている者がいることは明らか。

ここからは誰が警察の犬かってことを探る展開となります。

で、ここでいきなりタランティーノ監督お得意の「時間逆行」。

ズバーンって時間が戻って、その「裏切り者」のここまでを描写して、こんどはいきなり「今」に戻って話の続き、って流れです。

うん。

「パルプ・フィクション」とか見ないでこの作品を見たら、ここらの手法にけっこうびっくりしてたかもしれませんね。

っていうか、その過去に戻るのが、ちょっとありえないタイミングで入るっていうか。

そういう攻めかたするでしょ？タランティーノ監督って。

ハーヴェイ・カイテルさまがめっちゃかっこええです。

すげえいい感じで活躍してくれてますね。けっこう好きな作品でございます。

パパの採点。100点満点中85点。

タランティーノ監督は、深作監督の「仁義なき戦い」がお気に入りだそうでございますして、そんな監督の趣味が思いきり出てる作品でございますね。

なかなかバイオレンスしてるし。銃撃戦なんかすごく痛そう。

激しい銃撃戦とか、カッコいい銃撃戦の映画ってたくさんありますが、痛そうな銃撃戦を撮れる監督さんってあまりいないと思うんですが。

そんな痛そうな銃撃戦がとってもいかしてる作品です。

## ダーティハリー 3

---

1976年アメリカ映画

監督 ジェームズ・ファーゴ

主演 クリント・イーストウッド、ティン・テイリー、アルバート・ポップウェル

好きな映画をつらつらとご紹介します。

ご存知ハリー・キャラハン刑事が大活躍の「ダーティハリー」シリーズの第三弾。

「ダーティハリー」「ダーティハリー2」の仕上がりがめっちゃよかったんで、どうしても3以降の採点がきつくなてしまいますです。

ハリー＝イーストウッドさまは、街の汚い仕事ばかり引き受ける刑事でございます。

今回の敵は警察の悪徳グループでございます。こやつらは軍の資材を盗んで武装し、市長を誘拐して身代金を要求したりするわけですな。

んでハリーのマグナムが火を吹くわけござんす。

ダーティハリーシリーズっていいますと、ハリーの相棒もけっこう話題になったりします。

一作目はイタリヤ系の刑事。二作目は黒人さんでした。

今回はなんと婦警さん。一作目では銃撃戦で重傷、二作目は爆弾で昇天しましたですね。

とりあえず今回のパートナーはどうなるんだろう、みたいな楽しみもあったんですが。

婦警さんの割にはけっこうがんばっておられましたです。

このシリーズ、4以降はどっか開き直りみたいな感じがでてきまして、それはそれで面白く見れたりするんですが、ストーリー重視の第一作・アクションと謎解き重視の第二作に比べると、どうしても弱さだけが目立ってしまうように感じるのは私だけでしょうか。

パパの採点。100点満点中75点。

微妙な点数つけるでしょ。私的には75点ってのは基準点でございますなあ。

確かに悪くはない作品なんですけど、ワルの設定にしても、作品全体のカラーにしても、ちょっとこれまでの二作よりも落ちる感じは否めませんです。

残念。惜しいんだけど、って感じです。

## ダーティハリー4

---

1983年アメリカ映画

監督 クリント・イーストウッド

主演 クリント・イーストウッド、ソンドラ・ロック、パット・ヒングル

好きな映画シリーズです。ハリー・キャラハン刑事の「ダーティハリー」シリーズの第四作。

御大イーストウッドさまがシリーズ初メガホンをとった作品。

もうこのへんになりましたら、シリーズの世界観とかかなりまとまってまいりまして、ええ感じにこなれた雰囲気が出ております。

このシリーズ、後半の作品は、短い期間にワワワっと見ましたので、あらすじとかは覚えているんですが、細かい部分なんかは若干混同したりしております。

ごっちゃになってたらご勘弁ください。

今回ハリーが追うのは、謎の殺人鬼でございます。

この殺人鬼ってのが、ある犯罪にかかわった人物ばかりを殺していつているわけで。

当然、被害者は自分たちが狙われていることがわかっております。

で、狙われてるグループはその殺人鬼を返り討ちにしてやろうなんて雰囲気が流れていたりするわけで。

当然、そやつらは過去の自分たちの犯罪が明るみに出ると困るので、警察＝ハリーには情報提供とか協力とかしないわけです。

けっこうねじれた構図でございませよ？

けっこう流行した、後期ダーティハリーを代表する、「ゴーアヘッド、メイクマイデイ」って奥歯をかみしめながら言うセリフは確かこの作品で登場したはずでございます。

このセリフ、作品中に二回登場します。

一回目は強盗だか何かが、人質の頭に銃をつきつけているところに、マグナムを構えたハリーが近づき、「Go Ahead, Make My Day」って言うわけですね。

字幕では「さあ、撃たせろ」って訳してました。

直訳すると「続けるよ、（そして今日を）俺らしい日にしてくれ」みたいな感じですかね。

二度目はクライマックスで「Come On, Make My Day」とつぶやきます。かっこええ。

パパの採点。100点満点中80点。

開き直った分面白かったです。

ハリー刑事、だんだんムチャ度がアップしてまいります。それはそれでええ感じですよ。

ちなみにヒロイン役のソンドラ・ロックさまはプライベートでもイーストウッドさまの彼女だったそうなの。

うんうん。あのあまりにもキャラハン刑事らしくないラストはそういう事情があったからなのか、って妙に納得したりして。





## ダーティハリー 5

---

1988年アメリカ映画

監督 バディ・ヴァン・ホーン

主演 クリント・イーストウッド、パトリシア・クラークソン、エヴァン・キム、なんとリーアム・ニースン

好きな映画シリーズです。「ダーティハリー」シリーズの第五作。

なんだかだんだんメチャクチャになっていきますハリーさん。

本作クライマックスではアッと驚く新武器が登場。刑事ものの映画でこんなありかくなって素直に驚きました。

ハリーさん、今回は冒頭でマフィアの大物を逮捕します。

このときの模様がテレビで報道されてしまいまして、ハリー刑事はプチ有名人になってしまいます。

ところがこれが次の事件につながってしまうわけですね。

アブないやつがこのテレビを見ておりまして、ハリーさん「死亡予想リスト」みたいなものに名前を書き込まれてしまいます。

で、ハリーさん、死亡予想を的中させようとするこいつに命を狙われることになってしまいます。

聞き込み途中でいきなりチンピラに襲われたりしまして、ハリーさん、そのチンピラを撃退するんですが、そのときの巻き添えになって一人の男が死んでしまいます。

その男が「死亡予想リスト」を手にもっておりまして、しかもそこには男の名前とハリー刑事の名前が。

そこから、リストに名前の書かれた人物が次々と殺されていきます。

果たしてハリーはこの「ゲーム」に勝利することができるのでしょうか。

なんか、仮面ライダーを思い出してしまいました。

最初、ショッカーは世界征服を企んでいたはずなのに、気がついたら打倒仮面ライダーに必死になってたりするでしょ？

ダーティハリーも、これまでは悪人が悪いこととして、それに立ち向かうって構造だったんだけど、今回は「ハリーに挑戦する犯人」なんてのが登場したりして。

こういう犯人って、ハリーの命を狙うこと、ハリーと戦うことそのものが目的ですわな。

さすがに第5作までできてしまうと、こういうねじれた系のストーリーがでてきたりしちゃうんですよね。

パパの採点。100点満点中65点。

しかしなあ。この作品の筋立てってのはね、ちょっと違うと思うなあ。

4もちょっと違うんじゃないかなって思いましたが、今回もちょっと違うんじゃないかなあって。

まあ、ここらの違和感はみんな感じたんじゃないかなって思います。

だから、シリーズ終わっちゃったんだって思うし。

1から3くらいまでの空気を維持したまま、シリーズが続いて欲しかったんですが。

## 背徳の囁き

---

1989年アメリカ映画

監督 マイク・フィギス

主演 リチャード・ギア、アンディ・ガルシア、ウィリアム・ボールドウィン

好きな映画シリーズです。

リチャード・ギアさま主演作品。

リチャード・ギアさま苦手だったりします。

そもそも「愛と青春の旅立ち」で出てきて、「プリティ・ウーマン」とかでガーッと人気がでましたが。

めっちゃ苦手系ジャンルの作品ばかりだし。

そんなりチャード・ギアさまが、悪役に挑戦した一編でございます。

ギアはマフィアとも通ずる悪徳ポリスでございます。

若手の警察官をいけないアルバイトに引き込んだりするめっちゃ悪いやつでございます。

彼のいる署にやってきたのが警察内部の調査をするガルシアさまでございます。

ガルシアさまは友人のボールドウィンさまの調査にやってきたわけですね。

ボールドウィンさまはギアさまのいけないアルバイトのせいで、シャブ漬けにされとるわけで。

ガルシアさまはボールドウィンさまに駆け引きを申し出るわけですね。

告発しない代わりに、マフィアと通じている男の名前を教えろって感じで。

ボールドウィンさまはそれを断りまして、ほどなくギアさまの陰謀で殺されてしまいます。

それでもガルシアさまの調査の手が自分に迫ってきていることに焦ったギアさま、次第に暴走をはじめたわけでございます。

悪役ギアさま、けっこういけてます。

キャラ的には、やっぱり調査官はギアさまで悪徳警官はガルシアさまだと思うんですが。

そういえば「恐怖の岬」ってこんな感じでしたよね。

ワル顔のグレゴリー・ペックさまが善人の弁護士で、善人顔のロバート・ミッチャムさまが悪の復讐鬼で。

なんか思い出してしまいましたです。

クライマックスの盛り上がりはけっこう楽しめました。しかしもうちょっと盛り上がってほしかったですね。

パパの採点。100点満点中70点。

微妙なポイントですね。リチャード・ギアさま作品の中ではけっこう好きな作品。

でもアンディ・ガルシアさま作品のなかではあんまり好きじゃないです。

ってえ意味では微妙な作品。作品そのものはけっこう好きなんです。

## ブラックレイン

---

1989年アメリカ映画

監督 リドリー・スコット

主演 マイケル・ダグラス、高倉 健、松田優作、アンディ・ガルシア、若山富三郎

好きな映画シリーズです。

この映画ってけっこう忘れられない映画ですね。

この映画が大阪で撮影された時期って、私は演劇そのものからは引退していたんだけど、劇団関係の友人との交流は残っていた時期でございまして。

この映画の大規模な大阪ロケに、劇団の友人たちが参加したって話をきいて、めっちゃくちゃうらやましかったことを覚えております。

ダグラスさまは刑事。でも、ちょっと悪い刑事です。

ワルから金をもらってたりするダーティーな刑事ですな。

そんなダグラスさまをたしなめる真面目刑事がガルシアさま。

けっこうええコンビっぼいです。

ダグラスさまは、日本人のヤクザで殺人犯の松田さまを現行犯逮捕します。

で、彼を日本に護送する役目をガルシアさまとともに命ぜられます。

飛行機で空港に到着してすぐ、数人の日本人がごちゃごちゃ言いながら松田さまの身柄を引き取るわけですが、これが実はヤクザの手下だったわけで。

まんまとやられたダグラスさまとガルシアさま、大阪府警の刑事・高倉さまに頼み込み、松田さま逮捕の協力を申し出るわけですな。

日本人は英語がしゃべれないと思ってガルシアさまと英語で日本人の悪口を言ったりして、実はその悪口の相手は英語ペラペラだったりするなんて笑える場面がありました。

この作品のポイント、とにかく松田優作さまに尽きます。

クライマックスでもうちょっと暴れて欲しかったんですが。

しかし、聞くところによりますと、松田さまがこの映画を撮影してた時期って、すでにガンの末期に近い時期で、普通ならまともに演技できるような状態ではなかったそうです。

そんな時期にこれだけの演技をしたんだから、やはり半端じゃない根性の役者さんだったんですね。

ちなみにタイトルの「ブラックレイン」は、作中でヤクザの親分・若山さまが話す、原爆投下後の「黒い雨」のことです。

パパの採点。100点満点中90点。

とりあえずマイナス材料のほとんどない映画です。

リドリー・スコット監督も好きだし、マイケル・ダグラスさまもアンディ・ガルシアさまも好きだし、もちろん健さまも優作さまも大好き。

しかも劇団時代の思い出にけっこう直結してますし。

優作さま、この映画が遺作になってしまいましたね。本当にこれからって感じだったのに。残念です。

## ミッドナイト・ラン

---

1988年アメリカ映画

監督 マーティン・ブレスト

主演 ロバート・デ・ニーロ、チャールズ・グローディン、ヤフェット・コッター

好きな映画シリーズです。

ノリノリの時期のデ・ニーロさまが主演した、サスペンスアクションコメディですな。

この作品の前の映画がデ・パルマ監督の「アンタッチャブル」でございまして、まるまるとした前作からいきなりやせての登場です。

まあこの人は「レイジング・ブル」とか「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ」なんかでは一本の映画の中で太ったりやせたりしましたからね。

少々顔つきとか変わっても驚かなくなりましたが。

まあスリムなデ・ニーロさまに戻っての作品でございませう。

今回のデ・ニーロさまは元刑事の「便利屋」みたいな男。

金をもらえれば少々の危ない橋でも渡りませ系の男でございませう。

今回の彼の仕事は、マフィアの金を横領して、その金を慈善事業に寄付するなんて変わった男グローディンさまを捕らえ、ニューヨークからロサンゼルスに護送すること。

こういう仕事をしている男の嗅覚っていうんでしょうか。

パパッとグローディンさまを見つけるわけですが、彼を追っているのはデ・ニーロさまだけではありませんで、金を盗まれたマフィアだとか、彼を追うFBIだとかが二人のロサンゼルス行きを邪魔するわけですね。

逃げ回りながらやがて気持ちが通いあい始める二人。

おお、ここらへんからええ話になってきませう。

果たして二人はロサンゼルスにたどりつくことができるのでしょうか。

パパの採点。100点満点中80点。

やっぱりデ・ニーロさまってうまいですね。

この映画の封切り時のテレビコマーシャルがやたらかっこよくて、「かっこいいデ・ニーロさま」を期待して見たんですが、けっこうコミカルで暖かい系のデ・ニーロさまだったんでびっくりした記憶があります。

グローディンさまとの息もけっこうあっていたように感じたんですが。

ここからはあまり競演してないみたい。

っていうか、デ・ニーロさまって特定の役者さんと何度も競演することって少ないですね。

今気づきましたが。

なんか理由があるのでしょうか。

## ドラゴン怒りの鉄拳

---

1972年香港映画

監督 ロー・ウェイ

主演 ブルース・リー、ノラ・ミャオ、ロナート・ベイカー

好きな映画シリーズです。

ブルース・リーさま主演第二作でございますね。

日本では、主演第四作の「燃えよドラゴン」が最初に紹介されましたが、それ以降はブルース・リーさま作品は製作順に公開されました。

ってことは日本公開三作目でございますね。

「燃えよドラゴン」でのあまりにも衝撃的だったヌンチャクアクション。

あと怪鳥ボイス（「アタタタ」って声のことですわな）。

ところが、日本公開二作目の「ドラゴン危機一髪」では、おなじみの上半身裸ポーズにはなりませんが、ヌンチャクは使わず、（日本公開ヴァージョンでは）怪鳥ボイスも聞くことはできませんんだ。

（最近見たバージョンでは、日本初公開のときにはなかった怪鳥ボイスが入ってました。おそらくあとになって声だけ入れたのではないだろうかと思います）けっこう消化不良気味のところにこの作品の公開でございます。

叫びまくりのヌンチャク使いまくり。

すっごく面白く見ることができた当時小学生の私でございます。

作品の舞台は戦前の中国上海。

街には少林寺の道場と、進出（？ 侵略って書いたほうがいいのでしょうか）してきた日本人が経営する空手道場がありまして。

戦前の話だから、日本軍そのものが中国を荒らしていた時期ですよ。

この町でも、やはり日本人やりたい放題。

武道家リーさま、耐える耐える。

そしてついに爆発。

叫びながら悪の日本人武道家たちをバツバツとやっつけます。

たった一人で空手道場の門下生全員をやっつけまして、仲間とともに空手道場から出てきたリーさま。

そこには武装して銃をかまえる警官隊の姿が。

悲しそうな表情を一変させて、リーさまは銃を構える警官隊に向かって雄たけび&とび蹴り。

そこでストップモーション。

おお、「明日に向かって撃て」みたい。

リーさま主演作品の中で一番シリアスで悲惨なラストでございます。

パパの採点。100点満点中85点。

悪役が日本人ってのがちょっとひっかかりましたですね。

この映画を見たときはまだ私は小学生だったわけで。

映画のもつメッセージを素直に受け止めることができずに、ただ単に日本批判されてるで～、みたいな解釈しかできなかつたわけで。

今もう一度見たら、当時は受け止めることができなかつたメッセージとか理解できるだろうと思いますが。

しかし、空手道場の門下生たち、みんなそろって袴を後前にはいております。

撮影スタッフの誰もそれに気づかなかつたようで。

その程度の設定考証もせんと日本批判すんなよ、って感じですが。



## クリフハンガー

---

1993年アメリカ映画

監督 レニー・ハーリン

主演 シルベスター・スタローン、ジョン・リスゴー、マイケル・ルーカー

好きな映画シリーズです。

スタローンさまの作品では、この作品が一番好きでございます。

ロッキーシリーズはちょっと説教臭いし、ランボーシリーズはちょっとありえへんし。

この作品のスタローンさま、確かにあり得ないんだけど、まだリアルに楽しく見ることができ  
ます。

スタローンさまが演ずるのは、元山岳レスキュー隊員でございます。

彼は救助活動の中で、自分のミスで仲間の彼女を死なせてしまいまして、そのショックでレ  
スキュー職を辞しております。

ん？どっかで見たような設定。

っていうか、山岳アクションの主人公が背負う試練ってこれしかないのでしょうか。

「ホワイトアウト」でも「バーティカルリミット」でもそんな感じだったような気がしますが。  
ある日、山から遭難の救助要請が入ります。

救助に向かうスタローンさまの友人。

しかしそれはリスゴーさまをリーダーとする犯罪グループが送った救助要請だったわけで、その  
犯罪グループは、ちょっとしたトラブルで、山の中に散らばってしまった現金入りのトランクを  
回収するのをレスキューに手伝わせようとしてた、みたいな感じでございます。

スタローン、そうとは知らずに、友人を手伝おうと山に向かいます。

で、事態を知って、友人を助けるために悪党グループと戦うことになるわけですね。

なんかねえ、本当に手に汗にぎるハードアクションの連続でございます。

特撮とかをほとんど使わずに、生身のアクションで勝負している感じ。とっても面白かったです  
。

パパの採点。100点満点中90点。悪役のジョン・リスゴーさまがめっちゃいいです。

存在感たっぷりって感じだし、ええ感じでキレてるし。

「レイジング・ケイン」を見たときにも感じましたが、とにかく巧い役者さんですね。

こういう人がワルをやると、映画が締まって面白くなります。

強くてワルいリスゴーさまがいたからこそ、この映画もここまで面白くなったんじゃないでしょ  
うか。

## バトルランナー

---

1987年アメリカ映画

監督 ポール・マイケル・ 그레이ザー

主演 アーノルド・シュワルツェネッガー、マリア・コンチータ・アロンゾ、ジェシー・ベンチュラ

好きな映画シリーズです。

ぶっちゃけますと、私はスタローンさまよりシュワルツェネッガーさまのほうが好きでございます。

何かにつけ比較される二人ではございますが。

スタローンさまのほうはね、デビューの瞬間から、役者プラス脚本家みたいな感じで、いきなり才能全開っていうか、ワンナイトサクセスで出てきたみたいなのところがありまして。

それに対してシュワルツェネッガーさまのほうは、コナン・ザ・グレートシリーズで実績を重ね、ターミネーターでチャンスをつかんで、みたいな下積みを感じさせるキャラだもんで。

そんなシュワルツェネッガーさまですが、この作品はシュワルツェネッガーさま作品の中でもちょっと低めに評価されているようでございます。

原作はスティーブン・キングさま。

近未来、人々の娯楽はテレビに限定されております。

そんな世界で、高視聴率を誇る番組が「ランニング・マン」って番組でございます。

これは死刑囚どうしを戦わせて、勝ち続ければ自由の身、負ければ死が待っているってえ世界でございます。

主人公のシュワルツェネッガーさまは警官でございます、身に覚えのない罪で犯罪者となり、この「ランニング・マン」に出場することになります。

生き残るためには戦わなければならないわけでございます、ってことは戦うわけでございます。

シュワルツェネッガーさま、戦います。そしてその戦いの先には、やっぱり巨悪が隠れているわけでございます。

シュワさま、この巨悪を倒すことができるかどうかってのが物語後半のテーマになるわけですね。

「ロッキー3」には、プロレスラーのハルク・ホーガンさまが出演しておりましたが、この作品にもレスラーのジェシー・ベンチュラさまが出演しております。

ホーガンさまと比べたらベンチュラさまがかわいそうですが、やっぱり存在感が全然違います。もうちょっと見せ場をつくってあげたほうがよかったんじゃないかって思いますが。

パパの採点。100点満点中75点。

この作品の原作は、スティーブン・キングが別のペンネーム「リチャード・バック」で発表した作品が原作。

どうして別名義なんか使うんでしょうか。そのへんちょっとわからないんですが。  
とりあえず映画はけっこう楽しく見ることができました。

## ランボー

---

1982年アメリカ映画

監督 テッド・コッチェフ

主演 シルヴェスター・スタローン、リチャード・クレンナ、ブライアン・デネヒー

好きな映画シリーズです。

とりあえず当たった映画はバンバンシリーズ化してしまうスタローンさま。

この作品は「ロッキー」シリーズと並んでスタローンさまの代名詞になってしまいました。

作品の根底には「反戦思想」が流れているわけなんですけど、どこをどう見ても好戦的な映画としか捉えてもらえないわけで。

しかたないですな。

私、その昔、劇団に所属しておりましたですねえ、その劇団が中国に招待されまして、そのときに「南京大虐殺記念館」ってところに行きました。

そこを訪問したときに、劇団の代表が、テレビ取材のコメントで「最近では戦争を礼賛するような映画が増えているけれども、戦争の悲惨さってものをもっと若い世代に伝えなければならない」みたいなコメントをしていたことを思い出しました。

その戦争礼賛の映画ってのが、時期的に「ランボー」シリーズとか「コマンドー」とかの映画がドンピシャの時期でございまして。

だから戦争なんか礼賛してないんだってば。

「コマンドー」はテロ鎮圧の映画だし、この映画はある意味で戦争の被害者となった男がキレて暴れる映画だし。

方法論がちょっと違うだけで。

まあこういう話であまり熱くなるのもよくないですが。

主人公のランボー＝スタローンさまはベトナムの帰還兵でございまして。

彼は戦争時代の友人を訪ねて見知らぬ町にきたわけですが、その町の警察署長・デネヒーさまってのが変な奴。

元朝鮮戦争の英雄だとかで、ベトナム帰還兵を毛嫌いして虐待とかするわけですね。

最初は無抵抗だったランボーさんですが、とうとう堪忍袋の緒が切れて、警官とかをボコボコにいわしてしまいます。

で、オートバイをパクって逃走とかしちゃいます。

署長さん、朝鮮戦争の英雄のプライドにかけてランボーを逮捕、いや、処刑しようとするわけでございまして。

しかしランボーはグリーンベレーの特殊工作員だったわけでございまして、どんな状況でも生き残る訓練を受けてきた男だったわけですね。

ここで警察対ランボーの激しい戦いが繰り広げられることになってしまうわけでございまして。

パパの採点。100点満点中70点。

ランボーの元上司を演ずるのがリチャード・クレンナさま。

このクラスの俳優さんが渋い演技を見せたら、それだけで画面が引き締まります。

この役にクレンナさまを起用したあたりが、作品的成功の鍵だったような気がしますね。

## ランボー 怒りの脱出

---

1985年アメリカ映画

監督 ジョージ・P・コスマトス

主演 シルヴェスター・スタローン、リチャード・クレンナ、ジュリー・ニクソン、チャールズ・ナピアー

好きな映画シリーズです。

ランボーの超人的な戦闘能力を活かすのはやっぱり戦場やわって製作サイドは考えたんでしょうね。

すでに終結した戦争を題材にして、こんなに血わき肉踊るアクション活劇ができました。

警官隊と戦って逮捕され、服役中のランボー＝スタローンさまのもとへ、元上司のクレンナさまがやってまいります。

で、特殊任務につくことを要請するわけです。

その任務ってのは、かの戦争で捕虜になった兵士だとか、行方不明になった兵士たちの動向を調査することだったわけですね。

ただし、戦闘は禁止で、捕虜も救出しなくていいと。

調査だけすればいいってことなわけでございます。

作戦の司令官はナピアーさまでございます。

司令官は、「とりあえず歴戦の勇士が調査しましたが、捕虜は見つからなかったです」ってことにしたいわけですね。

そんなナピアー司令官の思惑なんてまるで知らないスタローンさま。

パラシュートで降下するときのトラブルで無線機だとか武器だとかを全部失った状況で調査することになります。

とりあえず調査終了後にヘリでピックアップされるポイントだけはわかっているわけですが。

現地の女性情報部員ニクソンさまと合流し、調査の末、なんと捕虜収容所を発見してしまいます。

正義漢のスタローンさま、司令官の指示を無視して捕虜を救出して合流ポイントへ向かいます。

驚いたのは司令官のナピアーさま。

収穫のなかったスタローンさまをヘリでピックアップして作戦終了のつもりが、捕虜を救出して現れたわけですから。

司令官、捕虜とスタローンさまを置き去りにして引き上げるようヘリに指示します。

で、スタローンさま、東側の駐留部隊に捕虜にされてしまいます。

めっちゃ激しい拷問。

拷問の途中で、ヘリへの引き上げを指示する司令官の通信の録音を聞かされたスタローンさま。プツン。

司令官に「必ず殺しに戻るから待ってろお」みたいな通信を残し、同時に大暴れモードのスイッ

チが入ってしまいます。

で、怒りの脱出ね。

とにかく強いスタローンさま。

この姿見てるだけでストレス消えてしまいますなあ。めっちゃスカっとする作品でございます。

パパの採点。100点満点中90点。

とにかく作品的な見せ場が多く、退屈しません。シリーズ最高傑作は文句なしにこの作品でしょうね。

## ランボー3 怒りのアフガン

---

1988年アメリカ映画

監督 ピーター・マクドナルド

主演 シルヴェスター・スタローン、リチャード・クレンナ、マルク・ド・ジョンジュ

好きな映画シリーズです。

チャーリー・シーンさま主演の「ホット・ショット」ってえ映画シリーズをご存知でしょうか。このシリーズ、かなり豪快にいろんな作品のパロディしてくれてるんですが、「ホット・ショット2」は、ランボーシリーズの強烈なパロディシーンが満載でございました。

「ランボー」シリーズを1から3まで見て、その勢いで「ホット・ショット2」見たりしたら、けっこう爆笑できませ。

ちゃんとリチャード・クレンナさまも出てるし。

で、今回は「ランボー3」でございます。

前作のラストでいずこかに姿を消したランボー＝スタローンさま、仏教の寺院で静かな生活を送っておりました。

そんな彼のもとに、元上司のクレンナさまが登場。

アフガン潜入の特殊任務チームへの協力を要請されます。

断るスタローンさま。

渋々帰るクレンナさま。

しかし、クレンナさまはアフガンでソ連軍の急襲を受け、囚われてしまいます。

特殊任務についていたクレンナさまですので、米軍はそもそも拉致の事実を発表できないわけですね。

んだもんでスタローンさま、クレンナさまを助けるために再び銃をとり、戦場に戻る決意を固めるわけでございます。

前作のベトナムから今回はアフガン。

ランボーってね、なんかベトナムっぽい、ジメジメした湿地帯とかジャングルとかでそのスキルを発揮しそうなキャラでございましてねえ。

なんか空気が乾いている系のアフガンって、ちょっと違うんじゃないかなあって思っておりましたが、やっぱりなんか違いました。

パパの採点。100点満点中75点。

やっぱりとにかくランボーの活躍するイメージってジャングルだと思うんですね。

アフガンだと空気がカラッとすすぎていて、違和感のほうが大きかったです。残念だなあ。



## シンドバット黄金の航海

---

1973年イギリス映画

監督 ゴードン・ヘスラー

主演 ジョン・フィリップ・ロー、トム・ベイカー、キャロライン・マンロー

好きな映画シリーズです。

映画を見始めてまもなくのころ、この映画がリバイバル上映されまして、当時、神戸市灘区にありました「灘中央劇場」に見に行った作品でございます。

なんか夏とかだったなあ。

当時、小学五年生か六年生だったと思います。野球帽かぶって、半ズボンはいて、自転車こいで見に行きました。

めっちゃ懐かしい。

特撮ものでございます。

日本みたいな着ぐるみがミニチュアの町であばれる、みたいな特撮ではなく、この作品は人形アニメーションでございます。

当時の私はですねえ、着ぐるみ特撮は見飽きるくらい見てましたが、アメリカイギリスの特撮の主流だったアニメーション特撮ってあまり見てなかったです。

とにかく新鮮でしたね。

お話はってえと、やっぱりシンドバッドのもので、アラビアンナイトの世界でございます。アラビアを征服しようってえ悪の王様がおりまして、われらがシンドバットが悪の王様に敢然と立ち向かうって物語。

半人半馬の怪獣ケンタウロスだとか、阿修羅みたいに手がいっぱいある石像がそのようさんある手にそれぞれ剣をもって襲い掛かってくるとか。

もう波乱万丈特撮炸裂って感じで、すごく楽しく見ることができました。

まあ映画見たのは小学校に行ってたころですから、まあ良く言えば家族そろって楽しめる映画、悪く言えばお子様向け映画だったんでしょうね。

あまりにも昔に見た映画なんでぶっちゃけ特撮場面しか印象ないですけど。

パパの採点。100点満点中80点。

それまでは親に連れられては映画とかけっこう見に行っていました。

はじめて自分一人で見に行った映画は、「ダーティ・ハリー」「ダーティ・ハリー2」の二本立てだったように記憶しております。

これも小学校五年か六年。

で、友達と見に行った最初の映画はこの映画でした。

そういう意味では私にとっては特別な作品。

子供むけ映画ではあるでしょうが、思い入れあるんで点数甘めでございます。

## ファイナルカウントダウン

---

1980年アメリカ映画

監督 ドン・テイラー

主演 カーク・ダグラス、マーティン・シーン、キャサリン・ロス、チャールズ・ダーニング

好きな映画シリーズです。

1980年って、角川映画版の「戦国自衛隊」は映画化されてたんでしょうか。

原作小説はもう発表されていたと思うんですが。

って書き出しはどういう意味かといいますと、素直にそういう意味でございます。

ある意味設定がかぶっちゃっております。やばいんと違うの？ってくらい設定がかぶっております。

でもこの映画見て、「よくできた面白い映画だなあ」って思ったのは、アクション映画としてすごくよくできていたからだろうと思います。

えっと。原子力空母ニミッツが、突然タイムスリップしてしまいます。

タイムスリップした先は、なんと1941年12月7日。

日本軍による真珠湾攻撃の直前でございます。

で、ここで艦長、悩む。

自分たちは合衆国軍人として戦闘に参加するべきなのか、参加するべきじゃないのか。

自分たちが戦闘に参加してしまっただけで歴史が変わってしまったらやばいなあとか。

そうこうしているうちに、ゼロ戦に発見されたりして。

やばいやん、ってことでF14戦闘機が出撃。

そんなんねえ、ゼロ戦に勝ち目なんてあるわけじゃないじゃないですか。

ゼロ戦パイロットを捕虜とすることに成功します。

ニミッツの乗組員にしてみたら、真珠湾攻撃なんて過去の事実ですから、みんな数時間後に起こることを知っているわけですね。

しかし捕虜の日本兵はそんな事情わかんないわけですから、自分がかまったことによって奇襲作戦の秘密がばれちゃあかんってんで、健気にもニミッツ艦内で暴れて、人質とって脱出しようとしたりします。

それを押さえようとする現代の乗組員たち。

ここらの攻防がすごく面白かったですね。

そうこうするうちに奇襲攻撃の時間が近づいてまいります。

艦長はある決断を下します。その決断とは...

もうねえ、真珠湾攻撃当時の日本軍と、現代の海軍とだったら、やっぱり相手にならないくらいの力の差があるわけで。

それをあえて1980年に対決させようって映画の企画がもちあげること自体、やっぱりアメリカの皆さんにとっては真珠湾攻撃って重い記憶となって残ってるんでしょうね。

パパの採点。100点満点中80点。

ロックバンド「ヨーロッパ」のファーストアルバムに収録されている「ファイナルカウントダウン」って曲、この映画とは全く関係ありません。

そういえばこの曲、若手時代の武藤選手の登場テーマ曲だったの、ご存知でした？  
関係ないネタだけど。

## 三人のゴースト

---

1988年アメリカ映画

監督 リチャード・ドナー

主演 ビル・マーレー、カレン・アレン、ジョン・フォーサイス

好きな映画シリーズです。

けっこうハートウォーミングなSF Xコメディでございます。

「ゴーストバスターズ」で一気に評価を高めたビル・マーレーさまが、一枚看板で主演した作品。

この人、そもそもめちゃくちゃ芝居がうまい上にコメディ演技もできる達者な役者さんです。

この作品以降の渋いバイプレイヤーとしての活躍は皆様ご存知だと思います。

主人公のマーレーさまはテレビ局の社長でございます。

視聴率を上げるためには何でもするってえテレビマン。

んでもってすげえわかりやすい守銭奴。

クリスマスの夜、視聴率を稼ぐために編成された生ドラマ「クリスマス・キャロル」。

その生放送の準備中、マーレーさまの目の前に、三人のゴーストが現れるわけです。

ゴーストは彼を未来だとか過去だとかに連れていくわけですね。

ゴーストはマーレーに、いろいろな「可能性の未来」だとか、「忘れてしまったやさしい気持ち」だとかを見せるわけでございます。

やがてマーレーは、三人のゴーストが見せる世界に触れ、すこしずつ人間らしい気持ちを取り戻していきます。

自らの番組「クリスマスキャロル」の生放送に乱入したマーレーさま。

ここからは話芸の達人マーレーの独壇場でございます。

「何が大切なことなのか、何を忘れてはいけないのか」そして「メリークリスマス」という気持ちを、視聴者に訴えかけるわけですね。

でね、その放送が、マーレー自身にとっての新しい奇跡を生むことになりまして。

で、ラストは涙ちょちょ切れる大感動なクライマックス。

ビル・マーレーさまって本当にうまいですね。

びっくりしてしまいます。

作品としては「ゴーストバスターズ」なんかのほうがよくできてるんですが、ビル・マーレーさまの巧さってえ意味ではこの作品が一番かもしれないです。

パパの採点。100点満点中90点。

もうねえ、とにかくすんげえ感動的で、ええ作品でございます。

あまりにもええ映画なんで、中古ビデオショップで衝動買いしてしまった作品でございます。

## スーパーマン 2・冒険編

---

1981年アメリカ映画

監督 リチャード・レスター

主演 クリストファー・リーブ、ジーン・ハックマン、テレンス・スタンプ、マーゴット・キダー

好きな映画シリーズです。

今は亡きクリストファー・リーブの代表作のシリーズ第二弾でございます。

けっこう力の入ったSF X。

けっこう力の入ったキャストिंगのシリーズでございます。

第一作はマーロン・ブランドさまにジーン・ハックマンさまが出演。

そしてこの第二弾では、第一作冒頭でマーロン・ブランドさまにクリプトン星を追放された宇宙犯罪者、テレンス・スタンプさまがワル役として登場でございます。

さらに第一作でスーパーマンにやっつけられたジーン・ハックマンさまも再登場。

なかなかの豪華キャストで暴れてくれますです。

スーパーマン＝リーブさま、相変わらず大忙しの毎日を送っております。

スーパーマン、エッフェル塔に仕掛けられた核爆弾の処理なんてしてたりするんですな。

爆発の瞬間が近づいた核爆弾を宇宙に向かって投げたときに、その影響で亜空間に投獄されていたスタンプさまら宇宙囚人が開放されてしまいます。

えらいこっちゃ。

当然彼らが暴れまくる場所は地球以外ないわけございまして。

さらに前作でスーパーマンにつかまってしまった悪党ハックマンさまも刑務所を脱獄。

スーパーマン、宇宙人スタンプさまと地球の悪人ハックマンさまを敵にまわして戦うことになります。

今回は恋人ロイス＝キダーさまとの恋愛がめっちゃポイントになってたりします。

ってのは、恋愛を成就させるために超能力を封印しなきゃいけない、みたいな世界でありまして。

恋をとるのか、世界の平和をとるのか、みたいなあ。

パパの採点。100点満点中75点。

うむむ。ハックマンさま、スタンプさまが第一作・第二作の両方に出演しているところから考えると、この二本はかなり近い間隔で撮影されたものだと思います。

ひよっとしたら「バック・トゥ・ザ・フューチャー」の第二弾・第三弾みたいに同時進行みたいな感じで撮られたのかも。

でも見る側の感覚ってやっぱり第二弾だしなあ。

第一作に比べると、やっぱりちょっと弱いような感想もっちゃいました。悪くはなかったんだけどなあ。



## スーパーマン3・電子の要塞

---

1983年アメリカ映画

監督 リチャード・レスター

主演 クリストファー・リーブ、ロバート・ヴォーン、リチャード・プライヤー

好きな映画シリーズです。

故クリストファー・リーブさまの人気シリーズの第三弾。

今回の悪役は、御大ロバート・ヴォーンさまでございます。

めっきり年をとってしまわれましたねえ。

この作品ですでに二十年前ですから、今ではもっとおじいちゃんになっておられることと思いますが。

ただ、残念ながら本作の「本当の敵役」ってのは、ヴォーンさまが開発したコンピューターシステムでございます。

悪役としては、ちょっと地味な印象がありますなあ。悪くはないんですが。

えっと、ヴォーンさまはコンピューター会社の社長でございます。

彼は悪のコンピューターシステムを利用して、世界を我が物にしようと画策します。

彼は小悪党のプログラマー・プライヤーさまと手を組みまして、思考することができるコンピューターシステムを開発し、そのシステムを利用してさまざまな悪事を働くわけでございます。

それだけではなく、スーパーマンの弱点を調べ上げ、彼の弱点がクリプトナイト（えっと、第一弾で出てきましたなあ。スーパーマンの故郷・クリプトン星のかけらでございます）であることがわかったと、クリプトナイトを集めてスーパーマンが持つようしむけたり。

そのせいで、スーパーマン、なんと悪の心が芽生えたりします。

この、悪人スーパーマンがけっこう強烈で面白かったりします。

しかしそこはスーパーマンですな。

やがて彼は正義の心を取り戻し、悪のコンピューターシステムを破壊すべく、コンピューターシステムの中核、「電子の要塞」に向かうわけでございます。

スーパーマンシリーズって、イマイチ悪役にインパクトが足りないように思うのは私だけでしょうか。

「バットマン」も「スパイダーマン」も、悪役がコミックチックで強烈だから、「ありえへんやん」って思いながらも楽しく見ることができたんですが。

なんか悪役の設定をリアルにしようとしすぎて、それがためにちょっとおとなしい感じになってるような気がするんですが。

パパの採点。100点満点中70点。

クリストファー・リーブさまもののスーパーマンはこの作品が最終作。

クリストファー・リーブさまの事故～半身不随～他界まで、スーパーマンの映像化は封印されていたようで。

っていうか、スーパーマン役者って、みんなそろって不幸な目にあってるって何かの資料で見た  
ような気がするんですが。

本当なのかなあ。



## レディホーク

---

1985年アメリカ映画

監督 リチャード・ドナー

主演 マシュー・ブレデリック、ルドガー・ハウアー、ミシェル・ファイファー、アルフレッド・モリーナ

好きな映画シリーズです。

けっこう豪華キャストのファンタジーラブロマンスでございます。

悪魔に魔法をかけられた男女。

女は昼の間、鷹になる魔法をかけられ、男は夜の間、狼になる魔法をかけられてしまう。

二人が人間の姿で出会えるのは日没と夜明けの短い時間だけ... いぐわああああ。めっちゃロマンティックざんしょ？

男はルドガー・ハウアーさま。

女はミシェル・ファイファーさま。

なんかいぶし銀のようなキャストिंगでございます。

主人公はブレデリックさま。

彼はまあ何といいましょうか、ケチな泥棒でございます。

彼は投獄されておりましたが、脱獄するわけですね。

逃げる彼を助けたのは、肩に鷹をとまらせた騎士ハウアーさま。

夜になると騎士の姿が消えます。

ブレデリックさまは山賊に襲われそうになりますが、闇から現れた狼が彼を助け、やがて謎の女ファイファーさまが彼の目の前に現れて道案内するわけですね。

んでまた朝になると女の姿が消えて、騎士が現れる。

どういうこっちゃって思って思っておりましたら、ブレデリックさま、鷹がファイファーさまに変身するところを見てしまいます。

で、話をききましたら、実はハウアーさまとファイファーさま、めっちゃ愛し合っておりましたが、ファイファーさまに横恋慕した司教が悪魔と取引しまして、男は夜になると狼に、女は昼のあいだ鷹に変身してしまうという魔法をかけられたってことがわかります。

魔法を解くには、司教を退治しなければならない。

ってことで騎士ハウアーさまは司教をやっつけようとしているわけでございますな。

めっちゃわかりやすい悲恋の設定でございます。

二人に魔法がかけられてるんだって設定が明らかになるまで、けっこうモタモタした感があります。

タイトルが「レディホーク」だし、二人が日没と夜明けにしかあえない悲劇の恋人同士なんだったことはみなさんわかって見ておられると思うのですが。

そもそもその設定知らない人はこの映画見ないだろうと思いますし。

なんかすごく丁寧にゆっくりゆっくり説明してましたが、そんなにのんびり描かなくても...って思ってしまいました。

パパの採点。100点満点中70点。

魔法のネタばらしをもうちょっと早くしてくれたらよかったんだけどなあ。

そうしてくれたら、後半の司教退治をじっくりゆっくり描けたんじゃないかなって思います。

## 遊星からの物体X

---

1982年アメリカ映画

監督 ジョン・カーペンター

主演 カート・ラッセル、ウィルフォード・ブリムリー、リチャード・ダイサート

好きな映画シリーズです。

1951年に製作された古典的SF作品「遊星よりの物体X」のリメイクです。

「...より...」版は、エイリアンは人間型で、かなりわかりやすい造形のエイリアンでしたが、リメイク版のジョン・カーペンター監督、かなりおぞましいとんでもないエイリアンをクリエイトしてくれまして。

ほんま「なんじゃこれは」みたいなグチャグチャなクリーチャーを見せてくれます。

舞台は1982年の南極でございます。

南極の氷の中で埋もれていたエイリアンが蘇り、基地の犬だとか人間だとかと同化して侵食していきまして、次第に犠牲者を増やしていきます。

エイリアンに寄生されてしまうと、意識がのっとられてしまいまして、エイリアンの手先になってしまうわけですね。

体液や血液なんかも意思をもって行動しはじめるわけですね。

んだもんで、体を焼かれたりしても、頭だけを切り離して、その頭に昆虫みたいな手足が生えてイゴイゴ動き出すなんておぞましい変身したりなんかして。

SF X炸裂のとんでもない世界が広がってまいります。

映像的に強烈なのは、犬のとりついたエイリアンが変身するシーン。

犬の口がパカッと割れて、その下からまた新しい犬型の生物が現れたりして、もう驚きでございます。

夢に出てきそうなくらい気持ち悪い。

そうかと思うと、人間に寄生したエイリアンはさっき書いたみたいに首だけ分離させて動き回るし。

なんじゃこりゃ、みたいな超変態悶絶画像が広がります。

サスペンシ的なハイライトシーンは、人間に化けたエイリアンがいらないかどうか調べるために、採血してその血液に火を落とすってシーン。

このシーンもけっこう強烈でびっくりしました。

この作品のSF X、やりすぎできもち悪いと言われればそのとおりなんですけど、しかしよくできていることだけは確か。

特撮を見るつもりでお楽しみいただけたらいいんじゃないかと思います。

パパの採点。100点満点中85点。

悪趣味ではあるグチャグチャSF Xではありますが、よくできていることだけは確かです。

血みどろとかあまり抵抗ない人は楽しんで見ることが出来るんじゃないかって思いました。

ちなみに私はスプラッター大丈夫だから、けっこう楽しく見ることができましたです。

## ウォーゲーム

---

1983年アメリカ映画

監督 ジョン・バダム

主演 マシュー・ブレデリック、ダブニー・コールマン、ジョン・ウッド

好きな映画シリーズです。

コンピューターが戦争をコントロールする現代の世界で、そのコンピューターが勝手に戦争をはじめてしまったらどうなるかってえ恐怖を描いた秀作でございます。

とりあえず面白い映画を撮るジョン・バダム監督、やっぱり面白く仕上げてくれております。

米軍参謀本部が極秘テストを行うわけですね。

全米軍の核ミサイルオペレーターに、ミサイル発射命令を出すわけです。

当然それは演習で、オペレーターが発射ボタンを押してもミサイルは発射されないわけですが。そのテストの結果、かなりの数の兵士が命令を聞かず、発射ボタンを押さなかったって現実が明らかになります。

このことを重視した参謀本部、必要なときに必要な攻撃ができる体制をとるべきだってんで、核ミサイルの発射を判断できる軍事コンピューターの導入を決定します。

んでいきなり舞台が変わる。

高校生ブレデリックさまの平和な日常。

彼は成績は悪いけどコンピューターには天才的な能力が発揮できる少年なわけですね。

発売前のコンピューターゲームのプログラムをいただこうと、ゲーム会社のコンピューターに侵入しようとしてます。

で、あれこれ試しているうちに謎のコンピューターに侵入することに成功します。

コンピューターの中には「核戦争ゲーム」みたいなものがありまして、彼はコンピューター相手にそのゲームを始めてしまいます。

もうお気づきでしょうが、彼が侵入したコンピューターは米軍の戦略コンピューター。

で、彼が始めてしまったゲームは実際のミサイル発射システムでございました。

えらいこっちゃ。電話回線から足がついて米軍の作戦本部に連行されちゃったブレデリックさま、今度はシステムを止めるために知恵をしぼることになります。

途中のサスペンフルな展開、クライマックスの盛り上がり、めっちゃ面白かったです。

やっぱりジョン・バダム監督の作品って好きだなあ。

パパの採点。100点満点中85点。

とはいうものの、ラストがあまりにもストーンと終わってしまったのが残念。

もうちょっとひねって欲しかったのですが。

## サイボーグ

---

1989年アメリカ映画

監督 アルバート・ピュン

主演 ジャン・クロード・ヴァン・ダム、デイル・ハドン

好きな映画シリーズです。

タイトルは「サイボーグ」。で、主演がジャン・クロード・ヴァン・ダムさま。

そうなりますとね、普通、サイボーグはやっぱりヴァン・ダムさまで、サイボーグ戦士がめっちゃ暴れまわる作品だって思うじゃないですか。

でもね、全然違いました。

舞台は近未来。

荒廃した世界が広がっておりましてね、その世界に秩序をもたらすのが、女性サイボーグ・ハドンさまの体内に埋め込まれたコンピューターチップだったりするわけです。

で、ヴァン・ダムさまは、この女サイボーグを守る役割をまかされた戦士でございます。

この設定理解した瞬間、「なあんや、ヴァン・ダムさまはサイボーグじゃないんだ」って思って興ざめしてしまいました。

さらにサイボーグと戦うわけでもないし。

あっ、そう、って感じ。

ヴァン・ダムさまは普通の人間で、ヴァン・ダムさまが戦う相手も普通の人間で、で、ヴァン・ダムさまが守るのがサイボーグ。

なんかタイトルからの想像と実際の作品が違いすぎて、あんまり楽しめなかったです。

まあね、シュワルツェネッガーさまとかスタローンさまが出てきてムキムキシーンがないと「なんじゃこの映画は」って思うのと同じで、セガールさまだとかヴァン・ダムさまとかがでてきて格闘アクションがなかったらやっぱり「なんじゃこりゃ」って思いますよね。

だからなのかそうじゃないのかわかりませんが、やっぱり今回も頑張ってくれておりますヴァン・ダム選手。

そりゃね、ヴァン・ダムさまはプロ格闘家だったわけだし、セガールさまはCIAで武道教えてたくらいの人だから、ここらへんの人アクションはまぎれもなく本物なわけですが。

だからねえ、何度も書きますが、それだけにこの作品の設定って失敗してるんじゃないかって思ってしまう。

パパの採点。100点満点中65点。

荒廃した未来世界が舞台って作品だったら、けっこうなんでもありな世界が広がっていてもいいかな、とそこまで考えますが、そうしなかったあたりが低得点の理由ざんす。

## 地球最後の男・オメガマン

---

1971年アメリカ映画

監督 ボリス・セーガル

主演 チャールトン・ヘストン、ロザリンド・キャッシュ

好きな映画シリーズです。

この映画を見たのは、おそらく小学校高学年のころだったと思います。

めっちゃ面白かったですね。あまりにも面白かったので、原作買って読みました。

リチャード・マシスンさまの原作でございました。

けっこう面白かったですね、原作も。

映画と原作は少し結末が違ったような記憶がありましたが。原作の結末覚えてないです。

主人公のヘストンさまは科学者でございます。

中国とソ連の間で細菌戦争が勃発します。

かねてから有事の際のワクチンを研究していたヘストンさまですが、その試作ワクチンを運搬しているときに細菌兵器ミサイルが発射されてしまうわけでございます。

ミサイル発射のショックで、ヘストンさまが乗っていたセスナ機（だったかヘリだったか...）は不時着。

ヘストンさまは迷わず試作ワクチンを自らの体に注射します。

で、時は流れて。

結局人類のほとんどはその細菌の影響で死滅してしまいます。

一部生き残った人々も、その細菌の影響で醜く変異してしまっているわけです。

何と申しますか、色素がなくなってしまって真っ白な顔になってしまうわけですね。

で、太陽の光を浴びることができなくなってしまいうわけですね。

この生き残った人々はヘストンの命を狙ってきます。

ヘストン、異形の生存者たちの攻撃をかわしながら、時には戦いながら、人類生存の道を探すことになるわけでございます。

主演のチャールトン・ヘストンさま、大御所俳優でございますが、今ではこの人、悪名高き全米ライフル協会の会長でございます。

銃の乱射事件とかが話題になるたびにこの人の名前がでてきます。

でもこの映画のころは普通の映画人だったんですよね。

この作品はヘストンさまご自身の企画だそうです。

なかなか力の入った作品ではあります。

パパの採点。100点満点中80点。

なんか能天気な「地球最後の男」やなあって印象が残っております。

なんかそういう事態にあるって悲惨さがなくて。

もうちょっと原作のもっている閉塞感なんか出てたらよかったのになって思いました。残念。





## スパルタンX

---

1984年アメリカ映画

監督 サモ・ハン・キン・ポー

主演 ジャッキー・チェン、ユン・ピョウ、サモ・ハン・キン・ポー

「プロジェクトA」の大成功をうけて、ジャッキー・チェンさま、ユン・ピョウさま、サモ・ハン・キン・ポーさまのトリオで映画化されたアクション巨編でございます。

ってというか、この三人が揃った時点である程度のアクション巨編になることは確定しているわけでございますが。

今回の舞台はスペインでございます。

チェンさまとピョウさまは移動喫茶店の経営者。

ひよんなことから彼らの店を手伝うことになった娘がいるわけですが、実はその娘は伯爵の娘で、莫大な資産を持っていたりするわけです。

しかし彼女、財産目的の悪い奴に誘拐されてしまいます。

チェンさまとピョウさまは、家出していた彼女を探していた探偵キン・ポーさまとともに、彼女を助けるためにがんばるわけです。

パパの採点。100点満点中70点。

なんかゴージャスな雰囲気は伝わりますし、作りたい世界もわかるんですが、ちょっと空回りしていたような感じですね。

残念な作品でございます。

ちなみに、悪の手先の格闘家を演じているのは、かつて猪木様と名勝負を繰り広げた、マーシャルアーツの大家、ベニー・ユキーデさまでございます。

## マネーピット

---

1986年アメリカ映画

監督 リチャード・ベンジャミン

主演 トム・ハンクス、シェリー・ロング、アレクサンダー・ゴドノフ

スティーブン・スピルバーグプレゼンツの、娯楽コメディ大作。

トム・ハンクスさまめっちゃ頑張っております。

ハンクスさまとロングさまは若い夫婦。

ハンクスさまは弁護士で、ロングさまはオーケストラの団員なんかをしております。

ロングさまの元彼はオーケストラの有名な指揮者。

若夫婦は指揮者の海外公演旅行の間、元彼の家を間借りさせてもらっていたわけですが、いきなりその元彼が帰ってくることになりまして、その家を追い出されてしまいます。

困った二人は家を探すことになるわけですが、郊外の大邸宅が信じられないような低価格で売りに出されていることを知り、あちこちに借金してその家を購入します。

あこがれのスイートマイホームですわな。

しかししかし。

この家が曲者でございますなあ。普通に生活をはじめた途端、使った場所から順番に、家が崩壊していきます。

もう、ドリフのコントみたいな崩壊のしかたしていきます。

建てつけの悪いドアを修理したらドア枠ごと倒れてきたり、踏み板の抜けた階段を修理したら階段そのものが崩れおちたり、電気つけたらショートして、それどころか配線をたどるように出火していったり、風呂に水をためたら風呂板の下の床が抜れたり。

ほんまコントの世界やわ。

それを修理するにあたってまた莫大なお金がかかったりして。

なんか、家が崩れるとか崩壊するとか、そういったコメディチックな設定がスペクタクルっぽくなるもんやなあって感心してしまいました。

そういえば夫婦喧嘩がサスペンス映画になるってことを証明した「ローズ家の戦争」なんて怪作もありましたなあ。

さてさて。ハンクスさま夫婦、この家を買ったことから夫婦仲が少しずつ微妙な雰囲気になりはじめ、やがて二人はある決断をすることになって...

なあんや。家屋崩壊スペクタクルかと思ってたら、恋愛ドラマじゃありませんこと？

後半はかなりベタベタマッタリの恋愛ドラマになります。

ええやないの。男前と美女なんやから。仲良くしたらええがな。

パパの採点。100点満点中70点。

原題の「マネーピット」ってのは、「金食い虫」とでも訳せばいいのでしょうか。

簡潔ですが、そのものズバリのタイトルですね。



## 木更津キャッツアイ・日本シリーズ

---

2005年「木更津キャッツアイ・日本シリーズ」製作委員会作品

監督 金子文紀

主演 岡田准一、桜井 翔、塚本高史、佐藤隆太、岡田義徳、哀川 翔、内村照良、ユンソナ、古田新太、薬師丸ひろ子

テレビでオンエアされていた映画をたまたま録画しておりました、あまり期待しないで見ましたが...見事にはまってしまいました。

こんなに面白い映画だったとは。

そもそも「木更津キャッツアイ」ってのはテレビオンエアの連続ドラマでございます。

そのドラマノーチェックでございました。こんなに面白いとはねえ。

うかつだったなあ。今からDVDレンタルして見ようかなあとか考えているんですが。

それくらい面白かったですね。久々に大爆笑しました。

「木更津キャッツアイ」ってのは、まあ木更津のワルガキチームの名前だっただけで理解いただければいいと思います。

えっと。何をどう説明すればいいんでしょうか。

キャッツアイのメンバーは、ひょんなことからロックバンド「氣志團」のメンバーと仲良くなりまして、彼らの出演する屋外ロックフェスティバルに参加することになります。

そんな折、木更津に死んだはずの地元の伝説の浮浪者、古田さまが現れます。

それと時を同じくして、偽札作りで刑務所に入っていた男・内村さま（これがキャッツアイのメンバーのたち先生、薬師丸さまの憧れの人だったりするわけでございます）が現れたって情報が流れたりしまして。

そんなタイミングで発生する偽札騒動。

偽札騒動に巻き込まれたメンバーは、なぜか船で漂流することになり(なんでやねん)、謎の南海の島でサバイバル。

キャッツアイのメンバーが隠した偽札の原版を追う、「偽札作り犯」内村さまは、岡田（准一）さまの彼女ユンソナさまを誘拐。

誘拐された彼女を助けるのは唐突に現れた哀川 翔さま(なんでやねん)。

内村さまと薬師丸さまはライブ会場で再会。

氣志團の歌うすぐ近くで爆弾が爆発(なんでやねん)、そこヘイカダにのったキャッツアイたちが南海の孤島から帰りついた(なんでやねん)と思ったら、彼らの目の前に巨大怪獣が出現(なんでやねん)。

なんじゃこりゃああ。

なんでもありかいな。脚本は宮藤官九郎さま。さすがの悶絶世界でございます。

パパの採点。100点満点中90点。

これだけ大笑いさせてもらった映画、久しぶりです。満喫させていただきました。



2005年「NANA」製作委員会作品

監督 大谷健太郎

主演 中島美嘉、宮崎あおい、成宮寛貴、松田龍平、松山ケンイチ、玉山鉄二

テレビでオンエアしていたものを録画しまして、わわわって見た作品。

原作は少女コミック。

東京へ向かう列車に乗り合わせた二人の少女ナナと奈々。

ナナ＝中島さまはロックバンド少女で、奈々＝宮崎さまは彼氏（平岡祐太さま）と暮らすために東京にやってきた少女。

列車で乗り合わせた二人は、家さがしの途中で偶然同じ部屋を気に入って、ルームシェアすることになります。

この二人の友情ストーリーが物語の基本線となります。

ナナ＝中島さまには彼氏がおります。

彼氏はナナと別れ、東京のバンドに引き抜かれたギタリスト＝松田さま。

そのバンドのメンバーが玉山さまね。

東京で暮らしはじめるナナのもとに、「東京でバンド活動しようぜ」みたいなノリで地元のバンドのギタリスト＝成宮さまがやってきます。

東京で知り合ったベース＝松山さまと、バンドを抜けて東京で弁護士稼業をしていたドラムで、グループが結成されます。

ライブシーンで歌われるのが、中島のヒット曲「グロリアスデイズ」でございます。

もう一方の奈々＝宮崎さまは、かなり苦しい恋愛。

思いすぎる奈々の存在がだんだんウザく感じはじめた平岡さま、バイト仲間の女の子に手をだしてしまい、やがてそっちが本命になってしまいます。

こいつサイテー。

フタマタサイテー。

って誰に言ってるんでございましょう。

別に私がフタマタかけられてふられたって言ってるわけじゃないですよ。

似たような状況があったことは否定しないけど。

ま、ええがな。

んでナナと奈々は、二人してナナの元彼の移籍先の人気バンドのライブを見に行くわけでございます。

ここで歌姫・伊藤由奈さま登場。

有名なヒット曲を熱唱してくれます。

タイトルわかんないけど。「エンドレスなんちゃら」って曲だったでしょうか。

間違ってたらすんません。

ライブが終わったあと、ナナ＝中島さまと松田さま、再び結ばれることになります。

ええやんか。幸せで。

で、いかにもパート2に続く、みたいな洒落たエンディングにつながります。

ええやんか。幸せそうで。

パパの採点。100点満点中75点。

思っていたより面白かったです。

もっとダラダラした友情物語なのかと思ってましたが。

奈々＝宮崎さまが彼氏＝平岡さまにふられる場面、なんかめっちゃ泣いてしまいました。

こんなシチュエーション最近リアルで見たような気がしましてなあ。

会社で同僚に「NANA」見て泣いちゃったって話したら、爆笑されました。

ほっとけ。こっちかていろいろあるんじゃ。

## 私の頭の中の消しゴム

---

2004年韓国映画

監督 イ・ジェハン

主演 チョン・ウソン、ソン・イエジン、ペク・チョンハク

韓国・日本で大ヒットを記録した、感動のラブストーリーでございます。

あ〜こりゃこりゃ。

あきませんなあ。恋愛ものをご紹介するときは何故かこんなテンションになってしまいます。

そもそもは日本の連続ドラマの翻案でございます。

ドラマ版見たんだけど、タイトル忘れちゃった。確か永作博美さまと萩原聖人さまの主演だったと記憶しております。

主人公のウソンさまは建築家志望の青年。

イエジンさまはウソンさまが働く建設会社の社長さんの娘。

コンビニですれ違ったところから二人は出会い、つきあって結ばれ、最初は反対していた父親とも理解しあって二人は結婚します。

しかし少しずつイエジンさまの体は病魔に蝕まれていくわけです。

だんだん物忘れが激しくなっていくんですね。

医師の診断は「若年性アルツハイマー病」。

この病気を治す方法はなく、治療法もないと、医師は言います。

ウソンさまにしてみれば、病状が進行し、次第に自分のことを忘れていく妻を見守り続けることしかできないってえことになります。

これはすんげえ辛い状況ですよ。

満面の笑顔で、自分を元カレの名前で呼んだりするわけですよ。

辛いっっちゃうねん。ありえへん。

病状が進行するイエジンさま。

やがて彼女は、辛い決心をします。

彼女は愛する夫に離婚を申し入れ、病院名を告げずに入院する道を選ぶわけですね。

時はながれて...

一人ぼっちになったウソンさまのもとに一通の手紙が届きます。

病状が進むなか、いくぶん記憶がはっきりした状態のときに書かれた別れの手紙。

ウソンさまはその手紙の消印をもとに、彼女の入院している病院をさがしてあてます。

今は夫であった自分に「はじめまして...どこかでお会いしましたか」みたいになってしまった妻。

ウソンさまは「今の彼女」のために、二人のコンビニでの出会いを再現しようとします...

もう、涙、涙。

せつなすぎ辛すぎ。愛する人にね、「はじめまして」とか言われたらどうしますって話ですわな



。

「今の私にはつきあってたころのあなたへの気持ちはありません」とか言われるのと同じくらいつらいですわな。

気持ちをなくされるつらさ。

忘れられるつらさ。

うんうん。わかるわかる。

ウソンさま、もう何も言わんでええから、とりあえず飲みに行こ、っていいたくなるような作品でございました。

パパの採点。100点満点中80点。

「MUSA」でめっちゃかっこええ武士を演じていたウソンさま。

本作では辛い運命に翻弄される若者を熱演です。ええなあ。ほんま、がんばりやって言いたくなってしまうました。

## THE 有頂天ホテル

---

2005年フジテレビ・東宝作品

監督 三谷幸喜

主演 役所広司、松たか子、佐藤浩市、西田敏行、香取慎吾、篠原涼子、戸田恵子、生瀬勝久、角野卓三、伊東四郎

天才劇作家とっていいでしょうね。

三谷幸喜さま脚本・監督によるスーパーコメディでございます。

とあるホテルの大晦日の一日の、めっちゃバタバタした様子を描きます。

本当、いつもくらいのスペースでは内容がほとんど伝わらないくらい、いろんな人間ドラマてんこ盛り。

どのエピソードをどう説明すればいいのかよくわからないくらい話が入り組んでおりますし、あるエピソードが別のエピソードの伏線になっていて、そのエピソードも別の大きなエピソードの伏線で。

で、最後にはすべてのエピソードが過不足なく決着して大団円を迎えるっていう、もう、非常によくできた物語でございます。

もうねえ、とにかく見てくださって言うしかないですね。

ってわけにもいかないので、登場人物別に説明。

まずはお客から。

佐藤さまは代議士。このホテルに宿泊しております。クリーンなイメージで売ってきたんだけど、ある疑惑がばれて、マスコミに追われる身。

彼女の元カノがホテルの客室係の松さま。

彼とこの夜知り合う娼婦が篠原さま。

西田さまは大物演歌歌手。でもコンサート前には超ナーバスになります。

彼の部屋にサービスに入る客室係が香取さま。香取は今日を最後にホテルをやめようと思っております。で、実はシンガー志望です。

角野さまはこの日、ホテルで行われるパーティで表彰される予定の人。その表彰、前年の受賞者が女性スキャンダルで受賞を辞退したって経緯があって、彼と過去に関係のあった娼婦・篠原さまがこのホテルをうろうろしていることがわかって気が気ではない。

ちなみに角野さまの奥さんは原田美枝子さまで、彼女はホテルのチーフ格の役所広司さまの元カノでございます。

で、役所さまのちょっと上の立場になるのが生瀬さま。

役所の右腕ともいえるスタッフが戸田さま、で、客室係がさっき書いた香取さまと松さま。

ホテルの総支配人が伊東さま。

そんな状況で、実にさまざまな事件が、さまざまなタイミングで発生するわけですね。

演出の手堅さと脚本の流れのよさと、何より役者の巧さ。

もう、びっくりするような傑作でございます。

日本映画をこれからリードしていくのって、きっとたけしさまと三谷さまなんだろうなあって思っていました。

パパの採点。100点満点中90点。

これだけ入り組んだ話を書きながら、全てのエピソードがきちんと落着いて、破綻なくええ感じに感動的に仕上げることができるってことが、もう奇跡的なことだと思っています。

みなさま是非この幸福な時間をお楽しみくださいませ。

## ロストメモリーズ

---

2001年韓国・日本合作

監督 イ・シミョン

主演 仲村トオル、チャン・ドンゴン

めっちゃびっくりしました。

物語の舞台は日本。でもその日本は我々の知っている日本ではありません。

「伊藤博文が暗殺されなかった日本」でございます。

「可能性の未来」の発展形ですわな。

伊藤博文が暗殺されなかったことにより、日本は太平洋戦争に連合軍側として参加し、戦勝国となります。

韓国を含む朝鮮半島は日本の領土でございます。

そんな日本で暗躍する組織が「朝鮮半島開放同盟」みたいな一団であります。

ビルを占拠したり、武装して美術品を強奪しようとしたりの犯罪者集団でございます。

彼らに対するのが、警察のドンゴンさまと仲村さま。

ドンゴンさまはなぜか韓国語が堪能だったりします。

ドンゴンは開放同盟の「ビル占拠事件」を調べるうち、財界にも大きな影響力をもつ、ある財閥に行き当たるわけですな。

財閥を調べようとすると、警察内部からストップがかかります。

その秘密って何やねんって話になりますが。

ここから先はネタバレしますからね。

実は日本は我々の知っている歴史通りに敗戦し、広島長崎に原爆攻撃をうけていたわけですね。

しかし「敗戦」「核投下をうけた国」ってイメージを払拭したかったわけですね。

そんなときに発見されたのが、過去へつながる通路ともいべきオーパーツでございます。

「被爆国」「敗戦国」という過去の過ちを修正したい日本政府は、そのオーパーツを使って「歴史の修正」を試みるわけです。

で、「伊藤博文」の暗殺を阻止し、もうひとつの歴史に乗り換えようとするわけでございます。

主人公たちが生きているのは修正されたほうの歴史。

しかしそんな政府の行動に待ったをかけた男たちがおりまして。それが「開放同盟」なわけですよ。

あらあら。

ネタバレの瞬間、それまでテロリストだった「開放同盟」が正義のために命をかけるヒーロー集団になり、警察は「歴史を書き換えて都合よく生きている悪者」って凶式に変わっちゃった。

この「価値観ひっくりかえし」の部分がすごかったです。

善と悪が五分ほどのシーンで入れ替わってしまいます。

ドンゴンさまは警察を離れ、解放軍とともに戦う決意をします。

ってことはそれまで味方だった仲村さまはその瞬間から敵。

とんでもない設定考える人もいるもんですな。

パパの採点。100点満点中85点。

「価値観がひっくりかえる魔法の五分」って感じですね。この仕掛けには本当にびっくりしました。

こんなすごい映画あったんだなあって思ってしまいました。

次回コラムのご紹介。次回も四月に見た映画のご紹介です。「あらしのよるに」のご紹介です。

## あらしのよるに

---

2006年「あらしのよるに」製作委員会作品

監督 石井ギサブロー

声の主演 成宮寛貴、中村獅童

絵本作家の木村裕一様原作の「あらしのよるに」シリーズの映画化。

シリーズは「あらしのよるに」「あるはれたひに」「くものきれまに」「きりのなかで」「どしやぶりのひに」「ふぶきのあした」と、タイトルわかっているだけで六作あります。

絵本版は「あらしのよるに」と「あるはれたひに」を読みました。

なかなかいい話なんですな、これが。

嵐の夜、ヤギのメイは小さな小屋で雨宿りすることになります。

しばらくしてやってきたのはオオカミのガブ。

二人（というか二匹というか）とも、嵐で鼻カゼをひいてしまって匂いがわからない。

メイは相手のことをヤギだと思い、ガブも相手のことをオオカミだと思って仲良く一夜を過ごすわけですね。

意気投合したガブとメイは、翌日、再び小屋の前で再会しあうことを約束して別れます。

ここまでが原作本「あらしのよるに」のお話。

で、翌日二人は出会う。もちろんメイがヤギで、ガブがオオカミだってことはこのときお互い知ることになります。

それでもメイとガブは友達でいようと約束しあいます。

原作シリーズのコピーにある、「ごちそうなのに友達で、なかよしののにおいしそう」って世界が作られるわけですね。

ガブとメイが友達でいようと約束しあうあたりまでが「あるはれたひに」のお話。

ガブとメイが友達どうしであるってことは、いつしかヤギ仲間、オオカミ仲間たちに知られることになります。

ヤギたち、オオカミたちはそれぞれにガブとメイの友情を自分たちの群れのために利用しようとしています。

しかしメイもガブも群れの仲間のために友達を裏切るということができません。

二人は激しく流れる川に飛び込み、オオカミの群れにもヤギの群れにも煩わされることのない、新しい世界を探す旅にでます。

しかし仲間を裏切ったガブを追って、オオカミの群れが彼らのあとを追うわけなんですな。

果たしてガブとメイの運命やいかに。

「あらしのよるに」って本は、そもそもすんげえ短い童話絵本でございまして、果たしてこの原作で映画が成立するんだらうかって心配しておりましたが、やはりというか何というか、シリーズそのものをひとつのお話にしたアニメに仕上がっておりました。

そもそもがいいお話なんで、けっこう感動的な仕上がりでした。

パパの採点。100点満点中75点。

私、基本アマノジャクですから、こういったいい話って「ケッ」って思いながら見たりするところがありました。

悪くはないし、いい話なんだけど、イマイチのめりこめなかったです。

1997年オフィスキタノ作品

監督 北野 武

主演 ビートたけし、岸本加代子、大杉 漣、寺島 進、白竜

「あらしのよるに」みたいなすんごい感動的な話の次にこういったバイオレンス系の作品を紹介するのはどうなんぞんじょ。

だってめっちゃ素直に、映画みた順番なんだからしかたないじゃないですか。

天才・北野 武監督のバイオレンス映画の傑作でございます。

もうねえ、びっくりしてしまいます。

すっごく簡単に銃を撃ったり殴ったり。

で、リアルに痛そうで、リアルに血が流れる。

北野監督ってね、本当にバイオレンスが好きなのかなあとか思ってしまいます。

バイオレンスとか本当に好きだったらね、あんなに痛そうな映画撮れないんじゃないかなって思ったりして。

というか、何というか、過去のヤクザ映画とか拳銃アクション映画とかを否定するところがスタートラインなんじゃないかなって思ったりします。

銃を撃つ、相手を殴る、映画でこれまでかっこよく撮られてきた映像って、結局は暴力なんだよって言いたいんじゃないかなとか。

この人の映画を見たら、本当にいろんなこと考えさせられます。

主人公たけしさまは元刑事。

妻の岸本さまは不治の病に冒されております。

妻の見舞いのためにある事件の張り込み現場から外してらったたけしさまですが、その日、同僚刑事の大杉さまが追っていた犯人に撃たれて重傷を負います。

たけしさまはその犯人を追いますが、犯人を取り押さえようとした若い刑事も撃たれてしまいます。

たけしさま、所持していた銃で犯人を射殺。

息絶えた犯人にさらに全弾発射。

刑事たけしさまの人生はここから迷走をはじめのわけですね。

ヤクザの金貸しから金を借りまくり、死んだ部下や半身不随となった同僚に金を渡し続けるわけですね。

ヤクザからも金を借りることができなくなったたけしさまは、迷わず銀行強盗を決行。

手に入れた金で車を買って、余命いくばくもない妻と、逃避行をはじめます。

当然たけしさまを追う元部下たち。

金に困っていたたけしさまがいきなり借金を返したことから、何かあったのではと気づいてたけしさまの後を追うヤクザの金貸しグループ。



そんな状況でありながら、たけしさまと岸本さま、花火を楽しんだりしながらの旅を続けます。で、クライマックスのバイオレンスシーンを経て、美しくも悲しいラストシーンにつながるわけですな。

パパの採点。100点満点中85点。

とにかく巧い監督ですね。

どこで何をどう見せるべきなのかがきっちりわかって撮っておられる。

なんてえらそうなこと書いたりしたら怒る人おられるかもしれませんが。

そうかと思うと、びっくりするくらいの長廻しが入ったり、すごく静かなロングショットが入ったり。

普通の監督さんならアップで処理するようなシーンをロングで処理するとか、「えっ？」って思うようなセンスをみせつけてくださいます。

やっぱり好きだなあ、北野監督の映画って。

1996年アメリカ映画

監督 スティーブン・ヘレク

主演 グレン・クロース、ジェフ・ダニエルズ、ジョエリー・リチャードソン

有名なディズニーアニメの実写映画化でございます。

原作はドディ・スミス。

映画的にはねえ、どうなんやろうと思いますが。

ダニエルズさまはゲームプログラマー。

めっちゃ賢いダルメシアン犬を飼っております。

なかなか面白いゲームが作ることができずに煮詰まっていたりします。

ある日、彼は散歩途中でリチャードソンさまと出会います。

リチャードソンさまもダルメシアンを飼っております。二人は意気投合。トントン拍子に結婚。

二人が飼っているダルメシアンにもかわいいベビーがようさんできまして。

リチャードソンさまが勤めている会社のボスがクロースさまでございます。

クロースさまは毛皮コレクターでございます。

クロースさまはリチャードソンさまがデザインした「ダルメシアン柄」のコートを、本物のダルメシアンの子犬の毛皮を使って作ろうとします。

で、ダニエルズさま夫婦が大切に飼っているダルメシアンの子犬をさらおうと、こういうわけでございますね。

まあね、そもそもが児童文学だし、あれだけ有名なアニメの実写映画版なわけですから、ところどころ「それはないやろ」って思ってしまう。

ダニエルズさまとリチャードソンさまの出会いの場面なんかもそうです。

第一印象で相手を殴る・殴られるみたいな勢いだった二人が、その二~三分後におつきあいしましょうなんて、普通「ありえへん」みたいな。

アニメなら許せても、実写だと許せないラインってのが間違いなくあるわけございましてね。

んでもって、題材がめっちゃめっちゃ有名な物語でございますので、スタートラインからビハインドを背負っているというか。

ちょっと見ていてキツかったですね。

パパの採点。100点満点中60点。

まあそれでも画面いっぱい登場するダルメシアンの子犬ちゃん、映像的なインパクトは満点でございます。

それはそれで面白かったです。

あと、楽しそうに悪役を演じておられるグレン・クロースさまが印象に残りましたです。

# 劇場版ポケットモンスター・アドバンスジェネレーション ミュウと波動の勇者ルカリオ

---

2005年ピカチュウプロジェクト作品

監督 湯山邦彦

声の出演 松本梨香、石塚運昇

ポケモンの作品世界に関しては何度か書いているとは思いますが。

劇場版の第一作「ミュウツーの逆襲」がね、とにかく傑作で、普通に大人が見ても涙ウルウルの傑作だったもので、なんだかんだいいながらほとんどの作品見ていたりしますが。

うむむ。

やっぱり今回の作品も第一作を超えることはできていないですね。

ただ、製作サイドとしては、やっぱりとんでもない努力を重ねて映画化って作業に臨んでおられます。

メイキングの映像なんかがよく流されておりますが、「水の都」をモチーフとした作品なんかでは、実際にヴェニスだとかに取材に行かれて、実際のヴェニスの風景をもとにアニメを製作されているとか。

アニメの世界の人にとっては当たり前作業なのかもしれませんが、アニメで海外のロケハンって感覚がまず私などは単純にすげえなあって思ってしまいます。

おそらく中世。

戦乱の世を鎮める力をもった「波動の勇者」って人がおったわけですか。

この人のおかげで戦乱の世は鎮まりまして。

で、現代。

おなじみのサトシくんたちはこの「波動の勇者伝説」の地にたどりつきます。

そこで年一回開催される「波動の勇者メモリアルバトル」みたいな大会で優勝しちゃったサトシくん、一日駅長みたいな感じで、メモリアルデーのパーティの間だけ扮装込みで「波動の勇者」役をやらされることになります。

しかしサトシくんの目の前で、その「波動の勇者アーロン」の杖から、アーロンの従者のポケモン・ルカリオが復活します。

んでもってそのお話とは別に、パーティの最中に「幻のポケモン」ミュウが現れたりしまして。で、「ミュウを狙ったポケモン使い」がミュウを攻撃したときに、身の危険を感じたミュウが、たまたま近くにいた「サトシのピカチュウ」と、かれらを狙う「ロケット団のニャース」とともに姿を消してしまったことから、サトシ・ロケット団が「ミュウを探す旅」をはじめることになります。

って意味わかったかなあ。

傑作「ミュウツーの逆襲」にも登場したミュウ、再び映画版に登場してテコ入ってわけでもないでしょうが...

やっぱり第一作には届いてないようです。

パパの採点。100点満点中70点。

第一作で最高ポイントを出してしまったシリーズってつらいですね。

今やってる平成仮面ライダーも「仮面ライダークウガ」が最高傑作だったと思いますし、平成ウルトラマンも「ウルトラマンティガ」が最高傑作だったと思うし。

さてこの次の作品の評価やいかに。

## 仮面ライダー555（ファイズ）劇場版・パラダイスロスト

---

2003年555製作委員会作品

監督 田崎竜太

主演 半田健人、芳賀優里亜、泉 政行、速水もこみち

平成仮面ライダーの劇場版。

劇場版ライダーが製作されはじめたのは、平成版第二作「仮面ライダーアギト」からでございます。

アギトはテレビシリーズの中に入るエピソード、次の龍騎はテレビ版とは別の、独自の最終エピソード。

で、この劇場版555（ファイズ）は「劇場公開時点で進行していたドラマの世界の数年後」って設定。

わかりにくい。つまり、テレビドラマの続きってわけではないです。

というのはね、この作品、ドラマの最終回までに主要キャストのほとんどが死んでしまうわけなんです。

でも、劇場版としては「ドラマの数年後」ってのはじまりかたをします。

ほな、この話はどこにどうつながんねんって話ですが、結論的にはどこにもどうもつながりようのない、映画独自の世界って解釈が正解だと思います。

ってことで。

「ドラマの夏時点の展開」の数年後。

人類のほとんどは死滅し、地球上は「オルフェノク」と呼ばれる変身能力のある新しい人類が支配する星になっております。

「オルフェノク」を統率しているのが、「スマートブレイン」って大企業。

この会社の内部に、人類を救済するという「伝説のベルト」が保管されております。

このベルトを装着し、しかもベルトを使用できるだけの適性をもった者だけがライダーに変身できるわけですな。

残された「人間解放軍」は、何とかしてそのベルトを奪おうとするわけです。

オルフェノクの中には、人間に味方する一派がおりまして、それが泉さまをリーダーとする一派。

人類解放軍には芳賀さまだとかのテレビドラマ主要キャストが集まっております。

彼ら解放軍が待ちこがれている人物が一人。

それは、かつての戦いで、スマートブレインのライダー部隊に拉致されたライダーファイズ＝乾巧＝半田さま。

やがて解放軍の目の前に現れたファイズは、人類の存亡をかけた黒いベルト争奪の戦いに身を投じることとなります。

作品クライマックスで、主人公巧のとんでもない秘密が明らかになるわけですが...

ドラマと共通のこの秘密が明かされたのって、時期的に映画の公開とテレビドラマとどっちが先だったんでしょうか。

テレビでこの秘密知ったときってめっちゃびっくりしましたが。

リアルタイムで映画見ておけばよかった。

パパの採点。100点満点中70点。

解放軍の中心メンバーとして出演しているのは、ブレイク前の速水もこみちさまです。

「こんなところで何してんの」って感じ。

「ガメラ3」でイリスに生気を吸い取られる仲間由紀恵さまをみたときと同じくらいびっくりしてしまいました。

## セント・オブ・ウーマン 夢の香り

---

1992年アメリカ映画

監督 マーティン・ブレスト

主演 アル・パチーノ、クリス・オドネル、ジェームズ・レムホーン

この映画って、あまり好きなジャンルではないんですが、なぜか見ました。

予告編とか映画情報とかを見たわけじゃなくて、ビデオのパッケージ見て衝動的に見てしまった  
ってのが正しいところでございます。

パチーノさまのダンスが感動的だってパッケージに書いておりましたねえ、あのパチーノさまが  
どんなすごいダンス踊るんだろうって思って見ましたら...

ダンスがすごくて感動的だったんじゃないじゃなくて、映画の作りとして「ダンスの場面が感動的だ  
った」って話でありまして。

「なあんや、パチーノさまがタップダンスとかするわけじゃないんや」って思いながらその場  
面見た記憶があります。

そりゃあねえ、パチーノさまがタップとか踊るわけないんですが。

オドネルさまは全寮制の名門校の生徒でございます。

彼は退役した全盲の元軍人のパチーノさまの世話をするってアルバイトを引き受けます。

もうねえ、パチーノさま、めっちゃわがままでめっちゃ頑固。

映画見てて腹たつくらいめっちゃ頑固じじいです。

パチーノさまはオドネルさまを伴ってニューヨーク贅沢旅行にお出かけしたりします。

純粋なオドネルさまにはパチーノさまのそんな行動が理解できないわけですね。

しかし行動をともしするうち、二人の気持ちが次第に通じはじめ、やがてオドネルさまはパチー  
ノさまの真意を知ることになるわけでございます。

もうねえ、パチーノさまがめちゃうちゃいいです。

軍人の気持ちが変わる場面ごとにどんどん印象がかわっていく素晴らしい演技。

すげえなあ。

オドネルさまもけっこういいです。この人がオドオドオロオロすればするほど、パチーノさまの  
印象が変化するわけございまして。

そういう意味ではなかなかバランスのとれた名コンビだったんじゃないかなあって思います。

パパの採点。100点満点中70点。

パチーノさまはこの作品の演技で、アカデミー主演男優賞を受賞致します。

うん、めっちゃ納得の名演技でございますです。

## ガメラ・大怪獣空中決戦

---

1995年大映作品

監督 金子修介

主演 伊原剛志、中山 忍

平成ガメラシリーズの第一弾。

「ガメラ対深海怪獣ジグラ」から封印されておりましたガメラシリーズ、ついに再映画化。ゴジラシリーズの例を出すまでもなく、昭和時代とは特撮のレベルが全然違いますもんで、作品の完成度とか特撮のリアルさとか、もう全然違います。

特に「ガメラ」シリーズの場合はね、飛行シーンが作品の生命線ともなるわけでありまして。この作品の最映画化を聞いたときはね、さすがに飛行シーンは封印されるんじゃないかと思っていました。

明らかにマンガチックでしょ。ガメラの飛行シーンって。それがなんとあんだ。とんでもないUF0っぽいカッコいい飛行シーンがクリエイトされていまして、正直感動してしまいました。

本作でのガメラは地球の守り神っぽく描かれております。

一人の女の子がガメラと交感することができまして、そのツールが勾玉だったりしまして。で、それがけっこう物語に奥行きとか、深みというか、そういうものを感じさせてくれるように。

けっこう気に入った設定でございます。

今回の敵役は、昭和時代からの宿敵ギャオス。

大昔に水没した古代文明の科学力で創造された遺伝子生物って設定でございます。

このギャオス、エサが不足するなど地球環境が悪化して、種の生存が危うくなると判断すると、数世紀眠りつづけるという「休眠卵」なんてのを産む、まあいわば「思考する遺伝子」をもった生物。

このギャオスを相手に、われら地球の守護神ガメラが戦うわけでございます。

昭和ガメラはどこをどうとっても人類の味方で子供の味方、なんて作りかたされてまして、そこがなんとなく胡散臭かったわけですが、今回は、「ガメラだって怪獣なんだから、きちんと怪獣として警戒って対応すべきですよんか」みたいな設定がちゃんとなされていましてし、続編の「イリス」編に至っては、「今回のギャオス編でガメラとギャオスとの戦いで巻き添えになって死んだ人の家族がガメラを恨む」なんて重い設定もでてきてまして、なかなかイカす作品世界を広げてくれております。

パパの採点。100点満点中70点。

今回のギャオス、怪獣デザイン的なリアリティを出すために、「スーツアクター」ならぬ女性の着ぐるみ俳優「スーツアクトレス」によって演じられております。

「スーツアクトレス」ってめっちゃ珍しいそうです。

ギャオスの「線の細さ」、そういう目で見えて堪能していただければと思います。





## スパイダーマン

---

2002年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 トビー・マグワイア、ウィレム・デフォー、キルスティン・ダンスト

この本でご紹介した作品のチェックなんかをときどきするわけなんですけど、やっぱりねえ、こういう作業はしなくちゃいけません。

「スパイダーマン2」を紹介して「スパイダーマン」ご紹介してないとか、「エイリアン3」紹介して「エイリアン」「エイリアン2」紹介してないとか。

びっくりしてしまいます。

スパイダーマンなんかとっくにご紹介したつもりになっておりました。

サム・ライミ監督によります、アメリカンコミックの実写映像化作品でございます。

ちなみにUSJの大人気アトラクションの「スパイダーマン・ザ・ライド」は、この実写版スパイダーマンをモチーフにしたアトラクション...ではなく、コミックスとかアニメとかをモチーフにしております。

って今さら言わなくてもみんな知ってると思うけど。

主人公のマグワイアさま、はっきり言ってパツとしない系の学生さん。

そんな彼は特殊なクモにかまれて（刺されて？）、超人的な体力とクモももつ特殊能力を身に付けてしまうわけです。

最初はその能力を金儲けに使おうと思ったりするわけですが、「自分が見逃してしまった強盗犯人」に自分の叔父が殺されるって事件をきっかけに、彼は正義のヒーローとして戦うことを決意します。

そんな彼の目の前に現れたのは、親友の父親でもある科学者、デフォーさまが薬の影響で変身してしまった彼自身の悪の人格の化身、グリーンゴブリンでございます。

マグワイアさま、親友の父親と戦うことになるのであります。

このシリーズのスパイダーマンってね、とにかく悩み、苦悩し、葛藤し続けるキャラでございます。

ヒーローであることの苦悩っていうか、そういう設定が物語に深みと奥行きを与えているように感じます。

っていいながら、見ていて「ちょっと悩みすぎ違うの？」っていいなくなるくらい、いろいろ悩んでくれます。

アメリカンヒーローのわりにちょい軟弱な感じ。

これも病める現代を象徴したキャラクター設定の産物なのではないでしょうか。

パパの採点。100点満点中80点。

それにしてもねえ、こういうアメリカンコミック系の悪役をやるビッグネームの役者さん、どうしてこんなに楽しそうに演技されるのでしょうか。

ジャック・ニコルソンさま、アーノルド・シュワルツェネッガーさま、ジーン・ハックマンさま、テレンス・スタンプさま、トミー・リー・ジョーンズさま...

本作のデフォーさまもめっちゃたのしそう。なんかうらやましいですね。

1994年アメリカ映画

監督 ピーター・シーガル

主演 レスリー・ニールセン、プリシラ・プレスリー、ジョージ・ケネディ、OJシンプソン

実はこのシリーズ、めっちゃ好きやったりします。とりあえず映画シリーズは三作（もちろん33作ではありませんよ）制覇しましたし、それとは別に、テレビサイズのシリーズ（「ポリス・スクアッド」）なんかも見ましたです。

なんか好きなコメディだなんて思ってスタッフ欄よく見たら、「ケンタッキーフライドムービー」のデビッド・ザッカーさま、ジェリー・ザッカーさま、ジム・エイブラハムズさまが手がけたコメディシリーズでございました。

ちなみに「ケンタッキー...」時代はズーカー兄弟とか表記されてましたが。

レスリー・ニールセンさま主演によるドレビン警部ものの最終作品でございます。

今回もけっこういろんな作品をパロディにしてくれております。

「ジュラシック・パーク」だとか「マルコムX」だとか。

あとねえ、画面の隅のほうでさりげなく面白いことしてくれてるのが大好きなんですね、このシリーズ。

たとえば爆弾事件の現場検証のシーンなんかで、死亡者の位置をチョークとかロープとかで囲ったりするでしょ？

この映画では、ありえへん形でかこってたり、とんでもない場所に人型のチョークが書かれてたり、いきなりエジプトの壁画風になってたり。

こういうところで細かいことしてくれるのがめっちゃうれしいです。

今回は引退したドレビン警部に突然の復帰要請。

爆弾魔捜査を依頼されます。まあドレビン警部のことですから、普通の展開にはならないことはわかっているのですが。

いつもいつも不遇な目にあうOJシンプソンさま、今回はちょっと控えめな不遇さです。

なんか作風違うなあって思ってたら、この作品はデビッド・ザッカーさまは製作・脚本にまわりまして、監督はしてないようですね。

それでかどうかわかりませんが、ちょっとパワーダウンしたような印象だけが残りました。

パパの採点。100点満点中75点。

好きなシリーズなんだけど、第一作～第二作のパワーは感じられません。

ちょっと残念。

ってよく考えたらパート2まだご紹介してないんですよ。またやってしまった。

パート2は近々ご紹介ってことで。

## ジョニーは戦場へ行った

---

1971年アメリカ映画

監督 ダルトン・トランボ

主演 ティモシー・ボトムズ、キャシー・フィールズ、ドナルド・サザーランド、ダイアン・バーシ

めっちゃ重い反戦映画でございます。

ダルトン・トランボ監督の初監督作品にして最高傑作でございます。

この人、そもそも脚本家だったらしいですね。

で、「赤狩り」なんかでけっこう苦労されたそうです。「赤狩り」に関してはロバート・デ・ニーロさま主演の「真実の瞬間」って映画で、めっちゃ詳しく描いてくれておりますので、まあこれを見ていただければ、こういうところでクダクダ書くよりもわかりやすいかと思います。

ただこの作品、もう、めっちゃ重いメッセージがこもった作品でございます。

1971年っていいますと、ベトナム戦争がけっこうグダグダしている時期です。

このような時期に作られた映画だからこそ意味があるのだと考えられます。

第一次世界大戦下。

ジョニー＝ボトムズさまという青年が出征し、戦場で目・耳の機能を失い、さらには手足を失って病院に収容されます。

青年はそこで失われた過去の日々を思い起こすわけですね。

美しい過去の思い出と、それが美しくあればあるほど辛い現実。

見えない目がかすかに感じる「光」の感覚だけを頼りに、時間の流れを知る悲惨な毎日。

頭をベッド脇に打ちつけるモールス信号だけが外部との連絡手段でございます。

めっちゃ悲惨。

それでも戦いは続く。

青年は絶望のメッセージをただひたすら繰り返します。

もう、めっちゃ重くて暗い気分になる作品です。

やだなあ、戦争って。

反戦を主張するためには戦争を描かなければなりません。

ここでは戦闘はほとんど描かずに、戦争被害者として青年を描くことによって、強烈な反戦メッセージを伝えようとしております。

パパの採点。100点満点中75点。

いい映画なんですが、好きじゃないです。

申し訳ないんですが。

メッセージは伝わりましたが、ちょっと重すぎる気分になっちゃいます。

名画だとは思いますが、もう一度見ようとか、そういう気持ちにはならない作品です。

## エイリアン

---

1979年アメリカ映画

監督 リドリー・スコット

主演 シガニー・ウィーバー、トム・スケリット、ベロニカ・カートライト、ジョン・ハート、イアン・ホルム

今日からは、これまで中途半端な形でしか紹介できていなかったシリーズものをご紹介します。

「エイリアン」シリーズって、とっくに全作品ご紹介したと思っておりましたが、調べてみたらなぜか一番苦手な「エイリアン3」しかご紹介しておりませんでした。

この作品は日本公開前、「人類がエイリアンと遭遇して、そのエイリアンが人類と相容れない生殖能力と肉体を持っていたら…」なんて紹介のされかたをしていました。

まあ内容的には間違いないんですが、こういう説明をされると、もっとエロティックな作品をイメージするじゃないですか。

全然そういう内容じゃなかったんでびっくりしました。

宇宙貨物船ノストロモ号。

その船が貨物を積んで地球に帰る途中、コンピューターが突然コースを変更。

船は未知の惑星に向かいます。

船会社のコンピューターは、未知の生物発見の可能性があると、その調査採集を最優先するって設定になってたらしい。

止む無く惑星を調査するクルーたち。

調査の途中で、乗組員の一人・ハートさまの顔に謎のエイリアンがくっついちゃいます。

エイリアンはハートさまの体内に寄生。

彼の胸を破って現れたかと思うと、船内のどこかに姿を消します。

船長スケリットさまは当初は「船会社の指示」で動く「船内科学班」とともにエイリアン捕獲を指示しますが、エイリアンはクルーを次々に殺しながら大きく成長。

船長はエイリアンを船外に射出しようとはしますが、逆に餌食になってしまいます。

生き残ったクルーたちは船を捨てて脱出し、エイリアンごと船を爆破しようと行動を起こしますが、準備中に脱出艇の入り口にそのエイリアンがおったりして。

至れり尽くせりの展開でございます。

主演のシガニー・ウィーバーさまはこのシリーズで一気にブレイク。

それだけではなく、リドリー・スコットさまにジェームズ・キャメロンさまにデビッド・フィンチャーさまにジャン・ピエール・ジュネさまなんてとんでもない監督たちを生み出すきっかけともなった、スターメイカーのようなシリーズでございます。

パパの採点。100点満点中90点。

とにかくめっちゃよくできたSFサスペンス。これだけよくできたSFもあまりないのではないかと思います。



## エイリアン 2

---

1986年アメリカ映画

監督 ジェームズ・キャメロン

主演 シガニー・ウィーバー、マイケル・ビーン、ランス・ヘリクセン

今日もこれまで中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「ターミネーター」の素晴らしい映像世界で全世界を魅了したジェームズ・キャメロン監督が、この作品では「エイリアン」の作品世界でおお暴れしてくれます。

この作品のキャッチコピーは「今度は戦争だ」だったです。

前作ではめっちゃくちゃサスペンス映画だった「エイリアン」ですが、今回はそのコピー通り、スーパーアクション大作として登場でございます。

もうねえ、めっちゃアクション映画。

あの「エイリアン」の続編がこんなにハードアクション映画になるなんて。

めっちゃびっくりしました。

前作でただ一人生き残ったリプリー＝ウィーバーさま。

地球に向かう救命艇は回収されず、彼女は冷凍睡眠の状態で、膨大な時間宇宙空間を漂っておりました。

辺境の星域で彼女は発見され、地球にもどりますが、その間に、第一作で「エイリアンの巣」となっていた謎の惑星の開発が始まっており、その星との連絡がとれなくなっているとの話を聞きます。

で、ウィーバーさまはその星でのナビゲーションを頼まれてしまいます。

予想通り、その星の開発スタッフのほとんどは行方不明になっております。

その星でウィーバーさま、エイリアンと戦うわけでございます。

前作で一匹だけだったエイリアンですが、今回は団体さままでご出演。

クライマックスでは大量の卵を産みだすクイーンエイリアンなんてのも登場します。

途中のアクションもサスペンス演出もバッチリ。

それでいてリプリーの母性全開みたいなエピソードもありいの、リプリーがロボット型のパワーショベル使ってエイリアンと格闘する場面ありいの。

めっちゃ楽しめました。

キャストには「ターミネーター」からの盟友、マイケル・ビーンを配したりなんかして。

めっちゃくちゃ大好きな作品でございます。

パパの採点。100点満点中98点。

100点つけてもいいんですが。

生涯の好きな映画ベストテンの上位に入ってくる作品でございますので。どうして今まで紹介しなかったのかめっちゃ不思議です。



## スパイキッズ

---

2001年アメリカ映画

監督 ロバート・ロドリゲス

主演 アンтониオ・バンデラス、カーラ・グギノ、アレクサ・ヴェガ、ダリル・サバラ

これまで中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

このシリーズは3だけをご紹介して、第一作をご紹介してなかったですね。

2はまだ見ていない...はずなんです。

見たような気もします。

っていうか、なんかそんな印象あるシリーズでございます。

バンデラスさまとグギノさまはスパイ。

そもそも全世界を股にかけて活躍するような、一流のスパイです。

そんな二人が恋におち、熱烈な恋愛の末に結婚。

二人はともに引退し、今では二人の子供とともに幸せな家庭生活を送っております。

そんなバンデラスさまのもとに、かつて所属していた組織から突然の任務復帰要請。

かつての仲間が任務中、消息を絶ち、おそらく敵にとらえられているであろうことを知らされます。

バンデラスさま・グギノさま、めっちゃひさしぶりの任務にうきうき。

しかし、潜入した敵組織アジトでつかまってしまいます。

両親が共に世界的スパイだったことを知った二人のこどもヴェガさまとサバラさま、父と母を救うため、最新のスパイグッズで完全武装して敵アジトに向かうのであります。

スパイっていっても、現実の「リアルなスパイ」ではなく、007みたいなありえへんスパイ世界で、ありえへん秘密兵器もって敵に立ち向かいます。

こういう作品の場合、ありえへん秘密兵器の面白さだけでも作品をひっぱっていけそうですが、その秘密グッズを操るのが子供だってえのが実にいい感じでございます。

バンデラスさま、グギノさまってけっこう渋い役者さんを起用しておりますが、作品の主役はあくまでも子役二人。

これがまたしっかり頑張ってくれております。けっこう楽しく見ることができました。

パパの採点。100点満点中85点。

敵役のアラン・カミングさまがけっこうええ味だしております。

子供番組のホストをつとめながら、マッドサイエンティストと共謀して世界征服を企む男。

マッドサイエンティストの作りだすクリーチャー（というんでしょうか？改造人間っていったらいいのかなあ）が、なんかすごく変でいけてましたです。

## 悪魔のいけにえ

---

1974年アメリカ映画

監督 トビー・フーパー

主演 マリリン・バーズ、アレン・ダンジガー、ポール・A・パーテー

今日もこれまで中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

っていうか、このシリーズははなからご紹介してなかったですが。

奇才トビー・フーパー監督の衝撃のデビュー作。

当時は「エクソシスト」とか「ヘルハウス」とかの悪魔心霊系映画が大流行しておりました。

そんな中で、こういうドド・スプラッター作品が出てきたわけですから、そりゃあみんなびっくりしたことだと思います。

もうねえ、低予算で作っている作品でございますから、特殊メイクとかSFとか使えませんが、その分、カメラワークだとか演出だとかサウンドだとかで恐怖をあおっていきます。

この作品見たのは大学生とかになってからだったと思います。

公開は小学校高学年のころだったです。

映画特集番組でこの作品が紹介されて、それ見ちゃって、夢に出てくるくらい怖かったことを覚えております。

めっちゃくちゃインパクトのあるショック画像が連発。

うぎゃあああああ。

テキサスの町を車でドライブしていたヒッピーさん、車の故障でやむを得ず田舎の一軒家に電話を借りに訪れます。

しかししかし、家に入った者から順に、マスクをかぶり牛肉解体用のエプロンをつけた大男に、ハンマーで頭を殴られたり、生きたまま牛肉を吊るす鉤爪に吊るされてチェーンソーで解体されたり。

もう、めっちゃくちゃな目にあいます。

今でこそ「レザーフェイス」はこういうキャラで、こういう道具をもった殺人鬼で...なんて知識をもった状態で見ることはできますが、予備知識なしでこの映像を見せられた人ってさぞやショックを受けたことでしょう。

パパの採点。100点満点中90点。

この「レザーフェイス」って殺人鬼、有名な犯罪者「エド・ゲイン」をモデルにしたそうです。

「サイコ」「羊たちの沈黙」のモデルとしても知られるこの男、殺人を繰り返し、その死体で部屋を装飾していたそうでもあります。

このレザーフェイスがかぶっているマスクは、殺した「獲物」の皮膚を縫い合わせて作ったマスクであるって設定。

気持ち悪い。トビー・フーパー監督って趣味悪いなあ。

## 悪魔のいけにえ 2

---

1986年アメリカ映画

監督 トビー・フーパー

主演 デニス・ホッパー、キャロライン・ウィリアムズ、ルー・ベリー

これまで中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

前頁でご紹介した「悪魔のいけにえ」の続編でございます。

前作から13年。あのチェーンソーファミリーが帰ってまいりました。

さすが13年の時代の流れですなあ。前作でひどい目にあったのは「ヒッピー」。

今回の最初の被害者は「ヤッピー」でございます。

っていいながらヤッピーってどんな人なのかイマイチよくわかってないんですが。

とりあえず、こぎれいなカッコしていい車乗り回している不良少年が、今回いきなりえらいめにあいます。

低予算で特殊メイクとか全然使うことのできなかった前作ですが、今回は冒頭いきなりの特殊メイクにもセットにも力はいっております。

冒頭のショックシーンは特殊メイクというよりはワイヤーワークまたはリモコンの人形だったようですが。

前作でおお暴れしたあのファミリー、再び降臨。

えっとねえ、なんとあのレザーフェイスファミリー、今では実業家になっております。

実はレザーフェイスの父親、人肉を原材料に使ったチリソースだかなんだかを発売したら、それが大ヒット商品になってしましまして、今やレザーフェイス君は趣味とソースの材料調達を兼ねた人間狩りを続けていたなんてえとんでもない話でございます。

今回はそのレザーフェイスに協力ライバルが登場。

かつて自分の身内を殺され、レザーフェイスファミリーをつけ狙うセンキレ親父、われらがデニス・ホッパーさまでございます。

物語後半は、このホッパーさまとレザーフェイスのセンキレバトル大会。

おまけにチリソース工場大崩壊のスペクタクルシーンつき。めっちゃすごいです。

パパの採点。100点満点中75点。

低予算からスタートしたフーパー監督、この作品のころには「ポルターガイスト」だとか「スペースバンパイヤ」などの大作をヒットさせ、財力は充分。

スケールが強烈になった分、ショッキングさとか、おどろおどろしさとかがほとんど感じられなくなりました。

これってホラー映画にとっては致命的なマイナスでございます。

ちょっと残念な内容になってしまったような気がします。

## 未来世界

---

1976年アメリカ映画

監督 マイケル・クライトン

主演 ピーター・フォンダ、ブライス・ダナー、ユル・ブリンナー

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

ユル・ブリンナーさま主演の傑作「ウエストワールド」の続編。

前作で脚本・監督を担当し、今回もメガホンをとったのは、今では「ジュラシックパーク」のベストセラー作家マイケル・クライトンさまでございます。

前作は「ロボットを使った、ハイテクテーマパーク」のロボットたちの暴走を描いたアクションホラームービーでしたが、今回はさらに複雑。

前作でロボットたちが暴走し、閉鎖となったテーマパーク「デロスランド」にうごめく巨大な陰謀が明らかになります。

コンピューターシステムの暴走で、ロボットたちが多数の利用客を殺してしまうというとんでもない事故が発生してしまったテーマパーク「デロスランド」。

しばらくの間閉鎖されておりましたが、ようやく営業が再開されることになります。

再開にあたり、各国の高官たちが招待されるわけですね。

彼らとともに、新聞記者フォンダも招待されます。

しかしこの「高官の招待」にはとんでもない秘密がありまして。

実は「デロスランド」のオーナーは世界征服を企む大悪人だったわけでございます。

政府高官を拉致しまして、高官そっくりのロボットにその代役をやらせ、世界を操ろうと考えていたわけでございます。

この超コワイ陰謀に気づいたフォンダさまの目の前に現れたのは、もう一人のフォンダさま。

なんとフォンダさまの複製ロボットもつくられていたわけでございます。

さあここで、フォンダさまとフォンダさまの戦いが始まります。

果たして勝つのはどちらのフォンダさまなのでしょう。

パパの採点。100点満点中80点。

前作「ウエストワールド」もめっちゃくちゃ面白かったですが、この映画もスケールが大きくて大好きです。

ただ、やはり第一作をみたときの衝撃まではちょっといかなかったですね。

ただ、クライマックスの盛り上がりはさすがって感じでした。

ラストもけっこうスカっとした感じでした。楽しませていただきました。

# ウルトラマンティガ&ウルトラマンダイナ・ウルトラマンガイア超時空大決戦

---

1999年東宝・円谷プロ作品

監督 小中和哉

主演 吉岡毅志、濱田 岳、渡辺裕之、平泉 成、かとうかずこ

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

平成第一期ウルトラマンの映画版第二作になります。

平成第一期ウルトラマンとしてはとりあえずは「ティガ」「ダイナ」「ガイア」とあるわけで、「ガイア」は平成作品としては三作目でございます。

なんでこういうことになったかってえと、「ティガ」はテレビで「ティガ」を放送していた年には映画化されなかったからです。

以前ご紹介しました「ウルトラマンティガ・ファイナルオデッセイ」は、この「ティガ・ダイナ・ガイア」の翌年に、テレビ本編の完結編として製作されました。

って豆知識はこのへんにして、「ティガ・ダイナ・ガイア」の話。

「ガイア」ってね、けっこう暗くて重い作品世界が特徴でございました。

宇宙からやってきた「根源的破滅招来体」ってのが送り込んでくる宇宙怪獣が敵で、その怪獣たちに対抗するのが地球怪獣で、でも怪獣の暴れる理屈と人間の理屈は違うから、ウルトラマンガイアはそのどちらをも相手しないといけなくて、で、アグルってえもう一人のウルトラマンがおりまして、それは地球を守るためには人間を滅ぼしてしまうことになってもしかたないってウルトラマンでございまして。

みたいな、何かを象徴しているかのような重いテーマをもった設定だったわけで。

ドラマのほうがそんな重い話だから、映画は逆にすごく軽いです。

主人公は濱田 岳さま。

これって彼が小学生のころの作品になるんですね。

彼は夢で見た「どんな願いもかなえてくれる赤い玉」を現実に入れます。

彼はテレビの中の「ウルトラマンガイア＝高山我夢＝吉岡さま」を現実の世界に呼び出してしまおうわけです。

その話を聞いた同級生のワルガキ軍団が、濱田クンの持つ赤い玉を奪って、怪獣なんかを創造しちゃうわけです。

で、テレビの中から現実の世界に飛び出したガイアと戦うって話なんですけど、ワルガキが作った怪獣ってのがめっちゃ強くてですね、増殖分裂したりするわけです。

陸上怪獣のキングオブモンスと、空を飛ぶ怪獣のバジリスと、水陸両用みたいな怪獣のスクーラー。

ガイヤピンチ。

いつしか赤い玉の邪念に操られていたワルガキから玉を奪った濱田さま、三匹になった怪獣に対抗するために、あと二人のウルトラマンの登場を願います...

で、ティガとダイナが出てくると、そういうわけでございますわ。

パパの採点。100点満点中70点。

この映画では、ガイヤに変身する吉岡さまとかめっちゃ地味です。

とにかく濱田さまがめっちゃいいです。

この人、小学生時代からこんなに巧かったんだあってびっくりしてしまいました。

## 仮面ライダーアギト劇場版プロジェクトG4

---

2001年東映・石森プロ作品

監督 田崎竜太

主演 賀集利樹、要 潤、友井雄亮、小沢真珠、升 毅

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

平成仮面ライダーの映画版第一作。

なんかウルトラマンとパターン似ているんですが、仮面ライダーも平成版第一弾の「仮面ライダークウガ」は映画化されませんでした。

ですんで、平成版仮面ライダーの映画化第一作はこの「仮面ライダーアギト」になります。

仮面ライダーもウルトラマン同様、平成に入ってから「一人のライダーが複数の形態に変身する」ってパターンが定着しております。

メインキャラのアギト（賀集さま）は、三パターンくらいに変身したんじゃないでしょうか。

アギトとは別に、友井さまが変身するギルスと、警察官の要さまがロボット型スーツを装着するG3（G3から物語途中でG3Xにヴァージョンアップしました）がおります。

ドラマでの敵は、ある日海岸に打ち上げられた太古のオーパーツから生まれた謎の少年～青年でございます。

怪人軍団「アンノウン」は、彼の指示で動いているらしい。

んで、怪人たちは、まあ言うところエスパーというか、超能力者ですな、そういう「自分たちを滅ぼすかもしれない力を持った新しい人類」を殺していくわるい奴なわけです。

さて映画版。

怪人たちは政府の「超能力研究所」を襲撃、そこで超能力（まあスターウォーズでいうフォース）の訓練してた超能力者たちを殺そうとします。

そこから逃げ出した二人の子供。

そのうちの一人がギルス＝友井さまと、もう一人がアギト＝賀集さまと知り合うわけですな。

これで三人ライダーのうち二人は巻き込まれることになりまして、あと一人は警察のライダーだから、嫌でも物語にかかわってくるわけで。

で、その警察の装着型ライダーシステムを開発したチームに、自衛隊から女性研修生がやってくるわけですね。

これが小沢さま。

しかし彼女は研修に来たってのは嘘でございまして、実は開発途中で封印された「めっちゃ強いけど、装着員が死んでしまう」という危険なシステム「G4」の設計図を盗むことが目的だったわけです。

で、自衛隊はG4システムを完成させてしまいます。

G4のシステムを完全なものにするために小沢さまは、超能力をもった子供をシステムの中枢に組み入れ、その予知能力で敵の攻撃を予測できるようにしようとします。

んで、小沢さまは超能力をもった子供を誘拐しようとして失敗、その子供よりももっと強い予知能力を持っていた「賀集さまの彼女」を拉致します。

ってわけで、自衛隊G4と警察G3、ライダーとアンノウンが対立しあうバトルが繰り広げられるわけでございます。

パパの採点。100点満点中70点。

もうねえ、とにかく話がよくできております。感心してしまいますわ。

ちなみに変身ヒーローの敵がオーパーツにからんだ秘密をもっているってお話、実は私、この作品以前に考えてはいたのですが...いけませんねえ。

考えつくだけじゃなくて、早く本の形にして、発表しなきゃいけませんわな。頑張ろうっと。



## ザ・フライ 2・二世誕生

---

1989年アメリカ映画

監督 クリス・ウェイラス

主演 エリック・ストルツ、ダフニ・ズーニガ

今日もこれまでのコラムで中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

クローネンバーグ監督の「ザ・フライ」の続編でございます。

とにかく前作はホラー映画史に残る傑作だったわけでありまして、やはりそのハードルは高かったって言うしかない感じでございますわな。

物語の完成度も、設定の説得力も、前作にははるかに及ばなかったです。

っていうか、これが「ザ・フライ」の続編ですって言って、前作の監督クローネンバーグさまは怒らなかったんでしょうか。

前作ラストで悲惨な死をとげた科学者。

彼には彼女がおりました。

実は二人はエッチしててですねえ、彼女の体内には科学者との間の子供が宿っていたわけでございます。

彼女、なんとか出産しますが、彼女が産み落としたのは、巨大な「昆虫の卵」でございました。

で、その卵から生まれてきたのが「ハエ男＝ザ・フライ」なわけでございます。

前作同様、彼は遺伝子レベルでハエと人間とが混ざり合った新種の生命体なわけですね。

彼は驚くべき早さで成長します。

もちろん研究室の中に軟禁されたような状況ではあるんですが。

そんな彼＝ストルツさまが恋をしてしまいます。お相手は研究室のコンピューター担当のズーニガさまでございます。

二人で協力しあい、父が手がけていた「物質転送装置」の研究を進めるわけですが、ストルツさまの体は少しずつ変化をはじめめるわけです。

彼は人間になるための最後の方法、ハエに変身しつつある父が試そうとした最後の方法を試そうとします。

その方法とは...

パパの採点。100点満点中60点。

えっと、「ザ・フライ」ってのはそもそも「蠅男の恐怖」って作品のリメイクなわけですが、私的には「わかりやすい造形」の「蠅男」のほうが好みなんでございます。

そこへきて「ザ・フライ」があって、んで「ザ・フライ2」だったもんで、はなから「うむむ、もうええんとちゃうの？」って感じでした。

悪い作品ではないと思いますが、なにぶんテーマが難しすぎたんじゃないかなって思います。

というのもね、このシリーズの最大の失敗は、人間がだんだんハエになっていくってところでして。

「蠅男」はね、「蠅男」なんです。だからどんなに苦悩しても苦しんでも、「ハエ男」として見てしまうんです。

当たり前だけど。

でもこの「ザ・フライ」シリーズはね、最初は人間としてそれなりに感情移入してみてもいいんですが、中盤から感情移入をやめてしまうんです。

後半なんて、主人公が蠅男ですらなく、蠅でもない「でっかい生き物」になるわけでありまして。

これでは感情移入なんかできまへん。

いや、マジで。

ってことで、ちょっと点数辛めでございます。申しわけありません。

## 呪怨 2

---

2003年「呪怨2」製作委員会作品

監督 清水 崇

主演 酒井法子、新山千春、葛山信吾、堀江 慶、市川由衣

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「リング」あたりで火がついた「ジャパニーズホラー」のある意味最高峰ともいえる作品でございます。

「リング」「リング2」「らせん」「リング0」...ここいらの作品ってね、実はそんなに怖くなかったりします。

って言ったら怒られるかもしれないけど。

確かにめっちゃ怖かったです。

「リング」なんかは、それまでに見た映画で一番怖かったと記憶しています。

でも、「呪怨」を見まして、「一番怖い映画」のベスト1が入れ替わってしまいました。

それくらい怖かったです。

とりあえずはビデオ版の「呪怨」1・2と、映画版の1・2を見ていただきたいなと思ったりしているんですが。

ホラー苦手な人にはめちゃくちゃキツイかもですよ。

ただ、歴史的傑作であることには違いないかと思えます。

主人公の酒井さまは女優。

ホラー映画ばっかりに出演する、「絶叫女優」というか「スクリーミング・クイーン」っていうか、まあそういう役者さんなわけです。

彼女は実際に殺人事件が起こった「呪われた家」を検証するってえ心霊特番に出演するわけですが、その「呪われた家」ってのが、「呪怨」のカヤコさんトシオくんの家なわけですね。

で、お約束通り、家に足を踏み入れた者（酒井さま・新山さま・葛山さま）が呪われます。

っていうか、今回は、主要キャストのこの三人はあとまわしにされて、彼らをとрмаく人（酒井の婚約者の斎藤 歩さま、新山の彼氏の堀江さまあたり）からだんだん呪われていきます。

後半では酒井が主演する映画のただのエキストラの市川さまがとんでもない怖い目にあったりして。

っていうか、呪われた人が主演する映画のエキストラやっただけでカヤコさんに出てこれちゃあ、もうなんにもできませんよ。

めっちゃ理不尽だけど、しゃあない。

呪いなんだし。

もうねえ、酒井さまも新山さまも葛山さまも、とんでもない目にあいます。

めっちゃかわいそう。

それぞれの登場人物を、オムニバス形式で追いかける手法は変わっておりません。

めっちゃええ感じでございます。もっとシリーズ見たいなあって思ってしまいます。

パパの採点。100点満点中80点。

気持ち悪い作品、残酷な作品、ビクッとさせられる作品。

ホラー映画にもいろいろあると思うんですが、本当の意味で怖かったシリーズって、いくら考えてもこれを超えるものはないと思います。

呪怨ワールドって、やっぱりビデオ二本と映画二本の四作でひとつの世界だと思しますので、まあできるだけ見ていただきたい作品でございます。

## 戦国自衛隊

---

1979年角川春樹事務所作品

監督 齋藤光正

主演 千葉真一、夏八木 勲、渡瀬恒彦

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

っていうか、シリーズものじゃないんですが。

江口洋介さま主演の「戦国自衛隊1549」は、続編でもないリメイクでもない、同じ設定を使った別の世界の別のお話でございます。

原作は半村 良さま。

とってもよくできた原作なんですね、これが。

原作小説のネタバラシしていいのかなあ。

原作小説ではね、主人公が実は織田信長だったっていうのが最大の仕掛けなわけですね。

原作を忠実のコミックス化した「戦国自衛隊」って漫画では、ちゃんとそのへんの設定が描かれておまして、ほっとしたんですが。

ってことをわざわざ書くってことは、やっちゃってます。この映画。

物語はもう皆様ご存知だろうと思いますが。

軍事演習中の完全武装状態の自衛隊一個小隊がタイムスリップしてしまいます。

タイムスリップした先は戦国時代。

司令官の千葉さまは、その事実を受け入れ、その時代で戦いながら生きていくことを決意します。

千葉さまは、武将の夏八木さまと同盟（っていうんだらうなあ）を結び、彼とともに戦うわけですね。

敵対する武将の居城に出向き、天守閣で和平の交渉をすると見せかけ（腕時計で時間を確認しながら）敵の武将を斬って、そこに自衛隊ヘリが登場するなどという、映像ならではの面白いシーンなんかがありました。

で、自衛隊の軍事力ってのは時の権力者にとっても、当時の武将の誰にとっても脅威だったわけでありまして。

夏八木さまはおいしい話と脅しと、わかりやすいアメとムチ作戦で、ついには千葉さまを裏切ることになってしまいます。

ここで千葉さまこそ織田信長なんだあってはっきりわかる場面が欲しかったんですが、千葉さま、まったく普通にやられちゃいました。

原作先に読んでしまってたから、「あれれ？」って思ったことだけ覚えております。

やっぱりねえ、原作のもっている最大にして最高の仕掛けをシカトしちゃあいけませんよね。

もうそれだけで大減点でございます。まったくもってもったいない話でございます。

パパの採点。100点満点中60点。

この映画化で千葉さまが織田信長であるって設定を使わなかった反省からか、平成に入ってから  
の江口さま版の映画化では、原作をさらにねじった設定が作られておりました。

さらにコミックス版では「続・戦国自衛隊」ってお話がありまして、これは関ヶ原の合戦直前に  
タイムスリップした自衛隊と、同じくタイムスリップしてしまった米軍小隊が江戸時代で戦うっ  
ていう、とっても映像むけのお話が作られております。

魅力的な原作って、いくらでも展開していくんだなあって思ってしまったんです。

## 新猿の惑星

---

1971年アメリカ映画

監督 ドン・テイラー

主演 ロディ・マクドウォール、キム・ハンター、ブラッドフォード・ディルマン

今日も中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「猿の惑星」の旧シリーズは全部で五作作られております。

衝撃のラストが話題になった第一作・その続編で、もっと衝撃的な結末の第二作。

この二作はすでにご紹介いたしました。

第二作のラストで、地球は超強力なコバルト爆弾によって消滅してしまいます。

その直前、チンパンジーの夫婦（マクドウォールさまとハンターさまでございます）、さらにもう一匹の老猿が人間たちが乗ってきたロケットに乗って地球を脱出。

爆発のエネルギーで時間を逆行してしまい、1970年代の地球にたどりつきます。

言葉をしゃべり、高度な知能をもつ猿の登場に人類はびっくり。

そればかりか、遠い未来、地球は「高度な知能をもった猿の惑星」となってしまうことに大変な衝撃をうけてしまうわけです。

こうなると人間の選択肢はそんなに多くはないわけで。

最初は友好的に二匹（いい忘れました。老猿は1970年代に到着してすぐに死んでしまいます）を歓迎していた人類ですが、メス猿ハンターさまのお腹に赤ちゃんが宿ったことがわかったとたん、その赤ちゃんが「高度な知能をもち、しゃべる猿の始祖」となることに気づき、赤ちゃんを殺し、さらに二匹の猿に避妊手術を受けさせようとするわけです。

赤ちゃんの命を助きたい二匹の猿は、軟禁状態だった研究所を脱出。

命がけの逃亡がはじまります。

ロディ・マクドウォールさまが演ずるチンパンジー。

実はこの作品が二作目であります。第二作でこのキャラを演じていたのはマクドウォールさまじゃなかったはず。

でもここで復帰できてよかったですね。

マクドウォールさま、ここから最終作品まで主演し、シリーズはこの人の代表作になります。

パパの採点。100点満点中75点。

人類のために二匹の猿とその赤ちゃんを抹殺する決意をする科学者を演じているのがエリック・ブリーデンさま。

この人がめっちゃいいです。頭がよくて悪いやつって感じ。この人の悪役がひたすら物語をひっぱっていった印象があります。

その名演技に5点献上させていただきます。

## 猿の惑星征服

---

1972年アメリカ映画

監督 J・リー・トンプソン

主演 ロディ・マクドウォール、ドン・マレー、リカルド・モンタルバン

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「猿の惑星」シリーズの四作目。

前作「新猿の惑星」のラストで唯一生き残った「言葉を話せる猿」の赤ちゃんが成長し、物語の主人公となります。

舞台は1990年。

犬猫が感染する強力な伝染病が大流行し、猿たちが人間にとっての唯一のペットとなっております。

猿たちは「召使」「奴隷」「ペット」のすべてを兼ねそろえた存在となっております。

赤ちゃんのころ「マイロ」と名づけられた猿（マクドウォールさま）、モンタルバンさまに大事に育てられているわけですね。

しかし育て親のモンタルバンさまの死によって奴隷として売られてしまうわけです。

猿はそこで「シーザー」と名前をつけられ（っていうか自分でその名前を選ぶわけですが）、奴隷として働くこととなります。

人間社会での政治家たち、先の「未来からやってきた猿騒動」のときの言葉を話す猿・コーネリアスとジーラの赤ちゃんが生存している可能性があることに気づき、シーザーがそのサルではないかと疑いを抱くようになります。

シーザーのほうは、奴隷として働かされている猿たちのリーダーとなり、横暴な人間たちからサルの仲間たちを解放しようと動きはじめます。

猿たちを組織的に動かし、銃器で武装した人間に対抗すべく戦うシーザー。

やがて猿たちは人間たちと、「惑星」の支配権をかけて戦うこととなります。

ここまでシリーズが続くと、好きな人はめっちゃくちゃ見るでしょうが、見ない人はまったく興味がないって状況になるようですね。

私のまわりの、比較的映画を見ている人に聞いてみても、この作品以降とこの次の作品は見えない人けっこう多かったです。

で、説明のためにごめんなさいですが、ちょっとネタバレ。

本作クライマックスで人間は猿との戦いに敗れ、地球上の支配権を猿に奪われて、「猿の惑星」を猿たちが「征服」することになるわけでありませう。

第一作・第二作はアイデア勝負・プロット勝負みたいなところがありました。

第三作はストーリー展開でひっぱっていきまされたですね。

今回は本当にアクション勝負の展開。

これまで人間と猿が真っ向勝負するって場面がなかったですからね。



ある意味作品全体の流れの転換期になる作品だけに、アクションにもさうとう力が入っております。

そういう意味ではシリーズ唯一の「猿対人間」の全面戦争シーンが見られる作品。

後に製作される「猿の惑星・創世記」は新シリーズの起点となるオリジナルストーリーって位置づけらしいですが、この作品から取り入れられた要素ってけっこう大きいと思います。

パパの採点。100点満点中70点。

作品の主人公は誰が何といってもマイロ～シーザー＝マクドウォールさままでございまして、我々は前作の「新猿の惑星」同様、人間でありながら猿側に感情移入しながら映画を見ちゃうわけです。

難しいですね。

## 最後の猿の惑星

---

1973年アメリカ映画

監督 J・リー・トンプソン

主演 ロディ・マクドウォール、クロード・エイキンズ

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「猿の惑星」シリーズの五作目。

この作品でシリーズはひとまず打ち止めでございます。

私はねえ、この作品のラストがいまだによくわかっていないんですわ。

二〜三回見たけど、わからなかったです。なにがどうわからなかったかってのは、あとで書きますが。

前作からさらに時間が流れております。

一人（ってか一匹ですわな）の老猿の前に、人間の子供たちと猿の子供たちが集まって話を聞いております。

「ねえねえおじいさん、話を聞かせてよ」「よっしゃよっしゃ、ほなら今日はこの話じゃ」みたいな感じで物語が語られます。

その内容とは...

人間と猿の戦いは最終的には核戦争までいってしまいます。

で、御互いにミサイル撃ち合って、お互いにほとんど全滅しちゃいます。

それぞれ生き残った猿と人間は、ともに助け合って共生の道を探そうとします。

しかし猿グループの中には、穏やかなチンパンジーもいれば好戦的なゴリラもいるわけでございましてなあ。

ゴリラの部族の者たちは、人間と共存なんてできないと考えているものが多いわけですね。

そうなるとう猿たちの中で意見の衝突とかが起きます。

で、一匹のゴリラが意見の異なる他の猿を殺してしまうわけです。

そこから事態は大きく動いて...ってなお話。

とにかく「猿の惑星」はいろいろなものごとをかなり寓話化していそうな感じがしますね。

この物語のクライマックスで、ゴリラが仲間の猿を殺してしまったことが明らかになり、仲間の猿から「猿が猿を殺した」ってことを責められるわけですが、人間ってめっちゃ普通に人間を殺しているわけであって、「そっかあ、猿が猿を殺すことって、やっぱり基本的にはないんだなあ」って妙なところに感心したりしましたが。

で、物語が終わって、もとの老猿の語る場面に戻ります。

老猿の話を仲良く聞く人間の子供と猿の子供。

果たして第一作でテイラー船長＝チャールトン・ヘストンさまがたどりついた「猿が惑星を支配し、人間が家畜として飼育される」未来は回避できたのでしょうか。

猿の子と人間の子が仲良く話を聞くって状況があるわけだから、「その未来」は回避できたんだ

って思ったりしてたんですが、そのあと、人間の子供がゴリラの子とちょっともめごとを起こして、髪の毛ひっぱられて老猿にとがめられる、みたいな場面が出てきまして、わからなくなっていました。

この作品のラストが、人間と猿が共存する未来につながると解釈すべきなら、あのカット要らないしなあって思って。

そのあと、猿たちの世界の「開国の祖」の像が涙を流します。

わからん。そこだけわからん。

パパの採点。100点満点中70点。

猿と人間がこの作品のあと、どのような関係を作るのか。

それは皆さんお考えくださいってことなんじゃないかな。

特に結末の五分ほど、どう理解すべきなのかわからなかったです。

けっこう微妙な終わり方してしまいました。

## ハウリング2

---

1985年イギリス映画

監督 フィリップ・モーラ

主演 クリストファー・リー、アニー・マッケンロー

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「ハウリング」シリーズの二作目。

この「ハウリング」、すごく微妙なタイミングで公開された作品ですよ。

ここらへんの事情は以前書いたかと思いますが。

ジョン・ランディス監督の「狼男アメリカン」って映画が製作されました。

この作品の特殊メイクはリック・ベイカーさま。で、あとからこの作品の特殊メイクのオファーが入りまして。

で、ベイカーさま、愛弟子のロブ・ボーティーンさまにその仕事をまかせた感じになりまして。

同時期に企画された狼男映画だもんで、同じ人がやるわけにもまいりませんし。

で、「ハウリング」が先に完成。この作品を見たリック・ベイカーさま、あまりに素晴らしい出来ばえに、あわてて特撮シーンを撮り直したってエピソードが残っております。

こういう事情があるから、変身シーンは「狼男アメリカン」のほうがよくできていて当たり前なんですよね。

師匠が弟子相手にジャンケンでいう「あとだし」したって感じなんで。

「ハウリング」のほうは薄暗い部屋での変身シーンでしたが、「狼男アメリカン」のほうは蛍光灯がめっちゃ普通についている部屋での変身シーンでした。

「狼男アメリカン」のほうが開封が早かったら、「ハウリング」はあまり評価されなかったかもしれません。

さて「ハウリング2」。

この作品、第一作はアメリカ映画だったのに、これはイギリス映画。

なんでこうなったのかはわかりませんが。

いきなり御大クリストファー・リー大先生が登場。

なんか賢そうにお話ししてたかと思うと、物語はいきなりトランシルバニアにとびます。

この地に住む吸血狼男一族と、狼男狩りの男との対決が描かれます。

「ハウリング」ですから、当然狼男の変身シーンもあるわけですが、なんかちょっと地味な印象。

やっぱりねえ、衝撃の第一作と、そのあともっと衝撃的だった「狼男アメリカン」を見たあとだけに、めっちゃ地味な印象しか残りません。

「ハウリング」って作品世界そのものは悪くはないと思うんですが、なんかポイントをしばってどこで何をどんなふうに見せるのか意識して映画化したほうがよかったんじゃないかって思いました。

申し訳ないですが、物語の筋立てもSFXもちょっと中途半端だったように感じましたね。

パパの採点。100点満点中65点。

しかしトランシルバニアって話になると、登場してまったく違和感がないのがクリストファー・リー大先生でございます。

今回はこのトランシルバニアって舞台設定が失敗したのかもしれませんが。

っていうか、大都会に狼男が出てきちゃうって世界が「ハウリング」（やっぱり一番印象的だったシーンが、ラストのテレビ局でのシーンでしたからね）「狼男アメリカン」あたりの、現代的狼男伝説映画の守るべき立場なんじゃないかなって思いました。

トランシルバニアに舞台をもってきちゃいけなかったんじゃないかなって思います。

## ハロウィン2・ブギーマン

---

1981年アメリカ映画

監督 リック・ローゼンタール

主演 ドナルド・プレザンス、ジェイミー・リー・カーティス

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

「ハロウィン」シリーズの第二作。

第一作はご紹介済です。

「ハロウィン」で競演したドナルド・プレザンスさまとジェイミー・リー・カーティスさまの名コンビ再び結集って感じでございますね。

残念ながらお二人の顔合わせはこの作品が最後。

この後、「ハロウィン3」にはどちらも出演しておりませんで、続く「ハロウィン4 ブギーマン復活」「ハロウィン5 ブギーマン逆襲」「ハロウィン6 最後の戦い」はプレザンスさまのみの出演です。

「ハロウィン6」クランクアップ後、プレザンスさまが亡くなりまして、そのあとカーティスさまを再び主役に迎えて「ハロウィンH20」（なんと「パールハーバー」のジョシュ・ハートネットが出演しております）と「ハロウィン・レザクション」って作品が製作されました。ただ、さすがにもうええやろって感じになったのでしょうか、最後にはカーティスさまも殺されてしまいまして、旧シリーズは一旦完結。

2007年にロブ・ゾンビ監督の手によりリメイクがなされます。

さてハロウィン2・ブギーマン。

前作ラストで射殺されたはずの「苦痛を感じない、殺人にも良心の呵責を感じない殺人鬼」マイケル君、復活～。

こういう殺人鬼って殺されても殺されても復活するんですなあ。

ジェイソン君だってそうでしたが。どないやねんって感じですが。

とにかくどんな事情かはよくわかりませんが、復活したマイケル君、カーティスさまを再び追いまわします。

で、マイケルを追うのはお馴染み「マイケルの主治医だった精神科医」プレザンスさまです。今回は病院に入院しているカーティスを追って、マイケルが病院に侵入。看護師さんだとかをえらい目にあわせながら彼女を追いかけまわします。

この「病院に紛れ込んだ殺人鬼」ってパターン、「面会時間」とか「ゾングリア」なんかでえぐい表現がありましたが、この作品を含め、おそらくここいらの映画を参考にして綾辻行人様の傑作「殺人鬼II」が書かれたんだろうと思われます。

綾辻さんの「殺人鬼」「殺人鬼II」どちらもめっちゃ面白いですから、是非お読みくださいね。

パパの採点。100点満点中80点。

プレザンスさまとカーティスさまの顔合わせ、なかなかよかったので、この作品が最後だってえ

のがもったいないですね。

プレゼンスさまが亡くなってしまいましたので、もう永遠にこの顔合わせは見られなくなってしまいました。

ちょっと残念です。

## ロッキー 2

---

1978年アメリカ映画

監督 シルベスター・スタローン

主演 シルベスター・スタローン、タリア・シャイア、バート・ヤング、カール・ウェザース。  
中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

シリーズものっていやああんた、これっしょ。

スタローンさまの代名詞でもあり、スタローンさま自身も文字通りのアメリカンドリームを実現させた「ロッキー」シリーズの第二作。

前作でチャンピオン・アポロ＝ウェザースさまに指名され、「何ラウンドまでもつだらうか」なんて言われながらも最終ラウンドまで戦いぬき、惜しくも判定で敗れたロッキー＝スタローンさま。

前作の最後で抱き合った恋人エイドリアン＝シャイアさまとも無事結婚。

んでロッキーは、どうにもすっきりしないチャンピオンのアポロから再戦を申し込まれるわけでございます。

まあよくある話ですわなあ。

チャンピオンが、無名の四回戦ボーイとフルラウンド戦って、判定にもつれこんで、なんとか判定勝ちなんてプライドが許さないでしょうし。

ボクシングでもプロレスでも、そういうことけっこうあります。

チャンピオンに指名されたロッキー、有名な「ロッキーのテーマ」をバックに走る・走る・走る。

サンドバッグ叩く・叩く・叩く。

で、試合になって、戦う・戦う・戦う。

で、流れる感動的なテーマ曲。

歓声。

うおおおおお。ええ話やがな。

今回は試合結果も当然ついてまいりまして。

前作ではね、勝たなくてもよかったわけですわ。勝たなくても十分ヒーローなわけで。

でも今回はね、アメリカンドリームの体現者としてロッキーを描こうとするためには、とりあえず勝たなければいけないわけです。

ドラマ的には。

やっぱりなんだかんだいっても70年代の映画だし。

これが2000年以降の映画だったら、やっぱり勝てないものは勝てないんだよ、みたいな描き方もありな時代になってしまうんですが。

パパの採点。100点満点中75点。

うん、基準点ですよ。シリーズの中では「ロッキー」と「ロッキー3」が好きなんですよ。

「ロッキー」はちょっとできすぎてるような気もするんだけど。

っていうか、できすぎてるといえばどの作品もできすぎてはいるんですが。



「ロッキー3」はね、とにかくラストシーンが好きでねえ。

まあこの話はのちほど。

そんな事情で、今日ご紹介の「ロッキー2」は基準点あたりの作品でございます。

## ロッキー3

---

1982年アメリカ映画

監督 シルベスター・スタローン

主演 シルベスター・スタローン、タリア・シャイア、バート・ヤング、バージェス・メレディス、カール・ウェザース、ミスターT

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

ロッキーはん、めっちゃチャンピオン。

チャンピオンとしてそれなりに多忙な毎日を送っております。

プロレスラーとドリームマッチしたり。

優しい妻との暖かい家庭。かわいいジュニア。

頭をかすめるのは、引退の二文字。

家族との安らかな生活を夢みなくなったわけですから。

そんな彼の目の前にたちはだかるのが、いかにも強そうな黒人ボクサー・ミスターTさま。

ロッキーは彼と戦うことになってしまいます。

そんな大事な時期なのに、ロッキーはずっといっしょに戦ってきたトレーナーのメレディスさまを失ってしまいます。

失意のロッキー。

そんな彼のためにトレーナー役を買ってでたのが、彼のライバル、アポロ＝ウェザースさま。

彼は言うわけですね。

「俺と戦ったときのお前はそんな沈んだ目はしていなかった。俺の戦ったときのトラの目を思い出すんだあ」みたいな。

んで、流れる歌はサバイバーの「アイ・オブ・ザ・タイガー」、みたいなあ。

ロッキーはアポロとともに、強敵ミスターTさまに立ち向かうのでありました。

いぐわあああああ。

でもね、スタローンさまがシリーズで一貫して描いているのは、やっぱりアメリカンドリームでございましてなあ。

だからやっぱり勝ってしまうわけでございますなあ。

それよりも、前頁でも書きましたが、本当に好きなのはラストシーンでありまして。

けっこう好きなシーンでございます。戦う男の友情、みたいな。

この作品見まして、カール・ウェザースさまのポイントめっちゃ上がりました。

パパの採点。100点満点中85点。

物語の前半で、ロッキーと戦うのは、日本で猪木さまと戦って大ブレイクする前のハルク・ホーガンさまでございます。

この作品中での役名は「サンダーリップス」。

ホーガンさまは猪木さまとタッグを組むことで大化けしたレスラーです。

猪木さまとタグを組んでいたころは、背中に「一番」って染め抜かれたハッピを着てまして、  
ご丁寧に襟のところに日本語で「サンダーリップス」って書いてあったことを覚えております。  
ホーガンさまってまだ頑張ってるんでしょうか。懐かしいです。

## ロッキー4・炎の友情

---

1985年アメリカ映画

監督 シルベスター・スタローン

主演 シルベスター・スタローン、タリア・シャイア、バート・ヤング、ドルフ・ラングレイン、カール・ウェザーズ

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

ロッキーシリーズはこのあと、「ロッキー5・最後のドラマ」「ロッキー・ザ・ファイナル」って作品がありますが、なんかねえ。

私的にはここまでって感じでございます。

っていうか、「5」以降は見てないです。

シリーズは「4」で完結してもらいたかったですね。

ということで、個人的に「ロッキー」の最終作と位置づけたい「ロッキー4・炎の友情」でございます。

ソ連（だったですね、この時点では）が、プロボクシングに参戦を表明しまして、すんげえ強いボクサーを送り込んでくるところから物語が始まります。

男の名はドラゴ＝ラングレインさま。

ドラゴの対戦相手は、ロッキーのライバルにして親友のアポロ＝ウェザーズさまでございます。

ドラゴはもうほとんど殺人マシンでございますなあ。

アポロをボコボコにいわします。試合のセコンドとしてリングサイドにいたロッキー＝スタローンさま、あまりに危ない状況にタオルを投げようとはしますが、リングで戦うアポロの視線がタオルの投入を止めるわけですな。

しかししかし、その結果、アポロはリング上でドラゴに殴り殺される結果となってしまいます。なんちゅうこっちゃ。この一件がロッキーのファイティングスピリットに火をつける結果となるわけでございますね。

で、ロッキーはソ連で彼と対戦することになります。

最新式のマシンで自らを鍛え上げるドラゴ。

それに対し、雪原を走ったり、丸太をのこぎりで切ったり、例によって一人筋トレしたりするロッキー。

まあねえ、これでドラゴが勝ってしまったらアメリカンドリームもへったくれもないだろうし、それ以上に「やはり野蛮は文明には勝てないのだなあ」って結論の映画になってしまいますのでねえ。

この時点で試合結果わかってしまいますが。

パパの採点。100点満点中70点。

この映画のポイントは、やっぱりドルフ・ラングレインさまでございますなあ。

まあスターのオーラがある人ですもんね。

それにしてはイマイチはじめてません。「レッドスコルピオン」「ユニバーサル・ソルジャー」あたりまでは破竹の快進撃って感じだったんだけど。ジョン・ウーの「ブラック・ジャック」あたりの路線をつきすすんでいただきたいのですが。今後のご活躍を期待しております。

## 必殺！III裏か表か

---

1986年松竹作品

監督 工藤栄一

主演 藤田まこと、鮎川いずみ、松坂慶子、村上弘明、京本政樹、三田村邦彦、白木万理、柴俊夫、笑福亭鶴瓶

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

今回から映画版「必殺シリーズ」をご紹介しますです。

若い子と話とかしてまして、「必殺」のことパチンコでしか知らないとか言われてめっちゃショックを受けた記憶がありますが...

そらそうやろなあ。

ドラマが大ブレイクしていたのって、私が高校から大学くらいの時期だし。

大学生のとき、ちょい役（っていうかエキストラですな）で必殺に出たことあるし。

懐かしい思い出でございます。

映画シリーズの中で一番陰鬱な空気をもった作品でございますね。

第一作はけっこうかっこよさを前面に出していましたが、第四作はアクション映画だったし、第五作はどっちかっていうとドラマの二時間スペシャルに近いエンターテインメント作品に仕上がっていましたし。

中村主水の同僚の同心（故川谷拓三さまです）が殺されてしまいます。

主水はこの事件を調べるうち、川谷さまが両替商（成田三樹夫さまと伊武雅刀さまの連合軍ですわ）を強請っていたことがわかります。

しばらくしまして、両替商の使用人で算盤担当の男（岸辺一徳さま）が計算違いを叱責され、それを苦に自殺するってえ事件が起きまして、主水はこの件で成田さまを捕らえ、同心殺しを白状させようとしています。

が、うまくいかない。

それどころか殺し屋に命を狙われたり、あげくの果てには殺しの濡れ衣まで着せられそうになってしまいます。

孤立無援で、家庭にも奉行所にも居場所のなくなった主水でございます。

そんな折、川谷さまの元妻で、実は両替商の身内で、夫を亡くしたことで再び両替商に戻った松坂さま、ひょんなことから秀＝三田村さまと知り合います。

松坂さまから両替商一派の陰謀を聞かされた秀さん、このことを主水に知らせますが、そのときすでに主水のもとに、殺し屋軍団が仕向けられていたのでした...

これまでの「必殺！」映画版ってね、映画独自のキャラクターは死んだりしていましたが、メインキャストは死ななかつたんですよね。

ところが今回は、テレビ版のメインキャストがバンバン死んでいきます。

ってことはこの作品で死んじゃったキャラはそれ以降の映画にもテレビにも出なくなるわけで

して。

お気に入りのキャラがバンバン殺されて行って、ちょっとショックな展開でございました。

パパの採点。100点満点中80点。

ええ？ってくらいメインの仕事人が死んでいきます。

途中の展開もめっちゃ暗い。まあそれが映画版の独自性なんだよって言われたらそれまでなんですけど。

見ててすごくどんよりしてしまいました。

ラストはちょっと救いがあるラストだったんですが。微妙な作品ではありますね。

## 必殺！5・黄金の血

---

1991年松竹作品

監督 舛田利雄

主演 藤田まこと、三田村邦彦、村上弘明、光本幸子、名取裕子、大沢樹生、西岡徳馬、山本陽子、岸部一徳

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

映画版「必殺シリーズ」の第五弾。

これまでこの本では「必殺シリーズ」は第一作と第四作をご紹介しておりました。

で、前頁で第三作をご紹介して、第五作。

第二作はどうなったんだって話ですが...

第二作の「必殺2 ブラウン館の怪人たち」はねえ、あまり印象に残ってないんですよね。

BGMはジャズ調にアレンジされていたことと、亡くなったプロ野球選手のアニマル・レスリー選手が出演されていたことは覚えているんですが。

ちゃんと調べて思い出しておきますね。

さて「必殺5」のお話。

このシリーズは、雰囲気「3」「4」だけがテレビドラマ版とちょっと雰囲気が違った感じで作られているわけなんですけど、この「5」は良い意味でも悪い意味でもテレビ版の二時間スペシャルをそのまま映画にしたような感じでございます。

だから必殺ファンの人にとっては当たり外れなく楽しめる作品になっているのではないかと感じました。

「必殺I」は映画化第一作ってこともありまして、片岡孝夫（仁左衛門）様や中井貴恵様を起用したり、それなりに力入ってましたし、「必殺III」は当時オンエア中のシリーズの中心メンバーが大量に殺されてしまうって衝撃の展開がありましたし、「必殺IV」は明らかに映画独自のシリーズ展開を目指したと思われる意欲作だったし。

そういう意味ではシリーズ中では一番安定した展開の作品ではないかと思えます。

晴らすに晴らせぬ恨みを金で晴らしてくれる裏家業「仕事人」の活躍を描くシリーズ。

今回は御用金運搬船を襲って沈没させ、それに伴う金相場の値上がりで大儲けを企てるワルの勘定奉行西岡さまと、金座のえらいさん岸部さま・山本さまがターゲットでございます。

ワルどもの企みとしては、まず御用金を運ぶ船を無宿人たちの襲わせて、その無宿人を仕事人に片付けさせます。

この仕事を引き受けたのは中村主人＝藤田さまのグループではなく、映画オリジナルキャラの名取さまのグループ。

仕事を終えた名取さまらを襲う殺し屋集団。

吸血蝙蝠みたいなのを操る殺し屋。ミスター死神博士＝天本英世さま、赤目のコンタクト入れての怪演でございます。



殺し屋グループの攻撃から逃げ切った名取さまら仕事人の生き残りが中村主水グループと協力しあい、殺し屋グループと金座のワル・勘定奉行らを仕事にかけるわけでございます。

仕事人グループでは大沢樹生さまがけっこうかっこええです。

「必殺Ⅰ」の片岡仁左衛門さまと同じのかっこええ殺し技を見せてくださいます。

パパの採点。100点満点中80点。

よく考えたら、ワルさんたち仕事人を巻き込む必要なかったんじゃないかって思うんですが。無宿人たちを天本グループが始末したらそれで陰謀がうまく成立したんじゃないかって思うんだけど。

謎の展開です。

## 必殺！・主水死す

---

1996年松竹作品

監督 貞永方久

主演 藤田まこと、三田村邦彦、菅井きん、白木万里、中条きよし、名取裕子、津川雅彦

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

映画版「必殺シリーズ」、とりあえずのシリーズ完結編。

本作ラストで藤田まことさま＝中村主水が死んでしまいます。

ってタイトルに書いてあるし。

ってことなんで、長きにわたってシリーズそのものをひっぱってきた藤田まことさま＝中村主水の最終作品になる...はずだったんだけど。

この後、東山紀之さま主演のドラマ「必殺仕事人2007」で、この映画のことなどなかったかのように登場。

テレビ側スタッフの皆様はこの映画のこと、なかったことにしたかったんでしょうね。

映画は將軍家跡目争いに仕事人軍団が巻き込まれてしまう展開でございます。

絵師・北斎＝鈴木清順さまが殺されることから物語は始まります。同心・中村主水＝藤田さまはこの件を調べるわけでございますな。

北斎が残した似顔絵がありましてね、主水はその似顔絵に書いてあった人物とそっくりの芸人＝細川ふみえさまを見かけます。

彼女の育て親の三味線弾きがお千代＝名取さま。

彼女は過去に負った傷がもとで記憶を失っております。しかし、彼女は主水のかつての仕事人仲間だったわけでありませう。

で、かつての主水の宿敵で恋敵で名取の元夫が清吉＝津川さまでございます。

今では清吉は大奥のゴミの処分を引き受けている大奥掃除人でございます。

そのころ將軍家では跡目争いが起こっておりまして、將軍家世継（細川ふみえさま、男装で二役です）の「捨てられた」双子の兄弟を探し出し、お家を乗っ取るうとしていたわけですね。

絵師北斎はそのための似顔絵を書かされ、口封じのために殺されたわけでございます。

主水らはまず「男世継細川さま」を推すグループが仕組む「女芸人細川さま」暗殺を阻止します。

で、そのあと、探していた世継ぎ候補が女だったことがわかったために、用済みとなった「女芸人細川さま」が殺されそうになるのを阻止するわけですね。

その一方で、大奥の命をうけた清吉が裏で暗躍します。

清吉は跡目争い騒動がおさまったあとも、お千代＝名取さまをめぐって、執拗に主水の命を狙うわけでございます。

主水の宿敵役の津川さまは、テレビシリーズ時代に何度もやられ役を演じてこられたそうです。

対談番組でちらっと聞いたことがありますが、なんでも必殺で殺された通算回数は、かなり上位

にいくそうです。

シリーズの顔の主水が、津川さんみたいな「殺され続けてきた役者さん」と戦って命を落とすっていうのも、歴史的ロングシリーズの結末としてはふさわしい感じもしますね。

ちなみに津川さんはシリーズ終盤、「必殺橋掛人」で堂々の主役を演じておられます。

シリーズプロデューサーの暖かい配慮が感じられるキャスティングですね。

パパの採点。100点満点中50点。

小学校～中学～高校と、けっこう見つけてきて、エキストラとはいえ出演までしたシリーズが完結するのって寂しい気がしていましたが。

特別の感慨をもって見た作品なのに、主水さん、あとでテレビで復活するんやもんなあ。

この映画、何だったんだって感じです。

ってことで点数低めです。

## 劇場版ポケットモンスター・ミュウツールの逆襲

---

1998年ピカチュウプロジェクト作品

監督 湯山邦彦

声の出演 松本梨香、石塚運昇、林原めぐみ、市村正親

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

映画版「ポケットモンスターシリーズ」の第一作。

すべてはここから始まったって感じです。

何度も書いておりますが、「劇場版ポケットモンスター」一連の作品では、私的にはこの作品が最高傑作ではないかと思えます。

まあポケモンについてはいいですかね。

そもそもはゲームのキャラでございます。

ゲームの中で手に入れる（ゲットするっていいですが）ことのできるモンスターがポケモン。

この当時のポケモンって総数151でした。

で、その151匹のルールが壊されたのがこの作品でございます。

作品冒頭でいきなり未知のキャラ登場。

しかしそいつは主人公サトシくんのポケモン・ピカチュウにあっさりやられてしまったりします。

そんなサトシくんのもとに一枚の招待状がとどくわけですね。

それは海に浮かぶ人口島でバトル（ポケモン同士を戦わせることをバトルっていうのニャ）大会を行い、最強のトレーナー（ポケモンを戦わせたら経験値が増えて強くなるのニャ。だからポケモンの持ち主＝トレーナーはバトルするのニャ）を決めようとするわけで。

たくさん招待されたトレーナーたちのなかで、嵐の海を無事渡りきって島にたどりついたのはサトシたち数名のトレーナー。

しかしそこで彼らを待っていたのは、「伝説のポケモン・ミュウ」の化石の遺伝子から再生された、クローンポケモンの「ミュウツー」だったのでございます。

ミュウツーは遺伝子操作で自分を生んだ人間を憎み、人間たちが持つ最強のポケモンを奪う目的で招待状を送っていたわけでありませう。

奪われたポケモンはでっかい機械の中で遺伝子を解析され、そしてクローンポケモンが続々と生まれます。

サトシくんの活躍でコピーされた元のポケモンたちは無事もどりましたが、彼らの遺伝子情報はすでに読み取られ、大量のコピーポケモンが登場。

ミュウツーの命令で、それぞれのオリジナルのポケモンと戦いはじめるのであります。

さらにはどこからともなく「幻のポケモン・ミュウ」も登場。

ミュウツーとの間で超能力バトルが始まってしまいます。

このあらすじって、そもそもポケモン世界がわかってないと多分伝わらないと思えます。

スイミングのコーチしてたころ、めっちゃくちゃポケモンが流行ってたんで、かなり必死に勉強した思い出があります。

もちろんテレビも毎週見てましたし。

でもすごくよくできた作品ですので、未見の、とくに大人の人に見ていただきたい作品でございます。

パパの採点。100点満点中90点。

クライマックスの盛り上げと、ラストの落とし方が大好き。

この作品。あえてオチはお話しませんので、皆様お確かめいただきたいと思います。

## 劇場版ポケットモンスター・ルギア爆誕

---

1999年ピカチュウプロジェクト作品

監督 湯山邦彦

声の出演 松本梨香、石塚運昇、林原めぐみ、鹿賀丈史

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

映画版「ポケットモンスターシリーズ」の第二作。

「ミュウツーの逆襲」の大ヒットに気をよくしたのでしょうか。今度は新ポケモンを前面にフィーチャーしての作品となりました。

これ以降、ポケモン映画は毎年夏になりましたら「幻の新キャラ」が登場し、ゲーム世界も拡散を続けます。

ソフトのほうも「ブルー」「レッド」「グリーン」から、「エメラルド」「ルビー」「サファイア」「ダイヤモンド」「パール」...と、ほとんど某ネットワークビジネスのピンレベルのような様相を呈してきております。

こんなネタわかる人いるのかなあ。ま、いいか。

えっとね、ポケモンのコレクターの大富豪（声・鹿賀さまです）がいましてね、その人が強力なポケモン捕獲システムを開発します。

で、地球のバランスまでも左右するくらいの力を持った幻のポケモン、フリーザー（氷をつかさどります）、サンダー（電気をつかさどります）、ファイヤー（これは火。わかりやすいネーミングや）、三体を手に入れようとするわけです。

この三体を同時に手に入れたらよかったんですが、やっぱり一匹ずつつかまえるもので、地球の自然界のバランスが乱れてしまうわけですね。

ファイヤー（炎）をつかまえたもので、フリーザー(氷)の力が強くなりすぎちゃって氷河期がきちゃうとか、そんな感じです。

たまたま南方の島を訪れていたサトシくん、伝説の勇者になってしまいまして、捕まっていたファイヤーを救出することになったりして。

しかしファイヤーが自由の身になっても、一度崩れたバランスは戻りません。

そこで島に伝承されている「海の守護神」ルギアを覚醒させ、崩れたバランスを修復させようとしています...

前作同様、壮大なスケールで描かれるポケモン世界であります。

でもねえ、前作では感動して泣いちゃった自分が信じられないくらい涙ボロボロだったんですが、今回は泣けるシーンありませんでした。

泣くつもりで見てたのに、ちょっと肩すかし食らったみたいな気分でした。

パパの採点。100点満点中75点。

ゲスト声優、今回は市村正親さまだったのですが、今回は鹿賀丈史さま。

ビッグネームの役者さんがでてくると、それだけで画面が引き締まるような気がするのは私だけ

でしょうか。

市村さまと鹿賀さまって、一時同じ「劇団四季」におられましたか、どっちのほうがランクが上なんでしょう。

ちょっと謎でございます。

1991年アメリカ映画

監督 デビッド・ザッカー

主演 レスリー・ニールセン、プリシラ・プレスリー、ジョージ・ケネディ、O・J・シンプソン

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

ザッカー兄弟+エイブラハムズ監督の強カトリオによるコメディシリーズの第二弾。

今思い出したんですが。

このザッカー・ザッカー・エイブラハムズのトリオって、「ケンタッキー・フライド・ムービー」があって、その次が「裸の銃を持つ男」シリーズだと思っていましたが、その間に「フライングハイ」シリーズが入ります。

で、「裸...」シリーズのあとに「ホット・ショット」シリーズになるんだ、って思っておりましたら、厳密にはこの作品のあとにホット・ショットの1・2が入りまして、そのあとに「裸の銃...」の第三弾が作られたって順番みたいですね。

前作に引き続いて、相変わらずお下劣なドレビン警部の大活躍が楽しめます。

今回の事件は、なんとエネルギー問題でございます。

画期的な新エネルギーの研究をしている博士がおりまして、その博士が学会で発表をしようとしているわけですね。

その発表がされてしまうと、困るのは既存のエネルギー業界の皆様。

石炭業界とか火力発電の業界だとか原子力発電の業界だとか。

で、そんな業界のワルたちが手を組んで博士を誘拐し、あろうことかそっくりさんの身代わりをたてて、既存のエネルギーをほめるスピーチをさせようってえおマヌケな筋書きを考えるわけでございます。

その計画を察知したドレビン警部、博士の救出と、本物の博士にスピーチをさせることを目指してがんばるわけでございますな。

例によって相棒のO・J・シンプソン君はほとんど捜査に協力させてもらえずにひどい目にあい続けます。

お約束でございますが。

パパの採点。100点満点中75点。

相変わらず画面の隅っこのほうで面白いことしてくれてたり、さりげなく「なんでやねん」ってことしてくれてたりします。

けっこう笑ったのは博士のスピーチの場面でしょうか。

スライド上映しているとき、博士の理論のあまりの難しさに、学会出席者全員爆睡。

そこへ会場に爆弾が仕掛けられたことを知らせにきたドレビン警部、彼が爆睡している出席者を起こす方法は...



このネタはめっちゃ笑いました。

さりげなく面白いことしてくれてますので、笑うポイント見逃さないようにしてくださいまし。

## ホット・ショット

---

1991年アメリカ映画

監督 ジム・エイブラハムズ

主演 チャーリー・シーン、ケイリー・エルウェス、ヴァレリア・ゴリノ

中途半端な形でしか紹介してなかったシリーズもの。

っていいながら「ホット・ショット」シリーズはまだとりあげておりませんでした。

「ケンタッキー・フライド・ムービー」でとんでもないお笑いセンスを見せつけてくれたザッカ一兄弟+エイブラハムズさまがた。

今回の作品はジム・エイブラハムズさまの単独興行って感じ。

作品のもっていきかたは、どっちかという「裸の銃を持つ男」シリーズよりも「フライング・ハイ」シリーズのほうに近いです。

「ケンタッキー・フライド・ムービー」でいうと、「燃えよ鉄拳」のパートみたいな感じ。

「フライング・ハイ」って、第一作目は「エアポート」シリーズのパロディだし、第二作目はSFチックに味付けした「エアポート」だったし。

ってな感じで、今回はまるまる映画一本使って、「トップガン」のパロディ映画を作りました、みたいな感じです。

物語とかはねえ、うむむ。説明しにくいけど。

ちゃんと説明したら、けっこう「トップガン」みたいなあらすじになりそうですね。

でもね、エイブラハム監督って、めちゃくちゃ映画好きなんだろうなって思います。

「トップガン」のシーン割りとか、カメラアングルとか、かなり研究したんだろうなって感じさせてくれるシーンがありました。

それでいて、やっぱり画面の端っこのほうでちょこちょこっと面白いことしてくれております。ジェット戦闘機の排気口（っていうんでしょうか）でバーベキュー焼いてみたり、むっちゃ普通っぽく戦闘機の排気で吹っ飛ばされる人がいたり、空母の甲板にありえないかっこうの人がいたり。

こういう「画面のはしっこで軽く遊ぶ」みたいなセンスって、すごく好きなんですよ。

セリフ言ってる人だけじゃなくて、セリフ言っていない人も、知らん顔しながら面白いことしてる、みたいな。

感覚としてはね、「うる星やつら」みたいなノリ。

なんで画面のはしっこにモゲラがおんねん、みたいなセンスです。

あと、一時期二時間ドラマとして定期的にオンエアされていたさんまさまの「心はロンリー気分は…」みたいな感じ。

あのドラマも、画面の端っこでさりげなく遊ぶ、みたいなことやってましたが。

好きだなあ、こういう世界。

パパの採点。100点満点中75点。

チャーリー・シーンがすごくいいです。

映画通の友人によると、今はいろんな事情とかがあって、「干されている」っていうか、ハリウッドから追放されつつある状況らしいですが。

「マルコビッチの穴」でいきなりでてきたとき、実はちょっとびっくりしてしまいました。でも残念だなあ。もっと「ホット・ショット」シリーズ見たいんですが。

## ホット・ショット2

---

1993年アメリカ映画

監督 ジム・エイブラハムズ

主演 チャーリー・シーン、ロイド・ブリッジス、リチャード・クレンナ

前頁でとりあげました「ホット・ショット」の続編でございます。

今回はランボーのパロディ。

相変わらずやってくれてますチャーリー・シーンさま。

やっぱりあらすじはほとんどランボーです。というか「コマンドー」っぽくもあるんだけど。なんかねえ、細かい面白いシーン書き上げていたら本当にきりがなくて、あまり書きませんが。

とりあえずお気に入りのシーンだけわわわって書きますね。

①冒頭、シーンさまがランボーみたいなはちまき巻いて格闘場に登場。でもなんか歩き方変。その理由は...

②ミャンマーとか、そのへんをイメージした寺で隠遁生活を送っていたシーンさま。

彼のもとに米兵救助の特殊任務の要請が。

室内で真剣に話あっておりますが、その後ろでアホなことをしているラマ僧。

なにやっとなねん。

③説得されて、ペルシャ湾に向かうことになったシーンさま。

彼が船で川を下っていくと、何やらどこかで見たことのあるような人が川をのぼっていきます。

「地獄の黙示録」のマーティン・シーンさま（しかも本人）やないですか。

チャーリーさまとマーティンさま。

二人がすれちがうときにお互い交わした言葉は...

④捕虜になっていたのは、やっぱりリチャード・クレンナさま。またかいな...

⑤で、捕虜を救出して、敵に見つかって、銃撃戦になります。

マシンガン撃ちまくり。シーンさま強い。しかし強すぎる。

って思っていたら、やっぱり「主人公が強すぎる」ってのもちゃんとネタになっておりました。

何せシーンさまが弾を「投げた」だけで敵がやられちゃうわけで。...ありえへん。

⑥そして意外な人が大活躍。んで意外な人と意外な人が大格闘。

もうどないでもせえやって感じで、ドガチャガになって作品は大団円でございます。

パパの採点。100点満点中90点。

このシリーズ（っていっても二本だけなんですけど）に関して言えば、2のほうが圧倒的に好きですね。

途中「氷の微笑」で見たような場面とか、「スターウォーズ」で明らかに見た覚えがあるような場面とか、「わんわん物語」でみたことのあるような場面を実写でしかも人間がやったりとか

。

チャーリー・シーンさま、やっぱりやってくれております。

本当、もっと続けてほしいシリーズですよ。

シリーズの継続を心から希望いたします。

## ウイラード

---

1971年アメリカ映画

監督 ダニエル・マン

主演 ブルース・デイヴィソン、アーネスト・ボーグナイン、ソンドラ・ロック

ご紹介もれのシリーズ作品でございます。

映画館とかレンタルビデオとかで見た映画じゃなくて、テレビの映画劇場のオンエアを亡くなった父といっしょに見た作品です。

ウイラードってのは主人公の青年＝デイヴィソンさまの名前です。

パツとしない青年でしてね、彼女もいないし友達もいない。

仕事もイマイチ、みたいな男。

そんな彼に友達ができます。それがネズミなわけですね。

二匹のネズミで、一匹が白いネズミのソクラテス、もう一匹が黒いネズミのベン。

二匹はめっちゃくちゃ賢くて、どうやら人間の言葉を理解できているようで。

だんだんネズミは増えていきまして、やがて彼の家の地下室はネズミでいっぱいになったりします。

最初はネズミを可愛がってエサなんかあげていたウイラード君、だんだんネズミたちがうっとうしくなってきたりします。

ウイラードの上司がボーグナインさま。

凶悪そうな顔のとおり、あからさまなパワハラ上司であります。

やがてウイラードは、自分に意地悪をした会社の人を、ネズミを使って意地悪を仕返そうとするわけですね。

最初は本当に意地悪の程度だったんですが、やがてそれは「復讐」へとエスカレートしていきます...

ボーグナインさまが圧倒的な巧さをみせてくれます。

意地悪さ、傲慢さ、窮地にたたされたときの情けなさ。

もうめっちゃ巧い役者さんですよ。さすがの名演技でございます。

パパの採点。100点満点中85点。

元祖動物パニック映画って感じです。

主人公のウイラードを演じているのが、あの「いちご白書」のブルース・デイヴィソンさまだったって最近知りました。

復讐を果たしたウイラードが、ネズミたちを処分しようとする場面の残酷さは、もう本当に夢に出てくるほど子供心に衝撃的なシーンでございました。

1972年アメリカ映画

監督 フィル・カールソン

主演 リー・ハーコート・モンゴメリー、ジョセフ・カンパネラ、アーサー・オコンネル

ご紹介もれのシリーズ作品でございます。

前頁でご紹介しました「ウイラード」の続編でございます。

「ウイラード」でかなり感動した小学生時代の私、続編がずっと見たくって、タイトルは「ベンかなんか」だったってことだけは知ってたので、テレビで「ベン」がオンエアされるのをめっちゃ楽しみにしておりました。

で、テレビ番組欄で「ベン」ってのをみつけて、うきうきしながら放送時間を待ってたら...

その日の放送は「ベンハー」でした。

ちゃうやん。

ネズミでてけえへんやん。

ってなつかしい話を思い出してしまいました。

「ウイラード」事件で生き残ったネズミ、ベンが主人公。

住む場所（ってのはウイラードの家の地下室だったわけですが）をなくし、ベンは下水道で生き残っていました。

食物をさがしてさまようベンを見つけたのが、心臓病を患っている少年・モンゴメリーさまでございます。

ベンと少年はだんだんと仲良くなっていきます。

しかしそんな彼らの友情も長くは続かないわけですね。

「ウイラード」事件を重くみた保健所（なんでしょう。なんか警察っていうより機動隊に近い装備していたような記憶があるのですが）、下水道の地下道に生息するネズミたちの駆除大作戦を実行します。

果たして少年は。そしてベンはどうなるのでしょうか。

この映画の主題歌をうたっているのが、後に世界にその名をとどろかせるマイケル・ジャクソンさまでございます。

パパの採点。100点満点中70点。

前作はかなりよくできた動物パニックサスペンスだったんですが、今回はかなり作風が違いました。

けっこう感動系の人間と動物の友情物語。

それだけに前作のインパクトには及ばなかったですし、前作のサスペンスフルな展開からは遠い続編になってしまいました。

しかしその分、けっこうハートウォーミングな世界が広がっていて、逆にサスペンスや残酷シーンとかがお嫌いな方には楽しめる作品になっていたような印象が残りました。





## ローラーボール（2002）

---

2002年アメリカ映画

監督 ジョン・マクティアナン

主演 クリス・クライン、ジャン・レノ

1975年に製作された、ジェームズ・カーンさま主演の近未来バイオレンス作品のリメイクでございます。

メガホンはアクションの名匠ジョン・マクティアナン監督。

前作はねえ、主演のジェームズ・カーンさま以外は「誰や、お前」みたいな感じのキャスティングでございましたが、今回は悪役のジャン・レノさま以外「あんた誰？」みたいなキャスティング。

クリス・クラインさまってどんな映画でてた人なんざんしょ。

勉強不足ですんません。

私ゃベン・アフレックさまも最近までよくわからなかった人なんです。

近未来。

世界はテレビマスコミが全てを動かす時代になっております。

命がけの賭けローラーレースを繰り返していたクラインさま。

友人から誘われ、莫大な契約金で、人気スポーツ「ローラーボール」のプレイヤーになります。

複雑な形をしたバンクの中を、バイクの選手とローラーシューズを履いた選手が入り乱れて走り回り、鉄製のボールを奪い合って自分のチームのゴールに入れたらポイントになるってゲーム。

このスポーツ、ごく一部のスタープレイヤー以外は元労働者とかばっかりなわけです。

つまり使い捨てができるプレイヤー。

だから一部のスターは破格の条件で大事にされるんですが、末端の選手は刺激的で衝撃的な暴力画像を視聴者に提供するために、ひどいときはゲーム中に殺されたりすることもあるわけです。

もちろんそれはレノをはじめとするオーナーだとかスポンサーだとかの指示によるものだったりするわけですね。

そんな裏があるなんて知らされてなかったクラインさま、ゲーム中の同僚の事故死をきっかけにしてオーナーに不信感を抱きはじめます。

こうなるとオーナーにとってクラインは邪魔なだけの存在でありまして、オーナーのレノさまは試合中の事故でスタープレイヤーのクラインさまを殺し、それを視聴率に結びつけようと考えはじめます...

パパの採点。100点満点中75点。

ローラーボールって架空スポーツね、75年版の「ローラーボール」のこと知ってますから、あまり新鮮な感じがしませんでした。

子供のころ、「日米対抗ローラーゲーム」ってショーとスポーツの中間みたいな番組もやってたし。

ローラーゲームも、75年版のローラーボールも知らない人なんかだと、斬新で新しいスポーツやなあってひょっとしたら思うかもしれません。

面白さよりも、悪く言えば古臭さ、良く言ったら懐かしさを感じてしまいました。

ちょっと私にとっては題材が悪かったかもですね。

# 海猿 LIMIT OF LOVE

---

2005年フジテレビ作品

監督 羽住英一郎

主演 伊藤英明、加藤あい、佐藤隆太、時任三郎、大塚寧々、吹越 満、浅見れいな、美木良介、石黒 賢

コミックスから生まれて大人気シリーズとなった「海猿」シリーズ。

映画からテレビドラマへ物語世界が動き、再び映画へ。

海上保安庁の潜水士たちの、命がけの救難活動がしっかりたっぷり描かれます。

海上保安庁の潜水士伊藤さま。彼は加藤さまと婚約しておりまして、加藤さまの気持ち的には結婚カウントダウン状態。

しかし伊藤さまは、ある飛行機墜落事故で、要救助者を救うことができなかったことが心の傷になっています。

わざわざ会いにしてくれた彼女に向かって、「結婚のこと考え直そう」なんて言ってしまって、彼女は傷ついて帰ることになります。

で、彼女の乗った巨大カーフェリーが座礁事故を起こすわけでございます。

フェリーの被害は甚大。

一刻も早く乗員乗客の救助を行わなければならない状況です。

そんな中、ちょっとしたトラブルから乗客・吹越さまとフェリーの売店職員の大塚さま、潜水士の伊藤さま・佐藤さまの四人はフェリーの下層階で爆発事故に巻き込まれてしまいます。

で、火災から逃げるうちに脱出できないエリアに迷いこんでしまうわけです。

下からは浸水。上は大火災。

脱出不可能な状況の中で、伊藤は全員の命が助かる方法を探し続けることになるわけでございます。

もうとにかく一難去ってまた一難。

どないすんねんって極限状況がひたすら続きます。

なんでここでこうなるのって感じ。

最後の最後まで力が入りっぱなし。

けっこう疲れる映画でございました。

ドラマから引き続き出演しておられるのは伊藤さま・加藤さま・佐藤さま。

あと、伊藤さまの所属する隊の隊長だった時任さまは、今では制服を着て救助作戦を指揮する立場になっております。

この時任さまがめっちゃええんですわ。

時任さまってこんなにかっこよくてこんなに巧かったんだあって改めて思ったりしました。

それにしてもねえ、潜水士さんが潜るシーンってね、映画見ててどうして息とめて見てしまうんでしょうか。

謎やわ。

パパの採点。100点満点中85点。

ドラマの物語展開のペースになんとか慣れてしまっていたのでしょうか。

前半（というか感覚的には冒頭の、って感じです）で人間関係をちょこちょこっと描いたかと思ったら、いきなり巨大カーフェリーの座礁事故が発生します。

ここらの展開が少し急だったですね。

まあ救難活動をじっくり描くためには人間ドラマとか描いている暇なかったのかな。

## エイリアン4

---

1997年アメリカ映画

監督 ジャン・ピエール・ジュネ

主演 シガニー・ウィーバー、ウィノナ・ライダー、ロン・パールマン

ご存知エイリアンシリーズの第四作。

一作目はリドリー・スコット監督のサスペンスホラー。

二作目はジェームズ・キャメロン監督のアクション映画。

三作目はデビッド・フィンチャー監督のサスペンス宗教映画で、四作目の本作はジャン・ピエール・ジュネ監督によりますアクションモンスタームービーでございます。

第三作でエイリアンを自らの体内に封印するように死んだリプリー＝ウィーバーさま。

しかし「エイリアンを宿した状態」での彼女のDNAが採取され、彼女はエイリアンの胎児ごとクローン再生されます。

彼女を生まれ変わらせたのは、エイリアンの力を軍事利用しようとしている科学者たち。

リプリーは母体として再生させられたわけですね。

科学者グループはあちこちで人を集め、その体にエイリアンを寄生させてエイリアンを増やしております。

宿主となるヒトを密輸してきたグループのメンバーにウィノナ・ライダーさまがおります。

ライダーさまらが「商品」を搬入したちょうどそのとき、エイリアンが檻から脱走。

研究所を兼ねた宇宙船は大騒ぎ。結局宇宙船の乗組員のほとんどはエイリアンの犠牲になります。

リプリーは密輸商人たちと行動をともにしながら、エイリアンと戦うことになるわけであります。

エイリアンはその寄生した生物の特徴をコピーしながら進化する生物でありまして、前回は「犬エイリアン」なんてのが登場しましたが、今回はさらに進化をとげまして、「卵生」ではなく「胎生」のエイリアンまで登場します。

そいつがなんとなく人間チックな顔してまして、めっちゃ気持ち悪いです。

ここらあたりはなんとなく殺人鬼系ホラームービーの香りがしたりして。

で、途中、密輸船の乗組員たちが潜って泳いで脱出をはかるところなんかは、プチ「ディープブルー」みたいな感じ。

エイリアンくんたち、めっちゃ泳ぐの上手かったりします。

とにかくめっちゃいろんな要素が詰まった作品に仕上がっております。

パパの採点。100点満点中85点。

作品ごとにこれだけカラーの違うシリーズも珍しいですよ。

私は「1」「2」がけっこうお気に入りでございます、で、「3」が苦手でしたので、「4」は別に見なくていいかなあって思っておりましたが、予想以上に面白かったです。

面白いシリーズですね。

## キッド (2000)

---

2000年アメリカ映画

監督 ジョン・タートルトープ

主演 ブルース・ウィリス、スペンサー・ブレスリン、エミリー・モーティマー

この映画ってディズニー映画だったんですよね。

なんかディズニー映画の名に恥じないめっちゃええ映画やったし。

ウィリスさまはイメージアドバイザーみたいな仕事をしているおっさんです。

まあクライアントのイメージをよくすることのお手伝いみたいな感じ。

かなりいかがわしいです。

皮肉屋で自信過剰で自己中心的。

なんとなく彼女みたいな存在の女性モーティマーさまもいるわけですが、なりふりかまわないウィリスさまのやりかたに彼女は批判的。

なんとなく破局近し、みたいな感じになっています。

そんなある日、彼の目の前に一人の少年が登場します。

これが映画初出演のブレスリンさま。めっちゃ巧い子役さんです。

彼はなんと8歳当時のウィリスさまだったわけすな。

とりあえずウィリスさま、ブレスリン君が8歳当時の自分なんだってことは認めるわけですが、どうして8歳のころの自分が目の前に現れたのかがわからない。

そりゃそうですわな。

ウィリスさま、少年時代の自分と奇妙な同居生活を送るうち、自分が成功と引き換えに忘れてしまっていたこととか、なくしてしまった夢だとかを少しずつ思い出すわけですね。

そしてついに彼は決定的なことを思い出すわけです。

少年が迎えようとしている「誕生日」に、そこから先の人生を左右する大きな事件が起こることを。

で、ウィリスさまは少年と車を走らせます。

この時点でウィリスさまには確信のようなものがあつたわけで。

車を走らせ、トンネルを抜けると、そこは少年時代だったわけすな。

そこに待っている「ウィリスさまにとっての過去で、少年にとっての未来」は、そこから先の少年の未来を左右する大きな出来事だったわけで。

でも、物語はそれだけでは終わらない。

まだ続きがあるわけです。少年との一連のふれあい、そしてそのあと起こるもうひとつの奇跡。

それによって彼は、「あるべき自分」を再発見することになるわけですね。

もう、後半なんて感動しまくってしまいました。

泣くとかはなかったんですが、もうめっちゃ集中しまくりです。

少年とウィリスさまとの別れの場面も、すっごく好きでした。

そのときのウィリスさまの表情がとってもいいんです。うん。感動しちゃった。

パパの採点。100点満点中80点。

とにかくスペンサー・ブレスリンさまにつきますね、この作品は。

めっちゃ巧い。めっちゃ達者。

そのあと、あの作品に出たこの作品に出たみたいな話、ぜんぜんきいてないんだけど、その後、どんな活動しておられるのでしょうか。

浜田 岳さまみたいにいい役者さんになっているとうれしいんですが。



## グラディエーター

---

2000年アメリカ映画

監督 リドリー・スコット

主演 ラッセル・クロウ、ホアキン・フェニックス、コニー・ニールセン、オリバー・リード、リチャード・ハリス

ラッセル・クロウさま主演の歴史スペクタクル大作でございます。

とにかくめったやたらと重厚な作品。グラディエーターってのはそのものずばり「剣闘士」って意味のようですね。

西暦180年のローマ帝国が舞台でございます。

帝国将軍として活躍しながら、剣闘士として死んだ男の数奇な運命を壮大なスケールで描きます。

ローマ皇帝（リチャード・ハリスさま）の忠臣として厚遇をうける将軍クロウさま。

皇帝は彼の武勲と忠誠にこたえるため、小心者でわがままな自分自身の息子フェニックスさまではなく、クロウさまを自分の次の皇帝にしようと考えております。

皇帝はその考えをクロウさまの活躍で大勝利をおさめ、勝利にわく戦地で息子に伝えたわけですが、父の考えにブチ切れたフェニックスさま、父を殺して病死ってことにしてしまいます。

で、時期皇帝候補だったクロウさまを暗殺しようとするわけですね。

クロウさま、あまりにも強すぎて暗殺部隊を返り討ちにしてしまって、その計画は失敗します。しかしセンキレの次期皇帝フェニックスさまの怒りを恐れた暗殺部隊の兵士たちは、クロウさまは死んだとする偽の報告するわけです。

逃亡するクロウさま。

彼は皇帝の兵によって妻と子供が惨殺されたことを知り、ショックでさまよっているところを奴隷商人に拾われます。

そして二束三文の値段で「剣闘士」の親方（なんとオリバー・リードさまでございます）のものとなります。

クロウさま、もと将軍だけあってめっちゃくちゃ強い。

またたく間に彼は「親方」の奴隷のなかで最強の戦士となります。

折りしもローマのコロシウムで開催が禁止されていた剣闘士の戦いが皇帝の命によって再開されることとなり、「親方」にも声がかかるわけですね。

クロウさま、皇帝の御前で戦うことになります。

果たしてクロウさまは妻と子供の仇を討つことができるのでしょうか。

圧倒的に面白かったです。

やはりアカデミー賞（作品賞、ラッセル・クロウさまの主演男優賞ほか）は信用しなきゃいけませんねえ。

パパの採点。100点満点中90点。

ラッセル・クロウさま、この一作ですっかりお気に入りの役者さんになってしまいました。  
すごく充実した時間をくれた作品でございました。

2001年アメリカ映画

監督 マイケル・ベイ

主演 ベン・アフレック、ジョシュ・ハートネット、ケイト・ベッキンセール

えっと。今さというまでもないですが、戦争映画です。

えっとね、太平洋戦争のこと、どこまで書いていいのかよくわからないんですが。

この真珠湾攻撃前後の話ってね、すごくいろんなエピソードがあったりしましてなあ。

実はアメリカは真珠湾攻撃を事前に察知してたとか、真珠湾は戦争をしたかったアメリカが捨石に選んだ場所だったとか。

っていうか、右翼の人なんかがよく街頭で演説してますがね、太平洋戦争を、軍国主義を盲信した軍部の暴走の結果だとか、戦前のまちがった教育による戦争だったとか、そういった戦後教育がねえ、事実を見えなくしているというか。

ちなみに。

私ってね、小学校のころから塾行ってまして。

そこの塾の先生がちょっと変わった先生で。

ナナハンバイクで全国まわってるような人でしてなあ。

で、けっこうしっかりした歴史認識持っておられた人で。

その人の影響で、けっこう太平洋戦争の実像ってのをつかむことができているんじゃないかと勝手に思ってるんですが。

ちなみにその先生、すでに故人で、後の推理作家、鷹羽十九哉先生です。

ってことで、私はその先生の影響で、太平洋戦争はどちらかというとアメリカが仕掛けた戦争で、真珠湾は開戦の口実のために犠牲になった場所だったんじゃないかって思っております。

そう考えないとツジツマあわなかつたりするんですね。

それってこの映画でもちょこっと描かれている部分だったりするんですが。

少なくとも、アメリカ軍が本気で日本の攻撃を察知しようとしていたら。また、その攻撃をくい止めようとしたら、真珠湾攻撃はあそこまで一方的なものにはならなかったと思います。

って硬い話は置いといて。

作品の前半は、アフレックさまとハートネットさまの二人の戦闘機パイロットが、看護師ベッキンセールさまをめぐってああだこうだするって、とっても甘ったるい恋愛映画として進行します。

ほんま、ええやん、勝手にしなはれって感じ。

しかし、開戦の機運、ひたひた。

そして日本軍の真珠湾奇襲攻撃が始まるわけであります。

まあねえ、「本当に奇襲だったのか」って話もあるんですが。

もうええか。

とにかくこの映画、徹底的に米軍目線で話が進行していきます。

もう、めっちゃアメリカ目線。

アメリカ映画だからしかたないんだけど。

って言ったら、クリント・イーストウッド監督が、硫黄島の戦いを日米双方から描く、みたいな試みをしていました。

うん、これってすごく勇気がある表現だったんじゃないかなって思いました。

一方からの歴史観をもって作品を描くのってすごく楽なんです。

やっぱり。そういう意味では、この時期にパールハーバーを描かなければならない必然性とかちょっと見つけることができなかつたというか。

まあ必然性で題材選びとかはしないんだろうけど。

パパの採点。100点満点中65点。

真珠湾攻撃のCGSF Xシーンは、もうめっちゃ見事でした。

しかしねえ、ちょっと歴史認識に隔たりがありすぎて、あまり楽しめませんでした。ごめんなさい。

## シャル・ウィ・ダンス（2004アメリカ）

---

2004年アメリカ映画

監督 ピーター・チェルソム

原作 周坊正行

主演 リチャード・ギア、ジェニファー・ロペス、スーザン・サランドン

あのう。はっきり言っていいですか？

何度も書いていると思いますが。

リチャード・ギアさま苦手。

なんかねえ、わしゃめっちゃええ男やでえって顔に書いてるような気がしまして。

でもトム・クルーズさまは嫌いじゃない。どうしてなんだろう。

トム・クルーズさまってちょっと下品な顔してるからでしょうか。

ってことで、そんなリチャード・ギアさまの主演する、ちょっとほろ苦系の大人のラブストーリーでございます。

言うまでもなく、周坊正行監督・役所広司さま主演の傑作「シャル・ウィ・ダンス」のハリウッド版リメイク。

オリジナル版は、めっちゃ強烈な個性の役者さんたちが集まってましたので、どんな感じになるんだろうって楽しみにしていましたが、予想していた以上に普通のキレイ系のハリウッドスターさんばかりのキャスティングだったので、へえ、そうなんや。って感じで見てしまいましたです。

ギアさまはクライアントの遺書とかを管理する仕事をしております。

電車に乗って家に帰る途中、ダンススタジオが見えるわけですな。

ダンススタジオの窓からいつも外を見ている美女ロペスさま。

スケベのギアさま、ロペスさまと知り合いになりたくてそのダンススクールに入会してしまいます。

しかしダンスをはじめてみるとこれがけっこう面白くて、だんだんはまっていくわけですな。

ってあらすじそのものは、周坊監督版の「シャル・ウィ・ダンス」と全く同じ。

かなりオリジナル版を意識した作り方しているように感じました。

クライマックス近く、奥さんサランドンさまにダンスを習っていたことがバレてしまいまして、それがもとでギアさま、ダンスをやめる決意をするわけですな。

「憧れの先生」ロペスさまが再び大会ダンスに挑戦するためにダンススクールを離れることを知った奥さん、「いってらっしゃい」って感じで、ダンスシューズをプレゼントしたりします。

オリジナル版では迷ったあげくに送別ダンス大会に行ったわけですが。

ハリウッド版ではもちろんダンス大会には行くわけですが、その前にちょっと寄り道したりします。

ギアさま、正装して奥さんの職場に行き、そこで奥さんにダンスを申し込んだりして。

しかもバラの花一輪持っていたりして。

こんなね、役所さんの演じた主人公のキャラではできないですね。

「愛と青春の旅立ち」「プリティ・ウーマン」でこういう系のクライマックスを演じてきたリチャード・ギアさまだからこそ許される設定っていいでしょうか。

ええなあ、男前は。

パパの採点。100点満点中75点。

基準点でございます。

うむむ。

リチャード・ギアさまが奥さんとダンス踊る前まではよかったんですがね。

あのシーンが妙にできすぎて感じがしまして、点数下がってしまいました。

ギアさまと奥さんの関係がなんとなくしっくりいかなかった上での大逆転的シーン・設定なんです。

やっぱりできすぎ。ウソっぽさが残っちゃいましたね。残念。

## ウォーターズ

---

2005年ヒューマックスシネマ作品

監督 西村 了

主演 小栗 旬、松尾敏伸、須賀貴匡、葛山信吾

借金を返すため、自分の人生をやり直すためにホストという職業を選んだ若者たちの姿を描くコメディ。

だと思っていたら...なんて書いてしまうからあかんのですよね。

それまでけっこうええ話系の、青春サクセスコメディだと思っておりましたが、クライマックスでとっもいかしたドンデン返しが。

びっくりしちゃいました。

元大道芸人・元銀行員・倒産した会社の元社長・解散したクラブチームの元バスケットボール選手に元板前...そんな経歴をもった男たち。

海辺のシケたホストクラブの面接を受けたそんなメンバーたちですが、店のマネージャーって男が、彼らが出したなけなしの金＝保証金を持ち逃げしてしまったってんでさあ大変。

店のオーナー＝原田芳雄さまが、お詫びに受け取ってくれて金をつぎ込んで、彼らは「素人ホストクラブ」を経営することになります。

そんな彼らの店にやってきたのはIT企業の若い女社長たち。

彼女たちは急造ホストたちのとんでもない失態の数々に激怒してしまいます。

やっぱり素人に水商売は無理だったんだっばい空気流れまくり。

ホスト志望の若者たちの気持ちはバラバラになってしまいます。

そんなとき、彼らの店のある港町が台風の直撃を受けるわけですね。

なんだかんだいいながら、全員が店に集まります。

ここで全員の気持ちがひとつになるわけですね。

ひょんなことから店長の大役をまかされた小栗さま、原田さまの孫娘の心臓病の手術費用を稼ぎたい一心で、ここで大勝負にでます。

以前激怒させたIT女社長たちと賭けをして、賭けに勝ったらホストクラブの客として料金を払ってくれと、まあそういう感じになるわけですね。

賭けてるのは、その女社長グループ全員を満足させる接客をすること。

果たしてこの賭けの勝敗は...

さっきも書きましたが、この映画の本当の大仕掛けはこの賭けが終わって、さらにハートウォーミングなクライマックスのあとにやってきます。

ここは難しいこと考えずに、西村監督の罠にはまっていただきたいと思います。

パパの採点。100点満点中85点。

けっこう今風男前俳優たちが大挙して出演しておりますです。

しかし、その中に二人の仮面ライダー出演者（葛山さま＝仮面ライダークウガ、須賀さま＝仮面

ライダー龍騎) が出演しているってところが実はポイントなのかもしれません。

いかに平成仮面ライダーにホスト顔のイケメン俳優が揃ってるかってことですよね。

ってというか、「仮面ライダー龍騎」にでてきた全ライダー（リュウガは二役だし、ファムは女の子だし、あとオーディンは人間体がありませんので十人ですか）でホストクラブやったらけっこういけると思うんだけど。

見てなかった人はわかんないかもですが、須賀さま、松田悟志さま、涼平さま、荻野 崇さま、木村 剛さま、高野八誠さま、一條 俊さま、黒田アーサーさまにあとウルトラマンネオスの主演の子ともう一人（最後の二人って名前覚えてないっす。ごめんなさい）。

見事なホスト顔ばかり。

このメンバーで「ウォーターズ2」やってほしいもんです。



2005年松竹・日本テレビ作品

監督 下山 天

主演 オダギリジョー、仲間由紀恵、椎名桔平、黒谷友香、石橋蓮司、沢尻エリカ、北村和夫、りりい、柊 毅

大好きなSF X 忍者映画。

でも物語のテーマは恋愛もの。

苦手ジャンルの恋愛ものではありますが、それを補ってあまりあるほどの特撮の素晴らしさを堪能させていただきました。

オダギリさまと仲間さまはそれぞれ異なる「忍びの隠れ里」の頭目の孫でございます。

「大御所様（っていうからには徳川家康なんだろうなあ）」の命令で、それぞれの里の代表五名が戦うことになってしまいます。

ところが実はオダギリさまと仲間さまは、すでに恋仲だったわけでございます。

んでよくできたことに、二人はどちらもそれぞれの里の選抜シノビ決戦の大將になってしまいます。

直接対決を避け、オダギリ一派は先発して江戸に向かいます。

なぜ隠れ里どうしが戦わなければならないのかってことの真意を大御所様＝北村さまならびに側近＝石橋さま、あと服部半蔵に問おうと、まあこういうわけでございます。

それを追う仲間さま一派。忍びの隠れ里の代表だけに、それぞれめっちゃすごい術を使います。仲間一派は、殺しても死なない男（椎名さま）・びろーんと長い着物の袖を自由に操る男・鉄の爪を操る獣人・霧を操る少女（沢尻さま）。

一方のオダギリ一派、毒の息を吐く女（黒谷さま）・短刀投げの使い手・変身能力のある男・盲目の預言者（柊さま）。

頭目のオダギリさまは、サイボーグ009の加速装置みたいな技を使います。

目がギラって光ると、いきなり周りの敵が動くスピードが遅くなって、その間にばったばたと相手を倒します。

仲間はその眼力で、相手の体じゅうの骨をぐちゃぐちゃに壊す術が得意技。

こんなすごい技をもったシノビが五人対五人。

めっちゃすごい忍術合戦を繰り広げるわけですね。

「バトロワ」よろしく、一人また一人とシノビが命を落としていきます。最後に残るのはやっぱりオダギリさまと仲間さま。

せつないタイマン勝負。

しかしオダギリは、数百年生きたという（結局死んじゃったけど）「死なない忍」椎名さまから、今回の戦いの理由を聞かされていたわけですね。

泰平の徳川の世となった今、「隠れ里の忍び」など必要なくなったと。里の最高の術者どうしを

戦わせている間に、徳川軍がそれぞれの里を攻撃する手はずになっていたわけでございます。  
果たして隠れ里の運命は... そして愛しあってはいけなかった二人の運命は...  
とにかくSFXが素晴らしいですね。けっこう見入ってしまいましたです。仲間さまきれいだし  
。

パパの採点。100点満点中90点。

仲間さま・オダギリさまのお二人がめっちゃくちゃいいのは当たり前なんですが、椎名さまがす  
んげえいい感じです。

この人、どんどんいい雰囲気を出す役者さんになってきましたね。

素晴らしいです。

## スパイダーマン 3

---

2007年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 トビー・マグワイア、キルスティン・ダンスト、ジェームス・フランコ、トーマス・ヘイデン・チャーチ、トファー・グレイス

アメリカンコミックスの大人気作品、「スパイダーマン」の実写版でございます。

スパイダーマン＝マグワイアさまは父の仇だと信じる、彼の元親友フランコさま。

本作では本格的に父「グリーンゴブリン」の遺品のロケットみたいなのに乗ってごちゃごちゃとマグワイアさまにからんできます。

当のマグワイアさまはめっちゃ浮かれておりましてですね。

彼女のダンストさまに対して、いつプロポーズしようかってところまでいっております。

そんなマグワイアさまのもとに重い知らせが入るわけですね。

彼の最愛の叔父を殺した犯人が、エピソード1の前半で彼がやっつけた荒くれ者ではなかったことが判明します。

犯人チャーチさまは刑務所を脱獄。

あろうことか、逃げるうちに物質の科学分解の研究施設に入り込んでしまっ、彼は砂といっしょに科学分解されてしまいます。

しかししかし。彼の「意思」は砂と同化してしまっ、新敵キャラ、「サンドマン」が誕生してしまうことになるわけでございます。

さらにさらに、宇宙からやってきた謎の寄生生物がマグワイアさまのスパイダースーツに寄生してしまっ、とりつかれたスパイダースーツは真っ黒になってしまいます。

その寄生生物は宿主の性格とかに干渉しまっ、そのおかげで「悪の黒いスパイダーマン」が登場することになります。

そんなわけで、今回のスパイダーマンは「自分を父の仇と狙う親友フランコさまが変身したニューゴブリン」と、「最愛の叔父を殺した犯人が変身した姿のサンドマン」、さらには「自分の中の悪の心」と戦うという、とってもややこしい展開となるわけでございます。

んでもってプライベートでは、うまくいっていたダンストさまと気持ちが通い合わなくなっ、彼女がフランコさまにフラフラっといったりしまっ。

そうかと思えば「スパイダーマンと仲良しの雑誌カメラマン」でもあるマグワイアさまの地位をおびやかす、「合成トリック当たり前」みたいなダーティなライバルカメラマン・グレイスさまが登場したりします。

自分自身の悪の心の象徴でもある「黒い寄生生物」との離脱に成功したスパイダーマンですが、今度はその生物、スパイダーマンの能力をコピーした状態でたまたま離脱の現場にいたグレイスさまに寄生します。

マグワイアさまに写真の合成を見抜かれてクビになったグレイスさま、スパイダーマンを逆恨み

しまして、サンドマンと手を組んでダンストさまを誘拐。

スパイダーマンを抹殺しようとしています。

強敵を前にしたマグワイアさま。最愛の彼女を救うために、かつての親友に助けを求めますが...

パパの採点。100点満点中75点。

すごい長い映画でしたね。びっくりしてしまいました。

それだけにいろんなエピソードてんこ盛りでございます。

映画的にはすごくよくできているんですが、ちょっと途中ダレてしまいましたね。

SFXアクションのシーンがドラマ部分に比べて短すぎたようで。

ってというか、ドラマ部分が長すぎたのかもしれませんが。ちょっと見ていてしんどかったです。も

うちょっとアクションシーンの連発を期待したんですが。

## パトリオット・ゲーム

---

1992年アメリカ映画

監督 フィリップ・ノイス

主演 ハリソン・フォード、アン・アーチャー、パトリック・バーギン、ショーン・ビーン、サミュエル・L・ジャクソン、リチャード・ハリス

トム・克蘭シーさま原作のCIAアナリスト、ジャック・ライアンを主人公にしたシリーズ第二弾。

ちなみの第一弾はアレック・ボールドウィンさまがジャックを演じました。

テロリストが企むイギリス王室貴族の誘拐計画を阻止したがために、テロリストに狙われることになったライアンファミリー。

彼ら家族とテロリストとの戦いを描きます。

ジャック・ライアン＝フォードさまは、CIAを退職しておりまして、今では警察学校とかの先生をしたりしております。

休暇で立ち寄ったロンドン。

運の悪いジャックは、そこでIRAによる王室貴族誘拐事件の現場に出くわしてしまうわけですね。

行動力が旺盛というか、言葉を変えればあとさきを考えないジャックさん、マシンガンで武装したテロリストに体当たり。

で、気絶したテロリストから銃を奪って誘拐グループを撃退します。

しかしそれがいけなかった。

そのときにジャックが射殺した男は、IRAの掟なんてクソくらえ、みたいなキャラのかなりアブない闘士＝ビーンさまの弟だったわけでございます。

逮捕されたビーンさまは護送途中で脱走し、それ以来執拗にライアンファミリーをつけ狙うことになるわけです。

アブない奴に狙われて、CIAへの復職を決意するライアン。

テロリストとアナリスト。

頭脳と頭脳の戦いの軍配は果たしてどちらに上がるのでしょうか。

っていうか、何というか。

ハリソン・フォードさまちょっとジャック・ライアンには似合っていないです。

この人は頭脳使うよりも撃ち合いとかしたほうがキャラなんじゃないかなって思うんですが。

パパの採点。100点満点中80点。

トム・克蘭シーのジャック・ライアンシリーズは、四作映画化されております。「レッド・オクトーバーを追い」ではアレック・ボールドウィンさま、本作とこのあとの「今ここにある危機」はハリソン・フォードさまが、そして「トータル・フィアーズ」ではベン・アフレックさまがジャック・ライアンを演じております。

個人的にはアレック・ボールドウィンさまがよかったかな。

ハリソン・フォードさまはなんかねえ。

ちょっとスターウォーズとかの荒くれイメージが強すぎて、頭脳派アナリストのイメージと結びつかないんです。

ごめんなさいって感じです。

## スタートレック

---

1979年アメリカ映画

監督 ロバート・ワイズ

主演 ウィリアム・シャトナー、レナード・ニモイ、デフォレスト・ケリー、スティーブン・コリンズ

これまでご紹介できなかったシリーズものを順にご紹介してまいりましょうね。

私、中学から高校にかけて、「宇宙大作戦」がめっちゃ好きだったんですよ。

深夜の再放送なんか、けっこう見てました。そもそもは1966年から製作されたテレビシリーズでございます。

五年間の宇宙探査飛行の任をうけたUSSエンタープライズ号の物語。

って若山弦三さまのナレーションが流れる、おなじみの海外ドラマでございます。

カーク船長のウィリアム・シャトナーさま、スポック副長のレナード・ニモイさま、マッコイ医師のデフォレスト・ケリーさま。

あとウーフラ（吹き替えではウラでしたなあ）とかチェコフとかスルー（吹き替え版ではミスターカトーでした）とか。

機関士はスコッティなのかチャーリーなのかよくわかんなかったですが。

で、満を持して製作された映画版スタートレック。

スタートレックファンの人のこと、トレッキーって言うのですが、この作品、ディープなトレッキーにはちょっと不評だったとか。

どっちかってえと、宇宙船とかエイリアンとかとの戦闘シーンなんかほとんどなくて、どっちかってえとストーリーを見せるタイプの作品だったので、そう感じられた人多かったかもしれませんね。

はるか外宇宙から、謎の雲状の物体が地球を目指して飛来してきます。

すわ、宇宙人の侵略かいなと臨戦体制に入る地球の皆様。

そこでUSSエンタープライズ号が発進。

すでにえらいさんになっていたカーク船長・マッコイ医師ら元クルーたちが勢ぞろいし、なぜかどこかの星で精神修行に勤んでいたスポックまで復帰し、謎の物体の謎をさぐります。

そんな中、エンタープライズの乗組員の一人で、交感能力に優れたクルーが「謎の物体」にとり込まれてしまいます。

クルーを救いに物体の中に入るカーク船長たち。

クルーの口を介して「謎の物体」の意図を知るカークたち。

物体は自らを「ビジャー」と名乗り、「ビジャーはクリエイターに会うためにきた」とのメッセージを繰り返します。

果たして「ビジャーとは何物なのか、そしてクリエイターとは誰のことなのか。

やがて驚愕の結末がやってくるわけでございますな。

パパの採点。100点満点中90点。

実は私的には、この作品すげえ評価高いんです。

映画版の中では、第二作「カーンの逆襲」について評価が高い作品。クライマックスのオチがわかって、「おお、そうだったのかあ」って爽快感はこの作品がダントツでございました。テレビシリーズ的なドンデン返し感が一番出ていたのがこの作品だったように感じます。



## スタートレック 2・カーンの逆襲

---

1982年アメリカ映画

監督 ジャック・B・ソワーズ

主演 ウィリアム・シャトナー、レナード・ニモイ、デフォレスト・ケリー、リカルド・モンタルバン

なんとなくご紹介できなかったシリーズもの。

映画版「スタートレック」の第二作。

「おい、知ってるか」「なんやねんな」「スタートレックの映画版、またやんねんて」「そうかあ、見にいかなあかんあ」「でもな、今度の作品で、ミスタースポック死ぬらしいで」「ええ〜？」

なんて会話が、同級生との間に交わされた衝撃の展開のシリーズ第二作。

実はこの映画、誰よりも早く見たくて、公開初日の第一回目の上映を見に行った思い出があります。

そもそもはテレビシリーズの「宇宙の帝王」ってエピソードの後日談でございます。

テレビ版で、エンタープライズ号を乗っ取ろうとして失敗し、辺境ではあるんだけど緑豊かな惑星に宇宙船「ボタニ・ベイ号」で送られた、優勢遺伝子人間のカーン。

運の悪いことに、この星をとりまく太陽が燃え尽き、そこは太陽の昇らない、砂だらけの惑星になってしまいます。

この星でカーク船長への復讐を誓って生きてきたカーン。

一方、宇宙再生の新プロジェクト「ジェネシス計画」の調査のためにこの星に立ち寄ったかつてのエンタープライズ号の乗組員チェコフ。

彼はカーンに拉致され、カークへの復讐の道具として利用されることになるのでした。

一方のカーク。今では提督でございます。エンタープライズの指揮官はスポックでございます。スポックも、ただの艦長ではなく、研修中の若いクルーの教官として乗っているわけでありまして。

えらくなったもんだ。訓練飛行中に盟友チェコフからの連絡。

それがカーンの罠であることは言うまでもないわけでありまして。

果たしてカークとカーンの因縁の対決の結末は...

えっと、既にも書きましたが、作品クライマックスで、レナード・ニモイさま扮する副長スポックが命を落とします。

説明すると長いんですが、エンタープライズ号はカーンの船からの攻撃を受けまして、エンジンに深刻なダメージを受けて航行不能に陥ってしまうわけですね。

カーンの船もその時点で航行不能。

で、エンタープライズを道連れにしようと、核爆弾以上の強力な破壊力をもつ「ジェネシス装置」を作動させるわけですね。

スポックは人間が入ると数秒ともたない、放射能もれした動力装置の中に防護服なしで入り、ワープエンジンの復旧を果たした後、力尽きます。

もうねえ、涙ズルズルでした。

スポックさん死んじゃうんだもん。

で、第三作に続く。

今でこそ、このあとシリーズがどう続くかわかっているから「へえ、そうやったんや」って感じですが、この当時は、もう真剣に泣いてしまいました。

パパの採点。100点満点中95点。

哲学的にさえ感じさせた前作とはうって変わって、今回は宇宙大活劇。

それでいて「破壊」と「創生」、「若さ」と「老い」、さまざまな根源的なメッセージを投げかけているような作品でございます。

スポックは「多数の利益は少数の利益に優先する」という「論理的思考」で、「これは論理的な結論です」みたいな考え方で命を落とします。

このスポックの「論理」に対するカーク提督の答えは...

これまた第三作に続く～

## スタートレック3・ミスタースポックを探せ

---

1984年アメリカ映画

監督 レナード・ニモイ

主演 ウィリアム・シャトナー、レナード・ニモイ、デフォレスト・ケリー

なんとなくご紹介できなかつたシリーズもの。

映画版「スタートレック」の第三作。

完全に前作「カーンの逆襲」の後日談でございます。

それでいて新しい物語展開なんかも若干入ってきたりして。

えっと、前作のラストで、カーク提督たちは軍隊式に、スポックの遺体を（ジェネシス装置稼働によって「創生」された）新惑星ジェネシスに安置して帰還するわけですが、バルカン星人のスポックの父は、このことを知って激怒するわけすな。

そもそもバルカン星人の魂は不滅で、誰かの肉体を介して生き続けることができるということがわかります。

で、スポックの魂はってえと、放射能があふれた動力室に入ろうとするスポックを止めようとして気絶させられたマッコイ医師の体に入っていたわけであります。

スポックの魂が生きていることがわかったカーク提督、じゃあ肉体はってことを考えはじめます。

もし「ジェネシス」という装置が真の創生をもたらすものなら、スポックの肉体も再生されているのではないかと考えるわけすな。

しかしながらまだまだ実験段階であったジェネシス装置によって創造された惑星ジェネシスは、急速に発達し、同時に急速に老化・崩壊をはじめます。

そんな惑星ジェネシスで観測された生命反応。

カーク提督、もう行くしかないって感じです。

行動的なカークさん、宇宙船かっばらって惑星ジェネシスに向かいますが、行く手にはおなじみ、戦闘民族宇宙人のクリンゴン星人が待ち構えているわけでございます。

いぐわああああ。

今にして思えば、第二作の時点でこの作品が製作されることは確定していたわけでしょうね。

あまりにも自然に物語がつながっているし、そもそも「カーンの逆襲」のエピソードそのものが大きな伏線であったようにさえ感じられる構成でございます。

あとで第二作を見直したんですが、めっちゃあからさまに、不自然なくらいのアップで「スポックの魂がマッコイ医師に移る場面」が描かれておりました。

ちゃんと伏線はってたんだなあ。

パパの採点。100点満点中85点。

ここからネタバレしまっせ。「多数の利益は少数の利益に優先する」って論理で自ら犠牲になることを選んだスポック。

崩壊しつつある惑星ジェネシスでカークはスポックを探し出し、マッコイ医師に宿っていたスポックの魂を再生したスポックの肉体に返すことに成功します。

「危険を冒してまでどうしてここにやってきたのですか」みたいなことを言うスポックに対し、カークは言うわけです。

このセリフがまた泣かせる。

そのセリフはDVDでご確認ください。

ちなみに本作の監督はスポック役のレナード・ニモイさまでございます。

## スタートレック4・故郷への長い道

---

1986年アメリカ映画

監督 レナード・ニモイ

主演 ウィリアム・シャトナー、レナード・ニモイ、デフォレスト・ケリー

映画版「スタートレック」の第四作。

えっとね、このシリーズ、ここから先の作品は急速に私的評価が下がってしまいます。

会社に、けっこうスタートレック好きな人がいてまして、一度「映画版スタートレック」談義をしたことがあるんですが...

お互いけっこうスタートレックが好きで、テレビシリーズのエピソードなんかもけっこう覚えている二人だったんです。

そんな二人が二人とも、映画版第一作から第三作までの内容とかあらすじとか、めっちゃ正確に覚えていたんですが、この第四作以降の記憶があやふや。

間違いなく見ているんですが、なんとなくあやふや。

物語的なインパクトのあった第一作、衝撃のクライマックスの第二作、なんじゃこりゃ的な第三作ときまして、もうよっぽどのことをしなけりゃ前三作には勝てないって...

そんな感じで、ここから先は、明らかに勝負を捨てたような感じの作品に仕上がってしまいました。

この第四作は、第一作みたいな感じで、テレビシリーズ的な「物語そのものを楽しませる」作りになっておりました。

逆にそれが新鮮だったりしましたが。

でもどうしても印象が軽くなってしまいますなあ。しかたないところですが。

宇宙から飛来してきた謎の飛行物体（またかいな）。

そのせいで、人類は絶滅の危機に瀕しております。

やがて、謎の飛行物体から発せられる音声は、絶滅したクジラの鳴き声に酷似していることが明らかになるわけですね。

しかしその時代にはクジラなんておりません。

で、なんでもありのエンタープライズワールドでございますなあ。

エンタープライズは現代にタイムスリップしてしまいまして、未来の人類を救済すべく、絶滅した（っていうか数十年・数百年後に絶滅する予定の）クジラを捕獲して未来に持ち帰るって計画をたてるわけでございます。

果たして人類の未来を賭けた捕鯨作戦は成功するのでしょうか。

パパの採点。100点満点中70点。

この作品の友人との略称は「クジラ」でございました。

何度も書きますが、決して出来の悪い作品ではありませんですよ。

ただ、第一作から第三作までが好みバッチリの作品で、そういう意味ではどうしても見劣りして

しまう作品でございます。

監督は前作に引き続きミスタースポック役者のレナード・ニモイさまでございます。

## スタートレック 5・新たなる未知へ

---

1989年アメリカ映画

監督 ウィリアム・シャトナー

主演 ウィリアム・シャトナー、レナード・ニモイ、デフォレスト・ケリー

映画版「スタートレック」衝撃の第五作。

前頁に登場した、「スタートレック」をけっこうよく見ている友人と語りあったとき、お互い一番口数が少なくなった問題の一作。

監督はここまで二作のメガホンをとっていたミスター・スポック＝レナード・ニモイさまから、カーク船長＝ウィリアム・シャトナーさまに代わっての一本でございます。

このあとの第六作目は製作総指揮がレナード・ニモイさまで監督がニコラス・メイヤーさまって人。

さらにそのあとは映画編もテレビシリーズと同様に「ネクスト・ジェネレーション」に移行しまして、その映画版の第一作「ジェネレーションズ」にもシャトナーさまは出演しておりますが、やはりメガホンはとっておりません。

ってことはどういうことなのかって考えますと、やっぱりそういうこと以外には考えられないわけでございます。

その友人のこの作品に対する評価も、監督としてのシャトナーさまの評価も「...」でございます。

私のこの作品の評価はっていいますと...

「覚えてない」って評価が一番近いです。

あらすじとかを映画サイトとかビデオパッケージとかで確認したんですが...

絶対見ているし、断片的な記憶もあるんだけど、覚えてないんですなあ。

原題が「ファイナル・フロンティア」でっせ。

スタートレックをずっと見ておられる人なら覚えておられると思いますが、テレビシリーズのころから、「スペース...ザ・ファイナル・フロンティア...」ってナレーションで始まったたわけ。

シリーズの総決算みたいな作品を期待していたんですが。

えっと、うろ覚えのあらすじです。

銀河系の中立星域が何者かによって占拠されたという連絡をうけたエンタープライズ号。

船長はもちろんカークさんでございます。

その星域に向かう途中、いろいろな情報が入ってくるわけでございますな。

星域の管理者が人質になっているとか、そのエリアには全然資源みたいなものがないとか。

やがて反乱軍の首謀者がスポックの異母兄弟のサイボックだったってことがわかります。

星域に着いたエンタープライズですが、カーク船長はそこでサイボックの真意を知ることになります。

サイボックは聖なる伝説の星にどうしても行きたくて、そのためにエンタープライズ号が必要だったわけですね。

お人よしのカーク船長は、サイボックとともにその星に向かおうとするわけですが...

パパの採点。100点満点中65点。

うむむ。やはりシリーズは「スタートレック3・ミスタースポックを探せ」か、それが無理なら最悪でも「スタートレック4・故郷への長い道」で完結しておくべきだったのではないかと思います。

スタートレックファンの私をして「空振り～」って言わせてしまう、逆の意味で衝撃的な問題作でございます。



## スタートレック 6・未知の世界

---

1991年アメリカ映画

監督 ニコラス・メイヤー

主演 ウィリアム・シャトナー、レナード・ニモイ、デフォレスト・ケリー

映画版「スタートレック」第六作。

カーク船長版エンタープライズ号の最終エピソードになります。

このあと映画シリーズはピカード船長＝パトリック・スチュワートさまのシリーズに突入します。

新シリーズの第一話では、ゲストとして「めっちゃじいさんになったマッコイ医師（＝デフォレスト・ケリー）」が出演しておりました。

さらにちなみに、1994年製作の新シリーズ映画版第一作にはカーク船長＝ウィリアム・シャトナーさまがご出演。

でもねえ。このエピソードって私的には好きじゃないです。

まあ見た人はその理由わかるだろうと思いますが。

このエピソードをスタートレックシリーズに入れることを認めてない人もいます。

さらにちなみに、私はこの「ジェネレーションズ」は海外旅行に行った先で、吹き替えなしの字幕なしで見まして、あらすじはわかるんだけど細かい内容とかは実は理解しておりません。

見直しして、お話ちゃんと理解してからとりあげようと思っております。

さて「未知の世界」。

えっと、旧シリーズと新シリーズの橋渡しともなる設定が描かれるお話。

このエピソードで地球連邦は、テレビシリーズからの宿敵クリンゴン帝国と和平を結ぶわけでございます。

で、この和平があったから「ジェネレーションズ」でクリンゴン星人（厳密にはクリンゴン人と地球人の混血...だったと思うんだけど）のクルーなんかが登場するわけです。

地球連邦の宿敵、クリンゴン人の惑星が、太陽の爆発か何かで、壊滅的な打撃をこうむります。

クリンゴンの支配者は地球との和平条約を結ぶことを希望しまして、その交渉にあたるのが我がエンタープライズ号でございます。

しかし、クリンゴンの大使を乗せた宇宙船が、砲撃をうけて爆破されてしまいます。

その攻撃を仕掛けたのがなんとエンタープライズ号だったと。

当然、一触即発。

カーク船長とマッコイ医師は、その大使を殺害したって罪で、クリンゴン星に拉致され、裁判にかけられることになります。

そんな間にも、クリンゴン宇宙船攻撃の真相を探るスポック。

そしてスポックがたどりついた事実とは...

しまったなあ。この作品が「ジェネレーションズ」につながるとかうかつに書いてしまったから

、最終的には和平交渉が成立することバレバレですよんか。

そうです。

和平交渉は成立しまして、ここから宇宙にはつかのまの平和が訪れます。

で、次に宇宙の平和を脅かすのは、「ネクストジェネレーション」シリーズの宿敵「ボーク」ってことになるわけですね。

まあこれは次の世代のお話ってことで。

パパの採点。100点満点中65点。

映画版スタートレックは3以降はちょっとポイント低いです。

この作品はまあまあ面白いほうなんだけど、でも「1」から「3」までの完成度には及びません。

カーク船長版スタートレックはこの作品で完結してしまうことになるだけに、ちょっと残念な気がしますね。

## エルム街の悪夢

---

1984年アメリカ映画

監督 ウェス・クレイブン

主演 ヘザー・ランゲンkamp、アマンダ・ワイズ、ジョン・サクソン、ジョニー・デップ、ロバート・イングランド

なんとなくご紹介できなかつたシリーズもの。

鬼才・ウェス・クレイブン監督の名前を世に知らしめた傑作ホラーシリーズの第一弾。

このシリーズの成功の要因は、第一作で作り上げた「夢の中の殺人鬼フレディ」ってコンセプトのすばらしさもさることながら、そのフレディを演じた名優ロバート・イングランドさまの名演によるところも大きかつたのも事実だと思います。

とにかく素晴らしい演技でございます。

ロバート・イングランドさまっていいますと、このフレディ以外にはあまり知られてないかもしれませんが、懐かしの大作ビデオシリーズ「V」で、「地球人に惚れてしまって結婚までしてしまうエイリアン」役を熱演していた人です。

「V」ってけっこう地味だけど巧い役者さん揃えてたんですよ。

マイケル・アイアンサイドさななんかも出てたし。

で、「エルム街の悪夢」のお話。

主人公はランゲンkampさま（この人、すごい名前ですなあ）が演じるナンシーって少女。

彼女は寝ると、きまって変な夢を見るわけです。

で、いつもすっげえ危ないところで目が覚める。

いつも夢から覚めて、「ああよかった」って感じだったんですが、ある日、彼女と同じ夢を見ているって言っていた友人が、夢の中の殺人鬼に現実に殺されてしまうって事件が起きてしまいます。

このシーンがけっこう強烈。

そんなことがあってからというもの、彼女は眠れなくなってしまうわけですね。

眠ったらその殺人鬼＝フレディに殺されてしまうわけです。

でも眠い。ふわあってなったら、フレディがやってくる。

びくってなって起きて、ああよかったって思ったら、またフレディがやってきて、なんでなんって思ったらまだ寝てたとか。

うまいですね、こういうトラップ。

わかっているもひっかかってしまいます。

やがてナンシーは殺人鬼フレディと対決する決意を固めます。

寝て、夢の中に入り、殺人鬼フレディと戦うことになります。果たしてナンシーちゃんの運命やいかに。

パパの採点。100点満点中90点。

ホラー映画の歴史の中でも重要な作品です。

殺人鬼フレディって、殺すことももちろん目的なんだろうけど、怖がらせる・苦しめることを楽しむドSな奴でございまして、その設定そのものがめっちゃええ感じのキャラになったようですね。

ちなみにこの作品、「燃えよドラゴン」の白人カラテマン、ジョン・サクソンさまがご出演。さらにさらに、今をときめくジョニー・デップさまがスクリーンデビューを果たした作品でもあります。

この人が出てることぜんぜんしらなかったから、今度見直して探してみようって思っております

。

## エルム街の悪夢 2・フレディの復讐

---

1985年アメリカ映画

監督 ジャック・ショルダー

主演 マーク・パットン、キム・マイヤーズ、ロバート・ラスラー、ロバート・イングランド

夢に現れる怪人で殺人鬼のフレディ・クルーガーがおお暴れするシリーズ第二弾でございます。今回ひどい目にあうのは男の子。マーク・パットンさまでございます。

悲しいかな、ぜんぜん知りません。

っていうか、このころのホラー映画って、本当にどうでもいい系のキャスティングしてましたですね。

若干ネームバリューのあったジェイミー・リー・カーティスさまを起用した「ハロウィン」なんかはむしろ少数派でございます、ほとんどの作品が「お前誰やねん」みたいな若手俳優ばかり起用しておりました。

そんな中で勝ち組役者さんを見つけるのが楽しかったりして。

「13金」の第一作ではケヴィン・ベーコンさまが出ていましたし、エルム街の第一作にはジョニー・デップさまが出てたし。

まあ最近のホラー映画は、勢いのある若手の登竜門みたいになってたりしますよね。

SFだけど、「パラサイト」なんかにはジョシュ・ハートネットさまとかイライジャ・ウッドさまなんかが出てましたし、「ラストサマー」とか「スクリーム」なんかは「次代を担う若手総出演」みたいなノリだったですし。

で、こんなことを書きましたら、本作の主演俳優マーク・パットン君はどないやねんって思われるでしょうが。

うむむ。普通やん、って感じ。以上。

主人公のパットンさま、夜な夜な鉄の爪を持つ男に襲われる夢を見ます。

なんでこんな夢ばかり見るんやろって考えていたわけですが、そんな謎を解き明かしてくれたのが、物置の奥から出てきた日記。

どうやらその日記はパットンさまが今の家に引っ越してくる前に住んでいた若い娘が書いたものらしい。

娘の名前は「ナンシー」。おお、つながった。

パットンさま、前作の主人公ナンシー＝ランゲンキャンプさまが住んでいた家に引っ越してきちゃったわけですな。

前の事件のときみたいに、よくないことが起こるんじゃないかと心配するパットンさまですが、まわりの誰もそんな話を信じないわけです。

ある日、部活のコーチに飲み屋に出入りしているところを見つかってしまいまして、シゴキモードに入ったコーチに学校に連れて行かれるわけですが、おお、ここでフレディ登場。

コーチを惨殺し、あろうことかパットンさまの身体に同化してしまうわけですな。

フレディにとりつかれてしまったパットンさま、彼はいったいどうなるのでございましょうか。  
パパの採点。100点満点中75点。

悪の殺人鬼キャラが主人公に同化してしまうという衝撃のおもしろい展開の一作。

当然、フレディがパットンさまに同化してからは、彼の恋人マイヤーズさまがフレディ＝パットンさまと戦うことになります。

やっぱりフレディ君と戦うのは女性でないとあかんのかなあ。

## エルム街の悪夢 3 ・ 惨劇の館

---

1987年アメリカ映画

監督 チャック・ラッセル

主演 ヘザー・ランゲンキャンプ、ロバート・イングランド、パトリア・アークエット

フレディ君大活躍の「エルム街」シリーズの第三作。

この「エルム街」シリーズですが、実は「エイリアン」シリーズみたいに、後に有名になる監督さんたちがメガホンをとっておられたりします。

第一作のウエス・クレイブン監督はミスター「エルム街」みたいな評価をされていたりしますが、他にも「ヒドゥン」「レネゲイズ」のジャック・ショルダーさま、「マスク」「イレイザー」のチャック・ラッセルさま、で、第四作目はなんとレニー・ハーリン監督なんかが登場したりします。

そういった意味ではけっこうあなどれないシリーズでございます。

毎晩毎晩、夢の中に殺人鬼フレディが登場して悩まされている少女アークエットさま。

ついに彼女は精神的に参ってしまいまして、病院に入ることになってしまいます。

その病院には彼女と同じように、フレディの悪夢に悩まされている子供たちがいっぱいいたわけですね。

病院の先生たちは子供たちの言うことを信用しない。

ただ一人の医者だけが子供たちの言うことを信じておりました。

そんな状況のなかに一人の心理学研修生がやってきます。名前はナンシー。

おお、第一話でフレディと対決したランゲンキャンプさまではありませんか。

この展開、けっこうびっくりしてしまいました。

やがて続発する患者たちの死亡事件。

その原因が何かを探るため、医師は一連の事件の元凶ともいべき殺人犯、フレディ・クルーガーの遺体のもとへと向かいます。

一方研修生のランゲンキャンプさまは、子供たちをフレディの魔手から救うべく、再び彼と対決する決意を固めるわけです。

戦いかたはね、もう慣れたもんでございまして。

「夢の中」の「フレディの館」へと向かうのであります。

けっこう巧い構成ですね。

現実の世界でフレディの封印をはかる医師と、夢の世界でフレディを封印しようとするナンシー。

これがけっこうスリリングな展開になりまして、けっこう楽しませてくれました。

パパの採点。100点満点中80点。

第一作は別格としまして、第二作よりもけっこう内容がこなれてまして、けっこう楽しめました。

やっぱりクライマックスの「夢」と「現実」の同時進行がポイントだったのかもしれませんがね。

ちなみのこの作品では、殺人鬼フレディ君の出生の秘密が明らかになったりします。



「エルム街の悪夢」シリーズの第四弾。

今では巨匠のグループに入れられてもいいレニー・ハーリン監督の作品。

ハーリン監督は、このあと「ダイハード2」（圧倒的に面白かったシリーズ第二作ですわな）、  
「クリフハンガー」（この映画も面白かったですね。とにかくジョン・リスゴーがめっちゃよかったです）、  
「ロング・キス・グッドナイト」（うむむ。この映画もよかったですよね）「ディー・ブルー」（いぐわあああ。この映画も好きやなあ）などの作品を撮りまして、アクション映画の第一人者として認知されることになります。

そんなハーリン監督の初期の作品でございます。

第一作から第三作までご紹介してまいりましたが...いろんな意味でシリーズの転換期にあたる作品でございます。

これまでの三作のヒーロー・ヒロインってね、相手が夢の中でしか現れない怪人だもんで、どうしても受身にまわらざるを得なくて、どうしてもあらゆる事態を主導するのって、殺人鬼フレディだったりするわけです。

今回の作品の最大の仕掛けは、フレディと対することのできる「超能力少女」の存在でございますな。

「13金」でも、シリーズ中盤で「ジェyson君」に対抗し得る能力をもった少女ってことで「超能力少女」ってのがでてきましたが、今回のこの設定も、それに少し似ているような気がします。

前作で生き残った少女（女優さんはパトリシア・アークエットさまからチューズデイ・ナイトさまに変わっております）。

彼女の夢にまたフレディが登場しはじめます。

で、例によってフレディのスーパー能力で、彼女のまわりの若者たちが一人また一人と命を落とすしていくわけです。

そしてついに少女チューズデイ・ナイトさまもまたフレディの犠牲になってしまいます。

で、彼女の友人が超能力少女だったわけです。

超能力少女アリス＝リサ・ウィルコックスさまは、殺された友人たちのために、夢の中の殺人鬼フレディと対決することになるわけでございます。

謎の殺人鬼に対する超能力少女って、けっこう発想としてはいけてるって思います。

13金シリーズも、超能力少女が登場する第七作あたりで新しい世界にむけてキレた印象がありましたです。

そういう意味ではこのシリーズもここでキレちゃたのかもしれない。

パパの採点。100点満点中80点。

さすがの貫禄で作品を仕上げたハーリン監督に10点献上でございます。

シリーズはこのあと、さらにややこしい方向に進んでまいります。

## エルム街の悪夢5 ザ・ドリーム・チャイルド

---

1989年アメリカ映画

監督 スティーブン・ホプキンス

主演 ロバート・イングランド、リサ・ウィルコックス

夢の中の殺人鬼って、設定としてはおいしいですなあ。

どれだけ滅ぼされても、普通に生き返っていい世界ですし。

かのドラキュラ伯爵にしても、復活するにはけっこう大変な思いされてましたでしょ。

13金のジェイソン君にしても、電気浴びたり落雷直撃されたりと、かなりしんどい思いをして復活しておりました。

そこへいくとエルム街のフレディ君は、まあ夢の中限定なんだけど、けっこう簡単によみがえっておまして。

得な設定です。

そんなフレディ君ですが、やっぱりこの人も「生身の身体」を手に入れたかったみたい。

今回フレディ君は、前作で彼を倒した少女、アリス＝ウィルコックスさまの体内に宿った赤ちゃんの夢に寄生して、再び現実の世界に生まれようとしております。

しかしそこは夢をコントロールすることのできる「ドリームマスター」アリスちゃん。

彼女はいちはやくフレディの策略に気づき、赤ちゃんを助けるために再びフレディと対決することになります。

今回はクライマックスでとんでもない助っ人が登場。

なんとフレディ君のおかあちゃんの霊が登場します。

そらフレディ君にもおかあちゃんはおるわけで。

フレディママはけっこう良識派で、アリスに味方したりするわけです。

ここらが13金のジェイソンママとちょっと違うところでしょうかね。

ジェイソンママはけっこうジェイソン君のことを偏愛してまして、結局「殺人鬼ジェイソン」を生むことになっちゃたわけだし。

まあそういう話は置いておきまして。

果たしてアリス&フレディママの連合軍とフレディの大バトルの結末やいかに。

パパの採点。100点満点中60点。

うむむ。フレディ君、もう一度この世界に復活しようって気持ちはわかるんですが、なんで「ドリームマスター」アリスの赤ちゃんの夢に寄生したのかがイマイチよくわかりません。

そのへんの詳しい説明とかあったような記憶もあるんですが、「なんでアリスの赤ちゃんなん？」って理由、忘れてしまいましたです。

彼女の赤ちゃんでさえなければ、ひょっとしたらまた復活できたかもしれないのに。

やっぱりちょっとマヌケなフレディ君でございました。

## エルム街の悪夢 ザ・ファイナル・ナイトメア

---

1991年アメリカ映画

監督 レイチェル・タラウェイ

主演 ロバート・イングランド、リサ・ゼーン、ヤフェット・コッター、ジョニー・デップ、アリス・クーパー

「エルム街の悪夢」シリーズの一応の最終作品でございます。

このあと、「エルム街の悪夢 ザ・リアルナイトメア」って作品と、「フレディVSジェイソン」って作品がありますが、内容的にはどちらも番外編みたいな内容。

あと2010年のリメイク版もあります。

とりあえずキャストिंग見てびっくりですわな。

シリーズ第一作でスクリーンデビューを果たした「今をときめく」ジョニー・デップさまが、「シザーハンズ」の主演を経て再び登場。

とはいっても特別出演なんですが。

こんなケースあるんですね。残念ながらこの映画を見たときは（もちろん第一作見たときも）ジョニー・デップさまのこと、あまり知らなかったですから、もう一回チェックしなおさないといけないかなって思ったりします。

あとフレディの義父役で出演しているのが、「エイティーン」「ビリオン・ダラー・ベイビーズ」「レースとウイスキー」「ポイズン」など、多数のヒット曲をもつカリスマ「アル中」ロックシンガーのアリス・クーパーさまでございます。

この人が出てたことも知らなかったです。

このへんがやっぱりビデオで映画を見るようになった弊害でしょうかね。

映画館に見に行っ、パンフレットとか見たら、映画見る前にそのへんのことわかっちゃうから、確実に覚えているところなんです。

ロック好きな私としてはケビン・コスナーさまの「ボディガード」にスパンダー・バレエのゲイリー・ケンプさまが出てたこともチェックしてたし、「ヤングガン2」にジョン・ボン・ジョビさまが出てたこともわかってましたし。

でもねえ、よく考えたらよっぽどじゃない限り、ビデオレンタルするときに出演者とかチェックしないもんなあ。

うかつでした。

見直してジョニー・デップさまとアリス・クーパーさまの出演シーン、チェックしなきゃいけませんね。

この作品はこれまでとはちょっと別の世界の話。

ここまでの登場人物とか、設定とかとは直接つながっていない作品です。

施設で少年の更生を手伝ったりしている少女ゼーンさまが主人公。

彼女は「絶対に眠らない」という少年と知り合います。

話を聞いてみると、少年は夢の中で殺人鬼フレディを見たというわけですね。

で、実はゼーンさまもその夢を見ていたりするわけです。

彼女は夢の秘密を解き明かすために、少年が見た夢の場所に向かいます。

それが実はフレディ君の罠。

フレディ君、現実の世界に復活するために、夢と現実が交錯した幻の町をつくり、その町を足がかりにして復活しようとしていたわけでございます。

果たしてゼーンちゃんはフレディの悪夢を断ち切ることができるのでしょうか。

パパの採点。100点満点中75点。

この作品、夢と現実の境界みたいな世界がテーマになっておりまして、映画「エルム街の悪夢」に主演した俳優ロバート・イングランドさまならフレディの悪夢を止める方法を知ってるんじゃないか、みたいな場面がありまして、俳優ロバート・イングランドさまが「そんなん知らんがな」みたいなことを言う場面があったりしました。

それはそれでとっても面白いシーンでした。

## グレートハンティング

---

1975年イタリア映画

監督 アントニオ・クリマーティ

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

とんでもない残酷描写の連続で話題になったドキュメンタリー作品。

めっちゃくちゃ話題になったのは、作品が始まってから30分程度のところで描かれる衝撃のシーン。

ライオンが人間を襲うってえ前代未聞のシーンでございます。

そのシーンがあるってだけでみんなこの映画を見にいきましたですねえ。

しかしライオンが人を襲うって場面以上に衝撃的だったのが、作品クライマックスの人間狩りのシーンでございます。

「ライオンが人を襲う」シーンと「人間狩り」のシーンが作品の二本柱になっております。

で、この映画を見た人たちの興味はやっぱりこの二つのシーンの真偽に集中するようでございます。

当時の映画雑誌の批評によると、前者は露出過多、後者は露出不足。

うむむ。どうなんやろって感じですが。

問題の「ライオンが人を襲う」シーンは、自然公園の動物保護区かどっかで、サファリカーを降りてライオンを撮影していた観光客が、背後から襲われてしまうって場面。その一部始終を近くのサファリカーに乗っていた別の観光客が撮影していたって話ですが。

他人がライオンに襲われて食べられている様子をずっと撮影し続けるなんて状況、普通ありえないわけだし、複数の人間（襲われた人が乗っていたサファリカーに乗車していた人と、撮影者が乗っていたサファリカーの人）の誰一人一切のアクションを起こしていないってのがちょっと信じられないですよ。

しかも撮影しているカメラは露出過多だし。

その割りにはアングルめっちゃ安定してるし。

カット割りとかしてるし。

ってことで、私的にはこのシーンはヤラセ。

「人間狩り」のほうは、アフリカかどっかの奥地の原住民の集落に入り込んだ旅行者が原住民に襲われて殺されたってんで、その復讐のために、武装したハンターたちが原住民を追いまわして殺して頭の皮を剥いで、ペニス切り落としてってシーン。

これもねえ。

一番えげつない所が巧妙にカメラアングルから外れてるんですが。

意図的でしょうね。

やっぱりヤラセっぽいですね。

もしこれが現実の話だったら、逆に、もっとこれみよがしに原住民を殺すシーンとかが撮影され

ているはずでございまして。

よくあるドキュメンタリーの公開処刑のシーンみたいに。

なんかカメラのオフの位置で銃が撃たれたり、カメラから見えないところでごちゃごちゃやってみてなあ。

んで露出不足だし。

私的にはこれもヤラセ。

そらそうやろ。

この2シーンは、本来の監督のドキュメンタリーには収録されておらず、あとから追加編集されたシーンなんだって話もありまして。

ほなら本来の「グレートハンティング」の見せ場ってなんなん？って話になりますが。

結局ね、本来のこの作品の主題は、動物も人間と同じように「狩り」って行動によって命を紡いでおりまして、その連鎖によって生きているんだって内容の、まあどっちかといえば「生命讃歌」だったんじゃないかと思います。

出産のために川を上る鮭を熊が捕って食べるシーンだとか、ヘビが猿を捕らえて食べるシーン、人間がコウモリをブーメランで捕るシーン。

そうかと思うと、豊作を祈願して大地に穴を掘ってその穴に精液を流し込むアフリカ原住民の風習を描いていたり。

ここらの組み立てを考えると、これってただの残酷ドキュメントではなく、やっぱり「命の連鎖」を描きたかったドキュメンタリーなんじゃないかと。

ラストの狼と人間の交流の映像が何よりもそれを強く伝えるメッセージなんじゃないかなと、私は思いますです。

パパの採点。100点満点中60点です。

## がんばれベアーズ

---

1976年アメリカ映画

監督 マイケル・リッチー

主演 ウォルター・マッソー、テイタム・オニール、ヴィック・モロー

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

といってもこのへんの作品は第一作だけ見て、二作目からは全然見ていない作品ばかりのご紹介になります。

けっこうヒットしました少年野球映画でございます。

元野球の名選手で、今は掃除人みたいな仕事で生計を立てているのがマッソーさま。

彼は政治家のえらいさんに、自分の息子が所属するチームのコーチを頼まれます。

このチームの名前がベアーズ。

そもそもこの政治家の息子ってのがえらいヘタなわけですね。

まあその子だけではなくて、普通のチームから「あまりの下手さゆえに」入団を断られた子供たちが集まるような、どうしようもないチームだったわけでありませう。

もうねえ、あまりにもひどい状況で、マッソーさま、すっかりやる気をなくしてしまうわけですね。

当然チームは連戦連敗街道ひた走り。あまりのていたらくにチームのボスである政治家さんはチームの解散を決意します。

しかしこれに反発したのが他ならぬマッソーさま。

別れた奥さんに育てられていた娘＝オニールさまだとか、不良少年だけど実は天才スラッガー、みたいな少年とかを連れてきたりして、チームの建て直しをはかるわけですね。

オニールちゃんは子供のころから野球を叩き込まれ、12歳でとんでもない変化球を投げたりする少女なんですね。

不思議なもんでね、めっちゃ巧い選手が二人くらい入っただけで、少年野球のチームってびっくりするくらい生まれ変わったりします。

で、強くなっていけば不思議と試合経験が積まれていって、そうなるとうるさい子も場慣れしていったんだんと巧くなっていくもんなんですね。

まあ少年野球のチームが強くなっていくってそんなもんだから、不思議でも何でもないんだけど。

しかし、そうなるとうるさい子って勝ちに固執した作戦だとか、勝ちにこだわった采配や選手起用するようになるんで、そこらあたりからチームには不協和音が流れはじめるわけですね。

選手みんなの気持ちはバラバラ。さあさどうするどうなるって感じでございます。

パパの採点。100点満点中70点です。

ありがちなんだけど、けっこうよくできたお話に仕上がっております。

テイタム・オニールさまがめっちゃいいですね。

めっちゃかわいいし。この人、今はどうされておられるんでしょうか。そういえばお父さんのライアン・オニールさまも最近名前聞かないですね。  
芸能活動とかしているのでしょうか。



## ベンジー

---

1974年アメリカ映画

監督 ジョー・キャンプ

主演 シンシア・スミス、アレン・フューザット、パッツィ・ギャレット

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

やっぱりこの作品も第一作だけ見て、二作目からは見ておりません。

名犬もののファミリーもの。どっちかというのを避けて通りたい世界でございます。ぶっちゃけ。でもここらへんで強引にご紹介しておきませんと、恐らくコラム連載終了してもとりあげそうにないような作品ですので。

ベンジーってのは、主人公（っていうんでしょうか）の犬の名前です。「ラッシー」みたいな感じ。

この第一作「ベンジー」が空前の大ヒットを記録しまして、例によってシリーズ化されます。第二作は77年の「ベンジーの愛」、第三作は80年の「名探偵ベンジー」、で、第四作が87年の「がんばれがんばれベンジー」。

ね、だんだんどうでもよくなってきますやろ？

私的にもねえ、このシリーズ、第一作をどうにかこうにかみるのが精一杯でございました。

いかにもショボい野良犬ベンジー。

ベンジーと友達になったのが幼い兄妹でございます。

お約束で、子供たちは親に「この犬飼ってよお〜」とか言うわけですが、やはりこれもお約束で、却下されるわけです。

トホホの兄妹ですが、ここで事態が急転。

なんとその二人が誘拐されてしまうわけです。

野良犬のベンジーくん、二人をなんとか助けようとしてがんばるわけですね。当然見ている手に汗にぎる。

ベンジーが兄妹の両親に必死で伝えようとするのがやっぱり全然伝わらなかつたり。

何してんねん、早く気づけよ、みたいにイライラしたり。

で、最後は結局ベンジークンの活躍で二人は無事助かって、そのごほうびにベンジー君は晴れてこのファミリーの一員となるのでした。

めでたしめでたし。

ええがな。めでたしめでたしで。

ちょっとねえ。こういうファミリーものの、いかにも話ができすぎている系の映画ってやっぱり苦手やなあ。

そういう意味でディズニー映画ってすごく苦手なんですね。

ハラハラするし、その割にはあまりにもできすぎたラストが待っているわけだし。

この映画なんかもそんな感じ。

クライマックスからラストがけっこうできすぎてまして、「へえ、そうなん、よかったやん」って感じになってしまいます。

ファミリー映画ってそのへんが減点対象になっちゃうんですね。

悪い映画じゃないんですが、ちょっと趣味ではないです～

パパの採点。100点満点中65点です。

ベンジーくんですが、作品では野良犬って設定ですが、実際には血統書つきの由緒正しい名犬らしいです。

種類までは覚えておりませんが。

そらそうやろなあ。

そんな名犬をこ汚い感じに仕上げてしまうんだから、犬担当のメイクさんも大変なんだなあって思ってしまいます。

## 荒野の1ドル銀貨

---

1966年イタリア・フランス合作

監督 カルヴィン・J・パジェット

主演 モンゴメリー・ウッド（ジュリアーノ・ジェンマ）、ピエール・クレソワ。

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

っていうか。

確かに「続・荒野の1ドル銀貨」って映画、あるにはあるんですが、それって別に続編とかじゃなくてですねえ、主演男優が同じってだけです。

全く別の作品に「続・なんちゃら」ってタイトル平気でついたりしましてなあ。

「夕陽のガンマン」と「続・夕陽のガンマン」は、主演・監督・音楽は同じですが、物語上の直接のつながりはないです（「夕陽のガンマン」で良い人キャラだったリー・バン・クリーフさまが、「続・夕陽のガンマン」では悪役を演じ、めっちゃショックを覚えた記憶があります）し、「荒野の用心棒」に至っては主演俳優からして違います（「荒野の用心棒」はもちろんクリント・イーストウッドさま、「続・荒野の用心棒」はフランコ・ネロさまでございます）

そんななんでもありのマカロニ・ウエスタンでございますんで、まあなんでもありです。

えっとね、弟を探して西部の町にたどりついた主人公のジェンマさま。

腕を見込まれて町の顔役の用心棒になります。で、仕事として顔役の敵を片づけるように依頼されるわけですが、その相手こそ探していた弟だったわけで。

で、弟、顔役の手下に撃ち殺されてしまい、ジェンマさまも弟に撃たれてしまっておりまして。

終わった終わった、二人とも死んだ、と思って立ち去る悪漢。

しかしジェンマさまは死んでいなかったわけですね。

弾丸はたまたまジェンマさまがポケットに入れていた1ドル銀貨に命中し、そこで弾丸が止まってジェンマさまは一命をとりとめます。

顔役一味への復讐を「弾丸で穴のあいた1ドル銀貨」に誓うわけでございます。

記憶によると、この映画を見たのって小学校の高学年だったと思います。

当時はなんとなくジュリアーノ・ジェンマさま旋風が吹き荒れておりまして。

ジェンマさま主演の現代劇が何本か続けてロードショーされておりました。

バイクのコマーシャルに起用されたり、紳士服のイメージモデルに選ばれたり。

で、気がついたらぜんぜん見なくなって、また気がついたらダリオ・アルジェント監督のサスペンスホラーに出ておられました。

この人もちょっと数奇な運命たどっておられますよね。

パパの採点。100点満点中75点です。

撃たれたはずなのに、ポケットのコインに当たって命拾いしたって設定、いまだにときどき使われたりしますよね。

最近ではシガーケースだとかに変わったりしていますが。

ある意味「ご都合主義」の象徴のようなこの設定の元祖はこの作品でございます。  
しかし、そういう「幸運」がこのドラマのテーマみたいな感じになっておりますので、主題としてひっばるならそれはそれでええかなって感じでございますな。

## 動く標的

---

1966年アメリカ映画

監督 ジャック・スマイト

主演 ポール・ニューマン、ローレン・バコール、ジャネット・リー、ロバート・ワグナー

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

ポール・ニューマンさま主演のルー・ハーパーシリーズの第一作。

第二作はこの映画の公開から十年ちかくたってから、「新・動く標的」ってタイトルで映画化されました。

第二作のほうは、主演のポール・ニューマンと、彼が演じるキャラが同じってだけで、別に同じ事件を描いているとか前の事件の続きとかではありませんです。

ちなみに第一作の原作はやっぱり「動く標的」、第二作のほうは「魔のプール」。

私がこの映画「動く標的」を見たのは小学校高学年、テレビの洋画劇場でだったと思います。

途中、ちょいと怪しい金持ちまるだしのいけすかない奴、ロバート・ワグナーさまがのんびり泳いでいるプールに、探偵ハーパー＝ニューマンさまが訪ねていくシーンがありまして、そのシーンが妙に印象に残っているせいか、第一作と第二作、どちらの原作が「魔のプール」だったかいつともわからなくなります。

ちなみにちなみに、「新・動く標的」では探偵ハーパーさんは文字通り「魔のプール」で溺れ死にそうになる場面がございます。

さて「動く標的」。

めっちゃ有名な小説の映画化なんで、あまりくくだ書かなくてもみなさんおわかりでしょうが。

ってごまかそうとしてもバレますわな。

なんせ小学校時代に見た映画だから細かいところまで覚えてないんですな。実は。

確かお金持ちの人の失踪事件の調査を依頼されたハーパーが、事件を解決していく様子を描いた作品だったってえ記憶があります。

とにかく主人公はタフネスの探偵であるハードボイルドですんで、殴り合いとかはあってもドンパチはあんまりないです。

それがまた大人っぽい感じがして好きだったですね。

ポール・ニューマンさまも、おそらくこの時期が一番かっこよくて輝いていた頃ではないでしょうか。

「新・動く標的」くらいの年代の作品になると、大物になりすぎてしまって、守りに入ったっぽい感じになっていたのがちょっと気になったかな。

この時代はまだイケイケでしたね。

第二弾の製作、もう少し早めてもらっていたらもっといいシリーズになったかもしれませんが。

パパの採点。100点満点中80点です。

ロス・マクドナルドさまの原作小説では、この物語の主人公の名前はリュー・アーチャーだったんですが、主演のポール・ニューマンさまの強い要望で主人公名が変更されたってのは有名な話でございます。

## 地中海殺人事件

---

1982年イギリス映画

監督 ガイ・ハミルトン

主演 ピーター・ユスチノフ、ダイアナ・リグ、ロディ・マクドウォール、マギー・スミス

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

ピーター・ユスチノフ主演によるポアロシリーズの第二弾。

いうまでもなく第一弾は「ナイル殺人事件」でございます。

「ナイル殺人事件」の前の「オリエント急行殺人事件」とこの二作の関係がちょっとわからないんですが。

クリスティの作品ってね、まあルール違反寸前の、空前のトリックが楽しい作品が多くてですねえ。

「アクロイド殺し」「オリエント急行殺人事件」「そして誰もいなくなった」「検察側の証人」「カーテン」「ABC殺人事件」あたりがその代表格でしょうか。

「オリエント急行殺人事件」は、原作を読む前に映画で見まして、それこそ映画館のイスからころげ落ちるくらいにその結末に驚かされましたし、「そして誰もいなくなった」にしても「アクロイド殺し」にしても、読んでいる本をバツタと落とし、ってくらいに衝撃的な犯人設定でございましたです。

「カーテン」なんか読み終わったあと、だまされた悔しさに眠れなかった記憶があります。

そんな強烈なクリスティ作品ですが...もうしわけないですが、この作品はちょっと弱かったですね。

トリックもそうだし、それにこの系統の「オールスター推理ドラマ」のメインコンセプトたるオールスターぶりもイマイチ。

「オリエント急行殺人事件」が10としたら、「ナイル殺人事件」が7で、「地中海殺人事件」は5くらい。

「オリエント」が傑作となったのは、いうまでもなく原作のすばらしさと主演級大スターの競演による演技合戦があったからでありましてなあ。

「ナイル」はトリックはけっこうよかったんだけど、「準主演級」ってキャスティングだったのがちょっと減点。

「地中海」はねえ...うむむ。トリックはイマイチ。

「ナイル」より意外性がなかったなあ。

キャスティングはねえ、残念って感じ。

「ビッグネームの脇役級」俳優さんを集めたって印象しか残らなかったです。

トホホ。

地中海のリゾートホテルに、ある事件の調査のためにおもむいた名探偵ポアロ＝ユスチノフさま。

そこで起こる殺人事件。

で、例によりましてそのホテルの宿泊客全員に動機があって、全員にアリバイがあるわけでございます。

おお。黄金のパターンですなあ。

前作の「ナイル殺人事件」はね、「オリエント」のパターンを逆手にとった構造を強調してまして、いちばんクサイ奴に一番確固たるアリバイがあるってパターン。

明らかに一番クサイ人には犯罪は不可能なんで、犯人は誰なんや、って面白さがあったんですが、今回はそういうひねりもなく、けっこう淡々と終わってしまった感があります。

パパの採点。100点満点中75点です。

実はこの作品、ロードショー当時、映画館で見たんですが、映画のエンドロールがはじまってからも席を立っていいのかわからなかったって思い出があります。

「クリスティ作品がこんなにすんなり終わるはずがない」って感じで。

このあとまたドンデン返しがあるんじゃないかって思ったりして。

会場の明かりがついて、ようやく映画製作者にだまされたことに気づいたっていうか。

そういう意味ではだまされた映画になるんでしょうか。



## ゴーストバスターズ

---

1984年アメリカ映画

監督 アイヴァン・ライトマン

主演 ビル・マーレー、ダン・エイクロイド、シガニー・ウィーバー、ハロルド・ライミス、リック・モラニス

これまでご紹介できなかったシリーズもの。

とにかくめっちゃめっちゃヒットしたSF Xコメディでございます。

ビル・マーレーさまにダン・エイクロイドさまにハロルド・ライミスさま。

けっこう芸達者な三人が揃いまして、それに「綺麗どころ」イメージでシガニー＝リプリー＝ウィーバーさまがご出演。」

これだけのキャストが集まったわけだから面白くなってあたりまえですわな。

マーレーさま・エイクロイドさま・ライミスさまの三人は科学者でございまして、霊とかの超常現象を封じ込める装置の研究とかをしておったわけでございます。

しかしある日、大学から研究の打ち切りを命じられまして、三人さん、路頭に迷うことになっちゃう。

で、彼らのはじめた商売が、幽霊を退治する「ゴーストバスターズ」でございます。

アメリカって幽霊で困っている人、多いんでしょうか。

三人の仕事は大繁盛。

しかししかし、彼らにとって強敵が現れるわけですね。なんとなく三人のマドンナっぽい存在になっていた女性ウィーバーさまの体に悪の魔王がとりついてしまいます。

魔王に立ち向かうゴーストバスターズの面々。

しかし魔王の罠で、ゴーストバスターズのメンバーの一人が想像する「この世で一番怖いもの」が実体化してしまいます。

それこそマシュマロマン。

なんでやねん。

ここらの展開、笑ってしまいました。

マシュマロマンが巨大化してニューヨークの町を怪獣みたいに歩き回るわけですから。

ゴーストバスターズは、悪の化身「マシュマロマン」に戦いを挑むのであります。

ビル・マーレーさまがけっこういいです。

この作品で人気ブレイクして、「三人のゴースト」につながります。

達者な役者さんですよ。この人の芝居、けっこう好きです。

パパの採点。100点満点中85点です。

とりあえず作品よりも、レイ・パーカー・ジュニアさまが歌う主題歌が強烈でしたね。

PVなんかもけっこう楽しい雰囲気仕上げられておられましたし。そういえば、演劇頑張ってたころ、東京に「鳥獣戯画」って劇団がありましてね、そこの劇団は芝居が終わったあと、「映画

音楽メドレー」って出し物をやっておられましてですねえ、「ムーンリバー」とか「スターウォーズ」とか「荒野の七人」とかで劇団のメンバーが踊るわけですね。

で、最後の曲は劇団員全員で「ゴーストバスターズ」を踊るって趣向でした。

懐かしいなあ。

まあ、当時のけっこう有名な劇団が、一番もりあげたいところでとりあげるくらいの名曲だったことですよ。

## ゴーストバスターズ2

---

1989年アメリカ映画

監督 アイヴァン・ライトマン

主演 ビル・マーレー、ダン・エイクロイド、シガニー・ウイバー、ハロルド・ライミス、リック・モラニス

前頁でご紹介しました「ゴースト・バスターズ」の続編でございます。

ビル・マーレーさまにダン・エイクロイドさまにハロルド・ライミスさま。シガニー・ウイバーさまにリック・モラニスさま。

主要キャストはほとんど同じでございます。

相変わらずマーレーさまは渋いし、エイクロイドさまは元気。

ライミスさまは何考えてるかわからんし。

適度にバランスのいい三人ですね。

前作でニューヨークを救った「ゴーストバスターズ」の三人ですが、時がたって、みんなそのことを忘れてしまって...って感じでございます。

そんな折、今度は別の「悪の大魔王」が眠りから目覚めます。

魔王は都会にうごめく人々の憎悪を自らのエネルギーに変え、力を強大なものにしていくわけです。

もうこうなるとゴーストバスターズが出動するしかないわけでございます。

もう大騒ぎ。

クライマックスでは、あっと驚く展開。

自由の女神、動くう、みたいなあ。

なんでやねんってつつこみたくなるようなハチャメチャな展開でございます。

とにかく手ごわい大魔王。果たしてゴーストバスターズの三人は悪の大魔王を倒すことができるのでしょうか。

作品的に非の打ち所のなかった前作を超えるのって、やはりかなり難しいわけで、ここはやっぱり攻めかた変えるべきだったんじゃないかと思います。

あまりにも作品構造が第一作のままでしたので、見ていて集中力が続かなかった感が否めません。

パパの採点。100点満点中70点です。

ちょっと厳しいですね。うんうん。

しかしこれが作品評価として正直なところでございます。

前作が面白かった分、第二弾のハードルは高くなるわけでございます。

監督のメンバーもほとんど同じなわけですから、第二弾前作よりも格段に面白くなっても同程度の評価しかされないわけです。

そういう意味ではそもそも評価するのが気の毒な条件です。

だったら「エイリアン」シリーズみたいに作品の切り口を変えるか、「バックトゥザフューチャー」みたいに第一作を徹底的にいじりまくるか。

割り切ってどちらかの手法をとってればもう少し高い評価を受ける作品になったかもしれない。

芸達者をそろえていただけに、ちょっと残念でございます。

## ジョーズ

---

1975年アメリカ映画

監督 スティーブン・スピルバーグ

主演 ロイ・シャイダー、リチャード・ドレイファス、ロバート・ショウ

かのスティーブン・スピルバーグ監督のアーリーな時期の傑作でございます。

で、かの「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン」の大人気アトラクションの元ネタでもあります。

原作はピーター・ベンチュリーさまのベストセラー小説。

映画公開前後、この小説のハードカバー版がめっちゃ書店に並んでいたことを思い出します。

あまりにも有名な作品なんで、あらすじとか別にいいかな、とか思ったりしましたが、やっぱり書いておかないと気持ちわるいんで書きますね。

えっと。アミティって港町が舞台。

港町＋海水浴場。

観光客がとにかく集まる町です。

この町の海水浴場で、巨大なホオジロザメに襲われた人の遺体が発見されるわけですな。

えらいこっちゃってんで、町の猟師たちは総出で海に出て、サメ退治をします。

で、サメがつかまってめでたしめでたし。これで海開きができるわい。

町の警察署長シャイダーさまひと安心。

ところが、捕まったサメは人を襲ったサメじゃないと主張する海洋学者・ドレイファスさまが現れます。

海水浴客からの収入が不可欠な市長は署長シャイダーさま・ドレイファスさまの意見を無視して海開きを強行。

その海水浴場にサメが出現し、またまた犠牲者がでてしまいます。

サメ退治に名乗りをあげたのは、サメ専門の漁をしている漁師ショウさまでございます。

ごっつい報酬を要求されますが、シャイダーさまはショウさまに仕事を頼むことにするわけですな。

シャイダーさま・ドレイファスさまの二人は、ショウさまと同行して、サメ退治を手伝うことになります。

しかし、彼らの追うサメってのが、もうケタ外れにとんでもないバケモノだったわけでございます。

百戦錬磨のサメ漁師・ショウさまの想像をはるかに越えたパワーをもった巨大人食いザメだったわけでございます。

果たして三人の運命やいかに。

前半はパニック映画。後半は海洋アクションサスペンス。

なかなかよくできた構造のドラマです。

主演の三人、それぞれにめっちゃいい味だしていて、すごく好きな作品でございます。

パパの採点。100点満点中70点です。

漁師役のロバート・ショウって大好きだったんです。

この映画までは悪役とか脇役とかが多かったですが、この作品以降は主役を演じるようになって、ちょっとうれしかったんですが...この映画の三年後、主役スターになって間もなく亡くなってしまいました。

もうちょっとこの人の主演作品見たかったんですが。

## 逃亡者

---

1993年アメリカ映画

監督 アンドリュー・デイヴィス

主演 ハリソン・フォード、トミー・リー・ジョーンズ、ジュリアン・ムーア

この映画の元ネタはテレビシリーズでございます。

主演はデビッド・ジャンセンさまでございます。

放送は1960年代で、なんかすごい視聴率をとっていた番組だったようですね。

デビッド・ジャンセンさまっていいますと、70年代に主演していました「ザ・マジシャン」ってシリーズドラマの印象しかありませんが。

っていうか、このころって私が海外ドラマ見始めたころでね。

「刑事コロンボ」からはじまって、「警部マックロード」、「刑事コジャック」、「女刑事ペパー」に「FBI」、「ニューヨーク大捜査線」に「サイボーグ大作戦」。

そんな感じで、デビッド・ジャンセンさまがドラマ版「逃亡者」に主演していたってのは知ってましたし、それをハリソン・フォードさま主演で映画化されるって聞きまして、すごく楽しみにしていたんですが。

なんかねえ。ちょっとねえ。

この題材も、二時間の尺の中では描ききるのは難しかったのかもしれないね。

妻殺しの濡れ衣をきせられ、殺人犯となってしまった医師キンブル＝フォードさま。

護送車両が事故を起こしたすきに彼は脱走し、必死に逃亡を続けながら「妻殺し」の真犯人、「片腕の男」を探すことになります。

彼を執拗に追うのが刑事ジョーンズさま。

缶コーヒのCMのおかげで、最近めっきりソフトイメージが定着しておりますが。

でもねえ、この人って本当にすごい役者さんだと思いますよ。

マジで。

この映画に関してはね、ハリソン・フォードさまには悪いですが、トミー・リー・ジョーンズさまの印象しか残ってないんですよ。

それくらい存在感のある名演技をしてくれております。

ジョーンズの演技見ているだけでお腹いっぱいになる、なかなかの名作。面白いですよん。

パパの採点。100点満点中80点です。

この「妻殺しの罪で捕まった医師が脱走し、逃亡しながら真犯人を探す」ってパターンのドラマ、日本でも連続ドラマ化されました。

えっとねえ、フォードさま主演の映画版ファンの方には申し訳ないんですが、時間をかけて登場人物とかの描き込みができるわけですから、ぶっちゃけ映画より日本版のドラマのほうが面白かったです。

ハリソン・フォードさまファンの方、ごめんなさいね。

ちなみに日本版は主演が江口洋介さまでございました。刑事は木村美紀さま。  
あと加藤浩次さまがめっちゃ名演技してました。



## サイレント・ムービー

---

1977年アメリカ映画

監督 メル・ブルックス

主演 メル・ブルックス、マーティ・フェルドマン、ドム・デレイーズ、バート・レイノルズ、ジェームス・カーン、ポール・ニューマン、アン・バンクロフト、マルセル・マルソー

メル・ブルックス監督の私的評価って、ちょっと微妙でございます。

めちゃくちゃ面白いわけでもないし、面白くないって一刀両断するみたいな感じでもない。

どの作品も、可もなく、不可もなくって感じですね。

とりあげる題材はみんな好きなんです。

注目をあびた「ヤング・フランケンシュタイン」にしても、この作品にしても、描こうとする世界はすごく好みピッタリの世界です。

しかし...いまいち気持ちがスイングしない映画に仕上がってしまうのはどういうことなんでしょう。

とくにこの「サイレント・ムービー」のコンセプトなんて、大好きなんだけどなあ。

映画監督のブルックスさま、もひとつヒット作に恵まれないでいます。

そこでブルックスさまは考えた。こんな時代だからこそ、誰も撮ろうとしない無声映画「サイレント・ムービー」を撮ろう。

しかし、インパクトのある出演者が欲しい。

ブルックスさま、大人気スターたちにアポなしで出演交渉を致します。

バート・レイノルズさま、ジェームス・カーンさま。

ここらのスターは体当たりで出演交渉するブルックスさまらの熱意に負けて出演承諾って感じ。

フランスに国際電話をかけ、パントマイムの第一人者マルセル・マルソーさまに出演交渉。

パントマイムを演じながら電話に出たマルソーさま、出演依頼をうけて一言「ノン」。

ノンって言うわりには出演してるし。

ちなみにこの映画の中で声を発するのはこの天才パントマイム役者・マルソーさまだけ。

ここらの構成は洒落てて大好きでございます。

何気なく通りかかったゴーカート場で、足を骨折してリハビリ中（のわりにはゴーカートを乗り回している）ポール・ニューマンさまを発見、出演交渉するべくカーチェイスならぬゴーカートチェイス。

チェイスが終わったあとのニューマンさま、「君たちサイレント・ムービー撮るらしいね、面白そうだから僕にも出演させてくれないかな」って感じで、自ら出演志願。

願ってもない話で、映画製作は進んでいくのでありました、ってお話。

ゲスト出演の大スターたち、それぞれ別の場面で出演交渉を受けるわけで、このスターたちが一同に会するシーンとかはありません。

ちょっと残念ですがね。

パパの採点。100点満点中80点です。

大女優イメージのアン・バンクロフトさま、実はメル・ブルックス監督の奥さんだったんですね

。

知らなかった。内助の功というんでしょうか。これだけ露出してたら「内助」とは言わないかな

。

## 新サイコ

---

1978年アメリカ映画

監督 メル・ブルックス

主演 メル・ブルックス、マデリン・カーン、クロリス・リーチマン

ヒッチコック作品全般をパロディとして撮っておられます。

「めまい」あたりが中心ネタになっておりまして、他にも「北北西に進路をとれ」だとか「鳥」だとかを思い出させる、「どっかで見たシーン」が炸裂でございます。

ヒッチコック作品の多くの主人公がそうであったように、「なぜか」いろんな事件に「巻き込まれる」「高所恐怖症」の「精神病院の施設長」。

設定としてはできすぎておりますなあ。

タイトルは「新サイコ」であります、むしろ「サイコ」ネタは控えめ。

っていうか、原題が「HIGH ANXIETY」ですから、中心となるネタは「めまい」です。

しかし「サイコ」ネタも「北北西に進路をとれ」みたいな感じでブルックスが「巻き込まれ」ていくネタも、もちろん「鳥」ネタも大好きでございます。

この映画を見たころって、そんなにヒッチコック作品見ていなかった時期だったと思います。今見直したら、ヒッチコック映画を見ている絶対量が当時とは全然違うから、もっと楽しめるんじゃないかなって思ったりして。

パパの採点。100点満点中80点です。

この作品はね、とにかくタイトルにだまされてしまいました。

この映画を見た当時って、この映画の元ネタになったヒッチコック作品では「サイコ」と「鳥」くらいしか見ていなかったんですね。

で、「新サイコ」だから「サイコ」さえ見てたらそれだけで楽しめるだろうなって思って見に行った作品です。

もう一回ちゃんと見たい作品でございます。

## シャレード

---

1963年アメリカ映画

監督 スタンリー・ドーネン

主演 オードリー・ヘップバーン、ケイリー・グラント、ウォルター・マッソー、ジョージ・ケネディ、ジェームス・コバーン

この作品のころのサスペンス映画って、なぜだか知らないけどヒッチコック監督作品って思い込んでて困ります。

で、調べてみたら全然違う監督だったり。

この作品はスタンリー・ドーネン監督だし、「暗くなるまで待って」はテレンス・ヤング監督だったし。

で、気になって調べてみましたが、ヘップバーンさまはヒッチコック監督とは仕事してなかったみたいですね。

なんかすごく意外です。

この「シャレード」にしても、「暗くなるまで待って」にしても、なんかすごくヒッチコック監督がメガホンとりそうな作品ってイメージがありましたもんで。

あと、ケイリー・グラントさまってすごいヒッチコックイメージですよ。

ジェームス・スチュワートさまとかも。

でもよく考えたらヒッチコック監督って金髪女優さんを使うことが多かったから、ヘップバーンさまはちょっと違ったのかなあ。

夫との離婚を決心していたヘップバーンさま。

彼女は遊びに行ったスキー場で、グラントさまと知り合い、惹かれはじめるわけですね。

で、アパートに帰った彼女を待っていたのは、夫の訃報でございます。

夫は何者かに殺されたらしいってことを聞かされます。

そんな夫の葬儀に、見知らぬ三人の男がおりまして。

ジェームス・コバーンさまにジョージ・ケネディさまにネッド・グラスさま。

なんかめっちゃ渋いけど怪しいキャスティング。

怪しい怪しい。

というのも、彼女は大使館の情報部員にいろいろな情報を聞かされておりましたですね、夫は戦時中に軍の金を隠匿。

で、三人の共犯者たちと、戦後その金を山分けしようと約束していたことを知っていたからでございます。

で、夫はその金をネコババして逃げようとするところを殺されたわけですね。

あからさまな悪人たちを向こうにまわして、ヘップバーンさまピンチ。

そんなときにいきなり現れるグラントさま。ここらあたりはヒッチコックっぽいような気がしますが、三人のならず者たちとグラントさまって、なんだか面識があるような雰囲気。

ひょっとしたら Grant さまも夫殺しの共犯なのかも疑いはじめます。

やがて彼女の目の前にどんどん死体がでてくる。これもまあヒッチコック的なパターンでございます。

いいところにいい役者を配した、けっこう渋くて、いいキャスティングだと思います。

ジェームス・コバーンさまもうちょっとかっこよかったらよかったのに。

パパの採点。100点満点中85点です。

雰囲気たっぷりの主題曲もとにかく有名でございます。

けっこうねえ、「いい映画見たなあ」って思わせてくれるような、懐の深い良い作品やなあって思います。

## 地下室のメロディ

---

1963年フランス映画

監督 アンリ・ヴェルヌイユ

主演 ジャン・ギャバン、アラン・ドロン、ヴィヴィアンヌ・ロマンス、モーリス・ピロー

この映画は、あまりにも印象的なラストシーンが大好きな映画。

フランス映画って、忘れられないラストシーンとか得意ですよ。

「天井桟敷の人々」といい、「禁じられた遊び」といい、「気狂いピエロ」といい...

この映画のラストシーンも強烈。

「太陽がいっぱい」に匹敵するような、すばらしいラストシーンの作品でございます。

刑務所から出所したばかりの老ギャング・ギャバンさま。

彼に足を洗ってカタギになって欲しがっている妻がロマンスさま。

そんな妻の声を無視して、ギャバンさまは新しく作られるカジノの現金強奪計画を練っております。

彼が仲間として目星をつけていたのが、刑務所で知り合ったドロンさまでございます。

綿密な計画を立て、それを実行に移す強盗チーム。

それはそれは、見事な作戦で賭場の現金をいただくことに成功します。

このへんがすごくよくできたサスペンスでしたね。

金を隠して、何くわぬ顔でホテルでのんびりした時間を過ごすギャバンさまとドロンさま。

しかし彼らの計画は、意外なところからほころびはじめ、やがて「映画史上に残るとんでもないラスト」につながります。

このへんの緊迫感って大好きですね。すごくよくできた作品でございます。

って、私ごときが今さら言わなくてもって感じの名作中の名作でございます。

もうとにかくジャン・ギャバンさまが素晴らしい。

若いアラン・ドロンさまなど相手にならないくらいの存在感でございます。

まあこれくらいの時期のアラドロンさまって、けっこう下品なイメージだったんですが。

やっぱりちょっと下品な感じでした。ドロンさまが雰囲気のある、上品な感じを出せるようになるのは、もう少し先の時期になります。

パパの採点。100点満点中85点です。

アラン・ドロンさまとジャン・ギャバンさまは、三度競演しております。

っていうか、三回しか競演してないっていいかたのほうが正しいかもしれません。

この二大スターの最初の競演が「地下室のメロディ」になるわけですね。

ちなみに二作目はこの二人にリノ・バンチェラさまを加えた豪華三大スター競演の「シシリ

アン」、三作目はようやく「主演アラン・ドロンさま、共演ジャン・ギャバンさま」ってクレジットになった「暗黒街のふたり」でございます。

もっと競演してたと思っていたのですが、意外でした。



## マトリックス・レボリューションズ

---

2003年アメリカ映画

監督 アンディ・ウォシャウスキー、ラリー・ウォシャウスキー

主演 キアヌ・リーブス、ローレンス・フィッシュバーン、キャリー・アン・モス

空前の世界観で世界中をあっと言わせた「マトリックス」シリーズの完結編でございます。

本作は文字通り前作の完全な続き。

今回は仮想現実「マトリックス」ではなく、登場人物たちにとっての「リアル」の世界での戦いが中心になります。

だもんで、ぶっちゃけすんげえ暗いムードの中でお話が進みます。

コンピューターが支配する世界での人類とコンピューターの戦いがこのシリーズの共通した物語展開。

これまで「コンピューター世界の中＝マトリックス世界」に意識だけが入り込んだレジスタンスがゲリラ戦（のようなものですね）を仕掛けていました。

しかし今回は「リアル」の世界でのコンピューターの反撃が始まるわけですね。

コンピューターと人間との戦いを終結させることのできる「救世主」リーブスさま。

彼は戦いを止めるために、コンピューターと取引しようとするわけです。

しかしリーブスさまがマトリックス世界で動いている間も、「人間開放グループ」の本拠地にむかって、コンピューター軍の容赦ない攻撃が繰り返されます。

もう、とってもすごい規模。

人間軍は火器を使用して対抗しますが、敵の繰り出す圧倒的な量の「マシン兵器」の前に壊滅寸前の打撃を受けます。

あわやってところでリーブスさまがコンピューターシステムの中心にたどりつき、交渉を始める。

リーブスさまの交渉材料は、「マトリックス」世界でコンピューターシステムの制御を超えて増殖しはじめたプログラム「エージェント・スミス」を制圧することでした...

もうねえ、SF X すぎすぎ。

ようこんな映像作るわって感心してしまいます。ただ、あまりにも暗い作品になってしまいましたね。

うん。

シリーズの流れとしては、やはり完結編たる第三作としては「リアル」の世界での人間とコンピューターの戦いの描写は避けられないわけでごさいます。

となるとどうしても作品は重く、暗くなってしまいます。

第一作の爽快な世界が二作目以降消えてしまったのが残念なところです。

結末もとにかくどんよりって感じ。

もう少し終わり方に工夫があってもよかったんじゃないかなって思っていました。



パパの採点。100点満点中65点。

なんでもこのシリーズ、「マトリックス・リローデッド」と「マトリックス・レボリューションズ」は並行して製作されたようです。

「リローデッド」でキアヌ・リーブスさまの出番が少ないように感じたのは、「レボリューションズ」のほうに撮影日程とられていたからでしょうか。

ローレンス・フィッシュバーンさまは「レボリューションズ」あまり出番なかったような気もするし。

って製作者側の台所事情がほのかに感じられるシリーズでございました。

## パイレーツ・オブ・カリビアン／呪われた海賊

---

2003年アメリカ映画

監督 ゴア・ヴァーヴィンスキー

主演 ジョニー・デップ、オーランド・ブルーム、キーラ・ナイトレイ、ジェフリー・ラッシュ

主人公はジャック・スパロウ＝デップさまって海賊。

なんか伝説の海賊らしいですが、今ではボロ船でひとりで航海する身でございます。

そんなジャックはカリブのある港町で、軍隊に逮捕されてしまいます。

一度は脱走に成功しますが、町の鍛冶屋ブルームさまとチャンバラを演じた末に捕まってしまう。

投獄されているそのとき、別の海賊集団が町を襲撃。

総督の娘ナイトレイさまを拉致して逃げていきます。

娘に思いを寄せていたブルームさま、海賊のデップさまの力を借りるために彼を救出し、二人で海賊を追うことになるわけでございます。

娘を誘拐したこの海賊集団、実は呪いをかけられた金貨を盗んでしまったために「死なない体になり、同時に体のあらゆる感覚（味覚とかそういうものです）を感じなくなった「生きている死体」。

その呪いをとくために自分たちが盗んで世界中にばらまいてしまった「呪われた金貨」を回収しようとしているわけでございます。

癖のある海賊スパロウ＝デップさま。

正義漢のブルームさま。

なんだかんだごちゃごちゃといいながら、ナイトレイさまを救出するためにがんばるわけでございます。

しかし敵は「死なない死体」。けっこう苦戦。

しかしスパロウには秘策があったりするわけございまして。

なかなか巧くオチがついておりまして、けっこう楽しめました。

パパの採点。100点満点中80点。

いまさら言うまでもないでしょうが、この作品世界の元ネタはかのディズニーランドの「カリブの海賊」でございます。

これで思いだすのが「ジュラシック・パーク」でのジェフ・ゴールドブラムさまの台詞。

恐竜を使った安全なテーマパークになる予定だったと嘆くりチャード・アッテンボローさまに向かって、「カリブの海賊は人を殺さないぞ」って言います。

映画を見たころ、関西住みでディズニーランドに行ったことのない私は「は？カリブにいてる海賊って人を殺さないで盗みとかするんや」って思ったりしておりました。

なんか恥ずかしい過去でございます。

## コン・エアー

---

1997年アメリカ映画

監督 サイモン・ウエスト

主演 ニコラス・ケイジ、ジョン・キューザック、ジョン・マルコヴィッチ、スティーブ・ブシューミ、ヴィング・レイムズ

悪くはないんだけど、常になんとか地味な空気が漂う謎の名優、ニコラス・ケイジさま主演のアクション大作。

何といたしますか、空の「ダイハード」って感じでございます。

ニコラス・ケイジさまが主演していたわりには面白かったです。

って書くと、本当にニコラス・ケイジさまに申し訳ないんだけど。だってそんな感じなんだもん。

この人、本当に出演作品に恵まれていないっていうか。

仕事をする監督には恵まれていると思うんですよ。

ブライアン・デパルマ監督とかジョン・ウー監督とかと仕事してるし。

でも、なんとなく監督の「実験作」と当たるタイミングで名匠と組む傾向にあるようでね。

「スネーク・アイズ」なんかはデパルマ監督の趣味で撮ったような作品でしたし、「ウインドトーカーズ」はおよそジョン・ウー監督らしからぬ作品だったし。

「フェイス・オフ」に至っては、ジョン・トラボルタさまがあまりにも素晴らしかったので、かすんでしまったかわいそうな人でございます。

この「コン・エアー」もけっこうそういう感じ。ジョン・マルコヴィッチさまがあまりにも強烈でございまして、長髪のニコラス・ケイジさま、何をやっても地味な感じでございました。

ケイジさまは元軍人。

彼はチンピラにからまれて、そこから喧嘩みたいなことになって相手を殺してしまいます。

殺人罪で刑に服し、長い長い刑期をつとめあげ、仮釈放を許されて囚人専用の輸送機「コン・エアー」に乗ることになります。

しかししかし、その「コン・エアー」の重犯罪者房の囚人が反乱を起こし、飛行機は囚人たちに乗っ取られてしまいます。

囚人ではあるんだけど正義漢のケイジさま、囚人たちの味方のふりをしながらたった一人で警察への情報メッセージを送り続けるわけでございます。

彼のメッセージにいち早く気づいたのが警察側のキューザックさま。

なんかここらへんがめっちゃ「ダイハード」ですよんねえ。果たして「コン・エアー」の運命やいかに。

パパの採点。100点満点中80点。

この作品に関しては素直に楽しめました。って書いたらニコラス・ケイジファンの人って怒ると思うんですが。

でも最近は出演作品もヒットしているようだし、不遇時代のニコラス・ケイジ出演作品って感じでございますね。

でも...なんでこの人、こんなに地味な印象なんですか。いい俳優さんなのに。

## アイ・ロボット

---

2004年アメリカ映画

監督 アレックス・プロヤス

主演 ウィル・スミス、ブリジット・モイナハン、ブルース・グリーンウッド、ジェームズ・クロムウェル

あまりにも有名なアイザック・アシモフの傑作ロボット小説の映画化...ではないんだけど。同タイトルで、同コンセプトで、でも全く別のお話でございます。

作品のベースになっているのは、アシモフさまが考えた「ロボット工学三原則」。

①ロボットは人間に危害を加えてはならない。

②ロボットは①に反しない限り、人間の命令には従わなければならない。

③ロボットは①②に反しない限り、自分の身を守らなければならない。ってやつ。

原作小説は、この三原則に沿って、さまざまなロボットと人間とのふれあいが描かれるわけですね。

ベビーシッターロボットが、人間の子供に母親が子供に抱くような愛情をもつようになるだとか、三原則の指示がロボットの思考回路の中で矛盾してしまって、ロボットがパニックを起こす話だとか。

映画ではそこからさらに進みまして、ロボット製造会社の内部の誰かが、恣意的に「三原則」をねじまげてしまい、それによって「殺人口ロボット」が大量生産されてしまうっていうアブナイ未来社会が描かれています。

ウィル・スミスさまは刑事でございます。

ただし、普通の刑事ではない。

かつての事故で片腕を失い、ロボット工学を駆使した「義手」を装着した刑事でございます。

おお、「サイボーグ大作戦」みたいやあ。

彼はロボットが苦手。っていうより、毛嫌いしております。

そんな彼の義手を製作してくれたロボット工学の権威の教授が、謎の自殺をとげるわけですね。

ウィル・スミスさま、この事件に不自然さを感じまして、いろいろと調査をはじめます。

で、彼が出したのが「ロボットが博士を殺したのではないか」って結論でございます。

彼の上司たちはその話をまともにとりあってくれません。

やがて博士を「殺したかもしれない」ロボットが特定されるわけですが、そのロボットは、まるで人間の容疑者のようにスミスさまに抵抗し、暴れ、逃げ回ります。

スミスさま、拘束されたロボットから事情を聴取するうち、その会社のロボットの量産にかかわっている「誰か」が、三原則を自分たちに都合の良いように書き換えているのではないかと疑いをはじめます。

そして自分たちに都合の良いプログラムをもつロボットを生産しようとしているのではないか、そして殺された博士はその事実をスミスさまに伝えるために、自分が設計したロボットのプログ

ラムの一部をあえて書き換えるという形で残したのではないかと考えはじめます。  
調査が進むうち、大量のロボット兵士に襲われるスミスさま。  
果たして黒幕は誰なのか。やがて巨大な陰謀が明らかになっていくわけでございます。  
パパの採点。100点満点中90点。  
めっちゃくちゃよくできた作品でございます。とにかく感心・感動のしっぱなし。  
子供のときに読んだ「われはロボット」から、こんなすごい映画ができたんだあって思うと、け  
っこう胸いっぱいになってしまいました。  
「われはロボット」って、けっこう私の少年時代の大事な一冊だったもんで。  
ちょっと採点甘くなってしまうかもしれません。

## ジョーズ2

---

1978年アメリカ映画

監督 ヤノット・シュワルツ

主演 ロイ・シャイダー、ロレイン・ゲイリー、マーレー・ハミルトン

再び中途半端にしかご紹介できていなかったシリーズもののご紹介。

大ヒットした海洋パニックサスペンス映画の続編でございます。

前作はロバート・ショウさま、リチャード・ドレイファスさま、ロイ・シャイダーさまの三枚看板で存分に楽しませてくれましたが、今回はロイ・シャイダーさまがピンでがんばっておられます。

アミティの町を襲った「人食い鮫ショック」から三年。

観光客を呼び寄せるためのでっかいホテルなんぞが建てられまして、町はますます観光依存の状況となってまいります。

そんな中で、またまた若者の行方不明事件が発生します。

前作のころにも増して観光客に来てもらわなければならなくなっているアミティの町。

しかしながら「人食いざめ」の恐怖はブロディ署長＝シャイダーさまの心に重くのしかかっておりまして。

今回、前作以上にシャイダーさまにとって頭が痛いのは、遊びざかりの息子の存在だったりするわけですね。

前作のころはけっこう小さかったんですが、三年たちまして、ごんた〜プチ冒険する年齢になってきております。

町が海開きしたから遊びにいきたくてしかたないわけですね。

でも父親はめっちゃ厳しくビーチに出ることを禁止したりします。

しかたないからビーチには行かずにヨットハーバーで船遊びしようとか、そんなやんちゃ坊主さんです。

で、とてもうまくできているこのシリーズ、サメ君はしっかりビーチじゃなくヨットハーバーのほうに向かったりするわけですね。

うおおおお。

シャイダージュニア、ピンチでございます。

さてさてどうなりますやら。

パパの採点。100点満点中80点。

とかく辛く採点されがちな続編ではございますが、この作品に関してはけっこうよくできております。

ロイ・シャイダーさまがサメと対峙する動機が、職務とか正義感がメインだった前作と比べまして、今回は「息子の命を救いたい」ってあたりに変わっている点がすごくいい感じでございます。

クライマックスのサメとの対決もすごくよくできております。

とにかくこの作品、シャイダーさまの名演技につきると思いますですね。



## ジョーズ3-D

---

1983年アメリカ映画

監督 ジョー・アルベス

主演 デニス・クエイド、ベス・アームストロング、ルイス・ゴセット・Jr

中途半端にしかご紹介できていなかったシリーズもの。

「ジョーズ」シリーズの第三弾。

えっと。ぶっちゃけていいっすか？

第一弾は傑作でございまして、第二作もロイ・シャイダーさまのがんばりでなんとか「良い続編」のレベルをキープしておりましたこのシリーズですが、第三作にして急に失速。

って感じ。

うむむ。しかたないですか。

名優ロイ・シャイダーさまが「ジョーズ2」で降板でございまして、どうしてもパワーダウンは避けられません。

でも、今回はそのパワーダウンに必死で抵抗しようとする努力がかなり見えておりましたなあ。

そのへんの努力の健気さについ甘い評価してしまいそうになってしまいます。

健気な努力の象徴は、3D映像の導入でございまして。

っていうか、ひょっとしたら「ジョーズ3」の企画が先にあったんじゃなくて、3Dの映画を作ろうって話が先あって、それにあった題材って何だろうって考えた結論がジョーズの第三弾だったって流れもあったかもしれませんが。

まあええか。

とりあえず、3Dとかの企画先行だったって可能性もありますわな。

あからさまに「飛び出す映像」向けのシーンとかが出てきたりするし。

えっと。

今回の舞台はこれまでと同じフロリダ。

海上公園が作られておまして、その施設の目玉が「水中ステーション」みたいな感じの「海底水族館」でございまして。

イメージ的には「ディープ・ブルー」の研究所みたいな施設ですわな。

っていうか、「ディープ・ブルー」がこの作品の設定をアレンジしたのかもしれませんが。

で、予想通り、この海底公園の海域に人食いザメが出没するわけでございます。

当然3Dで製作されておりますもんで、画面からサメ、飛び出す。

水しぶき、飛ぶ、みたいな。

水しぶきとか、絶対にかかることなんかないってわかっているんですが、それでもつい首とかをすくめてしまいます。

けっこう面白く見てしまいました。

でもそれって3Dの面白さであって、作品そのものの面白さではないのであって。

ちょっと微妙な位置にある作品には違いありません。

パパの採点。100点満点中65点。

3D作品の撮影技術って、進みましたよね。びっくりしてしまいます。

ちなみに私が生まれて初めて見た3D映画は、確か「人造人間キカイダー」の映画版だったと思います。

当時は青と赤のセロファンのメガネかけて映画みるような3Dでした。

今はグレーのメガネかけますよね。

ユニバーサルスタジオのアトラクションみたいに。

技術の進歩ってすごいなあって思います。

しかし、作品そのものの評価は残念ながらかなり低め。しかたないですかね。

## 愛と喝采の日々

---

1977年アメリカ映画

監督 ハーバート・ロス

主演 シャーリー・マックレーン、アン・バンクロフト、ミハイル・バリシニコフ、トム・スケリット

え〜っと。映画感想文集、いよいよ大詰め。

とりあげたい作品とか、かなり少なくなってまいりましたので、ここまでのコラムでご紹介できていない作品をアイウエオ順にご紹介します。

もちろん見た映画ばかりですじゃ。

今日は「愛と喝采の日々」のご紹介でございます。

この映画はねえ、劇団してるころ、すごくダンスに興味があった時期に、ミハイル・バリシニコフさまが出演しているってだけの理由で見ました。

記憶によりますと、亡命して「アメリカン・バレエ・シアター」に入団してトップダンサーになって、初の映画出演がこの作品だったんじゃないでしょうか。

バリシニコフさまのダンスが見られるってだけで、大興奮でございました。

でもバリシニコフさまは主役じゃないっす。

主役はシャーリー・マックレーンさまとアン・バンクロフトさま。

この二人は、かつてアメリカン・バレエ・シアターで頑張っていた親友同士って設定。

しかしマックレーンさまはバレエ団のダンサー・スケリットさまと恋におちて妊娠し、バレエをやめてしまっています。

当時マックレーンさまと親友だったバンクロフトさまは、マックレーンさまに「女性の幸せを選ぶべきだ」ってアドバイスをしたりしまして。

で、その結果マックレーンさまは引退したわけですね。

で、バンクロフトさまはマックレーンさまにかわって舞台上で主役を演じ、プリマの座を手に入れたって経緯があったりします。

複雑でしょ。

そんなマックレーンさまが暮らす町に、アメリカン・バレエ・シアターがやってきます。

マックレーンさまの引退の直接の原因となった「彼女の娘」は、すっかり大きくなって、やっぱりバレエをやっていたりします。

で、やっぱりアメリカン・バレエ・シアターに入団したいって思っていたりするわけです。

念願かなって娘はバレエ団に入団。母親として、マックレーンさまは嬉しくも寂しい、複雑な気持ちを抱くことになるわけですね。

彼女の不安通り、娘は若い団員バリシニコフさまにあこがれて、失恋して、それをバンクロフトさまが慰めて。

マックレーンさまにしてみれば、バンクロフトさまと娘との距離がどんどん近づき、自分と娘と

の距離はどんどん離れていく。

そして彼女の思いが爆発する瞬間が近づいてきまして...

パパの採点。100点満点中75点。

バリシニコフさまのダンスがすばらしいのは言うまでもないですが、マックレーンさまもバンク  
ロフトさまもすばらしかったです。

クライマックスシーンは、めっちゃ感動させていただきました。

うん。

マックレーンさまもバンクロフトさまも、やはり必死に生きてきたんですよ。

いいの悪いのって関係ないんです。

自分が選んだ人生なんだし。

それを卑下することも寂しいと思うこともないんですよ。

ってめっちゃいいメッセージを受け取ることができました。ちょっと元気になれる作品でございます。

## 赤ちゃんよ永遠に

---

1971年アメリカ映画

監督 マイケル・キャンパス

主演 オリバー・リード、ジュラルディン・チャップリン

アイウエオ順の作品紹介。

えっと。1971年当時って、高度成長社会の時代でした。

今の「核家族化」「少子高齢化」みたいな未来が予測できておりませんでした。

そらそうでしょう。

1971年の映画ってことは、遅くとも1969年から1970年に企画されて脚本が書かれた作品ですからね。

この時期は日本でも高度成長が続いておりまして、大阪万博が開かれたのがこの年。

そしてその周辺で、「未来につながる新しい居住の形」たるニュータウンってものが生まれてきたのがこの時期です。

ニュータウンって居住の形がけっこう危ういものだったってことは、今の「ニュータウン」の状況を考えていただければおわかりいただけると思います。

結局ね、人口がどんどん増えつづけて、自分の終の棲家ってものを用意しなきゃ、住むところもなくなってしまうぞお、って考えがちょっとずれていたんだってことになります。

加えて、ニュータウンの建物も、そして居住者自身も、「老いていく」んだってことがよく理解されていなかった。

このへんの発想のズレが、今、「老いてゆくニュータウン問題」になっている芽だったんだと思います。

まあバブル問題もあったんだけど。

ま、いいか。

この作品の未来は、そういった、ちょっと予測がずれちゃった「可能性の未来」を描いております。

人口が爆発的に増加してしまい、社会は産児制限を行うわけですね。

出産禁止令がひかれるわけです。

どうしても子供が欲しい夫婦は役所まで来なさいって感じで。

で、行ってみたら赤ちゃんの人形が渡されるわけです。

この人形抱いて我慢しなさいって感じで。

もう、ここらあたりの描写ってめっちゃ強烈でした。

主人公のリードさまとチャップリンさまは、それでも赤ちゃんが欲しい。

で、赤ちゃんを産むことができる場所と、その方法を模索するわけでございます。

ここらあたりの苦悩は、「代理出産」なんかで苦しんでいる人々のことを思いださせますね。

どうしても子供が欲しいんだけど、日本の中にはその方法を実現するだけの法整備がされていな

くて、しかたなく外国に行くとか。

これってそんな現代を予測してたのかなあ。だとしたら逆にすごい予測ですが。

パパの採点。100点満点中70点。

もうねえ、どうしようもないくらい、暗くて地味な気持ちになってしまう作品でございます。

この作品に関してはねえ、もう一回見るチャンスもらえたとしても、あまり見たいとは思わない作品ですね。

## 悪魔の受胎

---

1980年アメリカ映画

監督 ノーマン・J・ウォーレン

主演 ロビン・クラーク、ジェニファー・アシュレイ、ステファニー・ビーチャム

アイウエオ順の作品紹介。

この作品タイトルの「悪魔」ってのはサタンだとかベルゼブブとかの「悪魔」ではありません。

「悪魔のいけにえ」みたいなアブナイ人間を「悪魔」に例えているわけでもありません。

ここでいう「悪魔」ってのは宇宙生物のこと。

作品的にはほとんど「エイリアン」みたいなスペースモンスタームービーです。

「エイリアン」のご紹介のときで「人間の生殖のルールとエイリアンの生殖のルールが違ったらどうなるだろう」って作品紹介がありまして、かなりエロティックな作品を想像したって話を書いたと思いますが、「エイリアン」よりもずっとその作品紹介に近い作品がこれであり、「スピーシーズ」であると思います。

ただね、エイリアンの生殖と人間の生殖シーンが描かれるわけですから、ぶっちゃけどちらの作品もめっちゃダークな気分になりました。

地球からけっこう離れたある惑星で、ある調査が行われております。

その調査チームがえらい目にあうわけです。

まず洞窟を調査していたクルーが原因不明の爆発で犠牲になります。

その爆発事故から生還した男、いきなり暴れだしたりしまして、同僚を殺し、仲間に射殺されます。

この男がいきなりおかしくなった理由を調査しないといけないってんで、調査隊は再度洞窟に入ることとなりますが、そこでまたまた惨劇。

男性の科学者が殺され、女性のクルーはエイリアンにレイプ（なんでしょうなあ）されてしまいます。

で、母胎となった女性クルーはバンバン仲間を殺してまわります。

えらいこっちゃ。残されたメンバーはその「レイプされた隊員」と戦うこととなりますが、やっぱり映画のタイトルが「悪魔の受胎」だもんで、やっぱりごっついグロいエイリアンベイビーが誕生するわけでございます。

果たして乗組員たちは無事地球に帰還することができるのでしょうか。

パパの採点。100点満点中60点。

うむむ。あんまり得意な分野の作品ではありません。

エイリアンとの交配ってねえ、ちょっとエロティックな感じがするかもしれませんが、どうせだったら「スピーシーズ」とか「スペースバンパイヤ」みたいな人間型の、しかもきれいなねーちゃんのエイリアンに出てきてもらわないと、嫌悪感しか残りまへん。

そういう意味ではかなりの勢いで失敗している作品であると思います。





## 悪魔の毒々モンスター

---

1984年アメリカ映画

監督 マイケル・ハーツ

主演 アンドリュー・マランダ、ミCHEル・コーエン、マーク・トーグル

アイウエオ順の作品紹介。

映画製作会社「トロマ」の名前を一躍メジャーにした作品。

ではあるんですが、私ってこの作品あんまり好きではありません。

なんでなんだろうって考えるんですが。ホラー好きなのにこの映画は苦手。

あんまりホラーっぽくないからでしょうか。でも内容はけっこうドロドログチャグチャでございます。

主人公は、みんなのいじめられっ子君であります。

もう、本当にいじめられっ子。

妥協なきダメ男というか。

私っていじめたりとかいじめられたりとかあんまりない人でしたが、そんな私でさえいじめたりはしないものの、あんまり仲良くなりたいとは思わないタイプ。

しかもこの作品の主人公ってね、ただいじめられるかわいそうなキャラじゃない。

なんかいじめられながら、姑息なプチ復讐みたいなことする子。

で、いじめっ子にそれを感じかれて、もっとひどい目にあわされる、みたいな。

で、主人公君は有害物質の工場廃液の中に落とされ、その物質の影響でめっちゃ醜いモンスターになってしまうわけです。

で、そのモンスターは町にはびこる悪を退治する、正義のヒーローとして活躍することになるのです。

って書けばええ話系のヒーローものが撮れそうな題材ですが。

そんなにいい話に感じないのは、やっぱりヒーローたる「毒々モンスター」がグロいってことと、モンスターが悪人を退治するそのやっつけかたがまたまたグロいから。

そんなにグロいやっつけかたせんでもええがな、ってやっつけかたしてくれちゃいます。

ええ話ぶっとびですわ。

パパの採点。100点満点中50点。

やりようによってはもっと面白くなったろうに、なんでこんなにダークな気持ちでヒーローもの見なきゃいけないんでしょうか、って不条理な印象しか残らなかった残念な作品でございます。しかしこの作品の大ヒットで、トロマ社はけっこうメジャーな映画会社になったみたいだし、この映画はシリーズ化されてしまったりしまして。

「俺が映画を見る感覚っておかしいのかなあ」って悩んだりもした作品。

でもねえ、本当に申し訳ないんですが、私的には全然面白くなかったです。

なんか残念な作品でございます。



## 悪魔の墓場

---

1974年スペイン・イタリア合作

監督 ホルヘ・グロウ

主演 レイモンド・ラブロック、アーサー・ケネディ、クリスティーヌ・ガルボ

アイウエオ順の作品紹介。

えっと。マカロニウェスタンの時代から、常になんでもありのイタリア映画でございましたが、この作品は「ゾンビ」のまるまるコピーでございます。

っていうか、「ゾンビ」の製作はこの映画のあとですので、厳密にいうと「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」のコピーですが。

しかし、残酷描写とか、ところどころに見られるドロドログチャグチャ描写なんかは、数年後の「ゾンビ」を彷彿とさせる感じ。

ってことは「ゾンビ」がこの映画をパクったんでしょうか。

イタリア・スペイン合作なのに、この作品の舞台はイギリスの田舎町でございます。

ちょっとわけわかりませんが。

主人公のラブロックさま、殺人犯として疑われております。

なんだかんだしているうちに、ラブロックさまの疑いは晴れるわけですが、意外な犯人が明らかになるわけですね。

というか、犯人が誰なのかってことは映画のタイトル見ればわかるわけで。

犯人ってのは言うまでもなく、墓場から蘇った死体だったわけでございます。

こちらへの展開は、元ネタの「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」のまんまって感じでございます。

「ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド」の場合は、死体が蘇った原因ってのは「宇宙から降り注いだ謎の宇宙光線」だったわけですが、この作品では何と「害虫駆除のための超音波」が死体を蘇らせてしまったってえわけのわからん話でございます。

こちらの展開がねえ。

ちゃんと考えているようでもうひとつ物語の中でこなれておりませんでしたです。

まあねえ、死体が蘇って歩きまわるって展開を正当化させるためにめっちゃ苦労しておられるようですな。

ご苦労さまって感じです。

パパの採点。100点満点中65点。

主演のレイモンド・ラブロックさまって、むかしはけっこう名前の通った二枚目俳優だったような記憶があるんですが。

記憶違いかなあ。

あちこち資料調べてみましたが、過去の出演作品とか探しきれなかったです。

まあラブロックさまはいいとして、やっぱりイタリア映画ですなあ。

ってかスペインとの合作ですが、この「いただけるものは何でもいただきませ」的ながめつさは、やはりイタリアの香りを感じます。

恐るべしマカロニホラー、って賛辞を贈らせていただきます。

## アダムス・ファミリー

---

1991年アメリカ映画

監督 バリー・ソネンフェルド

主演 アンジェリカ・ヒューストン、ラウル・ジュリア、クリストファー・ロイド

アイウエオ順の作品紹介。

えっと。五十音順で作品紹介とかしておりましたら、どうしても「悪魔の...」とか「死霊の...」とか「地獄の...」とかのところでホラー作品が集中してしまいます。

コラム書いていて地味な気分になってしまって困ります。

「13金」とか「エルム街」とかのメジャー（まあねえ、メジャーっていう言い方もおかしいんだけど）もののホラーはけっこうよく覚えているからスラスラ書けるんですが、今回ご紹介したようなマイナーなホラー映画ってけっこう作品を評する切り口がみつかりにくかったりして、書きにくい。

で「悪魔の...」ってタイトルの作品が一段落してホッとしておりましたら、次は「アダムス・ファミリー」じゃないですか。

これはこれでちょっと書きにくいネタでございます。

そもそも「アダムス・ファミリー」ってのは「アダムスのお化け一家」とかいうタイトルのアメリカンアニメの実写映画化でございます。

なんだかおぼろげに記憶があったりします。

アニメ版はお父さんがはっきり吸血鬼キャラだったような記憶があるんですが。

化け物じみている、っていうよりはっきり化け物のアダムス一家。

絵に描いたような（原作はアニメだから本当に「絵に描いたような」なんだけど）化け物屋敷の豪邸に住んでおります。

そんなアダムス・ファミリーのもつ財産を狙って、悪徳弁護士がやってまいりまして、あの手この手を使ってくるわけでございます。

当然そのオマヌケ弁護士ってのはアダムス・ファミリーが化け物ファミリーだってことは知らないでやってきておるわけで、財産を奪おうとする涙ぐましい作業の中で、だんだんこの弁護士、えらい目にあっていくわけです。

パパの採点。100点満点中75点。

アンジェリカ・ヒューストンさまとかクリストファー・ロイドさまとか、とにかく癖があって、それでいて巧い役者さんを配しての映画化。

作品の大ヒットの理由ってのは、やっぱりここらのキャスティングの勝利ではないかと思えます。

物語そのものはむちゃくちゃ面白いとは感じなかったです。

ところどころのギャグもちょっとわかりにくかったし。

化け物のおかあちゃんがいきなり「バナナボート」を歌いだすってシーンがありましたが、若い

人なんてそもそも「バナナボート」なんて知らないと思うしい。

ここらのネタは、わが国ではすべるべくしてすべったって印象があります。残念～

## アトランティス

---

1991年フランス映画

監督 リュック・ベッソン

アイウエオ順の作品紹介。

私、学生時代から、仲良しさんの誕生日とかにはジュエリーとか服とかをプレゼントするって発想がなかったんですよ。

学生時代は芝居とかしてましたもんで、劇団仲間には戯曲とかプレゼントしてたし、バイト仲間にはCDとかをプレゼントする人でした。

ただ、プレゼントするCDはめっちゃ厳選しましたが。

そんな私が、一時期、そこそこ仲良かったお友達にあげたバースデープレゼントがこの作品のDVDでございます。

何度でも見られるし、そこそこ雰囲気あるし。

この作品をなんとなく流しながら、部屋を暗くしてワインなんか飲んでみてごらんないな。

もうめっちゃリッチな雰囲気に浸ることができます。

ストーリーとかはね、ないです。

海洋ドキュメンタリーフィルムやし。

泳ぐ魚だとか、ペンギンだとか、ラッコだとか、ウミヘビだとかが、海を泳ぐ様子を描きます。

もうねえ、めっちゃええ感じ。

ほああんって感じで見るのがこの作品の楽しみ方ではないかと思います。

圧巻はクライマックス。マリア・カラスの歌声にのせて、巨大なイトマキエイ（マンタとかマンタレイとかいうほうがわかりやすいでしょうか）が回遊する様子が描かれます。

本当、一回でいいから生マンタ見たいですね。

昔、スイミングの会社に勤めていたころ、ダイビングとかちょこっとやってましてね。

会社の高級フィットネスクラブの会員さん向けに、「マンタを見るツアー」ってのがありまして。

私は残念ながらそのツアーに参加することはできなかったんですが。

見た人によると、もう生マンタって、感動的だったそうです。

ただ、そのツアーに参加できた人みんながマンタを見れたわけではなくってですね、ポイントに着くまでに船酔いして潜れなかった人とか、潜ったんだけど海況が悪くて、よく見られなかった人とか、まあいろいろあったみたい。

そんな話聞いたらね、生マンタ見たかったなあって、本当に思いますね。

バブル時代、もう一回来ないでしょうかねえ。

パパの採点。100点満点中90点。

とにかく映像が美しい。そしてそれをもりあげる音楽も素晴らしい。

編集も美しい。

それらのいくつかの条件が重なりあって、この作品を傑作にしております。

昔のドキュメンタリー映画みたいに、変にナレーションを入れたり、説明くさい構成にできなかったところがいいですね。

イメージフィルムっぽい構成に徹したあたりがこの作品をむしろ趣き深いものにしております。



## アパートの鍵貸します

---

1960年アメリカ映画

監督 ビリー・ワイルダー

主演 ジャック・レモン、シャーリー・マクレーン、フレッド・マクマレー

アイウエオ順の作品紹介。

日本で「サラリーマン映画」っていいますと、やっぱり植木 等さまの一連の作品だと思うわけですが、アメリカ版の「サラリーマン映画」ってなると、ジャック・レモンさまの「アパートの鍵貸します」だとか「努力しないで出世する方法」だとかのコメディ作品になるんじゃないでしょうか。

ジャック・レモンさまはサラリーマン。

まあねえ、アメリカ映画ですから、サラリーマンっていっても優雅です。

生活なんて、平社員のものじゃなくて、係長課長クラス的生活レベル。

まあ「こんな生活無理～」ってつい思わせてしまうのは日本のトレンドドラマも同じなんです。

そんなサラリーマンのレモンさま、上司の浮気場所として自分のアパートの部屋を提供するわけですね。

で、その見返りとして出世をしようと。

まあいやらしいサラリーマンでございます。

そんなレモンさまにもいいなあって思う相手があります。

この相手がマクレーンさま。

でも実際にデートするとかはいつているわけじゃなくて、まあ「思いを寄せている」って感じでしょうか。

で、ある日、上司が自分の部屋に連れ込んだお相手がマクレーンさまだったりします。

おお、せつない展開でございますね。

しかしそれはそれ。名人ビリー・ワイルダー監督のメガホンでございますから。

あまり切なさに重点がいかないよう、適度にライトに適度にほろ苦く適度に笑える、実に巧みな作品に仕上がっております。

やっぱり巧みなあって感心してしまう作品に仕上がっています。参りました。

パパの採点。100点満点中75点。

ジャック・レモンさまも上手いですよね。

「おかしな二人」で競演したウォルター・マッソーさまとともに、この二人はアメリカンサラリーマンコメディの代表格みたいな感じで語られておりました。

私がリアルタイムで映画を見始めたころには二人ともすでにコメディ映画にはほとんど出演されなくなっておりました。

レモンさまは「チャイナ・シンドローム」、マッソーさまは「サブウェイ・パニック」みたいな

渋い作品に出演するようになっておりましたですね。

二人が徐々に顔を合わせたコメディ「フロントページ」は残念ながら未見。

この作品もいつかは見ておかないといけないなあって思っております。

## 荒鷲の要塞

---

1968年アメリカ・イギリス合作

監督 ブライアン・G・ハットン

主演 リチャード・バートン、クリント・イーストウッド、メアリー・ユア

アイウエオ順の作品紹介。

「ナバロンの要塞」「ナバロンの嵐」などのベストセラー小説を連発したアステア・マクリーンさま原作・脚本による戦争サスペンス映画。

この人の原作ってねえ、戦争を描いていながらただの戦争映画じゃないところがいいですね。

「ナバロンの要塞」にしても「ナバロンの嵐」にしても、ほとんどスパイアクションのノリでございました。

「ナバロンの要塞」なんかはアンソニー・クインさまが味方か二重スパイか、みたいなのところもありましたし。

この作品もそういう仕掛け満載のすっごい面白い作品に仕上がっております。

第二次世界大戦中、アメリカの将校がドイツ軍に捕らえられてしまいます。

その将校は「荒鷲の要塞」と呼ばれる軍事要塞に移送されるわけですね。

リチャード・バートンさまが指揮する英国情報部の精鋭と、クリント・イーストウッドさまらアメリカ特殊部隊の混成チームがその将校を救出に向かうわけでございます。

しかししかし、どうもこの救出チームの動きの情報がドイツ軍に漏れているようなんですね。

要塞に潜入するスパイと打ち合わせしていたら、敵軍の急襲を受けそうになったりしまして。

どうやら救出チームの中に敵のスパイがいるんじゃないかって雰囲気になります。

で、私なんかはなぜか不可思議な行動の多いリチャード・バートンさまあたりが怪しいんとちゃうのん、とか思ってしまうわけです。

果たしてどうなんでございましょうか。

ええ感じに戦争映画とスパイ映画とサスペンス映画と、さらに推理映画がブレンドされております。

クライマックスではアッと驚く仕掛けがわかったりして。

でもこれを書いてしまうわけにはいかないわけで。

とにかく見てくださって感じの一本。

アステア・マクリーンさま原作の映画って本当に面白いですね。

パパの採点。100点満点中75点。

私がこの映画を見たのは小学校高学年のころ。

しかし、めっちゃ面白かったことだけは覚えております。

確かテレビの洋画劇場でした。

淀川さまとか水野さまとか荻さまとかが解説をされておられたころです。

懐かしいなあ。しかしクリント・イーストウッドさまなんか若かったですね。

私は「ダーティ・ハリー 2」をロードショー館で見た世代ですから、この作品なんかは私が本格的に映画を見始めるよりかなり以前の作品になります。

でも、映画っていいですね。

いつまでたっても若いころの映像が残るわけだから。

私も映画に出ておくべきだったかなあ。

って、役者当時は選択の余地とかなかったけど。

## アラン・ドロンのゾロ

---

1974年イタリア・フランス合作

監督 ドウチオ・テッサリ

主演 アラン・ドロンのゾロ、スタンリー・ベイカー、オッタビア・ピッコロ

アイウエオ順の作品紹介。

この映画の公開当時、アラン・ドロンさまっていいますと、ほんま人気絶頂でございました。

「ロードショー」誌で映画俳優人気投票ってのがありまして、アラン・ドロンさまは常に二位。ちなみに一位はその時点で故人だったブルース・リーさま。

三位がロバート・レッドフォードさまとジェームス・ディーンさまの争いだったような記憶があります。

このころのアラン・ドロンさまの主演作品ってえと、軒並み大ヒットでございました。

「高校教師」、「スコルピオ」、「個人生活」、「愛人関係」、「ボルサリーノ2」、「フリック・ストーリー」などなど。

そんなヒットメーカーのアラン・ドロンさまの、出演50作目の作品として公開されたのがこの「アラン・ドロンのゾロ」でございます。

公開当時のパンフレットに、当然のごとくドロンのこれまでの出演作品がすべて書かれておりましたが、残念ながらその50本の中には未完成作品も日本未公開作品もありましてですなあ。

ですから厳密に言いますと、完成した作品での出演五十作目は、「フリック・ストーリー」あたりで、日本公開50作目は「ル・ジタン」のころの作品になるはずですよ。

そういう事情でございまして、ちょっと「看板に偽りあり」って感じの作品でございました。ストーリーはいいでしょうかね。

ゾロっていいますと、古くはダグラス・フェアバンクスさまやタイロン・パワーさま、近年ではアントニオ・バンデラスさまあたりの主演で何度も映画化されてきたネタでございましてね。

どこからともなく現れて、悪いやつらをこらしめて、剣でZのマークを刻んでいずこかに去る、黒覆面の騎士ゾロの活躍を描く冒険活劇。

主人公が弱っちい二枚目貴族で、じつはすごい剣の達人なんだよって設定はほとんどのゾロ映画に共通した設定だと思うのですが。

とくにこの作品は、タイロン・パワーさま版のチャンバラに対抗すべく、クライマックスの決闘シーンにめっちゃ力が入っております。

かなりがんばっているチャンバラシーン。

それだけでもけっこう価値があると思いますよ。是非ご覧いただきたいと思います。

パパの採点。100点満点中75点。

とはいえ、アラン・ドロンさまクラスの二枚目俳優が、本当に吹き替えなしでクライマックスのチャンバラを演じたかということ、それはそれで疑問符がついたりして。

本当に吹き替えなしでとんでもないアクションを演じる役者ってことになると、やはりブル

ース・リーさま、すこし時代があとになってジャッキー・チェンさま、さらにあとになってトム・クルーズさまとかマット・デイモンさまあたりの命知らず役者バカ（これっていい意味ですよ。バカ役者って意味じゃありませんのでお間違いなく）の登場を待たねばならないって雰囲気です。

## ある愛の詩

---

1970年アメリカ映画

監督 アーサー・ヒラー

主演 ライアン・オニール、アリ・マッグロウ、レイ・ミランド、トミー・リー・ジョーンズ

アイウエオ順の作品紹介。

ほんま、「出たあ〜」って感じの一本。

何がどこに出たんやって感じですが。

恋愛映画の最高峰に燦然と輝く、純愛映画の頂点でございます。

もうこれぐらいでいいでしょうか。

あのねえ、こういった系統の作品って、ほんまに苦手でございます。

原題は「ラブ・ストーリー」。もうねえ、それだけで石投げてやりたくなります。

主人公のオニールさまはミランドさまの息子でございますして、けっこう大きな会社の御曹司。

マッグロウさまは苦学生なわけですね。

そんな二人が大学で恋におちてですなあ、で、愛し合って結婚する。

貧しくも幸せな毎日。

しかししかし、マッグロウさまの身体は、白血病に冒されていたのであります。

いぐわああああああ。

もうええでしょうか。

ほんま、なんか愛し合う二人の背中に火をつけてあげたくなるような恋愛エピソード。

そこから悲しみの別れ。

そして男、世界の中心で愛を叫ぶ。ちゃうか。

えっと。

どっちかというと、この作品が「病気がらみ悲恋もの」の元祖っぽい雰囲気です。

ってことはね、百恵ちゃんの「赤いシリーズ」とか「セカチュー」とか、あと「僕カノ」とか「ワタケシ」とか、このへんの作品も元をたどればこの作品に行き着くんじゃなかなって思います

。

だって「ラブ・ストーリー」だもんよ。タイトルからして。

フランシス・レイ大先生の、「もうどうにでもして〜」って感じのわかりやすいテーマ曲も、それはそれでいい感じ。

日本語歌詞だけはつけていただきたくない名曲です。

この主題歌を日本語で歌われたひにゃあ、もう、暴れそうになります。

それよりもびっくりしたのは、この作品ってトミー・リー・ジョーンズさまのデビュー作だったんですよね。

知らなかった。どこに出てたんでしょう。

チェックしたいんだけど、この映画もう一回見るの、カナわんなあ〜

パパの採点。100点満点中75点。

おまけのウンチク。えっと、恋愛映画の名言ともなっている、この映画の「愛とは決して後悔しないということ」ってセリフですが、直訳すると「愛とはソーリーと決していわないということ」って意味です。

日本人って、「ごめんなさい」とかあまり言わない人種なんですけど、アメリカの人って、すごく自然に「ソーリー」とか言います。

で、そんな自然な言葉「ソーリー」も使わないのが「愛」なんだよって解釈すればいいんだってことで。

このセリフは映画の中で二回出てきまして、オニールさまがマッグロウさまに対して言った「ソーリー」って言葉にマッグロウさまがいうのが一回目。

二回目は、マッグロウさまを失ったオニールさまに対して、二人の結婚を許さなかったミランドさまが言った「ソーリー」にオニールさまが返す言葉です。

「愛とは決して後悔しないということ」ってセリフ、名訳なんだけど、ちょっと意味が独り歩きしているようにも感じられます。



# 家

---

1976年アメリカ映画

監督 ダン・カーティス

主演 オリバー・リード、カレン・ブラック、バージェス・メレディス、ベティ・デイヴィス

アイウエオ順の作品紹介。

「家」でございます。

大林宣彦監督の劇場用映画デビュー作の「ハウス」よりもこの作品のほうがはるかに前。

だから物語の筋立てが似てるように感じたとしたら、大林監督がこの作品を参考にしたってところでしょうが、そんなに似てないです。

タイトルが似てるくらいで。

この作品はホラー映画のマラソン上映会みたいな催しで見ましたですね。

作品のカテゴリーとしてはホラーというよりオカルト系の作品になるのではないかと思います。

オリバー・リードさまとカレン・ブラックさまは夫婦でございます。

子供もいてましたなあ。

そんな一家が、夏休みに格安の料金で豪華別荘を借りることができるって話をききまして、ホイホイ出かけるわけでございますな。

家を借りる条件は、その別荘の離れに住んでいるという老婆に毎日食事の世話をすることでございます。

素敵な夏休みの別荘暮らしを予定していた家族に、やがて奇妙な現象がふりかかることになるわけでございます。

途中、象徴的に現れる「霊柩車の運転手」がめっちゃ不気味で怖いです。

作品全体の印象としてはジリジリ怖がらせる感じに重点が置かれておりまして、あまり「どっひゃ〜」みたいなショックシーンはなかったです。

あと、けっこう豪華キャストなのに、それを生かしていないような気がしまして、ちょっと残念な感じがしました。

パパの採点。100点満点中70点。

けっこうよくある系ですわな。たまたま管理を任された(または引っ越してきた)別荘(または家)が、じつは...ってパターン。

有名なところではスティーブン・キング原作の「シャイニング」って傑作もありましたが。

作品的には、この作品よりも「シャイニング」のほうが数倍よくできております。

でもねえ〜。ひょっとしたら、時代的にキング大先生、この作品をシャイニング執筆の参考にしたのかもしれないあって気もするんですよ。

この作品では、あまりに続く怪現象に我慢できなくなった父が、この家から離れようとして、その車の前に庭の大木が倒れてきて脱出できなくなる、みたいなエピソードがあったんですが、こんなふうに簡単に脱出できないシチュエーションを詰めていったら雪に閉ざされたホテル、みた

いな設定になったってふうにも受け取れるし。

ゾゾっとさせる道具に写真があったり、構造というか、ホラーとしても仕組みの部分が両者とも非常に似ていたり。

実際のところ、どうなのでしょうね。

## 偉大な生涯の物語

---

1965年アメリカ映画

監督 ジョージ・スティーブンス

主演 マックス・フォン・シドウ、ドロシー・マクガイヤ、チャールトン・ヘストン、ホセ・フェラー、ジョン・ウェイン、シドニー・ポアチエ、デビッド・マッカラム

アイウエオ順の作品紹介。

こういう映画をこれだけの豪華キャストで映画化するってあたりがね、やっぱりアメリカってキリスト教の国なんだなって思ってしまいます。

日本だったら、お釈迦さまだとか、日蓮・空海・親鸞、このあたりの人の生涯を描くわけになるんでしょ？

ちゃいますやんねえ、感覚が。

わが国がもっとも豪華キャストで臨むのはやっぱり戦争映画であったり、忠臣蔵であったりですもんね。

宗教感が違うなあって思ってしまいます。

新約聖書の物語が、威厳たっぷりに描かれます。

聖人イエスを演ずるのは、マックス・フォン・シドウさま。

後に「エクソシスト」でメリン神父を演ずる人です。あと、「ジャッジ・ドレッド」とかにも出てましたなあ。

チャールトン・ヘストンさまは預言者を演じます。

この人、今では全米ライフル協会の会長さんで、アメリカで銃犯罪とかが起こるたびに声明とか発表しておりますなあ。

小学校時代、私はめっちゃこの人のファンだったんですが、いつの間にか全然映画に出演されなくなりましたよね。

悩めるユダを演ずるのが、「ナポレオン・ソロ」のテレビシリーズで、ソロの相棒イリヤ・クリヤキンを演じていましたデビッド・マッカラムさま。

このユダ像ってのが現在とても揺れておりますよね。

何でも、新約聖書に記述されていなかった使徒の記録とかが現れたそうで。

それによると、現在伝えられているユダ像ってのはかなり歪められて伝えられているんじゃないかって可能性が浮上して。

まあそういう宗教的な話とかはここで熱く語る必要もないわけですが。

とりあえずここでのユダは、やっぱり1965年当時の人物解釈でございます。

特に印象に残ったキャストはこのあたりでしょうか。

映画のほうは聖書の記述通り、イエスの誕生から奇蹟の伝道、エルサレム入り、そしてユダの裏切りからゴルゴタの丘の処刑、そして奇蹟の復活までをずっしりどっしり描きます。

こういう作品ってね、やっぱり日本で作るのは無理やなあって感じてしまいます。

日本って共通する宗教概念ってのが希薄ですもんね。

パパの採点。100点満点中80点。

実は私ってボンボンだったりしまして。

キリスト教系の幼稚園に通ってたりなんかして。

だもんで、イエスさまの生涯についてはけっこう普通に知っております。

だから逆に、もっと派手な奇蹟のシーンとかを期待したわけでございます。

人間イエスを描こうとしたのでしょうか。

いま一つ、イエスさまの神の子としての凄みに欠ける作品のような気がしまして、見ていて「ちょっと違うっぽい〜」って思ってしまいました。

実際のキリスト教圏のイエスさま像ってどうなんですかね。

## 栄光のル・マン

---

1971年アメリカ映画

監督 リー・H・カッツィン

主演 スティーブ・マックウィーン、エルガ・アンデション、ジークフリート・ラウヒ

アイウエオ順の作品紹介。

えっとね、この映画、映画的には本当、どないやねんなって感じお映画でございました。

当時はあまり知られてなかったですよ、ル・マンって。

私のまわりのみんながたまたま知らなかっただけなのかもしれませんが。

フランスのル・マンで行われる24時間耐久レースに賭ける男たちを描いた作品。

なんかひたすらレース場面があって、クラッシュとかがあって、休憩時間（二人のレーサーが交代で24時間を運転するわけですな）に彼女と話し込んだり。

そういう場面が淡々と続く感じ。

途中、今でいうスプリットスクリーンが使われていたりしまして、まあ退屈はしないような工夫はしておられましたが。

っていうかあ。

ぶっちゃけ、この映画に対する私の映画的评价はちょっと低めかもしれません。

でもね、この映画ってね、私にとっては特別な一本なんです。

この映画、亡くなった父と映画館に見に行った、数少ない映画の一本です。

神戸に住んでいた私、父におねだりして、大阪のOS劇場に「シネラマ」を見にいったんですね。

だからね、映画の記憶なんか全然なくて。

実は切符を買う父の背中だとか、ジュースを買ってくれた父の顔だとか、ポップコーンを兄ととりあいしながら食べたとか、そんなことしか覚えていないんです。

あと、シートが妙にフカフカだったこととか、劇場の広さに感動したこととか。

そういえばね、父って映画が好きだったんだけど、あまり父と映画の話とかしなかったなあ。

父も私もあまりしゃべる人じゃなかったし。

でもね、なんかね、この本って、本当は父に見せたくて一生懸命書いてるのかもしれない。

「オヤジと見たこの映画ってね、あのとき、俺、こんなふうに思いながら見てたんだよ」みたいな。

「お前も大人になったんだな」とか言ってもらいたくてね。

最後までそういうこと言ってくれなかったのですが。いかんいかん、湿っぽくなっていけねえや。

パパの採点。100点満点中95点。

えっと、そういう事情ですので、大判振る舞いの95点をつけてしまいます。

点数甘いですけどね、自分にとって特別な映画くらいこれくらい甘い点数つけさせてくださいなあ。



## エイリアン・ネイション

---

1988年アメリカ映画

監督 グラハム・ベイカー

主演 ジェームス・カーン、マンディ・パティンキン、テレンス・スタンプ

アイウエオ順の作品紹介。

全然期待しないで見た映画ですが、「けっこう面白いやんけ」って思いながら見てて、でも最後は「うむむ。やっぱりあんまりたいしたことないなあ」って感想を持ってしまった、なんだかとっても不憫な作品でございます。

近未来のお話です。

えっと、大量のエイリアンが地球にやってきました、地球に住みついたって未来。

エイリアンたちはけっこう友好的でございます、自分たちの居住区をつくって人間との共存をはかるわけですね。

カーンさまは刑事。エイリアンたちの居住区で起こった殺人事件を捜査するために、エイリアンの刑事パティンキンさまと組んで捜査をすることになります。

ところがこの二人、とにかく気があわないわけですね。

そらそうでしょう。白人と黒人（「夜の大捜査線」なんて名画がありました）、白人と中国人（ジェット・リー様の一連の作品は、たいてい物語のどこかに「中国人差別」がでてきますよね）、白人と日本人（「ブラックレイン」なんか、ある意味お互いに差別しあってました）でもうまくいくのが難しいのに、地球人とエイリアンですから。

このエイリアン、腐った牛乳が大好きとかの設定でございます。

「うげっ」とか思いながら見ていました。

しかしお互いに反発しあっていた二人、いつしかお互いを認め合い、協力しあって捜査することになります。

それはそれでお約束。

最後には二人仲良く怪我をして、それでも二人で事件を解決するわけですね。

ラストはけっこうほのぼのとした感じでした。人種問題をSFタッチで描いたええ感じの作品です。

パパの採点。100点満点中70点。

ジャームズ・カーンさまって、実はめっちゃ好きな役者さんでした。

「ゴッドファーザー」とか「ローラーボール」とか「キラーエリート」とか「シンデレラリバティ」とか。

で、おやおや、最近見ないなあって思っておりましたら、いきなりこれでございます。

「ローラーボール」や「キラーエリート」でハードアクションをこなしていた面影はあんまりなくなっておりましたね。

それよりびっくりしたのはもう少し後に作られた「イレイザー」でしょうか。

「あなた、誰」ってくらい雰囲気変わっておりました。

そらそうやわな。年もとりますわな。

「ジョーズ」でロバート・ショウさまの頭がはげていたことを知ったときとか、「レインメイカー」で、それこそ「あんた誰」って思うくらいに雰囲気が変わっていたミッキー・ロックさまを見たときと同じくらいショックでございました。

そういえば「タイムマシン」でミュータントの親玉をジェレミー・アイアンズさまが演じていたのを見たときもショックでした。

まあええか。



## エーゲ海に捧ぐ

---

1979年日本・イタリア合作

監督 池田満寿夫

主演 イロナ・スターラ、クラウディオ・アリオッティ、サンドラ・ドブリ

アイウエオ順の作品紹介。

この映画の公開当時ってね、私が中学生から高校生のころです。

そんで、けっこうエロティックな感じで宣伝とかされてましたもんで。

で、友達と見に行きまして。

見にいったんだけど。

うむむ。どないなん？って印象だけが残った不思議な作品。

何がどうってことはないんですが。

どないなん？って感じ。

けっこうねえ、きれいなねーちゃんが画面をえへらえへらしながら横切って、適当にエッチして、適当にめっちゃきれいなエーゲ海が描かれて。

きれいきれい世界なんだけど。どないなん？って感じ。うむむ。っていうか。

この映画って、大人の女性が見るポルノ映画って感じです。

「エマニエル夫人」ってこんな感じだったんだろうなあって思います。

そもそもエマニエル夫人見てないからえらそうなこといえないけど。

そりゃあねえ、ショッキングだったと思いますよ。女の人がこの映画見たら。

でもねえ、この映画見たころの私ったら中学生や高校生だったわけでございまして。

あんまり大きな声ではいえませんが、すでに友達の家でそういうビデオ見ておりまして。

そもそもこの映画は、そういう興味だけで見に行った映画でございまして、池田監督の世界観とか、作家池田先生の小説とか、そういうことを全く理解しようともしていない見かたをしたわけでありまして。

「だからどないなん？」って感じ。

男女のナニについてもね、もっとすごい描き方している画像なんかを見ているわけで、それと比べちゃうもんだから、「だからどないなん」って感想しか残らなかったです。

もう少し大人になってからちゃんと見ればよかったかもしれませぬね。

パパの採点。100点満点中65点。

主演のイロナ・スターラは、後にポルノ女優の議員さんになるチチヨリーナさままでございます。

へえ、そうやったんや。

でもそれを知ったところで「へえ、そうなんや」で終わってしまうところが悲しいですね。

このあと、同じ池田満寿夫監督の「窓からローマが見える」も見にいきましたが...

こちらのほうは、この作品よりも若干評価が高くてですなえ、「だから、どないなん？」って評価じゃなくて、「へえ、そうなんや」って評価でございます。

っていろいろ書きましたが、この評価はとにかく私の「芸術的受け皿」の問題だろうなあって思

いますので、そこらへんはお含みおきいただきたいと思います。

だってあんまりよくわからなかったんだもん。

## S F ソードキル

---

1984年アメリカ映画

監督 J・ラリー・キャロル

主演 藤岡 弘、ジャネット・ジュリアン、チャールズ・ランプキン

アイウエオ順の作品紹介。

初代仮面ライダーとして、知らない者はいないと言っていいと思われる藤岡 弘(現 藤岡 弘、) さま。

その藤岡さまがハリウッドに進出して主演した作品です。

演ずるのはジャパニーズ・サムライ。

とにかくね、藤岡さまがサムライのかっこして、アメリカの町を闊歩するって、その絵面だけでもベリー・ファンタスティックでございます。

歴史に隠された名作と言わせていただきますよう。

作品の導入はサムライの時代でございます。

戦っていた二人のサムライ。そのうち一人が崖から落ち、そこで気を失い、彼はそのままどこぞの万年氷みたいなところに生きたまま閉じ込められてしまいます。

で、時は流れまして、その氷漬けのままのサムライを蘇らそうってことで、彼はアメリカに運ばれ、最新の科学技術を使って蘇生させられることになるわけですね。

サムライは見事現代に復活。

そして一言、「ここはどこじゃ」

そらそうやろ。

しかしアメリカ人の科学者たちですから、彼をどう扱っていいかわからないし、そもそも日本語もわかっていない。

あかんがな。

蘇生実験が成功したときのこと想定しとかなあきまへんがな、普通。

相変わらず「ここはどこじゃ」を繰り返すサムライ藤岡さま。

やがて「サムライ復活プロジェクト」の科学者の一人・ジュリアンさまが、にわか仕込みのサムライ作法でサムライ藤岡さまを丁重に扱い、なんとなくサムライ藤岡さまも打ち解けたっぽい雰囲気になるわけでございますが、ちょっとしたトラブルから、サムライ藤岡さまは科学者たちの研究所から出てしましまして、真剣を携えた状態でアメリカの町を放浪することになってしまいます。

で、連発する「ここはどこじゃ」。

予想通り、サムライ藤岡さまはサムライの倫理通りに行動し、結果的に殺人を繰り返すことになってしましまして、ウオンテッドになってしまうわけでございます。

なんともやりきれませんなあ、ここらの展開は。

そしてそして、めっちゃせつないラストシーンが待っているわけでございますね。

パパの採点。100点満点中80点。

藤岡さまが、サムライのかっこしてアメリカの町をうろうろするってだけで、めっちゃポイントの高い一作。

途中、アメリカの科学者さんたちの「武士道」解釈がなんか妙だったりしますが、まあそれは笑って許すとしましょう。

## S F ボディスナッチャー (1978)

---

1978年アメリカ映画

監督 フィリップ・カウフマン

主演 ドナルド・サザーランド、ブルック・アダムズ。レナード・ニモイ、ジェフ・ゴールドブラム

アイウエオ順の作品紹介。

J・フィニーさま原作のSF小説、「盗まれた町」の二度目の映画化です。

ちなみに最初の映画化は1956年 ドン・シーゲル監督 ケヴィン・マッカーシーさま主演。

この後の三度目の映画化は1993年 アルベル・フェラーラ監督 ガブリエル・アンウォーさま主演。

私は二度目の映画化しか見ていませんが、なんかもっさりまったりって感じの、ジワジワした恐ろしさがとってもイケてる、SFホラー作品でございます。

タイトルにSFとか書いてありますが、あまりSFっぽくないです。

作品カテゴリーとしてはホラーサスペンスって感じ。

ある町で、住民の性格が急に変わってしまうって事件が続きます。

それを調べにやってきたのがサザーランドさまらの研究者チーム。

彼らは町のある場所に、巨大なマユのようなものが多数群生していることに気づきます。

で、調べてみると、そのマユの中から「人格が変わってしまった人」の死体が発見されるわけですね。

しかしその死体は死後何日も経っているわけで。

で、チームはそのマユは宇宙からやってきたエイリアンのマユで、マユで人間の肉体をコピーすることによって町を乗っ取るようとしていることに気づくわけです。

おお、怖い怖い。

しかしそれに気づいたときはすでに遅かったりしまして。

すでに町のほとんどの住人は、「人格が変わってしまったコピー人間」にされていたわけでございます。

かくして研究者チームたちは、必死で町から脱出することになるわけでございます。

ドナルド・サザーランドさまがめっちゃいいですね。

前に書いたと思いますが、人気テレビシリーズの「24」のキーファー・サザーランドさまはドナルド・サザーランドさまの息子さんでございます。

しかし、「別れた〇人目の奥さんの子供」みたいなノリでございまして、キーファーさまが成人して役者となるまでは、お互いに会ったこともほとんどなかったようです。

パパの採点。100点満点中80点。

この作品、ご紹介済みのホラー映画のええとこどりフィルム、「ザッツショック」で、かなり集中的にとりあげられておりました。

ってことはかなりクオリティの高いホラー作品であるってことがいえるわけで。

クライマックスの仕掛けを含め、なかなか楽しませてくれる作品でございます。

## XYZマーダース

---

1985年アメリカ映画

監督 サム・ライミ

主演 リード・バーニー、シェリー・J・ウィルソン、ブルース・キャンベル

アイウエオ順の作品紹介。

「死霊のはらわた」で衝撃的な監督デビューを果たしたサム・ライミ監督。

この人の監督第二作ってことで、めっちゃ楽しみにしながらロードショー見にいきましたが、うむむ、ホラーちゃうんけ、って感じ。

とにかく「死霊のはらわた」のインパクトが強すぎたもので、どうしてもホラーを期待してしまいますよね。

物語としてはホラー色はほとんどとっていいくらいなく、どっちかというところコメディタッチの巻き込まれ型サスペンスムービーです。

えっと、主人公のバーニーさまは殺人容疑で死刑を宣告され、今にも電気椅子に座らされようとしている男。

彼は無実の罪で死刑にされようとしているわけです。

そんなバーニーさまの回想として物語が進行していきます。

そもそも会社合併とか店の買収だとかの事情で、もめているえらいさん二人がおりまして、一方がもう一方を消そうとしまして、殺し屋を頼むわけですね。

こいつ、ごっつい発電機を背負って、ごっつい電圧の電気を放って殺す、みたいなハデハデな殺し屋。

これがいかにもアメリカンコミックス系のダメダメ殺し屋でございまして、ターゲットといっしょに依頼人まで殺してしまいます。

その様子を目撃してしまった依頼人夫人。

当然殺し屋はその夫人の口もふさごうとしますが、やっぱりドジな殺し屋さんは部屋を間違っ、全く関係のない女の子の部屋に突入するわけです。

で、また目撃者が増えてしまったもので、その女の子（シェリー・J・ウィルソンさまでございませう）を拉致って逃げるわけですね。

で、そのウィルソンさまに思いを寄せていたのがバーニーさまで、バーニーさまは殺し屋を追って大カーチェイスを繰り広げるわけでございます。

で、ああだこうだがありまして、バーニーさまは殺し屋と間違われて死刑にされようとしていたわけですね。

さあさどうなる。

良い意味でも悪い意味でも、前作とは全く違う系統の作品でございます。

まあね、サム・ライミさまって人はそもそもホラー作家志望の人ではなく、こういったポップでアメリカンコミック調の作品が撮りたくて、その足がかりとして撮ったのがたまたまホラーだったってところがこの監督さんのサクセスストーリーなんでしょうね。

この後、ライミ監督は「ダークマン」だとか「スパイダーマン」だとかの、アメリカンコミック調の傑作をバンバン発表することになります。

パパの採点。100点満点中70点。

この映画、確か何かのホラー映画と二本立ての封切りだったと記憶しております。パンフレットが、この映画ともう一本同じパンフレットになっていてですなあ、こっちから開くと「XYZマーダース」のパンフレットで、逆から開くと別の映画のパンフレットでってふうになっておりました。

併映何だったんだらう。またパンフレット探してみようと思っております。



## F / X・引き裂かれたトリック

---

1986年アメリカ映画

監督 ロバート・マンデル

主演 ブライアン・ブラウン、ブライアン・デネヒー、ダイアン・ノベラ

アイウエオ順の作品紹介。

なんとなくレンタルビデオ屋さんで見つけて、なんとなくレンタルして見たらめっちゃ面白かった作品です。

この作品の主人公は、映画のSF Xマンでございます。

天才的な技術を誇るFXマンのブラウンさま。

ある日、彼のもとに政府のえらいさんがやってきて、大仕事を依頼してくるわけですね。

暗黒街の大物の証言をとりたいた。

で、組織からの暗殺を避けるために、彼が何者かに殺されてしまったんだって偽装を、映画のSF X技術を使って演出してほしいと、そういう話なわけですね。

そういうややこしい仕事、やだなあって思いながらも、うまくもちあげられて引き受けてしまったブラウンさま。

血糊だとか爆薬だとかを駆使した見事な手腕で、彼はその仕事を成功させます。

やれやれお疲れさんって感じで引き上げたブラウンさまですが、なんと依頼人だった政府のえらいさんに殺されそうになり、危ないところで逃げます。

しかし行くところ行くところで命を狙われます。

どういうこっちゃって調べてみたら、実は政府のえらいさんと暗黒街の大物は裏でつながっていたわけです。

大物がネコババし続けていた組織の大金。こいつを、えらいさんと山分けする代わりに自分が殺された演出をしてほしいと、そういう事情だったわけですね。

警察のほうでもその政府のえらいさんが怪しいとにらんでいる刑事デネヒーさまなんかがおりまして、最終的にはブラウンさまとデネヒーさまは手を組んで、ワルをやっつけることで協力しあうことになるわけです。

血糊や爆薬、変装に特殊メイク。

映画の小道具にすぎなかったSF Xツールが、これほど威力を発揮してこれほど楽しめる作品になるとは思いませんでした。

とりあえず発想と着眼点の勝利でしょうか。

クライマックスのSF X技術を駆使したワルの追い込みもたいしたものです。

ラストのオチもなかなかいけてます。めっちゃ楽しむことができた作品です。

パパの採点。100点満点中85点。

「逃亡者」のご紹介のときに、デビッド・ジャンセンさま主演のドラマ「ザ・マジシャン」って作品がけっこう好きだったってお話を書いたと思います。

手品師がその技術を駆使して悪いやつを退治するってお話だったんですが、まあこの作品もそ

ういった感じですね。

そういう意味では、題材そのものが私好みだったのかもかもしれません。

## F/X 2・イリュージョンの逆転

---

1991年アメリカ映画

監督 リチャード・フランクリン

主演 ブライアン・ブラウン、ブライアン・デネヒー、レイチェル・ティコティン

アイウエオ順の作品紹介。

「F/X」の続編でございます。

前作はかなりサスペンス色が強かったんですが、本作はけっこうアクション映画っぽい仕上がりが。

なんとなく「ビバリーヒルズ・コップ」を見たときみたいな爽やかな印象が残っております。

あまり書いちゃあかんのでしょうが、前作の続きなんで書かないとしかたないですね。

前作のラストでゲットした大金のおかげで、主人公の天才SF Xマンのブラウンさまは、悠悠自適の生活を送っております。

そんな彼に、例によって警察方面からSF X技術を捜査に使わせて欲しいってお願いがきます。

今回は殺人鬼逮捕のおとりとしてSF X技術を使いたって申し出であります。

ブラウンさまの技術のおかげで作戦は成功したかに見えましたが、ブラウンさまに協力を依頼した事件の担当刑事が何者かには殺され、殺人鬼は別の刑事にその犯人として射殺されてしまいます。

ブラウンさまは密かに仕込んでいた隠しカメラの映像で、殺された刑事の上司が「刑事殺しの犯人が使った刃物」を射殺された殺人鬼の死体に握らせているのを確認しまして、事件の裏にある陰謀に気づくわけです。

しかしブラウンさまが事実を知ったことに気づいた事件の黒幕＝殺された刑事の上司は、ブラウンさまの命を狙うわけで。

SF Xマン危機一髪。

ここで登場するのは前作での相棒・元刑事のデネヒーさま。

彼は前作のごたごたで刑事を辞めて、私立探偵になっております。

事件の背後を探る二人。

やがて彼らは事件の裏に、20年前に迷宮入りになった「バチカンの秘宝・ミケランジェロの純金メダル盗難事件」がからんでいることを知ります。

ここらあたりから物語は俄然ヒートアップでございます。

ひたすら複雑に入り組んでくるストーリー。

そしてアクション。

そしてドンデン返し。

いぐわああああ。

けっこうスケールアップして楽しくストーリーが展開していきませんが、惜しいのはSF X技術を駆使したシーンが前作ほど印象に残らなかったことでしょうか。

アクション映画として頑張ってしまったせいで、緻密なSF Xの仕掛けをじっくり描くことが

できなかったのかなあ。

パパの採点。100点満点中75点。

とはいえ、前作にも通じる「粋」なクライマックスは健在。

やっぱり楽しませていただきました。

ただ、やっぱりSF Xの仕掛けをもう少しメインのストーリー展開にからめて欲しかったって思いますね。

## 王子と乞食

---

1977年イギリス映画

監督 リチャード・フライシャー

主演 オリヴァー・リード、マーク・レスター、アーネスト・ボークナイン、チャールトン・ヘストン、ラクウェル・ウェルチ、ジョージ・C・スコット、レックス・ハリソン

アイウエオ順の作品紹介。

やっと「オ」ですわ。すごいなあ。けっこう映画って見てるもんですね。

実は私、若いころに劇団やってまして。

この「王子とこじき」って作品で西日本の小学校をまわっておりました。

えっと、私って、背が低くて、当時は童顔ベビーフェイスだったもんで、当然主役でございます。

ただ、王子じゃなかったんですなあ。こじきのトム役。

いまだに劇団やってたころの話になると、「こう見えても若いころは劇団やってて、主役をやったんや。役柄か？『王子とこじき』のこじき役や（一同爆笑）」みたいなおいしいギャグでお世話になっていたりします。

マーク・トゥエインさまの傑作児童文学を超豪華キャストで映画化した作品。

王子と乞食はもちろんマーク・レスターさまの二役でございます。

王子のいる宮殿に忍び込んだ乞食の少年。

そっくりの王子と乞食は、そこで入れ替わり、王子は乞食のかっこうで町に出て、乞食は王子のかっこうで王子として過ごすことになってしまいます。

話の展開とか、私がやってたミュージカル（だったんですなあ、これが）とは少し違うところとかがありまして、へえ、そうなんやって感じで見た記憶があります。

乞食として町に出た王子を助けるはぐれ騎士がオリヴァー・リードさま。

乞食のほうのレスターの親方がアーネスト・ボークナインさま。

けっこういいキャスティングでございませよ？

巧いけど、癖の強い役者さんを揃えましたって感じで。

まあ児童文学だから、ご都合主義的な展開があるのはしかたないところですが、キャスティングの妙でそのマイナスをうまく乗り切ったって感じがします。

パパの採点。100点満点中80点。

とにかくいいのはオリヴァー・リードさまです。

なんかねえ、はぐれ者だけど腕の立つ騎士って感じがめっちゃ出ておりました。

三銃士でもけっこういい味出していましたし。

この役者さんもけっこう好きです。

遺作となった「グラディエイター」でお姿を拝見しましたが、やっぱり年とってましたね〜  
けっこうびっくりしてしまいましたです。

## 狼王ロボ

---

1962年アメリカ映画

製作 ウォルト・ディズニー

原作 アーネスト・トンプソン・シートン

アイウエオ順の作品紹介。

この映画、子供のころにめっちゃ何回も見ましたです。

とりあえず映画館で一回は見て、テレビで何回か見て、あと小学校の映画会とかでも見たような記憶があります。

天下のウォルト・ディズニーさまが製作した動物実写映画でございます。

監督はノンクレジット。

っていうか、ウォルト・ディズニーが製作総指揮をとった、めっちゃディズニーカラーの強い作品になっているように感じましたね。

って言ってもこの映画を見たのは子供のころですが。

子供心なりに、「おお、これが動物映画なんだなあ」ってけっこう思いましたし、この映画とか「灰色熊の一生」とかが動物実写映画の基準みたいな感じになったのも事実であります。

とにかくものすごいスケールで、自然と動物の共存だとか、動物と人間の戦いだとかが描かれます。

原作はもちろん「シートン動物記」。

「シートン動物記」って、とにかく子供のころすごく楽しんで読んだ本でした。

動物の生態を物語仕立てで読ませてくれた本でしたもんね～

手元の資料によりますと、この物語の舞台は1889年だそうです。

へえ、そうやったんやあ、って感じでございます。西部の荒くれ男たちから恐れられていた狼がおりまして、その狼の子供がロボでございます。

ロボは父狼と母狼を人間の手によって殺され、人間の持つ武器の恐ろしさを学習するわけですね。

そんなロボはいつしか狼としてたくましく成長し、群れのボスとして君臨します。

雌狼と結ばれまして、家族をもったロボ。

そんなある日、ロボの愛する妻（っていうか雌狼ですな）が人間に捕らえられてしまいます。

ロボはどんな行動をとるのでしょうか...

物語は徹底的に狼目線で綴られます。

だもんで、人間ってワル役でございます。

ここまで徹底されると逆に気持ちがいいですね。

こういう動物目線ってのが、後の傑作の数々を生んだんだらうなあって思います。

パパの採点。100点満点中80点。

とにかく自然と、その中で生きていく動物たちが暖かい描かれ方をされていることが印象に残っております。

っていうか、そもそもシートン動物記をアニメではなく実写で映像化するって発想がとんでもなくすごいなあって思っています。

ファミリーにはお勧めの一本ですね。

## 狼たちの午後

---

1975年アメリカ映画

監督 シドニー・ルメット

主演 アル・パチーノ、ジョン・カザール、チャールズ・ダーニング

アイウエオ順の作品紹介。

原題は「ドッグ・デイ・アフタヌーン」。

めっちゃ暑い日のことを「ドッグ・デイ」っていうことをこの映画のタイトルで知りました。ちなみに、どしゃ降りのことは「イット・レインズ・ドッグ・アンド・キャッツ」っていうんですってね。

英語って面白いなあ。もう、キレそうなくらい暑い日って感じなんでしょうね。

マイケル・ダグラスさまが主演した「フォーリング・ダウン」でダグラスさまがキレた日もめっちゃ暑かったって設定でしたが、あの日も英語的には「ドッグ・デイ」だったんでしょうね。ですから「ドッグ・デイ」の「ドッグ」は犬だとか狼だとかとは関係ありません。

でもこの映画、「狼たちの午後」ってタイトルがしっくりくるような、乾いたというか、ダルイというか、そういう熱気っぽい映画の雰囲気伝わってきて、けっこう好きなタイトルでございます。

めっちゃ暑い日の午後のことじゃった。

三人の強盗が銀行に押し入ります。

一人はビビってしまっていきなりリタイア。

ま、いいか。手際よくすればすぐ済む仕事だしって感じで強盗を決行した二人・パチーノさまとカザールさまでございますが、なんと銀行の金は彼らが強盗に入る直前に銀行本部に送られておりましてですねえ、日本円にしてわずか十万円くらいが残されていただけだったわけでした。

さらにさらに、あれよあれよという間に銀行は警官隊に包囲されてしまいまして、二人は止むを得ず銀行に立てこもることになってしまいます。

テレビ報道なんかも始まってしまいまして、二人は次第に英雄として見られるようになってたりするわけですな。

ここらへんの設定は後に「マッド・シティ」なんかででてきた展開ですね。

そしてそれを逆手にとったのが「ソードフィッシュ」。

時間が経つにつれ、事態はだんだん収拾がつかなくなりはじめます。

ついにFBIの捜査員が動きだし、犯人の説得にあたりはじめますが、この説得に少しずつ気持ちぐらぎはじめるのがパチーノさま。

しかしカザールさまを裏切ることはできないって感じなんですな。

やがて国外脱出用の飛行機が準備されまして、最終局面が訪れますが...

アル・パチーノさまがめったやたらとすごい演技をしてくれます。

びっくりしてしまいます。

役者さんをこれだけ魅力的に撮ることができるって、やっぱりシドニー・ルメット監督ってすご



い監督さんなんですね。

かなり心に残る作品でございます。

パパの採点。100点満点中85点。

アル・パチーノさまとジョン・カザールさまといえば、かの名作「ゴッドファーザー」で兄弟を演じた二大名優でございます。

この映画のあとパチーノさまは大スター街道を走っていきますが、カザールさまっていまいち輝ききれなかったっぽいイメージがありますね。

良い役者さんなんだけどなあ。

## オーバー・ザ・トップ

---

1987年アメリカ映画

監督 メナハム・ゴーラン

主演 シルヴェスター・スタローン、ロバート・ロジャ、デヴィッド・メンデンホール

アイウエオ順の作品紹介。

「ロッキー」が1976年、「ランボー」が1982年の作品でございます。

この当時って、「ロッキー」「ランボー」に続く新ヒーローの登場だあみたいな広告のされかたをしていました。

で、この「オーバー・ザ・トップ」はねえ、次はどんなヒーローを作ってくれるんかなあって感じで見に行きました。

で、見に行ったんだけどさあ。

皆様ご存知の通り、本作の続編は製作されませんでした。

まあねえ、スタローンさまの悶絶ハイパワーアクションを期待していた人は、やっぱり私みたいにけっこう失望したんじゃないでしょうか。

って、ここで失望って書いてしまったらこの作品の私的評価はあまり高くないってことですが。

主人公のスタローンさまはトラック野郎でございます。

妻も子供もいますが、今では別居中でございます。そんなスタローンさまですが、妻の側にいろいろなことがありまして、息子の面倒を見なければならぬ状況になってしまうわけです。

しかしずっと別居していた息子で、しかも彼は十歳とか十二歳とかの難しい年齢にさしかかっておりまして、そういう事情ですから、当然ぎくしゃくしてしまうわけですね。

で、父は子供との絆をとりもどし、もう一度強い父の姿を見せるべく、アームレスリング大会に出場することになるわけでございます。

あーこりゃこりゃ。

普通に見てまして、「ほうほう、そういう攻めかたしてくるのね」って思ってしまうハートウォーミングな物語。

親子の心の交流を高らかに歌いあげる系の作品でございます。

スタローンさまとシュワルツェネッガーさまって、何かにつけ比較されてましたが、親子の心の交流を描きながらもミリタリーアクションになってしまった「コマンドー」だとか、コメディにしてしまう「ジングル・オール・ザ・ウェイ」あたりのシュワルツェネッガーさま作品の「屈折したたくましさ」みたいなものを私は評価する人ですので、直球勝負で親子を描いた本作は若干ポイント低めでございます。

パパの採点。100点満点中60点。

途中、アームレスリングの選手たちをいかにもスポーツ番組的に（インタビューシーンを交えながら）紹介するってシーンがありましたが、これもかなりすべり気味。

どないなんやろって感じでございました。

架空の人物（ってか劇中の人物）の物語の中での戦いに対する意気込みを熱く語られましても

なあ。

なんじゃそらって感想しかありまへんがな。

うん。

このシーンがこの作品の最大の減点ポイントになってしまいました。

## おかしな二人

---

1968年アメリカ映画

監督 ジーン・サックス

主演 ウォルター・マッソー、ジャック・レモン、ジョン・フィドラー、ハーバート・エデルマン

アイウエオ順の作品紹介。

一時期、コメディ映画ってえと「おかしななんとか」ってタイトルをつけられていたような、いなかったような。

ジャック・レモンさまの「おかしな関係・絶対絶命」とか「おかしな夫婦」とか、マッソーさまの「おかしなホテル」だとか。

これとは別に、「おかしなおかしななんとか」って一連の作品群がありました。そちらのほうはレモンさま・マッソーさまはからんでいない作品ばかりだったように記憶しております。

「おかしな二人」っていいますと、そもそもはニール・サイモンの傑作舞台劇でございます。

「イッパイ飾り」っていってましたなあ。

舞台転換が全くなく、ひとつの部屋で全ての物語が進行する形の舞台でございます。

ヒッチコックの「ロープ」みたいな世界です。

あと「暗くなるまで待って」だとか「ダイアルMをまわせ」もこのグループ。

このへんは映画ではいろんな場面が出てきましたが、舞台では場面転換はなかったと思います。ともに女房に逃げられた二人の男・レモンさまとマッソーさまが喧嘩したりいがみあったり仲直りしたりの不思議な共同生活を送るってお話でございます。

キチキチした性格のレモンさまとめっちゃズボラでだらしないマッソーさま。

実にええ感じですれ違う二人の男が、あーだこーだとごちゃごちゃしながら笑わせてくれます。二人の部屋に若い女性がやってきて、でもレモンは女性のつける香水アレルギーでって場面がありまして、香水にやられて鼻をぐすぐすしているレモンを見て、女性たちが出ていった奥さんのことを思い出して泣いていると勘違いするってシーンがあったんですが...

この映画を見た当時小学生だった私、最初はアレルギーで涙が出ていただけなのに、女性に変ななぐさめらかたされて本当に泣くってレモンさまの芝居を見まして、笑っていいのか笑ったらあかんのか、すごく居心地の悪い思いをした記憶がございます。

パパの採点。100点満点中75点。

主演のウォルター・マッソーさまは舞台でも主人公のオスカーを演じていたそうでございます。なるほどなあ。こういうケースって日本でもけっこうあったりしましてね。

「蒲田行進曲」の風間さま平田さまなんかはこのケースの典型でございますね。

## おしゃれ泥棒

---

1966年アメリカ映画

監督 ウィリアム・ワイラー

主演 オードリー・ヘップバーン、ピーター・オトゥール、イーライ・ウォラック

アイウエオ順の作品紹介。

ロマンティック・サスペンス・ラブ・コメディって感じでしょうか。

美男美女が恋の駆け引きをしながら、美術館に展示された絵画をいただくとするお話。

まあええ話系ですわな。んでもって作品的には泥棒映画ではなく、おしゃれな恋愛映画でございます。

そりゃあねえ。ヘップバーンさまにオトゥールさまに、監督はウィリアム・ワイラーさまですもんで。

ファッショナブルでスタイリッシュでございますわ。

あーこりゃこりゃ。

嫌いじゃないんだけど、けっこう苦手な世界でございます。

そういう意味では私ったらほとんどヘップバーンさまの出演作品見ていなかったりします。

かなりラブロマンス系に出演作品が片寄ってたりするでしょ、ヘップバーンさまって。

実は最高傑作っていわれている「ローマの休日」とか「マイ・フェア・レディ」とか外してたりするんですよ。

さて物語。

ヘップバーンさまはかなり高名な絵画コレクターの娘でございます。

父は美術館とかに自身のコレクションの絵を寄贈したりするような名士だったりします。

しかしその絵ってのは実は偽物。

父は絵画コレクターとかではなく、贋作絵師だったわけなんですね。

やがて彼の持っている絵に疑いをかけた美術商がでてきます。

美術商は私立探偵オトゥールさまを雇って、ヘップバーンさまの父の絵を調べさせようとするわけです。

実は父の仕事のことがバレないかって心配していたヘップバーンさまでして、彼女は絵を調べるために忍び込んだオトゥールさまを泥棒と勘違いしてしまいまして、オトゥールさまに「美術館に出品されている父が描いた偽物の絵」を盗み出してほしいと依頼するわけでございます。

一目見たときからヘップバーンさまに惹かれてしまったオトゥールさま、彼女のために一肌脱ごうとするわけでございます。

最初にヘップバーンさまありき、みたいな企画だったでしょうから、ヘップバーンさまがいいのは当たり前ですが、けっこう良いのがオトゥールさま。

飄々としていながらどこかスツとぼけてて、みたいな難しい役を楽々となしておられましたです。

パパの採点。100点満点中70点。

とはいえ、ぶっちゃけ苦手ジャンルの作品であることは否定できません。

ラブコメディによくある「ンなアホな」みたいな展開がちょっと鼻につく感じがしてしまいました。

もう少しサスペンス色が濃かったら好きなタイプの作品になったのになあ。

## 俺たちは天使じゃない

---

1989年アメリカ映画

監督 ニール・ジョーダン

主演 ロバート・デ・ニーロ、ショーン・ペン、ジェームズ・ルツソ

アイウエオ順の作品紹介。

ヒューマニズムあふれる人情コメディってところでしょうか。

そもそもはこの作品、1955年に製作されたマイケル・カーティス監督、ハンフリー・ボガードさま主演の「俺たちは天使じゃない」（原題はどちらも「ウイ・アー・ノー・エンジェルズ」です）のリメイクになります。

ただ、ちょっとややこしいんですが、55年版の「原作」はフランスの劇作家アルベール・ユッソンさまでクレジットされておりましたが、89年版の原作はロナルド・マクドゥールさまになっております。

このロナルド・マクドゥールさまって人は、55年版の脚本家なわけですね。

ってことはつまり、89年版は55年版の脚本を原作として作り直した作品で、ユッソンさまの原作戯曲の設定からはかなり外れてまっせってメッセージだと理解していいと思います。

思いますってちょっと歯切れ悪いですが。だって55年版見てないんだもん。

デ・ニーロさまとペンさまは服役囚でございます。けっこう真面目にオツトメしている系の二人。

ある日、死刑囚の脱獄計画に巻き込まれてしまいまして、なぜか二人は脱獄してしまうことになってしまいます。

しかたないから逃げる二人。国境近い町にたどりつき、たまたま二人は神父であるって名乗るわけですね。

その町の教会にはたまたま神父さまがいなくて、脱獄囚の二人はそこで神父として過ごすことになってしまいます。

デ・ニーロさまは町に住む美人のシングルマザー・ムーアさまのことが気になってたりします。やがて町に追手がやってきたりしまして、さらにその追手に追われて例の死刑囚が現れたりなんかしまして。

けっこうゴタゴタ、ドガチャガに話はこじれていくんですが、もうねえ、めっちゃハートウォーミングに話がおさまったりして。うんうん。アメリカ映画やなあ。

パパの採点。100点満点中70点。

この作品、ロバート・デ・ニーロさまが製作総指揮を務めております。

だからというわけではないんですが、今回のデ・ニーロさまはちょっと抑え気味に芝居したみたいな印象がありますね。

ショーン・ペンさまに花をもたせたのでしょうか。

デ・ニーロさまって、「ニューヨーク・ニューヨーク」だとか「恋におちて」のときみたいに、相手役をひたすら立てる抑えた演技をみせることもありますからねえ。

今回もそんな感じがしましたです。



## オルカ

---

1977年アメリカ映画

監督 マイケル・アンダーソン

主演 リチャード・ハリス、シャーロット・ランプリング、キーナン・ウィン

アイウエオ順の作品紹介。

海洋パニックアドベンチャー作品でございます。

シャチって、すごく獰猛でそれでいて頭が良くて、海のギャングとか呼ばれていて... そういうイメージがありました。

私が子供のころって、水族館とかで曲芸する動物ってイルカとかオットセイとかイルカとか、せいぜいその程度で、シャチが曲芸するなんて考えられなかったころです。

日本で最初にシャチのショー開催に成功したのは、おそらく白浜アドベンチャーワールドだと思いますが、この映画の公開当時はもちろんそんな催しは日本では見られなかった時期です。

シャチってこわい生き物なんだなあって思いながら見た記憶があります。

シャーロット・ランプリングさまは海洋学者。

調査中に、サメに襲われます。

そんな彼女を救ったのは海のハンター、リチャード・ハリスさま。

彼は水族館とかから注文をうけ、サメだとかを生け捕りにして連れて帰る、みたいな仕事をしております。

彼らが狙っていたのはサメだったわけですが、そのサメが彼らの目の前で殺されてしまいます。

サメを殺したのはオルカ＝シャチだったわけですね。

ハリスはサメのかわりにオルカを生け捕りにしようとします。

かれらはオルカを一匹捕獲しますが、そのオルカはメスでございます、身重だったわけです。

メスのオルカは胎児を産んで息絶えます。

それを見ていたオスのオルカ。

オルカは妻を殺したハリスに復讐すべく、彼の船を追いかけまわすことになります。

ハリスのほうも、オルカとの戦いのなかでベテラン乗組員のウィンを失い、こっちはこっちでオルカへの復讐を考えております。

かくして人間とオルカの復讐合戦が始まるわけでございます。

物語の構造は、かの名作「白鯨」に似ているような気がしますね。

クライマックスの陰鬱さもちょっと似ております。

ただ、作品の目線はかなりオルカ寄りっぽく感じました。

やっぱり海で一番獰猛で残酷な生物は人間なのかもしれませんね。

パパの採点。100点満点中75点。

とにかく印象に残っているのはリチャード・ハリスさまですね。

若かったですね～ 「ジャガーノート」とか「カサンドラ・クロス」とか、とにかくアクションづいていたころです。

それがだんだんおじいさん役ばかり演ずるようになってしまし、で、残念ながら他界されてしまいました。

「グラディエーター」の国王役とかも良かったですが、何ととってもハリー・ポッターシリーズの校長先生役が印象に残っております。

「ハリー・ポッターと秘密の部屋」の撮影完了直後に体調を崩し、作品の公開を待たずに亡くなったそうでございます。

名優のアクションスター時代の姿をとくにご覧いただきたいと思います。

## 俺たちに明日はない

---

1967年アメリカ映画。

監督 アーサー・ペン

主演 ウォーレン・ベイティ、フェイ・ダナウェイ、ジーン・ハックマン

アイウエオ順の作品紹介。

アメリカン・ニューシネマの傑作でございます。

原題は「ボニーとクライド」。

そのまんまやんけ。

そういえば「明日に向かって撃て」の原題も「ブッチ・キャッシュイとサンダンス・キッド」だったですよ。

すくなくともこの二作に関して言えば、邦題のセンスの良さが光っておりますね。

どちらも若干ネタバレが懸念されますが。

施設（少年院っていうんでしょうか、感化院っていうんでしょうか）あがりのチンピラ、クライド＝ベイティさま。

ひょんなことから彼はボニー＝ダナウェイさまという女性と知り合います。

やがて二人は惹かれあうようになっていくわけですね。

二人は犯罪に手を染めるようになります。

自動車泥棒から銀行強盗。

二人の犯行は次第にエスカレートします。

そして次第に大胆不敵になっていくわけですね。

しかし彼らは「銀行の金は盗むけれども、市民個人の金には手をださなかった」わけです。

そんなエピソードが次第に広まり、彼らは次第にマスコミに「悪人ではない銀行強盗」みたいな扱われかたをはじめめるわけですね。

そんな彼らにも仲間ができれば始めるわけですが、仲間が先に警官との撃ち合いで命を失ったり、捕まってしまったりします。

そしてそれが原因で、二人は壮絶な最期の時を迎えることになるわけでございますな。

ってラストまで書いてしまいました、あまりにも壮絶であまりにも救いのないラストでございます。

結末知っていてもすごいショックなエンディングでございました。

フェイ・ダナウェイさまの美しさって、子供のころはわからなかったです。

なんでこんなギスギスのおばはんが人気があるんやろってずっと思っておりましたが、今見るとめっちゃきれいですね。

この人の良さ、子供のころは理解できなかったんだなあ。

パパの採点。100点満点中85点。

この映画の公開当時っていうか、「レッズ」のあたりまで、ウォーレン・ベイティさまは「ウォーレン・ビューティ」って表記されておりました。

「ディック・トレイシー」あたりでいきなり「ベイティ」になって、「あんた誰？」って思った記憶があります。

そらなあ、ベイティでしょうなあ。

## ローレイ

---

2005年フジテレビ、東宝、関西テレビ、キングレコード作品

監督 樋口真嗣

主演 役所広司、柳葉敏郎、妻夫木聡、堤 真一、國村 隼、石黒 賢

五十音順の作品紹介はちょっとだけお休み。

この映画、普通の戦争映画だと思って見ていましたら、なかなかどうして。すごくよくできた戦争サスペンス映画でございました。

日本映画もなかなかやるもんでございますなあ。

舞台は終戦直前の日本。

すでに広島に一発目の原爆が落とされておりまして。

海軍将校・役所さまは、士官・堤さまに呼び出され、新型潜水艦の指揮を任せられます。

艦の使命は米軍空母の攻撃でございます。この潜水艦にはとんでもない新機能が搭載されておるわけでございます。

当時の日本軍の科学力では考えられないような索敵システムを搭載しているわけです。

とんでもない正確さで敵駆逐艦の位置を知ることができるわけですね。

そこいらのことがありまして、米軍の間ではこの潜水艦のことを「ローレイ（船乗りが恐れる伝説の魔女）」と呼んでいるわけです。

この「ローレイ」ってシステムはドイツで開発されたものでございまして、特殊な能力、まあ超能力ですわな、そういう力を持った少女のパワーを軍事利用していたことがやがて明らかになります。

艦長の役所さま、副官の柳葉さま、この機能にびっくり。

そんな艦が敵地に向かっている間に、長崎が原爆攻撃を受けます。

艦は乗込んでいた士官・石黒さまらの一派によって占拠されてしまいます。

これは堤さまの命令だったわけですね。

堤さまはすでに日本の敗北を確信していたわけです。

帝都にこもったままで若者に死を強制し、自分たちだけ生き残ろうと考えている軍上層部を粛清しない限りは新しい国を作ることはできない。

堤さまはそうと考え、米軍と密約を結び、東京に原爆を落とそうと考えています。

で、ローレイはその密約成立の献上品ってわけなんですね。

役所さまは反乱部隊のリーダー石黒さまを倒して艦の指揮権を取り戻し、「第三の原爆投下」阻止のために（敵戦艦隊のド真中で）、原爆搭載機を撃墜しようとするわけでございます...

原作はたぶん、「このミス」かなにかでかなり高い評価をうけた推理小説であったと記憶しています。

それだけに物語の密度はすばらしいです。

やっぱり原作が素晴らしいと映画も素晴らしいものになるんだなあ。

パパの採点。100点満点中90点。

役所さま、柳葉さま、妻夫木さま、みんなめっちゃ素晴らしいです。  
とても良い作品を見せていただきました。脱帽です。

## 小さき勇者たち ガメラ

---

2006年「小さき勇者たち ガメラ」製作委員会作品

監督 田崎竜太

主演 富岡 涼、夏帆、津田寛治、寺島 進、奥貫 薫

平成になって大復活をとげた大怪獣ガメラ。

本編のほうは神話と怪獣特撮との巧みな融合みたいな感じで、けっこう重厚なシリーズとして良い仕上がりを見せてくれていますが、今回の作品はどっちかってえと番外編というか、後日談というか、そういう作品でございます。

物語冒頭でガメラは人間を助けるために、何頭ものギャオスを道連れに自爆します。

町には平和が訪れ、その当時少年だった津田さまは今ではこの町で居酒屋を営むオヤジになっております。

この津田さまの息子が主人公の富岡くん。

彼は母を交通事故で亡くし、かなり凹んでおります。

そんな彼は、夏休みのある日、不思議な光に導かれて「光る石」と「卵からかえったばかりのカメ」を手に入れます。

少年はそのカメを（自分が母から呼ばれていたあだ名と同じ名前）トトと名づけて世話をしますが、そのカメはいきなり空を飛んだり、たった一晩でめっちゃ成長したりと、かなり変。

みんなが「あのカメって実はガメラじゃないの？」って疑いはじめたころ、トトは姿を消します。

そんなとき、彼らの町に突然怪獣が出現します。

海上で漁船の襲撃を繰り返すうちに人間の味を覚え、餌を求めて町にやってきた肉食怪獣でございます。

怪獣に狙われ、絶体絶命の少年の前に現れて助けてくれたのは、トトがたくましく成長した「ガメラ」でした。

昭和時代のガメラからの、「ガメラは子供が大好き」って設定を大事にして一本の映画を仕上げた感じの感動作。

物語クライマックスで、ガメラに力を与える「光る石」をガメラに渡すため、何人もの子供が瓦礫の町の中を走りながらその石をリレーしていくって場面がありました。

あきまへんねん。

こういう感動系の場面は。

私って、ほんま監督の意図通りに泣いたり笑ったりする、安物の観客ですからなあ。

パパの採点。100点満点中75点。

富岡くんはあの懐かしの人気ドラマ「ドクターコトー診療所」でブレイクした人です。

富岡クンと津田さまは、このドラマの第一シーズンで共演しておりました。

けっこう息があっているように見えたのは気心しれていたからかな？

富岡くん、今どないしてはるんでしょうか。

ウィキペディアによると、芸能界を引退されたご様子です。ちょっと残念ですね。



## ダブル・ジョパティ

---

1999年アメリカ映画

監督 ブルース・ベレスフォード

主演 トミー・リー・ジョーンズ、アシュレイ・ジャッド、ブルース・グリーンウッド、ローマ・マフィア、アナベス・ギッシュ

「ダブル・ジョパティ」っていうのは合衆国憲法で決められたルールのことだそうです。

「誰もが同一の犯罪で二度裁かれることはない」というもの。

このルールを逆手にとって、「裏切って殺人犯の濡れ衣をきせた」夫への復讐を企てる妻の計画を描くサスペンス作品です。

なんとなく幸せに暮らしていたジャッドさまとグリーンウッドさまの夫婦。

、夫婦でクルーザーで出かけた旅の朝、彼女は船内の夫のベッドが血まみれになっているのを発見します。

もちろん夫の姿はどこにもない。

いろいろと事情聴取をされているうちに、彼女は被害者の妻ではなく、容疑者という立場になっていきます。

彼女は夫殺しの罪で裁判にかけられ、刑務所に収監されます。

その刑務所のなかで彼女は、ふとしたことから夫が生きていたこと、そして夫が自分を裏切ったことを知るわけですね。

彼女はそこから模範囚を演じ続け、仮釈放されます。

彼女の狙いはもちろん夫への復讐。

そして最愛の息子を取り戻すこと。

彼女の監察官を勤めるのがトミー・リー・ジョーンズさま。

不審な行動を繰り返す彼女の企みをジョーンズさまが見抜き、彼女を刑務所に再送致しようとしませんが、あわやのところで彼女は脱走、姿を消します。

自らの職を辞してジャッドさまを追うジョーンズさま。

ジャッドさまを追ううち、やがてジョーンズさまは、名前を変えて別人として暮らしているグリーンウッドさまのもとにたどりつきます。

グリーンウッドさまの周囲で目撃されるジャッドさま。

ジョーンズさまはさらに調査を繰り返し、夫グリーンウッドさまの陰謀に気づくわけですが...さて結末はいかに。

こういうスタイルの推理サスペンスドラマは、けっこう本数見ているんですが、イマイチ強烈に印象に残るものが少ないですね～

なんとなく小さくまとまってしまうものが多くて。

この作品も、どっちかという大仕掛けのクライマックスでさえちょっとこじんまりまとまっている印象が残りましたです。

パパの採点。100点満点中75点。

アシュレイ・ジャッドさまとかトミー・リー・ジョーンズさまとか、けっこうビッグネームでいい役者さんが出てるんですが、ちょっとその巧さを出し切れずに感じてました。あまり盛り上がりなくとも良い前半中盤の物語運びは文句なしだったんですが、クライマックスの盛り上がりが少し足りなかったようですね。残念です。

## ヴァイラス

---

1999年アメリカ映画

監督 ジョン・ブルーノ

主演 ジェイミー・リー・カーティス、ウィリアム・ボールドウィン、ドナルド・サザーランド、ジョアンナ・パクラ

なんといいたいでしょうか。SF・モンスター・ホラー・パニック・アクションって感じでしょうか。

宇宙ステーションと交信できる機能をもつロシアの大型ハイテク通信船。

宇宙からの謎の電磁波が襲来、ステーションが攻撃を受け、それは船の中核コンピューターまで侵食します。

それから数ヶ月後。

大型のハリケーンが海を荒らす中、アメリカの密輸船があわや遭難って状況になっております。

船長はサザーランドさま。

クルーはボールドウィンさまやカーティスさま。

彼らは嵐を避けるため台風の目の中に緊急避難します。

そこで彼らは例の通信船を発見するわけすな。

乗り込んで調査するクルー。

その船に生存者がいなければ、ロシアから莫大な報奨金がもらえるわけです。

しかし調査中、いきなりアンカー（錨ですな）が作動してそれがサザーランドさまの船を直撃。

彼らは船を失って、ロシアのハイテク船から逃げることができなくなるわけすね。

やがて船内で一人、また一人とクルーが行方不明になります。

実はこの船、宇宙からの「謎の生命と意思をもった電磁波」に支配されていたわけでありませう。

「電磁波」は船のハイテク機器を利用し、ロシア人の乗組員たちの体と機械を合成してアンドロイドを作っていたわけすな。

サザーランドさまの船のクルーも、サザーランドさまもアンドロイドにされてしまいます。

えらいこっちゃ。

カーティスさまやボールドウィンさま、「謎の意志をもった電磁波とそれに操られるマシン」がこれ以上広がらないよう、船を爆破することを計画しますが、果たしてどうなりますやら。

ヴァイラスってタイトルだから、かなりハイテクなモンスターを勝手にイメージしておりましたが、この作品のモンスターは半分マシン・半分人間のクリーチャー。

ちょっと気持ち悪かったし、今さらこんなモンスター出してくるか？って感じです。

パパの採点。100点満点中80点。

ちなみに映画タイトルの「ヴァイラス」ってのは、人間から見て船を乗っ取った「電磁波」が「ヴァイラス」なんじゃなくて、船を乗っ取った電磁波生命体が「地球にとって人間が『ヴァイラス』（=ウイルスですな）なんだと生命体と言う（っていうかディスプレイ越しにボールドウィンらと会話する）シーンからとられております。

## 男たちの大和 YAMATO

---

2005年「男たちの大和 YAMATO」製作委員会作品

監督 佐藤純弥

主演 反町隆史、中村獅童、仲代達也、鈴木京香、渡 哲也、松山ケンイチ

終戦記念日時期になりますと、大作系の戦争映画、または「火垂るの墓」とかがめっちゃオンエアされたりしますよね。

まあね、こういう時期くらいは戦争のこと、命のこと、真剣に考えないといけないかなあって思います。

海洋調査技術が発達していきまして、戦艦大和が沈没した海域に調査船が入りまして、船そのものの映像だとかが公開されたりしています。

そんな1980年代から物語は始まります。

大和とから生還して天寿を全うした老人(=中村さま)の娘、鈴木さま。

彼女は何が何でも大和が沈んでいる海域に行きたい、絶対に船を出してほしいと漁業組合に申し出るわけですね。

そんな話を聞いた老人・仲代さま。

老人は自分の船を出してヤマトの海域へ鈴木さまを連れて行こうとします。

実は老人・仲代さまも元大和の乗組員(松山さま)。

老人は大和に配属された日から「運命のその日」までのことを回想します...

ってここまでで実は冒頭10分くらいやと思いますが。

いつも書いておりますが、「大和沈没～」みたいな事実を描く本作の場合、とにかくクライマックスの「大和沈没」シーンに見る人みんなの意識が集中しちゃうんですよね。

ですから、そこに至るプロセスってけっこう丁寧すぎるくらい丁寧に描かないと、印象に残らなくなってしまうたりします。

本作は、ヤマトの乗組員のうち、メインとなる若者数名の描写に絞って描いておりました。

これはけっこう正解だったかもしれません。

描かれるのは松山さま・反町さま・中村さまにあと数人程度。

やはりこれくらいが限界ではないかと思えますね。

主題歌は皆様ご存知の長渕 剛さま。

作品ラストをこれでもかというくらい盛り上げてくれました。

パパの採点。100点満点中80点。

クライマックスの米軍による大和総攻撃のシーン。

なんかわけわからんくらいあっけなく若者が命を落としていきます。

うむむ。実際の戦争ってこんな感じなんだろうな。バババって機銃の音がしたら、回りの仲間うちの何人かが亡くなっていたとか。

ちょっと昔の戦争映画ではあえて描かなかったこういう殺戮シーンが妙に印象に残ってしまいました。

2007年アメリカ映画

監督 レン・ワイズマン

主演 ブルース・ウィリス、ジャスティン・ロング、マギーQ

えっと。この作品の公開の夏、「ダイハード4・0キャンペーン」ってのがありまして、そのキャンペーンに当選しましてチケットいただいて見に行った作品です。

このときはおよそ一年ぶりくらいに映画館にまいりましたです。

めっちゃ久しぶりの「ダイハード」シリーズの第四作。

前作からあまりにも時間が経っております。確かブログの「ダイハード3」のご紹介のときに「『ダイハード3』の出来があまりよくなかったんで4が製作されなかったのでは」とか書いてしまいました。

残念ながら予想は外れてしまいましたね。

ちなみにこの記述、こちらの電子ブック版では書き換えしております。

まあ十年以上経ってからの続編製作ですから、そもそも以前の「ダイハード」とは別モノ、と考えたほうがよさそうです。

これまで三度「とんでもない大事件」に巻き込まれ、ボヤきながらもその解決に貢献してきたウィリスさま＝マクレーン刑事。

やはり警察ではその功績を認めてもらえず、まだまだ下っ端でございます。

「2」と「3」の間に離婚した奥さんとの間にいた子供は、今ではきれいなねーちゃんに成長しております。

でも年頃の娘はおっさんの父親を相手にはしなくなっているわけですね。

ウィリスさま、しょんぼり。

そんな彼に連絡が入ります。町ではコンピューターに詳しいハッカーたちが連続して爆殺される事件が続いております。

だもんで、近くに住むハッカーの身柄を保護してワシントンまで送り届けろ、って指示でございます。

例によってボヤきながら現場に着いたウィリスさまですが、そこでいきなり「ハッカーを狙った銃撃戦」に巻き込まれてしまいます。

ハッカー君が「チームで動く殺し屋に命を狙われるようなとんでもない秘密」を握っていると感じたウィリスさま。

しかしそのときにはすでにアメリカ全土を無力化する規模のサイバーテロがすでに動き出していたのでした。

コンピューターシステムって、けっこう無防備なんですね。

だからサイバーテロリストみたいな連中の手にかかると、都市機能ってけっこう脆いものかもしれません。

テレビドラマ「24」なんかでもやっておりましたが、今の時代って、準備さえ万全だったら、

びっくりするくらいの少人数でとんでもないテロ活動が実行できてしまうようで。  
そういう意味では、かなり誠実な視線で「現代」というものを見据えている作品なのかもしれないなって感じました。  
パパの採点。100点満点中75点。  
ウィリスさま、年をものともせずがんばっております。  
さすがやなあ。

## ホーンティング

---

1999年アメリカ映画

監督 ヤン・デ・ボン

主演 リーアム・ニースン、リリ・テイラー、キャサリン・ゼタ・ジョーンズ、オーウェン・ウィルソン

1963年に製作されたホラー映画「たたり」の現代版リメイク作品でございます。

作品の舞台となるのは「ヒルハウス」って名前の古いお屋敷。

テレビ映画情報雑誌でこの「ヒルハウス」って名前を聞いただけで「見よう」って思ってしまったのですが、予想は外れてしまいましたかな。

というのは、1975年あたりにありましたオカルト映画ブームのころに製作された「ヘルハウス」と関係あるのかなって勝手に思ってしまったんですが。

っていうか、「ヘルハウス」もかなりこの作品のもとになった「たたり」を参考にしたんじゃないかなって思います。

ちなみに「ヘルハウス」の原作は「地球最後の男」（「オメガマン」の原作でございます）を書いたリチャード・マシスンさまでございます。

遺産相続のごたごたで、住んでいる家を追い出されたテイラーさま。

彼女はたまたま目にした「宿泊・食事つきの住み込み調査協力」の仕事に応募しまして、ちょっとヤバそうな「ヒルハウス」って家で調査協力をすることになるわけです。

調査を主催しているのは大学教授のニースンさま。

彼は心理学を研究しております。

パニック心理学みたいな研究。

ニースンさまは調査の参加者に調査目的を明かしません。

そのかわりにオバケ屋敷の伝説だとかを語って聞かせたうえで参加者を自由に行動させ、共同幻聴だとかが発生する様子を解明しようとしていたわけですね。

ところがこの「ヒルハウス」、本当にオバケ屋敷だったからさあ大変。

屋敷に住む「霊」は、次第にその牙をあらわにしてまいります...

見ていてあんまり怖くないなあって思ったのは、怖くない描き方をしてるからでしょうね。

ネタバレになるので詳しくは書けないですが、この屋敷には悪い霊と良い霊がおりましてね。

早い段階から現れるのは良いほう。

だからぶっちゃけ怖くない描き方しています。

で、クライマックスで出てくる「悪い」ほうは、CGに頼りすぎてしまったせいか、これまた全然怖くない。

ちょっと失敗してますね。ほかにもっていきかたなかったのでしょうか。

パパの採点。100点満点中60点。

「怖くないオバケ屋敷映画」ってところで大幅減点。

で、怖くないわりに登場人物がみんなシリアスなもんで、めっちゃチグハグな印象が残りました

。

怖く作らないなら、いっそ「ホーンテッド・マンション」みたいにコメディ冒険アクションくらいに設定書き換えたらよかったのに。

見る前はかなり期待していただけに、ちょっと残念です。



# 劇場版ポケットモンスター・ダイヤモンドアンドパール ディアルガVSパルキア ダークライ

---

2007年ピカチュウプロジェクト作品

監督 湯山邦彦

製作 小学館プロダクション

声の主演 松本梨香、林原めぐみ、石塚運昇、石坂浩二、山本耕二、加藤ローサ、ロバート

最近のゲームメーカーさんの戦略って、本当にすごいと思いますね。

この作品では任天堂さんの「ニンテンドーDS」に「ポケットモンスターアドバンス・パール」または「ダイヤモンド」をセットした状態で会場に行きますと、会場内の電波をDSが拾って、劇中のポケモンキャラ「ダークライ」がプレゼントされるという、まあようやるわって感じのプレゼントつきでした。

でもね、私が小学生だったら、絶対ダークライ欲しいって思うでしょうね。

だから任天堂さんの戦略は大正解だと思います。ってゲーム関係の話はこれくらいにしておいて、映画の話。

相変わらずそもそものポケモン世界の構造がわからないと、とつてもわかりにくい説明になるかと思いますが。

ディアルガとパルキア。ともに最新DSソフト「ダイヤモンド」「パール」のジャケットに使用されている人気の幻のポケモン。

「時間と空間」を支配するポケモンです。

時空の中でそれぞれに接触のないように生きてきた二体ですが、それが時空の裂け目で遭遇してしまったわけですね。

ディアルガとパルキアはとつてもないバトルを繰り広げることになります。

で、地上の話。

ディアルガ・パルキアの戦いとは別に、ポケモンマスターを目指して旅を続けるサトシくん。

ある町にたどりついたわけですが、その町に「幻のポケモン」ダークライがいるってことを知るわけですね。

町の人々はダークライを悪いポケモンのように考えていたりするわけなんですけど、実はそれには秘密があるようで。

町には巨大な時計塔があったりしまして、その時計塔だとか、ゲストキャラの女の子（声・加藤ローサ）が吹く草笛の音が重要な伏線だったりとか。

物語後半の大盛り上がり大会のためにあまり詳しくは書かないですが。

このところ、ポケモン映画の新作ってけっこういい作品がでてきたように感じます。

「ミュウと波動の王者ルカリオ」だとか、この作品とか。けっこう感動したりしました。

パパの採点。100点満点中75点。

けっこうしっかり作られておりましたし、物語のポイントとなる「ダークライ」の描かれかたもうまく物語と連動しておりました、楽しめました。

このクオリティの作品が作られて、その上ゲームのキャラプレゼントが入るわけですからね。ポケモン人気は根強いものがありますね。もう完全に世界観を確立している感があります。

## ヴァン・ヘルシング

---

2004年アメリカ映画

監督 スティーブン・ソマーズ

主演 ヒュー・ジャックマン、ケイト・ベッキンゼール、リチャード・ロクスバーグ

以前ご紹介しました、「リーグ・オブ・レジェンド」とけっこう似た世界観を持った、ホラー風アクション大作でございます。

ドラキュラ映画でとにかく有名なヴァン・ヘルシング教授ですが、このヘルシングが「教会から派遣されたモンスターハンター」だったんだって新解釈がこの物語のスタートライン。

モンスターハンターだからモンスター退治の秘密兵器とか使いまくります。

この秘密兵器がけっこうハイテクっぽくて面白いです。

ヘルシングにからんでくるモンスターは「ジキル博士とハイド氏」、「狼男」「フランケンシュタインの怪物」「ドラキュラ（並びにその手下の女バンパイヤ）」などなど。

今回ヘルシング役に挑むのはかの「Xメン＝ヒュー・ジャックマンさま」

なんかこの人、普通の人間の役あまりしないですね。どうしてなんででしょうか。

ローマの教会の指示でモンスター狩りを行っているヘルシング＝ジャックマンさま。

今回は吸血鬼伝説の国、ルーマニアへ行くように命ぜられます。

そこでは吸血鬼一族と戦っている貴族の一家がおりまして、ジャックマンさまが到着する直前、当主の青年が狼男との戦いで行方不明になっていたりします。

で、その当主の妹がベッキンゼールさま。

ジャックマンさまとベッキンゼールさまはドラキュラ伯爵の城に赴き、吸血鬼退治をしようしますが、その町には吸血鬼退治の予言の書があったりするわけですね。

で、その予言の書の核心部分が切り取られておりまして、その部分をジャックマンさまが持っていたりしまして。

けっこうややこしい因縁があったりするわけなんですね。

けっこう伏線なんかめいっぱい張っておりますし、これまでの「モンスター映画キャラの世界」プラス、この作品独自の新しい設定なんかも山盛りありますので、なんとなく見ていましたら「え、なんでこんな話になったんやっけ」みたいなことになったりしますです。

けっこう集中して見ていただきたい作品でございます。

パパの採点。100点満点中85点。

クライマックスのSF Xがすごくすばらしいです。

ただ、どこがどう素晴らしいのかって話を書いてしまいますと、途中のストーリー展開をばらしちゃうことになってしまいますので、ここでは書かないようにしておきましょう。

## シュレック 2

---

2004年アメリカ映画

監督 アンドリュー・アダムソン

声の出演 マイク・マイヤーズ、キャメロン・ディアス、エディ・マーフィ、アントニオ・バンデラス

ディズニーだと思い込んでおりましたら、違いましたです。

そらそうやわなあ。「シュレック」ってユニバーサルスタジオジャパンのアトラクションやし。

でもディズニーっぽい空気持った作品だなあって、勝手に思っておりましたが。

でも実際に映画を見てみましたら、ディズニーちゃうやんって感じ。

かなり、というか、相当下品でお下劣なギャグが多いですね。

ちょうど「宮崎アニメ」と「クレヨンしんちゃん」の違いみたいな感じ。

間違いなく「シュレック」のほうが私好みでございます。

前作「シュレック」のラストで数々の苦難の末に結ばれたシュレックとフィオナ姫。

田舎で楽しく暮らしていたわけですが、そこに突然の使者がやってまいりまして。

使者をよこしたのは姫の父上。

姫の父親ですから王様でございます。

「一度だんな様を連れて遊びにきなさい」ってことは「結婚したんだった挨拶に来なさい」って読まなければならないことは当然シュレックだってわかるわけで。

いやがるシュレックをむりやり連れて、はるか遠くの「姫の出身国」まで旅に出る姫。

国賓級の出迎えを受けますが、出てきたシュレックの姿を見てみんな驚くわけですね。

とりわけ強い拒否反応を見せたのが姫の父親でございます。

実は父国王は、魔法使いのおばあさん（ってかオバサンというか、教育ママっぽいんだけど）の息子、チャーミング王子と姫を結婚させるって約束を魔法使いとしていたようでございます。

そこで父国王と魔法使い、魔法の秘薬を使って姫と王子を結びつけようと画策するわけですが...

とってもファンタジックな物語ですが、ところどころに入るギャグはかなり現代的で、それでいてかなりお下劣。

そのへんが「教育的で健全なディズニーアニメ」と明確に一線を画している部分でございます。

そらそうやわなあ。ディズニー映画で白雪姫とかシンデレラはゲップとかしませんもんね。

余談ですが、この次の作品、「シュレック3」では、そのへんの「お姫さま軍団」が大挙してご出演。

ディズニーワールドをチクリとやってくれているようです。

パパの採点。100点満点中75点。

よく考えたら、「シュレック」見ていなかったです。

でもけっこう楽しめました。

っていうのも、作品世界そのものの解説はUSJのアトラクションで見えて知ってましたもんで。

## ディープ・インパクト

---

1998年アメリカ映画

監督 ミミ・レダー

主演 ロバート・デュバル、ティア・レオーニ、イライジャ・ウッド、マクシミリアン・シェル、ヴァネッサ・レッドグレイブ、モーガン・フリーマン

なんとなく「アルマゲドン」「ザ・デイ・アフター」あたりの映画とごっちゃにされてしまう不遇な作品でございます。

だもんですからね、作品を見て、記憶が鮮明なうちにあらすじとかどっかに書いておきませんと、わからんくなりますわな。

そういう意味ではこの本って私的にはすんげえ有益な映画データベースになっております。物語展開のいきさつとかね、そのあたりのことって、けっこうすぐ忘れてしまうんですよね。映画見てすぐに記入していた作品って、この本の過去のデータみたらけっこう思い出したりしますからね。

宇宙のはるか彼方から地球へとやってくる彗星。

軌道を計算した結果、その彗星は間違いなく地球を直撃するコースをとっていることがわかります。

そこで人類は二つの方法で危機を回避しようとしています。

ひとつは彗星に着陸することのできる性能のスペースシャトルを飛ばし、星の地中深くに爆弾を埋め込んで爆発させて彗星を破壊しようという計画。

もうひとつは、もしもその爆破作戦が失敗したときのために、各国に大型のシェルターを作って、「種の保存」に必要な人数・家畜や動物・植物などを避難させるって計画。

もちろん最初の爆破計画が成功すれば第二の計画は発動されずにすむはずだったのですが、彗星上の気象トラブルから星の掘削作業は失敗。

当然爆破そのものも失敗しまして、今度は大小二つの彗星が飛んでくるって悲惨な結果となってしまいます。

作業にあたったスペースシャトルとの通信は途絶。

やむを得ず人類は「現代の箱舟」ともいべき「アーク」作戦に種の存亡をあずけることになります...

いまさら私がくくだ書かなくてもみなさんおわかりかと思いますが、爆破計画に失敗したシャトルはまだ機能しておりまして、彼らの犠牲が人類を救うことになるわけですね。

シャトルのクルーが家族に最後の別れを言うシーンが、めっちゃ普通に予告として流れたりしまして。

こんな場面予告編で流したら、「きっとシャトルが犠牲になって人類が助かるんだ」なんて思うでしょうが...

そのとおり。言っちゃった。

パパの採点。100点満点中80点。

「ディープ・インパクト」で有名な場面って、自由の女神が水没する場面とか、海辺に立つ死を覚悟しているであろう男女が、とんでもない高さの津波が迫ってくるのをただ見ている場面とか  
...

そんな感じですよ、あとさっき書いたシャトルのクルーが家族とモニター越しに別れを言う場面だとか。

このへんの場面って、あんまり予告編に使わないほうがいいと思うんですが。

だって内容わかっちゃうじゃん。

じゃあないとは思いますが。

2006年「県庁の星」製作委員会作品

監督 西谷 弘

主演 織田裕二、柴咲コウ、佐々木蔵之介、石坂浩二、酒井和歌子

織田裕二さんってね、一時すごかったじゃないですか。ドラマでは「東ラブ」から「お金がない」から「踊る大捜査線」から、映画では「踊る大捜査線・ザ・ムービー」から「ホワイトアウト」から。

ちょっと腰を悪くされたそうで、そこらへんからメディアへの露出が極端に少なくなりましたよね。

かと思ったら世界陸上のアンカーマンとかやってるし。

この作品、私的には「めっちゃ久々やなあ」って思えるような登場のしかたでした。

この人のキャラって、本当、熱血漢だと思うんですよね。

テニスの松岡修三さんとか山下真二さんなんかと通ずるものがあるというか。

それだけに、上述の「お金がない」だとか、阿部 寛さんと競演した病院の内部闘争を描いたドラマ（「冷たい雨」とか、なんかそんなタイトルだったと思いますが）のように、「本当は熱血漢なんだけど、そのキャラを内に秘める」みたいな、ちょっとねじれた役も面白く仕上げる事ができる役者さんです。

今回の主人公もなんかそんな感じ。

織田さまはエリート官僚（っていうんでしょうか）。

県庁職員として県のすべての事業の運営を実行していく立場の男です。

彼は莫大な予算を使う「公共シーサイド老人ホーム」みたいなプロジェクトの責任者です。

そんな彼は「出世のツール」として「県庁エリートが出向する、民間企業との技術交流プログラム」のメンバーの一人に選ばれます。

技術交流研修を終えて、一段ランクアップして県庁に戻る予定。

彼はなんかめっちゃ斜陽っぽいスーパーマーケットに研修職員として派遣されます。

彼の担当研修者はなんとパートさん。演ずるのは柴咲さま。

なんじゃこりゃと思った織田さまですが、彼女は本当の意味の「実践的感覚」で店を取り仕切るベテランパートさんだったわけですね。

なんだかんだと反目しあいながら、数々の挫折を経て織田さまは自分に欠けていたものを次第に見つけていくことになるわけです...

織田さまってね、めちゃくちゃ芝居巧いわけじゃないと思うんですよ。

どっちかというとな器用なタイプの役者さんだと思います。

織田さまの同世代の役者さんだと、堤 真一さまとか今回共演の佐々木さまなんかのほうがずっと巧い演技すると思います。

でも、自分の得意分野に役を引き込むとすごくいいです。

っていうか、ほとんどの役を自分の近いところに引き込んでしまっているようなんですが。

だからハマればすごくいい作品ができると思うんですなあ。

もっともっと活躍して欲しい役者さんなんで、早く体調完全にしてバリバリ映画やドラマに出て  
いただきたいと思っております。

パパの採点。100点満点中85点。

織田さまと肩を並べて、柴咲さまもものすごくいいですね。

おもしろかったです。



## プラネット・オブ・ジ・エイプス／猿の惑星

---

2001年アメリカ映画

監督 ティム・バートン

主演 マーク・ウォールバーグ、ティム・ロス、ヘレナ・ボトム・カーター

かの名作「猿の惑星」のリメイクでございます。

リメイクっていう感じではなく、監督のティム・バートンさま曰く「リ・イマジネーション」ってことらしいです。

もうねえ、半端じゃなくSF Xがすごいです。

「ポセイドン」とか「スーパーマン」とか「キングコング」とか、旧作のリメイク（じゃなくってリ・イマジネーションですか）なんかの作品を見ましたら、とんでもない勢いで映像技術が進歩していることが感じられますね。

主人公のウォールバーグさまは宇宙科学者でございます。

宇宙空間でさまざまな動物実験をするために派遣されていた人ですな。

ある日、彼らの実験のパートナーのチンパンジーを乗せた一人乗りロケットが行方不明になりまして、ウォールバーグさまはチンパンジーを追ううちに時空嵐に巻き込まれ、謎の惑星に着陸します。

何とそこは、知能をもった猿が人間を支配する惑星だったのであります。

彼は奴隷の女性らとともに猿の居住区から逃げ出します。

そのときに「人間に好意的なチンパンジーの科学者」とともに逃げ出したもんですから、話がややこしくなります。

そのメスのチンパンジーに好意をもっていた猿軍団の将軍ロスさまが、何が何でもウォールバーグさま一味を皆殺しにしてメス科学者を奪還しようと、それこそ猿軍団全軍体制で追ってくるわけでございます。

もちろんウォールバーグさまらに味方する人間たちもおります。

そんな反乱分子が集結しまして、猿対人間の戦いの火蓋が切って落とされるわけでございます。

今回の映画化では、奴隷ではあるものの、人間は言葉をしゃべることができます。

猿と人間の立場が逆転した世界をディープに描くのなら、やっぱり人間はしゃべれないほうがよかったと思うんですが。

どうなんやろ。

パパの採点。100点満点中80点。

とにかく「猿の将軍」を演ずるティム・ロスさまの演技がすばらしいです。

めっちゃキレた猿なんだけど、どっか賢くてズルくて。人間の役としてこういう役を配されてもかなり難しいと思うんですが、複雑な心理が特殊メイクの上からでもはっきりわかります。

すばらしい演技でございます。

ラストのオチは少し読めてしまいました。

ラスト的としては前作のほうが衝撃的でよかったなあと思います。

皆様はどうお感じになりましたでしょうか。

## ホーンテッド・マンション

---

2003年アメリカ映画

監督 ロブ・ミンコフ

主演 エディ・マーフィ、テレンス・スタンプ、ジェニファー・ティリー

ディズニーランドのアトラクションとして人気の「ホーンテッド・マンション」。

これはそのアトラクションの設定をもとに映画化された作品でございます。

マーフィさまとティリーさまは夫婦で不動産を営んでおります。

まあもっぱら頑張っているのは夫のマーフィさまなんですが。

ある日、マーフィさまのもとに「自分が住んでいる屋敷を買ってもらいたい」との連絡が入ります。

折りしもその日はマーフィさま一家が週末のキャンプに出かける予定の日。

ビジネスチャンスを逃したくないマーフィさまは、キャンプに行く途中にちょっとだけその屋敷に立ち寄って商談することにしまして、彼らは家族そろってその屋敷に上がりこむことになってしまいます。

ところがそのとたん、いきなりの雷雨。

できすぎやがな。

やむを得ず彼らはその屋敷で一晩やっかいになることになってしまいますが、それが恐怖の夜の幕開けだったわけですね。

実はこの屋敷、幽霊屋敷だったわけございまして、そもそも「身分違いの恋」に落ちた大金持ちの貴族が、その女性と駆け落ちしようとしたその晩に女性に死なれてしまいまして、当主はそのショックで自殺、なんて洒落にならないコワイ事件があった屋敷。

当然、屋敷を売りたいとやってきた当主ってのは幽霊。

当主だけじゃなくて、執事（なんとテレンス・スタンプ様でございます）も召使も、みんな幽霊。

彼らがマーフィさま夫妻を招いたのは理由がありまして、妻ティリーさまが、「駆け落ち直前に自殺した娘」に生き写しだったわけでございます。

屋敷の幽霊たちは、ティリーさまを「あっちの世界」に引き込もうとあの手この手を考えてくるわけですね。

果たしてマーフィさまたちはこの危機を乗り越えることができるのでしょうか。

テレンス・スタンプさま、「あんたほんまにテレンス・スタンプさまかいな」って言いたくなるくらい面影なかつたりします。

この人、若いころはほんま男前やったのに。

パパの採点。100点満点中85点。

さすがディズニーって感じですよ。

ホラーにしかならないシチュエーションなんですけど、めっちゃ普通にファミリーアドベンチャームービーになってしまいました。

「パイレーツ・オブ・カリビアン」なんかもとってもいい感じにアドベンチャームービーでしたもんね。

あれも一歩間違えばホラーなシチュエーションだったのですが。さすがディズニーですね。

## ラスト・サムライ

---

2003年アメリカ映画

監督 エドワード・ズウィック

主演 トム・クルーズ、ティモシー・スポール、渡辺 謙、ビリー・コノリー、真田広之、小雪  
けっこういろんな意味で驚かされた作品です。

っていうか。過去、ハリウッドが描いた日本って、常にどっか違うんとちゃいまっか？って感想を持ってたわけです。

私は。

「カブキマン」とか「SFソードキル」とかのジャンキーな作品はまあしゃあないとして、けっこうまとも系の作品であってもね、「う...ちょっと違う...」みたいな感想、ずっと感じていたりしましてなあ。

名作「ブラックレイン」が描いた大阪にしても、ちょっと違うでしょ。

ニューヨークの刑事は勤務終わったあとに飲みに行くかもしれんけど、大阪府警の刑事さんは外国から来た刑事の二人連れ連れて、生バンド演奏のクラブみたいなところ言ってレイ・チャールズ歌わへんちゅうねん、みたいな。

なんかアジア文化と日本文化いっしょこたに描いてるみたいな作品あったし。

「ブレードランナー」とは言わんけど。

そんな描かれかたに飽きていたところにこの作品です。

そらびっくりしますわ。監督のエドワード・ズウィックさまって、かなり本気で日本文化を研究した人みたいですね。

作品で描かれている「日本」は、ほぼ我々が教科書で習った「日本」でした。

これってけっこうすごいことだなあと。

明治維新直後の日本を、日本人が描くテンションでハリウッドが映画化したってことですから。

米騎兵隊の生き残りがクルーズさまです。

拳銃やライフルメーカーの宣伝のために、自らがインディアンと戦った話をする、みたいな、騎兵隊魂とは無縁の、旅芸人みたいな生活を送っています。

そんな彼にとんでもない仕事が舞い込みます。

組織されて間もない近代日本の軍隊を鍛えるって仕事。

当然バックには武器を売りたいアメリカ政府の思惑がからんでいたりして。

クルーズさまは来日して早々、「戦える状況ではまるでない」新政府の軍隊を率い、最後のサムライ、勝元一族＝渡辺さま・真田さまらの討伐を命ぜられます。

当然、新政府軍は惨敗。

指揮していたクルーズさまは勝元の捕虜となりますが、次第に「サムライ」として誇り高く生き、そして滅びようとしている彼らの姿に心を動かされていきます...

パパの採点。100点満点中90点。

渡辺さま・真田さま・クルーズさまがとにかく巧い。

真田広之さまって、日本映画ではほとんどアクションとかやらなくなったのに、この映画とか「プロミス」とかではめっちゃアクションやってますよね。

ずるいなあ。

でもある時期からアクションを封印して演技派を目指した真田さまの作戦は大正解だったと、今にして思います。

今では演技もできて、人並み以上のアクションもできる名優ですもんね。

## 沈黙の聖戦

---

1997年アメリカ映画

監督 チン・シウトン

主演 スティーブン・セガール、バイロン・マン、モニカ・ロウ

最近見た映画なのに、内容全然覚えてない。

映画を見て、あまり時間が経ってないのに内容忘れてしまっているってのが、ひょっとしたらこの映画の評価なのかもしれませんなあ。

おぼろげな記憶をたどりながら、書きますよお～

セガールさまは元CIAの職員でございます。

彼には娘がおりまして。

その娘が、議員の娘といっしょにタイ旅行に行きまして、議員の娘といっしょにテロリストに誘拐されてしまったからさあ大変。

作品構造としては「コマンドー」みたいなハードな世界が展開されるわけですね。

セガールさま、元CIA職員時代の同僚で、今はタイの寺院で僧侶となるべく修行をしていたマンさまの協力を要請しまして、娘救出作戦を決行するわけですが、やがてタイ警察とかタイ軍だとかを巻き込んで、大騒動になっていくわけですね。

クライマックスではテロリストが狂信する「密教」（みたいなお坊さんのワル）と、マンさまが修行していた寺院の「宗教」との念力念仏合戦みたいになったりして。

わけわからん。

決して面白くないとか、わけわからんとかの作品では断じてないです。

でも、ちょっと変ってるって思ってしまうのは私だけでしょうか。

セガールさまが日本びいきなのは有名ですが、タイとかがでてきたらわけわかりません。

演じているセガールさまも、あまりのわけわからなさ、ちょっと精彩を欠いていたように思えました。

パパの採点。100点満点中70点。

とりあえずすげえって思ったのが、ワイヤーアクションでございます。

本作の監督のシウトン監督は、かの「LOVERS」でアクション監督を務めた人です。

そんな人が普通のアクション作るわけないでっしゃろ。

セガールさまって本当にCIAで柔術（っていうか合気道）を教えた人らしいんですが、そんな本物の武術をもつセガールさまにやられた兄ちゃんが、フワア～って飛んでいくのがめっちゃ微妙で楽しめました。

でもなんか違和感ありましたね。

マジで強いんだから、その「マジでの強さ」をうまく取り入れることの作品でお目にかかりたいって思うんですが。

セガールさま、頑張ってくださいです～

## 第三集 上巻 あとがき

---

と、ということで、第三集上巻はこの180作品でご紹介完了です。

下巻は185作品をご紹介します。

皆様下巻もお楽しみくださいませ。

では皆様、第三集下巻でまたお会いしましょう。

いやあ、映画って本当に良いものですね。

下巻でもごいっしょに楽しみましょう。

では、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。